新しい
フランスの小説

人喰い鬼のお愉しみ

ダニエル・ペナック

中条省平▼訳

Au bonheur des og

白水社

CamScannerでスキャン

「幼いディオニュソスを輪のなかに引きいれようとして、巨人（ティタン）たちは、がらがらのようなものを振る。この輝く物体に引きつけられて、ディオニュソスがティタンたちのほうへ進んでくると、彼の頭上で恐るべき輪が閉じる。そして、ティタンたちは寄ってたかってディオニュソスを殺害し、それから火であぶって、貪り喰ってしまう」

（ルネ・ジラール『身代りの山羊』）

「……信者たちは、聖人がただそこにいて、自分たちの代りに鞭打たれてくれればそれで十分だと思っている」

（ルネ・ジラール『身代りの山羊』）

「善人の知らないことを知ったために、人は悪人になるのだろう」

（ウディ・アレン）

CamScannerでスキャン

でぶちゃんに
ロベール・スーラに

CamScannerでスキャン

1

花嫁のヴェールのように、軽やかで、期待をもたせる女性の声が、スピーカーから降ってくる。

「マロセースさま、お客様ご要望コーナーまでお越しください」

霧のかかった声、まるでデピッド・ハミルトンの写真がしゃべりはじめたみたいだ。だが、ハミルトン嬢の霧のうしろに、ぼくはかすかな含み笑いを感じとった。けっしてやさしくはない、その微笑。やれやれ、行きますよ。たぶん来週には着けるだろう。今日は十二月二十四日、午後四時十五分、デパートは身動きの余地もなく混みあっている。プレゼントに押し潰された客でごった返し、人ごみが通路をふさいでいる。暗い苛だちのなか、目に見えないほどゆっくりと流れる氷河。引きつった笑い、ぎらつく汗、口ごもる罵り、憎々しいまなざし。脱脂綿ひげのサンタクロースにいきなり肩をつかまれた子供が、震えて叫び声を挙げる。

「恐くないからね、サンタさんなんだからね！」

記念写真のフラッシュがたかれる。

サンタクロースといえば、ぼくの目のまえにも、半透明で巨大なサンタがひとり、動きの止まった人

ごみのうえに、恐ろしい人喰い鬼のシルエットを投げかけている。桜んぼのように赤い、ぽってりとした唇。白いひげ。満面に笑み。そして、口の端からは、子供の脚が何本も突きだしている。いや、これはきのう学校で、ちびが描いた絵の最新作だった。いやはや、あの女教師の顔といったら。「この年のお子さんがこんなサンタクロースを描くなんて、信じられます？」「サンタクロースのほうは信じられるんですか」とぼくは答えた。ちびを腕に抱えてみると、体温でお湯を沸かせるほど熱い。あんまり熱いので、眼鏡がくもっている。そのせいで、いつもよりさらに目がやぶにらみになっていた。

「マロセーヌさま、お客様ご要望コーナーまでお越しください」

マロセーヌさまだってお越しくださりたいのは山々なんだ！　中央エスカレーターの下まではなんとかたどり着いた。それに、内側の溝まで見せている大砲の黒い口のせいでその場に釘づけにされていなければ、もうとっくにエスカレーターに乗りこんでいたところだ。ところが、この大砲がぼくを狙っているのは、たぶん紛れもない事実なのだ。砲塔が台座を中心に一回転し、ぼくのほうを向いてぴたりと止まり、それから、大砲の鼻先がちょうどぼくの目と目の真ん中まで持ちあがり、ぼくを睨みつけた。この砲塔と大砲はAMX30型戦車のもので、身長一メートル四十センチの老人がリモコン操作している。老人はめんどりがくっくっと鳴くみたいに、嬉しくてたまらぬようすで笑いながら、遠くからこのマシンを操作している。数え切れないほどたくさんいるテオの小爺(おじい)たちのひとりだ。じっさいとても小さくて、ほんとうに爺さんで、着ている灰色の作業服のおかげで、テオの小爺たちだとわかる。この変な作業服は、テオ自身が小爺たちを見失わないために、特別に着用させているものだ。

「二度と承知しないからね、おじいちゃん、おもちゃをもとの場所に戻しなさいよ！」

玩具売場のうしろから、売り子が、もういい加減にしてよといったようすで叱りつける。かわいい顔

の女の子で、頬っぺたのなかにヘーゼルナッツを隠したリスみたいだ。老人はいうことを聞かない子供のようにぺっと唾を吐き、発射ボタンに親指をかけた。ぼくは盛大に音を立てて完璧な直立不動の姿勢を取り、こういった。

「大佐どの、AMX30はもう時代遅れであります。くず鉄置場か、南米にでもくれてやりましょう」

小爺はおもちゃに悲しそうなまなざしを投げたが、諦めたような身振りで、ぼくに「行ってもよし」の合図をした。売り子の微笑みが、あんたに老人学の学位をあげるわ、と語っていた。すると突然、この階の警備員のカズヌーヴが床からせり上がるように出現し、怒ったようすで戦車を拾いあげた。

「まったく、いつだって悶着を起こすのは、マロセーヌ、お前なんだよ!」

「よくいうよ、カズヌーヴ」

素晴しき哉、職場!……。

戦車を取りあげられてしまった老人は、それでもまだ腕をばたばたさせている。ぼくのほうはエスカレーターに運びあげられながら、高度が上がれば空気もふえると思ったわけでもないけれど、ちょっと楽な気分になっていた。

高度が上がると、テオがいた。大フラミンゴも衝撃を受けるようなショッキング・ピンクの服をぴっちりと着こなして、いつものように、スピード写真の順番待ちの列に並んでいた。テオはぼくにやさしく笑いかける。

「おやテオ、君の赤んぼのひとりがおもちゃ売場でずいぶん楽しそうにやっていたよ」

「それはよかったわ。すくなくともその間は、小学校の出口で作業服の前を開けてたりはしないからね」

微笑には微笑。それからテオは目をちょっと動かして、お客様ご要望コーナーのガラスのボックスのほうを差し示した。
「あの檻のなかで、だれかがあなたの代わりにお勤めをしてるみたいよ」
レーマンがかなり長いことお勤めをしていることを理解するのに、たしかに一秒もかからなかった。レーマンは女の客に、なにもかも悪いのはぼくのせいだと説明している真っ最中だった。ご婦人の目からは、涙が短い間隔をおいて滴り落ちている。病的に肥満した赤ん坊が、ばらばらに壊れかかったベビーカーに押しこまれて、部屋の隅に置かれていた。ぼくは扉を開けた。いましも顧客への最も率直な連帯の意を表明しつつ、レーマンがこう断言しているところだった。
「マダム、おっしゃることは全面的にその通りでございます。まったくもって許しがたい。そのうえ……」
そこでぼくを見た。
「そのうえ、本人がやってまいりました。一体これについてどう考えるのか、尋ねてみることにいたしましょう」
レーマンの声は音域を変えた。同情あふれる調子から、猛毒あふれる調子へ滑りこむ。事情は単純だった。レーマンは催眠術師のように平静に、事情をぼくに説明する。異常に太った赤ん坊が、世間のみんなと同じ熱い期待のまなざしをぼくに向けている。それは三日前のことだった。ぼくの部下がいまここにいるご婦人に一台の冷蔵庫を売ったらしい。かなり容量のある冷蔵庫なので、ご婦人は二十五人分のクリスマスの真夜中のディナー――しかもオードブルとデザートつき――を、そのなかに冷蔵した。
だが、「冷蔵」というのは若干ニュアンスに欠ける言葉だ。というのも、その夜、ある理由から――そ

の理由をレーマンはできたらぼくに説明してもらいたいというのだが——、問題の冷蔵庫は火葬炉と化した。つぎの日の朝、このマダムが扉を開けたとき、生きながら焼き殺されなかったのは奇跡といってよいだろう。ぼくは女性客をちらりと見た。たしかに、眉毛が焦げて赤茶けている。彼女の怒りを通して火傷の痛みまで感じられ、ほんとうに可哀そうに、と思えたほどだ。赤ん坊は、まるで、すべての原因はお前にあるといったふうにぼくに目を向けている。ぼくは、不安を感じながら、レーマンのほうに目を向ける。腕を組み、机の角に体をもたせかけてレーマンはいった。

「待ってるんだがね」

静寂のひととき。

「品質管理係は君だ、違ったかな?」

ぼくは頭を縦に振ってそのとおりだと同意し、口ごもっていった。ただどうもよくわからないんですよ、品質管理テストは実施されたわけですし……。

「先週のガス調理台や、ポエリー事務所の掃除器とおなじようにな!」

いまや赤ん坊の目つきには、赤ちゃんアザラシ大量虐殺の犯人もお前だとはっきり書いてある。レーマンはふたたび客の女性のほうに向き直った。レーマンの口ぶりは、まるでぼくが透明人間みたいにその場から見えなくなったかのようだった。レーマンは、女性客が敢然と苦情を申し立てるのをためらわなかったことに感謝を捧げている(外を見ると、相変わらずテオがスピード写真のボックスのまえに突ったっている。あとで、ちびのアルバムに載せるためにテオの写真を一枚頼まなくちゃ)。レーマンは、当社の機構の浄化にご参加下さるのはお客さまの務めであると語っていた。品質保証が利くのは申し上げるまでもないし、わが社はただちにもう一台別の冷蔵庫をお届けするはずです。

「お客様ご自身およびお客様のご家族が被らざるを得なかった物質的損害に関しましては（と、旧下士官レーマンはこんなしゃべりかたをする。その声の底には古き良きアルザスの思い出が滲みでている。レーマンは、名物のリースリング・ワインをしこたま聞こし召したコウノトリによってアルザス地方のキャベツ畑に運ばれたのだ）、このマロセーヌ君が率先して補償させていただくことになると確信しております。申し上げるまでもなく、彼自身の費用負担によって」

そして、こうつけ加えた。

「マロセーヌ君、クリスマスおめでとう！」

それから、レーマンが当店におけるぼくの職業的キャリアを逐一たどりなおし、お客様のおかげをもって、幸いなことにこのキャリアにも終わりが訪れようとしていると告げたとき、女性客の疲れきった目に見えたものは、もはや怒りではなく、戸惑い、そして憐憫であり、まもなく彼女のまつ毛の先端には、涙の粒が震えて盛りあがり、いまにも爆弾投下を開始しそうだった。

いまだ、催涙ポンプを全開にせよ。ぼくは伏し目がちにそっとまなざしをそらせる。そして大きな窓ガラスごしに、視線を店内のメールシュトレームの渦潮のような大混乱へと潜りこませた。情け容赦のない心臓が動脈梗塞を起こした血管に脈々と血球を送りこんでいる。全人類が巨大なプレゼントの包みを持ちあげ、その下で這いまわっている。たえずおもちゃ売場から立ちのぼる半透明のきれいな風船の群れが、頭上のすりガラス製の天井に貼りついてゆく。このカラフルな葡萄の房をとおして、陽の光がさんさんと降りそそぐ。美しい。女性客はむなしくレーマンの言葉をさえぎろうと試みるが、彼は非情にも、ぼくの来たるべき履歴書を作成しつづけている。前途洋々とはいえない。二、三の悲しい職場を経て、またしても解雇、そして、ついに決定的な失業ののち、ホスピスに収容され、無縁墓地に放りこ

CamScannerでスキャン

まれるだろう。女性客の目がぼくに向いたとき、ぼくは涙を浮かべていた。レーマンの声は淡々と響き、機械的に棺に釘を打ちこみつづけた。

だが、女性客の目に浮かんだものを見ても、ぼくは驚かなかった。彼女はぼ、く、の、身、に、な、っ、て、い、た。ぼくが涙を滴らせると、彼女はぼくの立場に立っていた。憐れみ。息を大きく吸いこんで言葉を続けようとしたレーマンを、ついにさえぎった。車はバックしはじめたのだ。訴えは取りさげる。冷蔵庫の新品さえ補償してくれれば結構で、それ以上要求するつもりはない。この方（ぼくのこと）にも二十五人分のお夜食を弁償していただく気は毛頭ありません（レーマンはどこかでぼくの給料の額について言及しておくべきだった）。クリスマスのお祭の前日にこの方のお仕事を奪うようなことになったら、一生自分で自分を責めつづけますわ（レーマンは「クリスマスのお祭」という文句を二十回以上も発していた）。だれにだって間違いは付きもの、げんにわたくしだってつい先日、お仕事で……。

五分後、新しい冷蔵庫の引換証を手に、女性客はお客様ご要望コーナーを去ろうとしていた。赤ん坊とベビーカーが一瞬扉のところにつっかえた。女性客は神経質そうに鼻をすすりあげながら、ベビーカーをぐいと押した。

レーマンとぼくだけが残された。レーマンが大笑いしたのを見て、ぼくはどっと疲れが出て――当然の話だと思う――、小声でこういった。

「悪党どものご立派な連繋プレーだ」

ぼくに反撃を喰らわせようと、ガミガミ屋の巨大な口が開かれた。だが、その口はすぐに閉じられた。店のはらわたの底からせり上がってきたのだ。

CamScannerでスキャン

くぐもった爆発音。阿鼻叫喚がそれに続いた。

CamScannerでスキャン

2

ぼくたちは大きな窓ガラスに鼻をぎゅっと押しつけた。最初はなにも見えなかった。爆発で吹き飛ばされた二千か三千個の風船が店の見通しを遮っていた。それが天井の光のほうに向かってゆっくりと昇りはじめると、できれば見たくなかったものが見えてきた。

「くそっ」とレーマンは呟いた。

客たちはパニックに呑みこまれていた。全員が出口を探して右往左往している。いちばん頑丈な人間が、いちばんひ弱な人間の上を駆けめぐっている。靴下やパンツを跳ね飛ばしながら、商品の陳列台の上をじかに走っている者もいる。あちこちで売り子やこの階の主任がパニックを鎮めようとしている。紫の上着を着た大男が化粧品のウィンドウを突き破ってのびていた。ぼくはお客様ご要望コーナーのガラスの扉を開けた。台風の最中に窓を開けたようなものだ。デパート全体が一個の巨大な叫喚と化していた。ぼくの横では、スピーカーが冷静さを取り戻せと熱っぽくがなり立てている。人びとがほんとうに死に瀕しているのでなければ、そのあまりの惨状に、ミス・ハミルトンは笑いで死にそうな声を出していたにちがいない。いずれにしても、彼女の説得は、ハリケーンのさなかにスプレーを吹きつけたほ

どの効果しかなかった。下は戦争なのだ。上では風船が半透明の落ち着きを取り戻している。その恐るべき光景は、この世のものならぬ薔薇色の光に浸っていた。レーマンがぼくのそばに来て、耳元で怒鳴った。

「どこから来たんだ？　どこで爆発したんだ？」

　むかし兵隊だったレーマンの声には、インドシナで経験した興奮のきな臭い匂いが感じられる。だが、どこで爆発したのか、ぼくにもわからない。腕や足を突きだした人間の体の山が、エスカレーターの運行を邪魔している。お客たちは四段飛ばしの勢いで下りのエスカレーターを駆けのぼろうとするのだが、上から降りてくる人の波に押されて逆流する。みんなが状況を理解したときには、もう全員がエスカレーターの下に殺到して、人間でできた栓にふさがれていた。その塊がひしめきあい、喚きあうばかりだ。

「くそお！」とレーマンは叫ぶ。「くそっ、くそっ、くそっ……」

　そして、肘で人の波を掻きわけながらエスカレーターのほうに駆けてゆき、操作レバーをひっつかみ、機械を停止させた。

　スピード写真の扉のところでは、テオが光のなかで自分の顔の写真四枚をじっと眺めている。気に入った様子だ。ぼくにその一枚を差しだす。

「ほら、ちびちゃんのアルバムに取っといて」

　それから、静けさが訪れた。結局、その後にはなにも起こらなかったので、静けさが訪れたのだ。どこかでなにかが爆発し、その後にはなにも起こらなかった。だから、静かになった。まもなく、ミス・ハミルトンの甘い声が聞こえてきて、お客様がたに落ち着いて建物の外に出てくださるようお願い申し上げ、それから、従業員の皆さんは各自の持場に戻るようにと要請があった。そして、事態はまさにそ

の通りに進行した。人の波は出口に向かって静かに引いてゆき、あとに残された空き地には、ハンドバッグ、靴、色とりどりの包み、迷子といったものが散らかっていた。ぼくは百人くらいの死体があるものと思っていた。だが、予想はまったく外れた。そこで、従業員たちが、半分死んだようになったお客の上に身をかがめていたが、お客たちは最後には立ちあがって、足を引きずりながらなんとか出口までたどり着いた。

建物の側面にある小さな扉は、警察の出入り専用だった。その扉から、警官たちが入ってきた。彼らはおもちゃ売場に直行した。おもちゃ売場！　とっさに、リスのような可愛い売り子と、テオの老人の姿が頭に浮かんだ。ぼくは止まっているエスカレーターを跳ね降りた。しかし、たいていの予感がそうであるように、その予感も結局間違った予感だった。死体は六十歳くらいの男性で、その腹がまわりに撒き散らしたものから判断するに、生きているときはさぞかし立派な太鼓腹だったのだろう。爆弾は彼の体をほとんど真っ二つに切断していた。ぼくはできるだけ目立たないように嘔吐しながら、なぜか、ルーナのことを思っていた。ルーナと、ローランと、彼らの子供のこと。ルーナからはもう三度も電話がかかっていた。「あなたはどう思う、バンジャマン、アドバイスして」。かわいそうな妹、どうしてぼくがアドバイスなんかできると思う、こんな状態なのに。

取りとめのない考えが浮かぶあいだに、ばらばらになったお客の体には毛布がかけられた。

「美しくはないよね」

小柄な警官がぼくにやさしい微笑みを送っていた。こんな状態にいたら、何だってないよりはましだ。あまり気乗りはしなかったが、ちょっと感謝の意味もこめて、ぼくは返事をした。

「確かにね」

CamScannerでスキャン

警官は頭を縦にふって、いった。
「だけど、地下鉄の飛びこみ自殺はもっと始末に悪いんだよ！」
(元気が出る言葉だ……)
「屑肉がそこらじゅうに散らばってさ、車輪の軸のあいだに指が挟まってたりするんだ……なんでこんなことを知ってるのかっていうと、おれは班でいちばん小っちゃいだろ、だからそんな仕事をするのはいつでもおれなんだよ」
警官ではなかった。消防隊の救急班員だ。赤い線の入ったくすんだ青の制服の救急班員。とにかく小さい。体より大きなヘルメットが腰のベルトのあたりまで覆ってぴかぴか光っている。
「だけど、ほんとに耐えられないのは、交通事故で大火傷した連中だよね。あの臭いは一度くっついたら取れないんだ。二週間も髪の毛が臭ってるから！」
おもちゃ売場の上空にはもう風船はなかった。みんな爆風で吹き飛ばされて、てっぺんまで昇ってゆき、ガラスの天井に張りついている。リスの売り子がすすり泣きながら、抱きかかえられ、連れてゆかれる。救急班員が毛布のかかった死体を指した。
「気がついた？　ズボンの前のチャックが開いてたよ！」
(いいや、断じて気がつかなかったとも)
幸いなことに、気の良い救急班員とは別れることができた（ゴングに救われたってところだ）。スピーカーがこういったからだ。従業員の皆さんも自宅に帰ってくれて結構です、ただし、パリを離れないように。捜査の必要上の措置です。どうか楽しいクリスマスを。
おもちゃ売場の端で、カラフルなボールを取り、ポケットにねじこんだ。一度弾ませると、いつまで

も跳ねつづける半透明のボールだ。ぼくにだってクリスマスのプレゼントをしなくちゃいけない相手がいる。次の売場で、星をちりばめた包装紙を失敬して、ボールを丁寧に包んだ。ロッカーに制服を戻し、外へ出た。

外では、黒山の群衆が、今度は店全体が吹っ飛ぶところを見ようと待ち焦がれている。氷のような寒さのせいで、自分に死ぬほど熱のあるのがわかる。こんなにたくさんの人が外に出ているのだから、地下鉄は空いているだろう。

だが、群衆は地下鉄のなかにもいた。

CamScannerでスキャン

3

ペール＝ラシェーズ墓地の近くに、縦三、横六、深さ九フィートの分譲地がある。フォリー＝レニョー通り七十八番地。ぼくのアパルトマンだ。家に着くと、電話がしつこく鳴っているところだった。ベルが鳴ると、いつもぼくはつい慌てて駆けつける。
「パンジャマン、なにもなかった？」
ルーナ、ぼくの妹だ。
「なにもって、なに？」
「爆弾よ、デパートの」
「みんな吹っ飛んじゃった。助かったのはぼくひとりだ」
ルーナは笑った。それからこういった。
「吹っ飛ばすっていえば、わたしも決心したわ」
「なんの？」
「小っちゃな爆弾みたいなもの。わたしの間借人を吹っ飛ばすことにしたの。中絶よ、バン。わたし

CamScannerでスキャン

に必要なのは、ローランなの」
そして沈黙。ルーナの泣いている声が聞こえる。だが、とても遠くから。彼女は泣き声を聞かれまいと必死で抑えている。
「聞いて、ルーナ……」
なにを聞かせようというんだ？　よくある古典的なストーリー。彼女はやさしい看護婦、彼はハンサムな医師。二人は電撃的な恋に落ち、死ぬまでお互いの目を見つめあっていようと決心した。あなたとわたし、二人だけ。だが、歳月が経過して、第三の存在が欲しくなり、その欲求が猛烈なダッシュをかけてくる。自分たちの分身がほしいという女性の激しい本能だ。もうひとつの生命。
「ルーナ、聞いて……」
ルーナは聞いているが、ぼくはなにもいえない。だから彼女はいう。
「聞いてるわよ」
仕方なくぼくはしゃべりはじめる。その間借人は大事に取っておかなくっちゃいけない。君は前の間借人たちを始末してきた。なぜなら、君はパパたちが好きじゃないから。ローランにはパパになってほしくないってわけだ。だが、今度の間借人は始末しちゃいけない。なぜなら、君は間借人のパパをあまりに愛しているからだ！　そうだろ、ルーナ？　ほんとに、もうばかなことは止めるんだ（『お前こそばかなことは止めろ』と、ぼくの心の奥のひだからいつもの囁き声が聞こえる、『赤ちゃんにも生きる権利を！』運動のスローガンを聞いてるみたいだぞ！」）だがぼくは続ける。いったん話しだしたら、話しつづけなくては。
「いずれにしても、もう以前みたいに簡単には済まないよ。きっと死ぬほどローランを恨むようにな

るにちがいない。君の性格はよく知っているんだ！　ねえ、堕胎医が鼻先に卵巣一対をぶらぶらさせてそれでお仕舞いってわけじゃないんだよ。長い時間かかって身も心もだんだんに衰弱してくるんだ。いってることはわかるよね」

ルーナは泣いていた。それから笑い、また泣きはじめた。たっぷり三十分も！

完全に疲労困憊して受話器を元に戻したが、またすぐに電話が鳴った。

「もしもし、わたしのおおちびさん。大丈夫？」

ママンだ。

「大丈夫だよ、ママン、大丈夫」

「デパートに爆弾ですって。そういえば、わたしたちのお家では爆発騒ぎなんてただの一度も起こらなかったわよね」

ママンは、むかし一階にあった親切な金物屋で起こった騒ぎのことを当てこすっているのだ。ぼくは子供のころその金物屋に入りびたりになっていたが、結局、日曜大工仕事ひとつマスターできなかった。爆発騒ぎの後、金物屋は子供たちのためのアパルトマンに改造されてしまった。だが、ママンは、六十二年六月の朝、プラスチック爆弾の塊で吹き飛ばされた向かいの食料品屋のモレルの店のシャッターのことを忘れている。それから、通りがかりにやって来て、客を選ぶときは気をつけたほうがいいぜ、と脅したタフな二人組のことも。ママンは人がいい。戦争のことだって忘れているんだから。

「子供たちは元気？」

「元気だよ。みんな階下にいる」

「クリスマスはどうするの」

「五人水いらずで家にいるよ」
「わたしは、ロペールにシャロンに連れてってもらうの」
（シャロンといっても、シャロン＝シュル＝マルヌのことだ。かわいそうに）で、ぼくはいった。
「ロペールばんざい！」
ママンは牝鶏みたいにくっくっと笑った。
「あんたはいい子ね、わたしのおおちびさん」
（たしかに、いい子だ……）
「他の子供たちだって悪くないよ、ママン」
「あんたのおかげよ、バンジャマン。あんたはいつだっていい子だったわ」
（くっくっと笑ったあとに、すすり泣き）
「わたしはあんたたちを棄てて……」
（たしかに、悪い母さんだ……）
「棄てたなんてとんでもない、お休みだよ。ママンはお休みを取ってるんだ！」
「なんて母親なんだろう、バン、はっきりいって。わたしってどんな母親？……」
ぼくはすぐにママンが自問自答するのに必要な時間を割りだし、受話器を羽毛布団の上にそっと置いて、台所へ行き、よく泡だったトルココーヒーを作った。寝室に戻ると、電話の声は相変わらず母親の本性の探求を続けていた……。
「……それがわたしの最初の家出だったわ。三歳のときよ、バン……」
コーヒーを飲みおわり、カップをコーヒー皿に戻す。テレーズなら、カップの底に溜まったコーヒー

かすの模様で、この地区全体の未来を占うことができるだろう。

「……だけど、もう遅すぎたの。八歳か九歳になる頃だったと思う……バン、聞いてる？」

ちょうどそのとき、室内電話の呼出し音がじりじりと鳴った。

「聞いてる、ママン。だけどもう切るよ、子供たちが子機で電話してきたんだ！　じゃあね、ゆっくり休んでよ。忘れないでよ、ロベールばんざい！」

ぼくは受話器を置き、またすぐに受話器を取った。テレーズの甲高い声が、ぼくの鼓膜にドリルを突き立てる。

「バン、ジェレミーったらくそったれよ。ぜんぜん宿題ができないの！」

「テレーズ、言葉に気をつけろよ。弟みたいな口を利いちゃいけない」

今度はその弟の声が爆発した。

「くそったれなのはこの馬鹿女のほうだよ。なんにも説明できないくせに！」

「ジェレミー、言葉に気をつけろよ。姉さんみたいな口を利いちゃいけない。クララを出してくれないか」

「バンジャマン？」

クララの温かい声。ビロードのような声だが、熟しきっておらず、まだ固さの残る声。ひとつひとつの単語が、「優」をあらわす無垢の白星のように、静かな明快さで転がりでる。

「クララかい？　ちびの具合はどうだい」

「熱は引いたわ。ローランに診てもらったんだけれど、二日間は暖かくしてあげなくちゃいけないって」

CamScannerでスキャン

「また人喰いサンタを描いたかい」
「一ダースくらい。血の色はずっと減ったけれど。写真に取っておいたわ。パン、今夜の食事はドーフィース風グラタンよ。一時間でできあがるわ」
「じゃあそっちに降りてゆくよ。ちびを出してくれる？」
それから、ちびの小さな声が聞こえた。
「どうしたの、パン」
「いや、大したことじゃない。お前のアルバムに貼るように、テオの写真をもらってきたっていいたかったんだ。それから、今夜は新しいお話をしてあげるよ」
「人喰い鬼のお話？」
「爆弾のお話」
「へえ、すごいね……」
「これからぼくは一時間だけ眠るからね。ちょっとでも室内電話に近づいた奴がいたら、殺してくれ」
「OKだよ、パン」
ぼくは受話器を戻し、ベッドに倒れこみ、着地する前にすでに眠っていた。
一時間後、巨大な犬に起こされた。犬はぼくの脇腹にタックルしてきた。その激しいショックでぼくはベッドの下に転げ落ち、壁とベッドのあいだに挟まってしまった。犬はその上から完全にぼくを押えこみ、今朝おこなう時間のなかった身支度をぼくに代わってやってくれた。犬自身はパリ市の排水溝のような悪臭がしていた。顔を舐めまわすその舌は、すえた魚か、虎の精液か、パリのお犬様たちと同じ

ような臭いがしている。
「プレゼントだろ？」とぼくはいった。
するど、犬はうしろに飛びすさり、口では言い表わせないくらい汚い尻を床におろし、舌をだらりと下げ、首を前に垂れて、ぼくをじっと見つめた。ぼくは上着のポケットを探り、小さなボールの包みを引っぱりだし、犬の目のまえに差しだして、宣言した。
「ジュリユス、お前のだ。クリスマスおめでとう！」
かつて金物屋だった階下のアパルトマンには、ドーフィーヌ風グラタンのナツメグの香りがいつまでも漂い、ぼくが子供たちとともにお話の核心に踏みこんでゆくころになっても、なかなか消えなかった。すでにパジャマを着た子供たちは目でぼくのお話を追いかけ、何段にも重なったベッドから垂らした足をぶらぶら揺らせている。いまやレーマンは狂ったように回転する滑り台のほうへ突進し、たったいまぼくが発明してやった機械仕掛けの腕を振りまわし、群衆を蹴散らして進んでいた。
「どうして失くしちゃったの、本物の腕は？」と間髪をいれずジェレミーが尋ねる。
「インドシナでのことだ。ダラトへ向かう三二七キロメートル地点で待ち伏せに会ったんだ。部下たちはレーマンのことをほんとうに慕っていたからね、彼らは戦場を退却するときに、レーマンとレーマンの腕をそこに置いていってくれたんだ。レーマンとレーマンの腕はもう別々になっていたんだよ」
「どうやってそこを切り抜けたの」
「部隊長がたったひとりでレーマンを探しにきてくれた。三日後にね」
「三日後だって！　その三日間なにを食べてたの」とちびが尋ねる。

「自分の腕さ！」

われながら当為即妙のご名答に、みんなも満足した。ちびは人喰いの話に満足し、ジェレミーは戦争の話に、クララはちょっとしたユーモアの味付けに満足した。だがテレーズだけは、仕事机の向こうで裁判所の書記のようにしゃっちょこばって、いつものように、脱線もふくめてぼくの話をぜんぶ速記していた。テレーズが通っている秘書学校のために、またとないトレーニングになるのだ。この二年間の夜のエクササイズで、彼女はすでに、カラマーゾフの兄弟、モービー・ディック、田舎っぺ騒動記、イエスタ・ベルリングの伝説、アスファルト・ジャングル、それにぼくの脳のほら穴から出てきた二、三の物語を書き写していた。

子供たちのまばたきがそろそろ灯りを消してもいい頃だと告げるまで、ぼくはお話を続けた。そっと部屋の扉を閉じたとき、闇のなかでクリスマスツリーがきらめいた。なかなか見事な話しっぷりだったと思う。子供たちは一秒たりとも、プレゼントに飛びつこうなどと考えもしなかったのだから。ジュリユスだけは、包み紙を破らずに中身を取りだそうとして、二時間ものあいだ悪戦苦闘していたけれど。

4

続く事件は、翌十二月二十五日朝八時のチャイムの音から始まった。「どうぞ、開いてますよ」と怒鳴ろうとして、いやな記憶に引きとめられた。先週、ジュリユスとぼくが扉を開けると、廊下の真ん中に白木の棺桶が置かれて、便秘したような顔の三人の運送屋が付きそっていたのだ。口を開いたのは、三人のなかでいちばん青い顔をした男だった。

「死体なんですけど」

ジュリユスは慌ててベッドの下に潜りこみ、ぼくのほうは、髪の毛をぼさぼさにしたまま、申し訳ないがといった気持をこめて、色褪せたチェックのパジャマを差して見せた。

「五十年後にまた寄ってください。いまは準備ができていないもので」

そういうわけだが、チャイムは鳴っている。ぼくは、人と知りあいになるのが大好きなジュリユスをうしろに従えて、扉まで足を引きずる。すると、スーパーマンのように項（うなじ）まで筋肉で膨れあがった巨漢が、毛皮の襟付きの飛行士用ジャンパーを着て、ドイツ占領下のフランスに降下したアイルランドのパラシュート隊員のように、目のまえに突ったっていた。

CamScannerでスキャン

「実習捜査官のカレッガです」

交通整理の白い警棒が出世して調書用ボールペンに変わったというわけだ。彼が体の塊をアパルトマンのなかに潜りこませるやいなや、その尻のあいだにジュリユスが鼻面をねじこんだ。犬にぴんたを喰らわしたりはせず、刑事は急いで椅子に座った。そんなところが気に入ったのか、思わずこういっていた。

「コーヒーは?」

「ご自分用に淹れるついでがあれば……」

ぼくが台所に移ると、彼は尋ねた。

「扉には鍵をかけたことがないんですか」

「一度も」

「犬の性的自由のためにそうしているんですよ」と頭のなかでは思ったけれど、口には出さないでおいた。

「いくつか質問したいんですが。規則なんです」

もちろん予想はしていた。デパートの模範的従業員のお目覚めの時間だ。十人ほどの組合幹部と、十数人のどんな組織にも属さぬ独立心旺盛なおどけ者が、優先的に刑事の訪問を受ける。大事な子分たちへのデパート経営陣からのクリスマスプレゼントだ。

「ご結婚は?」

砂糖入りのお湯が銅製のコーヒーポットのなかで歌を歌っている。

「してません」

CamScannerでスキャン

ポットにトルココーヒーの粉をスプーン三杯入れ、ゆっくりと掻きまわして、クララの声のようなビロードの滑らかさが出るのを待つ。
「子供さんたちは、下ですか」
ふたたびポットを火のうえに戻し、コーヒーが煮たたないように気をつけながら、温度を上げてゆく。
「半分弟が二人に、半分妹が二人、四人とも母の子供なんです」
小さなボールペンで手帳に書きこむ時間が経過して、カレッガ刑事は次の質問をした。
「で、父親の方がたは？」
「ばらばらです」
台所の扉ごしに覗いてみると、カレッガはせっせと、ぼくのかわいそうな母が父たちをばらばらにしたと書いている。それから、ぼくはコーヒーポットとカップをもって出ていった。濃い液体を注ぐ。手を出した刑事をさえぎった。
「ちょっと待って。コーヒーの粉が沈んでから飲んでください」
彼はその通りにした。
ジュリユスが彼の足もとに座りこんで、熱心に見守っている。
「デパートでのお仕事は？」
「叱られることです」
彼は聞き返さなかった。そのまま書きこむ。
「その前のお仕事は？」
おやおや、長くなるぞ。貨物発送係、バーテン、タクシー運転手、宗教学校の絵の先生、石鹸訪問販

売員、そのほか忘れたのもあると思うけれど、デパートの品質管理部門、これがいまの仕事だ。
「いつから？」
「四か月前から」
「気に入ってます？」
「ほかの仕事と同じですよ。労働にたいしては充分すぎるくらいもらってます。でも、どれほどうんざりさせられるかを考えれば、とても充分とはいえません」
（この問題をみんなでよく考えてみようじゃないか！）
彼はメモを取る。
「昨日、なにかいつもと違うことに気づきませんでしたか」
「ええ、爆弾が爆発しました」
さすがに刑事は顔を上げた。だが、まったく同じ無感動な調子で、正確にいい直した。
「爆発の前にという意味ですよ」
「なにも」
「お客様ご要望コーナーに三度呼びだされたそうですが」
おいでなすったぞ。ぼくはオーブンレンジと、掃除器と、点火式冷蔵庫の話をした。
刑事は内ポケットを探って、ぼくのまえにデパートの平面図を広げた。
「お客様ご要望コーナーはどこです？」
ぼくは指さした。
「ということは、少なくとも三度はおもちゃ売場のまえを通ったわけですね」

CamScannerでスキャン

それが結論ってわけか。この男の！

「確かに」

「立ち止まりましたか」

「二度目の航海のときに十秒ほど、ええ」

「いつもと違うことに気づきませんでした？」

「AMX3 0戦車に狙われたこと以外には、なにも」

彼は黙って手帳に書きこみ、ボールペンにキャップをかぶせ、コーヒーをひと息で飲み、コーヒーかすまで呑み下し、立ちあがって、いった。

「とりあえずこれで終わりです。ただしパリを出ないように。ほかにお訊きしたいことが出てくるかもしれませんから。さよなら、それとコーヒーをありがとう」

それだけ。閉まった扉を長々と眺めているなんてことは、映画のなかでしか起こらないことだ。ジュリユスとぼくは、カレッガ刑事の率直なところに惹かれていた。お笑い担当班に配属されれば立派な未来だって開ける若者だ。今晩子供たちにしてやる話のネタは仕入れたぞ。話の大筋はおなじだ。ただし、言葉のやりとりは強烈なユーモアの色に染まって噴出し、刑事とぼくは、憎悪と、不信と、讃嘆のいり混じった爆発するような感情を抱きつつ別れることになる。そして、刑事は二人だ。子供たちもすでによく知っている、ぼくの創作にかかるあの恐るべき二人組。苦痛にのたうちまわるハイエナのように醜い毛むくじゃらのちび男と、禿の巨人。頭は禿だが、「その強力な上顎の両側には、ふさふさとした揉み上げが感嘆符のように刻印されていた」。

「ハイエナ・ジプと、揉み上げパットだ！」とちびは叫ぶだろう。
「ハイエナ・ジプっていうのは、ハイエナみたいな顔から付けられた名前なんだよね」とジェレミーが正確を期す。
「揉み上げパットっていうのは、ヘアスタイルから付けられた名前なんだよね」とちびも負けずに正確を期す。
「棺桶エドより悪党で、ボヘミアの木偶より狂ってるんだ」
「二人は友だちなの？」とクララが尋ねる。
「十五年も一緒にやっている」とぼくは答えるだろう。「たがいに命を助けあったことも数えきれない」
「車はなに？」このジェレミーの質問には素晴らしい答えが用意される。
「プジョー504、ピンクのコンバーティブル、直列6気筒、鮫みたいに危険なやつだ」
テレーズは「星座は？」と訊くだろう。
「二人とも牡牛座だよ」
カレッガが出ていったあと、子供たちのところへ行くと、いかにもといった感じで、クリスマスの樅の木が色とりどりの電球で輝いていた。ジェレミーとちびはプレゼントの包み紙の海のうえで鷗のような叫び声を挙げている。テレーズはプロっぽく眉根を寄せながら、昨夜のぼくの話を、真新しいタイプライターで打ち直している。ルーナがやって来ていて、この家族の肖像を見て、目に涙を浮かべ、妊娠六か月といった感じの外股に足を開いている。そういえば、ローランがいない。クララがぼくのほうに

やって来たが、ジャージーのドレスのせいで輝くような美しい体の線が浮かびあがっている。クララが手にしているぼくの古いライカは、彼女は口には出さなかったが何年もまえから欲しがっていたもので、最近ついに彼女の熱意に負けて、写真を取ることだけは許していた。ジャージーのドレスを選んだのはテオだ。この分野に関しては、男好きの男に絶対に任せるべきだと思う（偏見かもしれないが）。

「はい、パンジャマン、あなたのよ」

クララが差し出したものは、きれいに包装されていた。ボール紙の箱に入り、薄葉紙に包まれた、ホイップクリームみたいにふわふわのシャラント・スリッパ一足。これこそまさにぼくの欲しかったもの、本物のクリスマスだ。

CamScannerでスキャン

5

翌二十六日、仕事再開。いつもと同じように、地下鉄のペール＝ラシェーズ駅までジュリユスが見送りにきてくれる。ぼくが犬の餌代を稼いでいるあいだ、ジュリユスは牝犬を引っかけにベルヴィルに出かける。ジュリユスの涎だらけの顎のあいだには、一昨日の夜以来、新品のボールが咥えられたままになっている。

買い求めた新聞には、「デパート爆破の悪魔的犯行」についての記事が長々と書かれていた。たったひとりの死者ではもの足りないらしく、記事の筆者は、十数人の死者が出れば見られたはずの光景を描きだしている！（どうしても悪夢のような光景を見たいなら、目をしっかりと開けているだけでいいのに……）。それからこの新聞屋どのは、故人の経歴についても数行を費やしている。クルブヴォワの評判のよい自動車修理工場経営者で、六十二歳。近所の人びとは熱い涙にかきくれているが、「幸いなことに」独身で、子供もいなかった。読み間違いではない。「幸いなことに独身で、子供もいない」と確かに書かれている。ぼくは回りを見まわした。「幸いなことに」運命の神が優先的に独身者に体当たりするという事実は、この首都圏に暮らす家族たちの小宇宙を不安に陥れてはいない模様だ。あまりに気

分が軽くなったので、レピュブリック駅で地下鉄を降り、残りを歩いてゆこうと決めた。暗く、じめじめして、人ごみでいっぱいの、凍りつくような冬の朝。パリはヘッドライトの黄色が淀む水溜まりだ。

遅刻するのではないかと思ったが、デパートのほうがぼくより遅刻していた。巨大なショーウィンドウに鉄格子のシャッターが降ろされた様子は、さながら隔離検疫中の大型客船だ。地下のボイラーから蒸気が立ちのぼり、朝靄のなかに消えてゆく。建物のところどころから小さな光が洩れているのを見れば、まだ心臓は動いているらしい。なかには生命の気配がある。建物に入ると、突然、光の洪水に見舞われた。いつでも同じショックを受ける。外がどんなに暗く陰鬱でも、なかは輝いているのだ。大量の光が店の上から静かな滝のように落ち、鏡や銅製品やガラスやまがいのクリスタルに反射して、通路を流れ、お客の心にまで降り注ぐ。この光は、いまある建物を照明しているのではない。別世界を創造しているのだ。

そんなことを考えながら、警官の素早い指先に頭のてっぺんから爪先まで検査され、やっと原子爆弾ではないと認定されて、奥に進むことを許された。

ぼくが最初に出社した人間というわけではなかった。すでに従業員の大部分は一階の通路に集まっていた。みんな中空を見つめている。女性のほうが多い。彼女たちの目は、精霊の声にでも耳を傾けているかのように、とらえどころのない光を放っている。上の指令用のブリッジから、サンクレールがマイクを手に切々と訴えかけている。彼は、先頃の「出来事」の際に見せた「従業員諸君の非の打ちどころのない態度」に讃辞を捧げ、また、経営陣がシャントルドン――化粧品売場のショーウィンドウを横断旅行し、現在病院で傷を癒している職員――にたいして満腔の同情を表明していると断言した。さらに、

昨日警察の訪問を受けた職員にはご寛恕をいただきたいが、「経営者サイドも含めて」全職員が警察の調査に協力しなければならないし、それはひとえに「幸いなる結論を導くべく、事件捜査に必要なすべての要素を明らかにする」ためにほかならない。

サンクレール自身についていうなら、一瞬たりとも、今回の爆破事件が「われわれの協力者の一員」と関係があるなどと思ったことはない。なぜなら、諸君は私に「雇われている」のではなく、むしろ「協力してくれている」からであり、このことは取締役会でおごそかに言明した事実でもある。入口でのちょっとした検査については「協力者の皆さん」にとくにお詫び申し上げたい。自分自身もその種の検査を受ける準備はできているし、捜査が続くあいだは、お客様がたにもこの検査を受けていただくことになる。

ぼくはサンクレールを見た。すごく若いし、すごくハンサムだ。出世も速かった。当たりは柔らかいが、権威も感じさせる。一流商社の出身で、まず、発声の仕方と服の着こなし方を叩きこまれたのだ。残りのことはあとから自然についてくる。ほとんど愛情にみちたしゃべり方で、ブロンドの髪の房の下から、苦悩の限に縁どられたやさしい目がのぞいている。サンクレールはデパートのことで胸が痛いのだ。彼を取りまく協力者たち、人事部長、各階の責任者、鬼のように冷酷な上級現場監督などは、もっとずっと職務にふさわしい顔つきをしている。彼らは金色に塗られた二階の欄干に沿って、一糸乱れず並んでいる。表情もその場にぴったりだ。耳を澄ませば、責任者たちの心臓の上で名札が上下する音さえ聞こえてきそうだ。この思いつきは面白い。ぼくが笑うと、前にいる男がうしろを振りむいた。ルシフル、労働総同盟の代表ご本人で、いささか違いのわかる男だ。

「いいから、黙って聞いてろよ、マロセーヌ」

ぼくは恍惚状態の聴衆に視線をやり、それから、ルシフルの剃りあげた項（うなじ）を見つめ、ふたたび、中央の演壇に目を向けた。疑いもなく、サンクレールには天賦の才能がある。彼にはコツがわかっているのだ、ぼくには一生わからないはずのコツが。

いつまでも続くミサから抜けだして、ロッカールームに行った。金属製のキャビネットを開け、制服を出す。ぼくの私物ではない。会社からの借りものだ。ひどくダサくもないが、もちろん格好よくもない。灰色がかって、古っぽくて、あまりにまともすぎる詰まらぬ服。奮発してもう一着買ってみるか、なんて思って買うような奴の服。買ったばかりのときみたいに、その服を手にもち、腕を伸ばして広げてみた。からかうような声がぼくを白昼夢から引きもどした。

「いい話があるの、パン。わたしのと交換しない？」

今朝はセルッティを着こなしたテオだった。テオはスピード写真に写すために頻繁に服を替えるので、彼のロッカーははち切れそうになっており、ぼくのロッカーにまで服を詰めこんでいる。ぼくたちのロッカーの鍵は共通なのだ。だから毎朝ぼくは、テオのイタリア＝ハリウッド調のワードローブのなかから、自分の制服を苦労して引っぱりださなくてはならない。

「嘘じゃないわよ。欲しくないの？　持ってってって、ほら！」

ぼくは手で押しとどめた。

「ありがとう、テオ。このギンギンの制服を見るたびに、自分がほんとうにこの仕事に向いているのかなって、つねづね疑問には思ってるんだけどね」

するとテオは大笑いした。

「毎朝自分のワードローブのまえに立つたびに、わたしもまったくおなじ疑問を感じるの。わたしはほんとうは女好きじゃないかってね。でも、やっぱりホモなのよね」

それから、ぼくたちは地下一階に降りた。日曜大工仕事の殿堂、テオの王国だ。テオは毎朝、部下の店員たちよりも三十分以上も前に売場にやって来る。大量殺戮に先立って、兵卒がぎっしり並んだ戦列を見回るナポレオンさながら、ひと気のない通路を一巡りするのだ。どんなに小さなナットがひとつなくなってもテオは見逃さないし、陳列棚にほんのちょっと乱れた形跡があっても、彼の心ははげしく痛む。

「小爺(おじい)たちったら、ほんとにひどいでたらめをやるわ！」

テオは溜息をつき、商品を元に戻す。目をつぶったままで、地下一階全体を整頓することだってできるだろう。この売場は彼の領分なのだ。ぼくたち二人だけのときには、ここには天地創造以前の静寂が垂れこめる。

「クララはドレスが気に入った？」

「最高の娘の最高の服だよ、テオ」

ぼくたちは声をひそめた。テオは長椅子用のキャスターを詰めた箱のなかにチャイムを見つけたという。

「わたしの爺さんたちに最初に障害が出るのは記憶力なの。なんでもかんでも拾ってきちゃ、それをどこかに置いて、また他のものを持ってくるでしょう。赤ん坊みたいに貪欲で、一所懸命だからね……」

テオの小爺たちが出現しはじめたのは、彼がまだ工具売場の一介の店員だったころにさかのぼる。テオはこの界隈の年寄りにすごく親切だったので、じいさんたちは毎日毎日彼の仕事台に集まってきては、朝から晩まで静かに修繕の仕事をこなし、その数はどんどん増えていった。

「わたしはこの街の人間だから、街がどんなものかよく知ってる。あの爺さんたちを放っておくことができなかったの。放っておいたら悪いことだってやりかねないもの」

百歳の老人たちがどんどん侵入してくることに文句をいう者があると、テオはかならずそう答えた。

「爺さんたちはここで働いて、世界を再建しているんだって思ってるわけだし、お金がかかるわけでもないでしょう」

テオの職務の階級が上がるたびに、小爺たちの数も増えていった。ものすごく遠いホスピスからもやって来た。その後、サンクレールはテオを修繕仕事の帝王に祭りあげたのだが（テオがありあわせのものでパリ全体を修繕できるだけでなく、風呂場を修理しようと思って来た客に芝刈機を売りつけることもできるからだった）、それ以来、地下一階全体がテオの小爺たちの領分になったのだ。

「天国の待合室ってわけよ」

「あの灰色の作業服はいったいどこから見つけてきたんだい」

「うちの隣の孤児院の一掃セール。ともかく爺さんたちがあの服を着ていれば、どこにいてもわかるから」

正午に社員食堂を避けて小さなレストランで食事をしているとき、テオは笑いをこらえきれなくなった。

「知ってる？」
「なにを？」
「わたしが老人愛者だって噂をレーマンが流してるの。いわば、第三世代に突入した小児愛者ですって」
（心やさしきレーマン……）
「そうそう、小児愛っていえば、ちびちゃんのアルバムにこれをあげてよ」
新しい小さな写真だ。ワインレッドのスーツ、本物のビロード、ボタン穴には黄色いミモザの花。写真の裏にひとこと書いてある。ちびは太字と細字を混ぜこぜにして、この文句を書き写すにちがいない。
「テオはバトー・ムーシュをしています」
わかる人にはわかる言葉なのだろう。もちろん、テオはわかっている。それから、テオが部屋にいないとき、その扉にピンで止められたこの写真のメッセージを見るたくさんの彼の友だちもわかっている。それでは、ちびは？　こんな写真のコレクションは禁止するべきだろうか？　子供はテオの専門分野ではないとはいうものの……。

6

午後の時間が始まると、まもなく二、三の苦情が書類かごのなかに放りこまれた。そのうちの重大な一件は寝具に関わる厄介なものだった。さっそくレーマンがぼくを呼びつけた。おもちゃ売場のまえを通る。爆発の痕跡はあとかたもない。商品の陳列台は結局修理には回されず、夜のうちに、まったく同じ台が運びこまれた。爆発など起こらなかったし、ぼくは集合的幻覚に捕われていたのだという奇妙な印象が生じた。だれかがぼくの記憶の一片を切りとったみたいな感覚だ。この心がしぼむような感覚は、エスカレーターの上昇にしたがって、おもちゃ売場が人のうようようごめくデパートの深みに沈んでゆくあいだも、ずっと続いていた。

レーマンのオフィスでがなり立てている男の肩幅はものすごく広く、ガラス扉を完全にふさいでいた。背中が太陽を日蝕状態に追いこんでいる。最初は、レーマンの顔も見えなかった。客のブレザーの内側で震える筋肉と、赤焼けした首の皮膚の下で脈打つ血管から判断するに、レーマンはどうにもならない状態に追いこまれているらしい。彼が目の前にしているのは、お人好しの大男といったタイプではない

のだ。多血質だが、声を荒げたりはしない。最悪だ。部屋のなかにも一歩も入ろうとはしない。うしろ手に扉を閉めたまま、レーマンに向かって指を突きだし、ぶつぶつと損害を並べたてている。ぼくは三度軽く短くノックした。こつ、こつ、こつ、よりもっと短く。

「入りたまえ!」

おやおや、レーマンの声に不安が混じっている。マストドンみずから、うしろを振りむきもせずに扉を開けてくれた。ぼくは男の腕と扉の枠のあいだを、殴られた犬のようにおどおどした体の柔軟さを発揮して通りぬけた。

「入院三日、労働停止二週間、あんたの品質管理係が聞いたらパンツがずり落ちるだろう」

客の声だった。予想していたように、淡々として、確信にみちている。つまり危険だ。男は不平を並べたてに来たのでも、議論を吹っかけに来たのでも、むろん善処を要請しに来たのでもない。自分の力で、自分の権利を認めさせに来た、それだけのことだ。一目見て、この男には、自分以外に行動原理のないことがすぐにわかった。また、その性格のせいで、この男が社会的階級の上位に行けないことも、一目見てわかった。たぶんこの男は、自分でもどこか居心地の悪くなるような心を抱えているのだろう。だが、レーマンにはそのことを感じる余裕がない。他人に打撃をあたえることに慣れすぎたレーマンの恐怖はただひとつだけ、他人から打撃を喰らうことだ。だから、この状況では、客の男のほうが信頼できるのだ。

ぼくは自分の目に十分な恐怖の色を浮かべ、レーマンが勇気をふるってぼくの自由にやらせてくれるように仕向けた。レーマンは手短に、ここにいらっしゃるお客様のムッシューなんとか、つまり、自己の純粋状態へのダイバー(なぜこんな比喩を思いついたんだろう、筋肉のせいか?)が、先週、一〇

パーセント天然木コーナーで幅一四〇センチのベッドを注文したと説明した。

「一〇〇パーセント天然木はたしか君の担当だったね、マロセーヌ」

おずおずと頭を下げて、はい。

「つまり、こちらの方は、幅一四〇センチのベッド、曲線加工のくるみ材、商品番号T・P・885をお買いあげになった、君の担当売場でね、マロセーヌ君。しかるに、初めてご使用になったその日に、ベッドの頭側の脚が二本とも折れてしまったのだ」

休止。ダイバーにちょっと目をやると、彼の下顎がチューインガムの原子たちに拷問をくわえていた。レーマンのほうは、ぼくにボールをパスできてまんざらでもない様子だ。

「保証は……」とぼくはいった。

「保証はむろん利くが、君の責任が問われているのだよ。さもなければ、君を呼ぶ必要はないだろう」

ぼくは自分の靴をクローズアップで見つめる。

「ベッドには、どなたか別の方がいたんですか」

たとえ心底ふるえあがっていたとしても、この種の楽しみを見逃すレーマンではない。

「君さみ、いったい何をいおうとし……」

レーマンの言葉は巨漢のバーナーのような視線であっさり蒸発してしまった。質問に簡潔に答えたのは、巨漢自身だった。

「鎖骨一本に肋骨二本。婚約者だ。病院にいる」

「うううううう！」

思わずぼくは唸り声を挙げていた。苦痛の唸り声。巨漢もレーマンもびくりとした。

「うううううう！」

今度はみぞおちを一撃されたような唸り声。それから、乳のすぐ下に肘の先を当てて胸郭を思いきり圧迫する。ぼくの顔は、運命のベッドにかかったシーツと同じくらい真白になった。すると、ヘラクレスは一歩まえに進みでて、ぼくがショックで意識を失った場合に備えて、ぼくを抱きとめる仕草をしかけた。

「ぼくのせいなんですね？」

虚ろな声、呼吸困難の初期症状。よろめきながら、ぼくはレーマンの机でなんとか体を支えた。

「ぼくのせいで？」

この肩肉の塊が跳躍台の上からルーナやクララの体めがけてダイビングし、彼女たちのか細い骨を圧し潰すところを想像しただけで、証明書つきの本物の涙が出てきた。必要なのは涙に濡れたこの顔なのだ。

「亡くなられたなんて」

あとはキャスターに乗せたようにすんなりと運んだ。ぼくの激しい反応に心を動かされて、ムッシュー筋肉の怒りは急速にしぼみ、体まで縮んだようだった。驚くべき変化で、ほとんど心臓の形まで見えてきそうだった。この機会をとらえて、レーマンはねちねちとぼくに襲いかかってきた。ぼくはしゃくりあげながら、レーマンに辞意を表明する。それはあまりに身勝手だとレーマンはせせら笑う。自分のような無能な者はこのデパートにいてもなんの役にも立ちませんから、どうか、とぼくは懇願する。

「無能さの償いをしてもらう必要があるんだよ、マロセーヌ！　それ以外の落度も全部だ！　いや、

それ以上にだ！」
　レーマンがぼくの無能さの代価を可能なかぎり高く支払わせると断言したとき、客の大男がつかつかと部屋を横切り、レーマンの机に二個のこぶしを叩きつけた。「この男をいじめてそんなに楽しいか？」
「この男」というのは、ぼくのことだ。ということは、悪くないぞ、ぼくは筋肉皇帝陛下の庇護を受ける身分になったのだ。レーマンはもっと奥まで体を沈みこませられる椅子が欲しくなったことだろう。客は言葉を続ける。むかし学校でも、馬鹿どもが自分たちより弱い者をいじめるのを見て頭に来ていたんだ。
「だから、よく聞けよ、おっさん」
「おっさん」というのは、レーマンのことだ。その顔色はまるで蠟燭。一件が落着するためには、この蠟燭を燃やすほかあるまい。レーマンが「よく聞く」べきことは単純だった。一、自分は訴えを引っこめる。二、後日、「この男」が職を失っていないか必ず確かめに来る。三、もしもそのとき「この男」がここにいなかったら、もしもお前が「この男」をクビにしていたら……。
「こいつみたいに、お前を押っぺし折ってやるからな」
「こいつ」というのは、たった今わが救世主の指のあいだでボキッと音を立てた、レーマンの植民地時代の記念品、見事な黒檀製の定規のことだ。
　レーマンがようやく我に返ったのは、下りのエスカレーターが巨漢の肉体の最後の一センチ角を呑みこんでからだった。そのときになってはじめて、レーマンは腿を叩いて大喜びし、鯨のように大口をあいて笑ってみせた。だが、レーマンの掌を返したような大喜びにぼくは同調できなかった。今回ばかりはだめだった。ぼくは筋肉男の退場を最後まで見届けた（「おいお前、こんな屑どものいいなりになっ

てるんじゃないぞ、戦え！」帰りぎわに男はそういったのだ）。そしてぼくも他人に語りかけるように、何度となく、自分にそう語ってきた。筋肉男殿、「この男」だって、デパートと戦うこと、この帝国と戦うことを考えなかったわけじゃないんだ。すくなくとも、品質管理部と戦うこと、強力だが抽象的にしか存在しないこの制度と戦うことは考えた。そして、自分なりに武装したんだよ。そこへ恐れを知らぬ騎士バイヤールがたったひとりで帝国の守護隊と戦う決意を固めてやって来た。だが、バイヤールは年齢不詳の小男（お前のことだよ、マロセーヌ！）と出会い、この小男が自分のせいで死にかかっていると思いこみ、これまでもそうしてきたように、過剰な人間性ゆえに、あわれ、自分の怒りを解いたのだ。騎士バイヤール、すなわち、わがダイバーが踵を返したとき、ぼくは彼の靴に目をやり、「ダイビング用の足ひれはもうちょっと上等なものだといいなあ」と祈った。

今度はぼくが扉を開ける番だった。

「レーマン、今日はもうこれっきりです。ぼくは家に帰ります。必要ならテオがぼくの代わりをしてくれるでしょう」

レーマンの笑いが喉に引っかかる。

「あのおかま野郎はその仕事のために給料をもらってるわけじゃない」

「給料をもらってもしたくない仕事もある」

レーマンはうすら笑いに可能なかぎりの軽蔑を詰めこんで、こう答えた。

「わたしもそう思うよ」

（屑め、いつか機械仕掛けの腕が必要になるからな）

下に降りてゆくと、おもちゃ売場は黒山の人だかりだった。
「十二月二十四日より二十六日のほうがよく売れるなんて、聞いたこともないわ」
そういったのは、リス顔の赤毛の売り子で、彼女は、どちらかといえばイタチ顔の同僚と話をしていた。こちらの女の子は一所懸命ボーイング747を包みながら、リス顔に賛同していた。彼女の長い指が、奇跡的な巧みさで、濃い青地にバラ色の星を散らした包装紙の上を滑ると、紙はひとりでに包みに変わってゆく。この包装係の横の展示台では、キングコングのロボットが自分の能力を誇示している。黒く、頑丈そうで、毛深く、本物より本物らしい大きな猿が、その場から動かずに歩いているのだ。腕には、眠るクララに似た半裸の人形を抱えている。歩いているのだが、進まない。ときどき、がくり、がくりと、頭を後ろにのけぞらせる。赤い目と大きく開いた口からは閃光が放たれる。黒い不気味な毛に赤く血走った目をした獣と、その恐ろしい腕に抱えられたあまりにも白く脆弱な体。この対比には、迫りくる不吉な兆候がうかがえる（なんてことだ、たしかにこの仕事が重荷になりはじめているらしい……それに、あの人形もクララにそっくりだ……）。

CamScannerでスキャン

7

家に着いても、相変わらず黒い大猿が頭のなかを歩き回っていた。そして、電話が鳴ったとき、ただ「もしもし」というだけなのに、この世の苦痛をすべて引き受けたかのようにつらかった。

「パン？」

ルーナだ。

「パン、やっぱり間借人は吹っ飛ばすわ」

やめてくれよ、その話は蒸しかえしたくない。とくに今夜は。

ぼくは冷たい声で答えた。

「だったらぼくにどうしろっていうんだ？　導火線に火をつけろとでも？」

ルーナは受話器を置いた。

ぼくが受話器を置いて最初に目に入ったものは、ドアのところで嬉しそうにしている犬のジュリユスの口だった。朝のボールをまだ口から離していない。ぼくは不機嫌にジュリユスを睨んで、いった。

「だめだ、とくに今夜は」

CamScannerでスキャン

ジュリユスは即座に絨毯に同化した。ぼくは眠りについた。一時間後に目覚めて、室内電話を取った。

「クララ？　ちょっと空気を吸いに出てゆきたいんだ。夕食が済んだころに、君たちのところに行くよ」

「わかったわ、パン。あなたのライカで素晴らしい写真が撮れたわよ。あとで見せてあげる」

ジュリユスはさきほど以来、ぺしゃんこになったままだ。質問したくてじりじりしているらしく、ぼくをじっと苦しげに見守っている。このもうひとりの主人はジュリユスにとって謎なのだ。幸いなことに、この主人とはそんなに顔を合わすわけではない。

ぼくは尋ねた。

「散歩に行くか」

彼はすばやく立ちあがった。ジュリユス、いつでも喜んで外に出かけ、いつでも満足して帰宅するんだな。犬ってものは。

吹っ飛ばされたのはデパートだけではない。ベルヴィルもだ。舗道沿いの建物の正面玄関が軒並み解体されて、大通りはさながら歯の抜けた顎だ。ジュリユスは熱心に尾を振りたて、鼻を地面すれすれに這わせて、うろつきまわる。突然しゃがみこんで、中央の通りのどまん中に、犬の嗅覚の栄光に捧げる壮麗なモニュメントを築きあげる。それから十メートルほど進み、大きな尻を高く、誇らしげにもちあげるが、なにか重大なことを忘れていたかのように、急に立ちどまる。そして、うしろ足でアスファルトを怒り狂ったように掻きむしる。自分の糞の始末ができるわけでもないし、正しい道を行くわけでもないが、そんなことは構うことじゃない。ジュリユスは仕事を遂行する、なすべきことを果たすのだ。

CamScannerでスキャン

彼はデパートの陳列台じゃない。彼には記憶力があるのだ。もっともデパートの陳列台になにが並んでいるかは知らないだろうが。

百メートル先では、祈りの時を告げるイスラム教徒の悲しげな声が、ベルヴィルの黄昏に響きわたる。ここには祈りの時を告げるモスクの尖塔は存在しない。代わりをつとめるのは、四角い窓、便所の通風孔、あるいは、老朽化した建物の正面玄関の四階と五階のあいだにある踊り場の切妻窓だ。ぼくは一瞬、この異世界から来た司祭の嘆き節に身を任せた。彼はコーランの断章をまくしたてたが、そこで語られているのは、大預言者のパンツのなかで聖なる茎を成長させるタチアオイのことらしかった。そこには、ほとんど耐えがたい流浪の苦痛が滲みでていた。事件以来はじめて、デパートの爆発で体を引き裂かれて死んだ男の姿を思いだした。それからルーナのことを考え、自分をろくでなしと罵った。さらにふたたび、クルプヴォワの自動車修理工場の持主の内臓を思い浮かべた。そしてまた、どこかにぐったりと体を横たえたくなったので、一本の木に体をもたせかけた。それから、「クトゥビア」の店に向かって大通りを横切りながら、ぼくは何歩で行けるか数えていた。

ジュリユスは台所にまっすぐ入ってゆき、アドゥシュを見つけた。祈りの時を告げる声は、人びとの会話とドミノのぶつかる音でかき消されている。煙草のけむりが重く漂い、ほとんどの人がパスティスの杯を前に座っている。切妻窓から呼びかける同胞が、世の人びとを純粋なイスラムに引きもどすためには、まだまだしなければならないことが山ほどあるようだ！

アマル老人はぼくを見つけると、満面に笑みを浮かべた。この老人の髪の白さにはいつでも驚かされる。彼はカウンターを一回りしてやって来て、ぼくの腕をしっかりつかんだ。

CamScannerでスキャン

「やあ、わが子よ、元気かい」
「元気ですよ」
「母さんは？」
「元気です。休みを取ってますよ。シャロンで」
「子供たちは、元気かい」
「元気です」
「連れてこなかったんだね？」
「宿題がありますから」
「君の仕事のほうは、どうだい」
「好調ですよ」
老人はぼくを椅子に座らせ、さっと紙のテーブルクロスを広げ、ぼくの正面に回って、腕を伸ばして体を支え、ぼくに微笑んだ。ぼくは尋ねる。
「アマル、元気ですか」
「元気だよ、ありがとう」
「お子さんたちは？」
「元気だ、ありがとう」
「奥さんは？　奥さんのヤスミナは元気ですか」
「元気だよ、神様の思し召しでね」
「いつ、もうひとり作ってあげるんですか」

「来週アルジェに帰るので、そのとき最後の子を作る予定だよ」
ぼくたちは大いに笑った。ぼくが子供のころ、ヤスミナは何度もぼくの母親の代わりをしてくれた。ぼくの母親はどこか遠くへ行っていた。
アマルは他のお客の世話をする。アドゥシュがぼくの前にクスクスを置いてくれる。今夜、大預言者とその信者たちを冒瀆したくなかったら、このクスクスの皿をすっかり空にしなければならない。
ぼくが情けないほど食欲のないことに気づくと、アマルがぼくの前に座った。
「元気ないな、え？」
「ないですよ」
「一緒にアルジェに来るかい？」
ホワイ・ノット？　しばらくのあいだ、このアイデアがぼくの頭のなかに喜ばしい光の尾を引いていくのを見守っていた。アマルはふたたび誘った。
「どうだい？　犬と子供たちの面倒はアドゥシュが見るよ」
だが、実習捜査官カレッガの平板な顔が命令を繰り返した。
「無理なんですよ、アマル」
「なぜ」
「仕事があるから」
彼は不審げにぼくを見ていたが、やがて、だれにも厄病神のひとりくらいはついているものさ、と独り言をいって、ぼくの肩をぽんぽんと叩き、立ちあがった。
「お茶をもってくるよ」

CamScannerでスキャン

エジプトの歌姫ウーム・カルスームの声が映像付きジュークボックスから聞こえてくる。画面には、彼女の葬儀に参列する大群衆が映っている。ぼくは歌声が消えてゆくのを耳にしながら、レストランを後にした。ジュリユスが足にまとわりつく。一瞬、アドゥシュの笑い声がぼくたちを追いかけてきた。
「この次は食べ物はやらないぞ。その代わり体を洗ってやるよ、その犬ころの！」

ぼくは子供たちに、わが二人組の刑事、ハイエナ・ジブと揉み上げパットの捜査劇が手探りの状態で開始するところを語ってやった。彼らは、サンクレールの「協力者」たちの私生活や、夜になるとおもちゃ売場を占拠する幽霊団や、脅迫されているにもかかわらず何事もなかったように販売を続ける勇気あるデパートの対応（「ザ・ショウ・マスト・ゴー・オン！」）などを、ピンセットも使わずに次々に摘出してゆくのだった。ぼくらの回りには、クララの写真を乾かすための紐がそこらじゅうに張られていた（この情熱のせいで、彼女はバカロレアの国語の試験に費やすべき時間をどれくらい奪われているのだろう？）。ちびの描いた人喰いサンタクロースの写真もあった。他の写真は、ベルヴィルの消滅と、未来の美観都市（ベルヴィル）を形づくるのっぺりした水槽群の出現を記録していた。そして、とても若いママンの写真が一枚。その若さからすれば、ぼくが生まれたところだ。その目にはすでに、どこか遠くへ行きたいという欲求が見えている。
「ネガから引き伸ばしたのかい」
「いいえ、プリントからコピーしたの」
「額に入れようよ」とジェレミーが提案した。「そうすれば、もう家出したりしないよ」
テレーズはいわれたことをひと言も逃すまいと速記している。そのすべてが、ひとつの同じ大河ロマ

ンに流れこんでゆくかのように。それから突然、食欲不振の尼さんにも似た彼女の表情の乏しいまなざしがぼくにじっと注がれた。
「バン？」
「テレーズ？」
「死んだ人だけど、クルブヴォワの……」
「うん？」
「誕生日のホロスコープを見てみたの。ああいう死に方だって出てたわ」
クララがぼくにすばやい視線を投げる。ぼくは、ちびが眠ったのを確認し、ジェレミーが口に出しかけたいつもの嫌みを引っこめるように視線で釘を刺した。それから、可能なかぎり興味深そうな表情をこのすてきな顔に浮かべた。
「ほう、どう出てた？」
「彼の生年月日は一九一九年一月二十一日、これは死亡広告に出てたわ、バン。その日火星が325度の位置で天王星と合に入り、この二つの星そのものは146度の位置で土星と衝になっているの」
「そりゃすごーい」
「黙れ、ジェレミー」
「行動をあらわす火星が、激しいトラブルの惑星である天王星と結合し、土星と衝突している。これは創造的であると同時に不吉な気性を意味しているの」
「まさかー」
「ジェレミー、黙れ」

「第８宮に入った火星と天王星は暴力的な死を予告し、火星が始まりの月を通過することによって、正真正銘の死が介入してくる。つまり、まさに十二月二十四日に起こったことが起こるのよ」
「うっそー」
「ジェレミー……」

8

翌日は爆弾はなかった。次の日もなかった。その後もなかった。同僚たちの不安も徐々に薄れていった。まもなく会話の種にもならなくなった。ほとんど思い出のようなものだ。デパートは巡航を再開した。爆弾事件のはるか沖を進んでゆく。レーマンはかつてない熱意を見せて水兵の役をこなしている。テオの小爺たちは自分たちは帝国の建設者だと思いこんでいる。テオ自身は毎日ちびのアルバムを充実させている。警官たちは職員と客の身体検査を続け、職員と客はにこにこしながら腕をもちあげる。サンクレールは八百人の協力者を失い、八百人の雇い人を得た。ルシフルは労働総同盟の、レーマンは「わが社」のスローガンを繰り返している。ぼくはつつがなく怒鳴られていた。枯渇しはじめた想像力のなかで途方に暮れたハイエナ・ジブと揉み上げパットは窮地に陥っている。子供たちは、パンの調子が悪いからテレビに切り替えると脅しをかけていた。ルーナはもう電話をかけてこない。すべてが秩序を回復していた。二月二日までは。

その女性は非常に美しかった。雌ライオン・タイプだ。赤毛が分厚い波をなして、筋肉質と予想される広い肩にかかっている。イタリア女のような腰が静かに揺れている。非常に若いという年齢は過ぎて

いる。好感を誘う円熟の年齢といったところだ。お尻に張りついたスカートの上のほうにはミニマル主義のパンティの線が見える。ミス・ハミルトンの呼出しを待つ以外にすることはなかったから、ぼくはこの美しき幻影を追跡することにした。彼女は展示台のあっちこっちを引っかきまわす。なかば露わになった腕には、そこそこ東洋風の銀の光り物が巻きついている。爪は長く、茶色で、強力かつ柔軟、物をつかむときには、くるりと巻きつきそうだった。デパートの混雑のおかげで、濁った水のなかの魚のような容易さで、ぼくは彼女をつけていった。二本の通路が交差しているところでは、わざと彼女を見失い、ふたたび発見することに喜びを感じた。この予期せぬ偽りの出会いでアドレナリンが駆けめぐり、ぼくの体内に産毛を逆立たせた。ただひとつ苛々したのは、彼女の視線を捕えられないことだった。髪の毛があまりにふさふさしていたし、よく動いていた。彼女のほうは、いうまでもなく、ぼくに気づいてはいない（仕事着が透明人間にしてくれるのだ）。このお遊びはしばらく続き、ぼくがどうにも御しがたい欲望の状態に達したとき、ことが起こった。彼女はシェトランド・コーナーをたっぷり五分もぶらぶらしていたが、突然その指が突きだされて、丸くなり、掌が小さなセーターを丸ごと吸いとり、その手をハンドバッグが咥えこみ、呑みくだし、空っぽの手を吐きだしたのだ。

ぼくは彼女を見ていた。だが、陳列台の反対側で、手だれの警備員カズヌーヴも見ていた。幸いなことに、ぼくのほうが彼女に近かった。カズヌーヴが牙を剥いて売場を回りこんでくるあいだに、ぼくは美しき万引き女にあと二歩と近づいていた。ハンドバッグに手を突っこんで彼女をぼくのほうに振りむかせ、セーターを取りだして、彼女の肩に当て、寸法を合わせるふりをした。同時に、考え抜いたあげく、こうしているんだからねという表情を見せて、歯のあいだから声を細く絞りだした。

「騒いじゃいけない。店のスパイがあなたのすぐ後ろにいるから」

CamScannerでスキャン

彼女は反射的に抗うのをやめただけでなく、美しくかすれた声でこう叫んだ。
「似合ってるでしょ。どう？」
不意打ちを喰らって、ぼくは適当なことをいった。
「目にはとっても似合ってるよ、ジュリア叔母さん。だけど髪にはちょっとね」
じっさい、ぼくは彼女の目しか見ていなかった。黄金を散らした二つのアーモンド、それを縁どる睫毛はほとんどぼくの鼻先をくすぐりそうに長い。この驚嘆すべき美の背後から、もう二つの目がぼくを串刺しにしていた。砲門のようなカズヌーヴの目。ぼくは無造作にセーターを陳列台に投げ、別の一枚を選んで彼女のほうに差しだし、頭をうしろに反らせて、目利きらしく眺めた。カズヌーヴが態勢を立てなおして、割りこんできた。彼は目的に直進する。
「ふざけた猿芝居はよせ、マロセーヌ、おれはこの女が最初のセーターを万引きしたのを見たんだぞ」
「『この女』？　それがお客様にたいする口の利きかたなのか、カズヌーヴ？　あんたみたいに立派な男が？」
この言葉を口にしたとき、ぼくの口調は、心ここにあらざる夢想家のようになっていた。というのも、ぼくの選んだ二番目のセーターが、この可愛い雌ライオンにうっとりするほどよく似合ったからだ（決めた、洋服屋をやるぞ！）。ぼくはいった。
「そのセーター、すごくぴったりだよ、ジュリア叔母さん」
「ジュリア叔母さん」を気に入ったのはぼくだけではなかった。かなりな数の客が息を呑んでいた。
そのうち、髪が真白のやさしそうな老カップルは、緑色の買物かごをぶら下げて、文字どおり喰いいるようにぼくたちを見つめていた。

「マロセーヌ、いい加減にしろよ。おれの仕事の邪魔をするな」
カズヌーヴが不協和音を響かせた。その間に、ここから遠くないところでテオの小爺たちのひとりがマッサージ用パイプレーターを盗んでいた。
「カズヌーヴ、あんたの仕事の邪魔をするつもりはないよ。ただ、ちょっとはしゃぎすぎじゃないかと思ってね」
「マドモワゼル、あなたはこのシェトランドをバッグに入れた。見たんですよ！」
彼女は救命ブイにしがみつくように、ぼくの目にしがみついた。大きな顔、突きでた頬骨、濡れた唇。
「カズヌーヴ、いったいどこでそんなに見事に日焼けするのか教えてくれないかな？」
的のどまん中に命中だ。カズヌーヴは、毎日、人工日焼けサロン・コーナーに入りこんでは、無料でそのテラコッタのような立派な顔を焼いているのだ。ぼくはこうつけ加えた。
「ジュリア叔母さんのことは放っといてくれ。さもないと、びんたを一発喰らわすぞ」
その瞬間、ことが起こった。スローモーションみたいに。デパート全体が凍りついたようだ。カズヌーヴは蒼ざめた。彼のすぐ後ろでは、愛想のよさそうな老カップルが微笑みを浮かべながら、たがいに向きあっている。そして、百歳を記念するキスを深々と交わしあう！
信じがたい伝染性をもつ官能的な接吻。はんだ付けされたその二つの下腹のあいだから、緑色の買物かごの一部がのぞいている。鮮やかな緑色。
それから、カズヌーヴは約束通りびんたを喰らわされた。だが、喰らわせたのはぼくではない。肩から引きぬかれた老女の腕だった。ぼくは、その間欠泉から完璧な線を描いてほとばしる血のカーブを目で追った。男のほうの顔もはっきりと見えた。信じられないといったまなざしが、ローマ人風に刈りこ

んだ、赤ん坊のように柔らかい白髪の房の下からのぞいていた。カズヌーヴの顔も見えた。彼の頬は突然ぶるぶると波紋を描き、衝撃波を顔全体に波及させていった。

まさにそのとき、爆発音が聞こえた。頭のなかで煉瓦の壁が砕け散る。うしろから突きとばされたカズヌーヴが、ぼくとジュリア叔母さんを絨毯に押し倒した。

CamScannerでスキャン

9

爆心地に居あわすことの利点は、踏みつけられる心配がないということだ。だれだって震源からはできるだけ遠ざかろうとする。

上に被いかぶさった女性の重みで、ぼくは床に這いつくばっていた。敵の機関銃から彼女に守られているみたいだ。だが、近づいてよく見れば、彼女はたんに気を失っているだけなことがわかっただろう。ぼくは彼女の頭を手で支えて、彼女の体をそっと脇に移し、剝きだしになった脚にドレスを下ろしてやった。カズヌーヴがぼくの正面にいたが、床に座りこんで、自分がはじめて作った砂山を見ている幼児のように恍惚とした表情を浮かべている。彼は血でびしょ濡れになり、身じろぎもせずに、その血が自分のものか、他人のものか、考えているようだった（カズヌーヴが考えるところを見るのは初めてだ）。カズヌーヴの数メートル先には、恐るべき血の沼ができていて、そのなかに、ばらばらになって、もつれあう二つの死体がある。ぼくは苦労して立ちあがった。周囲は、一斉に魚を釣りあげるときの生け簀のようなパニックだ。すべての魚が水の外に飛びだそうとする。目に見えぬ手網から必死で逃げようとして、魚は上に跳ね、下に落ち、ぶつかりあい、急に方向を変える。いちばん信じがたいのは、こうし

た光景が完全に深海の底のような静けさのなかで展開していたことだ。売場全体が崩れおち、逃げまどう人びとの足の下で展示用のマネキンがつぶされる。それなのになんの音も聞こえない。ぼくはまさに狂った巨大な水槽の底にいた。ジュリア叔母さんが気を取りもどす。彼女の唇は動いているが、なにも聞こえない。聾だ。爆発で耳が聾になった。本能的に耳に指を突っこんでいた。血は出ていない。それですこし安心した。ジュリア叔母さんのまえにしゃがみ、彼女の顔を両手で挟んだ。

「どこもけがはない？」

自分自身から電話を受けているように自分の声が聞こえた。彼女はぼくになにか答えを返し、それから、うしろを振りむこうとしたので、ぼくは引きとめた。だが今回は、血だらけで絡みあうものを見ても吐き気は起こらなかった。人間はどんなことにも慣れると思わなければいけないのだろう。二つの死体は、究極の交感のなかで内臓を交換しあったという趣だった。彼らは溶けあっていた。鮮やかな緑色の小さな買物かごは破片もとどめてはいない。彼らの下腹は買物かごを暖め、そして、買物かごが孵化したのだ。二人の白衣の男が完全にふらふらになったカズヌーヴを連れてゆく。ぼくは肩を叩かれ、振りむいた。歴史がつねに最悪の状況下で繰り返されるということの証明だ。このあいだの救急班の小男が説明を始める。その薄い口髭の下で、バラ色のなめくじが二匹体をくねらせている。だが——なんという幸運！——ぼくには彼の声が聞こえなかった。

病院での四時間は長かった。ぼくの体はあらゆる角度から検査された。異状なし。手で体をいじくりまわされることに、なにか子供っぽい喜びを感じた。子供のころ、ママンや、アマル老人の妻ヤスミナに風呂に入れてもらったときの喜び。耳の聞こえないことがこの楽しみをさらに膨らませる。ぼくはか

CamScannerでスキャン

ねがね、自分が立派な聾にはなれるが、立派な盲にはなれないだろうと思っていた。ぼくを耳の世界から救いだしてくれ、耳の聞こえないのが好きなんだ。だが、目はふさがないでくれ、死んでしまう。しかし、良いことにはつねに終わりがある。世界はついにふたたびぼくの鼓膜への道を切り開いた。周囲の医者や看護婦たちの会話が聞こえてくる。最初は、なにをいっているのか、まったくわからなかった。隣のコンパートメントでの話を聞いているようなものだ。それから、徐々に音が形を整えてゆく。なんのことはない、一週間ほどぼくの様子を観察していよう、という内容だった。脳になんらかの異状が見られる可能性があるからだ。病院に一週間！　ここからでも子供たちとジュリユスの顔が見えた。

「話になりませんよ！」

長い白衣を着た馬面がこちらに体をかがめる。

「なにかいいましたか」

「ええ、だめだっていったんです。ここになんかいたくありませんよ。調子は上々、問題なし。家に帰りたいんです」

馬面の白衣は、丸い腹の突っぱったもっと白い白衣に相談する。

「帰すわけにはいかないんだな。必要なX線検査を全部受けないうちはね」

ぼくはまたしても検査台の上に横たえられる。ぼくのちょうど鼻先で巨大な腹がしゃべっている。腹という腹がみんな爆弾仕掛けで……この医者もまた、ぼくの顔のまえで破裂したら？

ぼくはいった。

「だれにも引きとめることはできませんからね」

外はすでにとっぷりと暮れていた。地下鉄まで歩いてゆくあいだに、一台の車が舗道沿いに走り、ぼくに追いついて、クラクションを鳴らした。五〇年代のクラクション。「ピイーッ」と鳴るやつだ。振りかえった。ジュリア叔母さん。4シュヴォーの黄色いシトロエンのなかから、乗れと大きな身ぶりをしている。

「歩いてゆくの？　乗りなさいよ、乗せてあげるから」

ジュリア叔母さんの思い出の品に乗りこんだ。

「医者の免責にサインさせられたでしょう？　わたしもよ。医者の御身大切、当り前の話だけれど」

彼女は4シュヴォーを高級客船みたいに滑らかに走らせる。車の年代を考えれば大したものだ。ぼくたちはペール＝ラシェーズに向けてクルーズした。ジュリア叔母さんはしゃべる。しゃべる。ぼくの目には、鮮やかな緑色の買物かごと、ぴったり合わさった下腹が浮かんだ。それから、カズヌーヴの恐怖のまなざし。カズヌーヴはなんでもなかったにちがいない。腕を切断して賭けてもいい。彼はショックを受けただけだ。爆薬は二つの下腹でできた密閉状態の巣のなかから、柔らかい卵をぶち破るように爆発した。

「天使みたいに勃起してたのよ！」

天使の勃起？　どんな天使？　だれの勃起だって？　ジュリア叔母さんは、いわくいいがたいノスタルジーに霞む目でぼくを見ている。彼女はいった。

「サンディニスタよ。彼らは天使みたいに勃起してた。果てしなく。笑いながらセックスするの。絶頂のときの彼らは、燃えあがるようにゆっくりいく。そして、わたしの火事が完全に鎮火するまで続けるのよ。キューバでも一度だけ経験したけれど。革命直後で、わたしは十四歳だった。領事をしていた

CamScannerでスキャン

父が追いだされる二日前のこと。それから一度キューバに帰ってはみたけれど、もうお仕舞い。社会主義リアリズム風の勃起に、スタハノフ運動的な交接……」

彼女はちょっと押し黙った。ぼくはひと息ついた（彼女がこんな状態になったのは爆弾の影響だろうか）。赤信号が青に変わる。車と同時にジュリア叔母さんも運転を再開する。

「いまやニカラグアもだめ……建設的な快楽ですって」

彼女の顔は嫌悪に歪んでいたが、突然表情が柔らぎ、ハスキーな美声が幸福な確信を取りもどした。

「幸運なことに、まだモイ族がいるし、マオリ族に、サタレ族に……」

ぼくは口を挟んだ。

「サタレ族？」

「ブラジルのアマゾンのサタレ族よ！」

ジュリア叔母さんは説明を続けた。

「彼らの筋肉は長くて、すっきりしていて、とても形がいいの。でも肩や腰をつかんでみると、すごく手ごたえがある。彼らのペニスはサテンで出来たみたいにすべすべして、世界のほかの場所では見たことがないわ。彼らが女にまたがると、体の内側から光が射しはじめるのよ。素晴らしい赤銅色。一九〇〇年のガレのガラス製品みたい」

こうして、冬の夜のパリがぼくたちのカヌーの傍を流れてゆくあいだ、ジュリア叔母さんは独自の理論の目ざましい根幹部を披露した。彼女の説では、正しくやるためには、勝利の翌朝の革命家か、偉大な未開民族でなければならない。彼らの頭には永遠が宿り、彼らは直説法現在形でセックスする。つま

り、それが永遠に続くかのようにやれるのだ。世界のほかの場所では、だれもが過去形か未来形でやりまくっている。記念式典を行なったり、記念碑を建てたり、いつまでも生き永らえたり、子孫繁栄に励んだりして、だれもいまの自分と向かいあっていない……。

彼女の声はこのうえない説得力を帯びていた。

「そのいまの自分と向かいあうっていうのは、まさにその瞬間、自分と他人、あなたとわたしと向かいあって……」

ジュリア叔母さんの顔がヘッドライトに照らしだされる。もはや一瞬たりとも彼女の顔から目が離せない。彼女の輪郭は街の灯で虹色に輝いている。そして突然、数かずの照明器具を並べたショーウィンドウの光のほとばしりを受けて、彼女の姿全体が浮きあがって見えた（やったあ！）。

10

ぼくたちは車を二列駐車させたまま、だれかから追跡でもされているように三階までよじ昇り、水無し河にでも飛びこむようにベッドに身を投げ、衣服に火が着いたみたいにたがいに服をむしりとった。彼女の二つの乳房がぼくの顔に弾け、唇がぼくを捕えて離さず、マオリ族の欲望で痙攣する接吻がぼくの口に押しつけられた。ぼくたちの手はありとあらゆる場所を駆けめぐり、撫でさすり、こねくりまわし、絞りあげ、掻きわけた。脚が絡みあい、太腿が頰を挟みこみ、下腹と二頭筋が固くなり、ベッドのスプリングがそれに応え、寝室はこだまを返した。そして突然、その混沌のなかから、ジュリア叔母さんの素晴らしいライオンのような頭部が、信じられないほど見事なたてがみの後光を従えて出現し、いまや岩だらけの道のようにしわがれた声で尋ねた。

「どうしたの」

ぼくは答えた。

「べつに」

べつにどうということはなかった。まったくなかった。彼女の二枚の貝殻のあいだでとぐろを巻く情

CamScannerでスキャン

けない軟体動物をのぞけば。こいつが頭を出したがらないのだ。爆弾が恐いのかな、とぼくは思った。だが、自分自身に嘘をついていることはよくわかっている。本当のことをいえば、寝室に見物客が溢れていたからだ。壁が割れそうなほど一杯に。ぼくのベッドのまわりを、直立不動の見物人たちがぎっしりと取り巻いていた。しかも、ただの見物人じゃない！　サンディニスタに、キューバ人、モイ族に、サタレ族が輪になって、それぞれ裸だったり、制服に身を固めていたり、弩や、カラシニコフ銃を腰に巻きつけて、銅像のように赤銅色に輝き、微粒子状の栄誉を後光に戴いていた。そして、全員勃起しているのだ！　誇らしげに腰に手を当て、弓なりに湾曲した、濃密な、ぴりぴりするような名誉の障害物をめぐらして、ぼくの彼女への欲望を遮っていた。

「べつになんでもない」とぼくは繰り返した。「なんでもないんだ。悪いね」

そして、ほかにすることもないので、笑った。

「それに、こんなことって、馬鹿みたい？」

馬鹿みたいだとは思わないからこそ、笑ってしまうのだ。ぼくはあらためて彼女に説明した。そして、ふたたび謝った。オリンピックの審判員に囲まれているうえに、ぼくは競争が苦手なのだと。彼女はいった。

「わかるわ」

それから、今度は彼女がぼくに謝った。ぼくたちの不幸な出来事は、未開人と革命家の愛の行為に関する今度の調査の結論になるだろう。『アクチュエル』の来月号にその記事を載せなければならないのだ。

「へえ、『アクチュエル』で働いてるんだ？」

そう、『アクチュエル』で働いている。

「結局、愛を殺すのは、愛についての知識なのよね。男の人は、ほかの男が勃起することを知ってしまうと、勃起できなくなるのね」

彼女が自説を展開しているあいだ、ぼくは彼女を愛撫しようと試みたが、彼女はぼくの手を払った。代用品はだめ。

「そう、創造を台無しにするのは、勉強だわ……」

ジュリユスはどこだ？　ジュリユスがどこへ行ったのか気になった。たぶん、アドゥシュの調理台のうしろだろう。まったく人生ってやつは。尻で爆弾が破裂したあと、インディオたちと主人公の衝突のせいで、欲望に膨らんだペニスが萎縮してしまったというのに、お気に入りの犬は行きつけのレストランで、心静かにたらふく食事にありついている。ジュリユスのやつめ、今度会っても知らんぷりをしてやる。三度は覚悟しろよ。聖ペテロだってキリストを三度知らないといったんだから。

まさにその瞬間、寝室の扉が開かれた。ジュリユスだ。そうとも！　ジュリユスにちがいない。

CamScannerでスキャン

11

だがテレーズもいた。テレーズは戸口に立っていた。ジュリユスがテレーズの横にいる。別の顔が出た。ルーナだ。さらに別の顔。ジェレミー。背を思いきり伸ばして爪先立ちで立っている。それから、クララ。部屋のなかまで入ってくるわけにもいかず、みんな戸口のところで押しあいへしあいしている。

テレーズがいった。

「まあ！　生きてたのね……」

嬉しいやら、情けないやら。

ぼくはうなずいて自分のだらしない軟体動物を指さした。

「なんとかね……」

テレーズは、ジュリア叔母さんにできるだけさりげない作り笑いを送った。ぼくのベッドの友人は全裸のまま、自分の理論を展開するのに夢中だったので、突然の闖入者たちに口をぽかんと開けている。

「ジュリア叔母さん？　ですよね」

なんて可愛い妹なんだろう。ぼくに残された最後の威厳も、いまや息を引きとろうとしている。ジュ

リア叔母さんは、自分がぼくの人生における最初のジュリア叔母さんではないことを悟ったはずだ。テレーズが調子に乗って続ければ、ジュリアはほどなく、ぼくの人材調達法のすべてを知ることになるだろう。まったく、なんて恥ずべき話なんだ。ぼくはデパートの美しき万引き女たちを引っかけてきたのだ。悲しい真実である。男とは汚いものだ。だが、もっと汚い奴もいる。ほかの奴。たとえば、カズヌーヴ。あるいは、彼と同類の警備員たち。彼らは、万引きした女性たちを、まっすぐに店の責任者のところに行くか、それとも、試着室でひととき過ごすか、二つにひとつの選択で追いつめるのだ。ぼくはすくなくとも無理強いはしない。さらにいわせてもらうなら、ぼくがジュリア叔母さんを誘うとしても、それは、彼女を恥辱から救ってのちの話だ。そして、ぼくは、できること以外はしない。テレーズが、ぼくの生きている姿を見てほんとうに嬉しかったかどうか、じつはよくわからない。彼女の生きる王国はこの世界とはちがうのだ。テレーズは完璧な臨床医の声でジュリアにこう尋ねた。

「どうやってうつ伏せに眠れるんですか、そんなに大きな胸で」

ジュリアは目を丸くする。その怒りにみちた当惑の表情を、みんなの頭ごしに炸裂するクララのフラッシュが捉える。

そのうえ、妹、弟、犬が、叫び声を挙げる見知らぬ人びとの群れにぐいぐい押されて、彼らとともに寝室の内部になだれこんでくる。大はしゃぎの一団。彼らの半裸の肉体は、ジュリア叔母さんのサタレ的な美に匹敵するほど美しかった。この素晴らしき仲間たち全員がぼくらのベッドに潜りこみ、あらゆる角度からぼくらを撫でまわしはじめる。聞いたことのない言葉で様ざまな叫び声をあげながら。

「ヴィクシ・マリア、ケ・モサ・リンダ!」〔ああマリア様、なんてきれいな娘なんだろう!〕

CamScannerでスキャン

「エ・オ・ハパース・タンベンイ！　オリャ！　オ・ペロ・タンウ・ブランコ！」〔男の子のほうだって！わあ！　こんなに白い毛！〕

ジュリアは、歓喜と不審のあいだで奇妙な表情を浮かべている。自分の欲求不満の影響で現実と化した夢を目の当たりにしていたのだから。

「パレシ・オ・メニノ・ジェズズ・メズモ！」〔まるで子供のころのイエス・キリストみたい！〕

この最後の一句はあまりにも滑稽な調子で発音されたので、意味のわからない者まで全員が大笑いした。愛撫の勢いは二倍になり、クララのフラッシュはぽんぽんと音を立て、ジュリユスは主人のところに辿りつこうと道を切り開いている。ジェレミーは皿のように目を丸くし、ルーナは妊婦のように微笑んでいる。ちびは足をくっつけたまま飛びあがって手を打ちならし、テレーズは騒ぎが過ぎさるのを待ち、ジュリアは愛撫には愛撫で対抗する。ぼくは、ケピ帽をかぶり青い制服を着た新米の風俗取締係の天使にエスコートされて、妖精のソーシャル・ワーカーが入って来るのではないかと心配だった。だが懸念は外れた。つぎに入ってきたのは、この素晴らしいお祭の主催者だった。

「テオ！」

彼は草原のような緑のスーツをまとい、その胸のポケットにレタスの芯をあしらい、レタスのいちばん白いところにバラのはっぱを一葉ピンでとめていた。ちびのアルバムには、この衣裳を着たうしろ向きのテオの写真がある。添えられた文句には、「テオが森に餌をやっているところです」とある。

テオはげらげら笑いながら、ぼくを見た。

「そうよ！　わたし！　あなたの家族が、大事な兄さんが吹っ飛ばされたっていうニュースを聞いて、いったいだれのところに助けを求めに来ると思う？　このわたしよ！　ついてないことに、今日わたし

CamScannerでスキャン

は家にいなかったの。で、この子たちは森にわたしを探しに来たわけ」
「森？」
「ブローニュの。友だちのブラジルの子たちが商売の戦闘服を着て、足が凍えそうになって突ったってるから、ちょっと元気づけてあげようと思って、お腹に詰めこむものを持ってってあげてたの。そしたら、病院であなたが五体満足だって聞いたから、そのお祝いに、この子たちを連れてくることにしたのよ。やさしい子たちでしょ？」
（ブローニュの森だって……ぼくのちびたちが……もしかしたら、兄として不適格だとぼくは彼らの保護権を剝奪されるかもしれない）
あとは、階下の子供たちのアパルトマンに舞台を移して、ブラジル風お祭が即興で繰り広げられた。ジェレミーが、おなじ建物に住む友だちのところで、南米大陸の性別不明歌手のなかでいちばん頭のいかれたネイ・マトグロッソのレコードを見つけてきた。音楽が大声でがなりはじめると、ジュリア叔母さんは、肉体をそなえた夢の男たちとダンスを始める。ぼくはテオとクララのやさしいまなざしに抱かれ、次から次へとブラジルコーヒーの杯を重ねる。ジェレミーはこの部屋の鳴るものをすべて叩いて、音楽のリズムを追いかけ、ちびはその年齢の子供にふさわしくこの大爆撃のなかで眠り、ルーナは持ち前の笑いを浮かべている。テレーズはベッドの縁に腰かけ、自分の手に、女装したバイアの大男の力強く細長い褐色の手を取っている。その女装男の肌は、ぼくの体の内側を飽和状態にしているコーヒーみたいに、暗く輝いていた。彼とテレーズの掌だけが枕元の小さなランプに照らされている。この男がぼくの妹の予言のことをどう理解しているのかわからなかったが、その目は恍惚として、身につけたミニスカートのラメとおなじ反射光を放っている。彼はテレーズに震える指を突きつけて、叫びだした。

「エッサ・モサ・ショラヴァ・ナ・パヒガ・ダ・マンイ」

突然、すべてが止まった。このリオの崖の上で繰り広げられていた音楽、ダンス、コーヒーも。

「いまなんていったの？」

テレーズが通訳した。

「テレーズはお母さんのお腹にいるときから泣いていた、そういったのよ」

十六年も歳月が逆戻りして、ぼくの心は氷のように冷たくなった。（ママンの声がいまでもはっきりと耳に聞こえる。彼女は「赤ちゃんが泣いている」といったのだ。「赤ちゃんが泣いている？」「そうよ、バンジャマン、お腹のなかで赤ちゃんが泣いているのが聞こえるの！」）

できるだけ平静に、ぼくは尋ねた。

「それで？」

いままでジュリア叔母さんとダンスを踊り、ついさっきぼくを子供時代のキリストと比べて大笑いした女装男が、なまりのかけらもない非常に静かな声で説明した。

「私たちの国では、それは、その赤ん坊が千里眼をもつことを意味しているのです」

それから、彼は金ピカの手さげバッグのなかを引っかきまわし、青みがかったガラス製の、水の入った彫像を取りだした。そして、テレーズの前にひざまずき、彫像を差しだしながら、小声で唱えた。

「パラ・ヴォセー、マンイ。ウン・プレゼンチ・サグラド」〔お母さん、聖なる捧げ物をあなたに〕

「これはイェマンジャの彫像よ」とテオが説明する。「彼らの海の神様。彼らが窮地に陥ると、ちゃんと助けだしてくれるらしいわ」

無神論者の天邪鬼がぼくのなかで目を覚まし、耳元にささやいた。

「この立派な神様のおかげで、連中はブローニュの森で安心して野垂れ死にできるってわけだ」
テレーズはお礼の言葉もいわずに彫像を受けとり、それを、彼女の神様たちのコレクションが置いてある小さな飾り棚に安置しに行った。

CamScannerでスキャン

12

「どのくらいの時間セーター売場のある階にはいましたか」
「十分くらいです」
「なにをしていましたか」
「友だちの女性がセーターを選ぶのを手伝っていました」
「昔からの友だちですか」
（カズヌーヴのやつが密告したんだ！　前々からぼくを大好きだとは知っていたが）
「その女性の住所と職業をお願いします」
今回はカレッガ刑事ではなく、クードリエ警視長だ。司法警察の。
クードリエ警視長はその名の水脈探し（クードリエ）にふさわしい人物だった。生れながらの冷徹な探求者。いつもは泥棒や人殺しを探し、今日は爆弾犯人を探しているが、原子の分裂や、癌退治の水薬の探求に乗りだしていたとしても不思議ではない。彼の高度な探求心にたまたま偶然が作用すれば、いまぼくのまえではなく、顕微鏡のうしろにいてもおかしくない人物だ。レジョン・ドヌール勲章をぶら下げ、葡萄酒の

壜みたいな濃緑のスーツを身にまとい、スーツの下にはホルスターなんかちらつかせはしない。ぼくが戸惑っているのを見て、静かに、重要な目撃者であるあなたの証言は絶対に必要なものなのです、といった。

「それで、そのシェトランドの友だちは?」

ぼくは、彼女は友だちというより知人であり、「ジュリア叔母さん」という呼び名で、雑誌の『アクチュエル』で働いている、と答えた。

そのとき扉がばたんと音をさせ、ぼくは二メートルも飛びあがった。ブラジルのコーヒーのせいだ！ 警視長はぼくのほうに向きなおった。

「そんなに興奮しないでくださいよ、マロセーヌさん。だれにだってする質問なんですから」

ぼくは興奮しているどころか、裸にむしられて、高圧電線にとまり、真下の電線に触らないように両脚のあいだに尾を引っこめている小鳥だった。

ぼくは哀れなこの全身の皮膚で、つぎの質問を受けとめた。

「その十分間に、なにかいつもと違うことに気づきませんでしたか」

なにも気づかなかった。ぼくが見たのは、まさにそれが起こった瞬間、その場で起こっていたことだけだ。だが、それは超現実的な正確さで起こっていた。とくに、鮮やかな緑の買物かごの一部分と、密着した下腹。そうぼくは言った。機甲タイプライター戦車がぼくの言葉を捕獲する。その一斉掃射のたびにぼくは感電死しそうだ。クードリエは眉をしかめて、尋ねる。

「被害者の正確な人相特徴を教えていただけませんか」

「男性のほうならなんとか。女性は、腕しか見ませんでしたし……」

その男性を初老のローマ皇帝といった感じで説明した。皇帝の職務をいまや終えなんとするクラウディウス。
「そして、白髪の房の下に、非常に青い目ですね。ペタン元帥風の」
「まさにその通りです」
突然ぼくは、そのカップルが信じがたい若さで抱擁しあい、キスしていたことを思いだした。
「確かですか」
「もちろん確かですよ。なぜですか」
「新聞に書いてありますが、二人は兄妹だったのです」
そして、つぎの事実が近親相姦の可能性を排除するかのように、こうつけ加えた。
「兄はエンジニアで、土木局を定年退職しています」
それから、自分自身を納得させるようにいった。
「いずれにしても、大したことじゃありません。あなたがたみたいなものでしょうからね」
そして、意地悪そうな目つきで、
「あなたと、あなたの叔母上ですよ」
沈黙。扉が開く。押し黙った秘書が、机にある緑色をしたモロッコ革のマットの横に、小さな盆を置いた。警視長は、「どうも、エリザベート」といい、ぼくに尋ねる。
「コーヒーは？」
ぼくは飛びあがる。
「大嫌いなんです！」

CamScannerでスキャン

警視長は自分のカップに注ぎながら軽く笑った。
「少なくともその点については、嘘をついていますね、マロセーヌさん」
なかなか冴えているじゃないか。警視長はゆっくりとコーヒーを口にしたが、その香りがぼくの鼻を突きあげる。そして、彼はカップを盆に戻し、「エリザベート、どうもありがとう」といい、体の前で手を組みあわせ、アロマの微粒子まで逃さぬように最後に唇を舐めまわし、ぼくをじっと見つめた。
エリザベートは小さな盆を抱えて逃げてゆく。
「マロセーヌさん、最後の質問です。デパートでのあなたの仕事は、ほんとうはなにをすることなのですか。あなたの証言からは、それがはっきりとわからないのですよ」
理由は以下のとおり……。
奇妙なことに、そのとき初めて、ぼくは部屋の装飾を意識したのだった。クードリエ警視長の机は帝政様式だ。ぼくたちが座っているぼろ椅子は偽ローマ調で、マホガニーの本棚の側でやさしくきらめくレカミエ夫人風の長椅子に深入りするのは避けるにしても、堂々たる大文字のNが刻印されたコーヒーセットにいたるまで、すべてが、ほうれん草みたいな深緑の壁布の放つ植物性の光に浸されている。壁布には小さな蜂の文様が散らされている。もっと良いものはないかと見ると、本棚に、コルシカ出身のちび将軍のちび胸像と、ちび帽子の複製と、ラス・カーズ著『セント・ヘレナの回想』があった。これらのインテリアはたったいま警視長が発した質問となんの関係もなかったが、ぼくは、こうした装飾を警視長が自分のポケットマネーで誂えたのか、それとも、執務室を自分の大好きな色で統一するのに警察当局から特別な融資を受けたのか、疑問に思った。いずれにしても、結論はひとつだ。この男はかならずしも毎晩家には帰らない。この部屋にいると気分が良いのだ。ともかく、管理職を好む人間は仕事

CamScannerでスキャン

場も好むものだ。この警官は二十四時間中二十五時間働く。フーシェの生まれ変わりを長く騙しておくことはできない。そういうわけで、嘘をつかないことに決めた。

「ぼくはいけにえの山羊、スケープゴートなんです、警視長さん」

クードリエ警視長はまったく感情のない視線を返した。

そこで、ぼくは「品質管理」の職掌がまったく見せかけにすぎないことを説明した。ぼくはなにも管理していない。というのも、商品の殿堂から溢れでる物の洪水のなかで、なにも管理することなどできはしないからだ。品質管理スタッフの数を十倍にでも増やさないかぎり。さて、客が苦情をたずさえて立ちあがると、ぼくがお客様ご要望コーナーに呼ばれ、途方もない面罵を受ける。その仕事は、屈辱の暴風雨をこの身に引き受けることだ。ぼくがあまりにひどく恥じいり、途方に暮れ、深く絶望した様子に見えるので、客はたいていの場合、ぼくに自殺でもされてうしろめたい思いをするのはまっぴらと、苦情を引っこめ、デパートの被害は最小限になり、ことは合意のうえで落着する。そういうわけ。そのために給料をもらっているんです。まあ、そこそこの金額ですよ。

「スケープゴートねぇ……」

クードリエ警視長は相変わらず感情を見せない目でぼくを見た。

そこで、ぼくは尋ねた。

「いないんですか、警察には?」

警視長はしばらく値踏みするようにぼくを見つめていたが、最後にいった。

「マロセーヌさん、ありがとうございました。今回はこれで結構です」

13

外に出ると、針の絨毯を裸足で歩いているような気がした。瞼は痙攣し、手はむやみに震え、歯はがちがちと鳴る。それにしても、あのコーヒーのなかにいったいなにを入れたんだ、イェマンジャよ？ 社員食堂で十八時三十分に予定されている連合組合の集会に行く前に、ちょっと家に寄って、精神安定剤のヴェイリウム（複数だから、ヴェイリアというのが文法的に正しい？）を三錠呑みくだす時間しかなかった。ヴェイリウムは、ぼくの神経の状態にはなんの変化ももたらさなかったが、体を雲で包みこんだ。外から見れば、ぼくはぼんやりしているが、中は焼けつきそうになっている。高圧電流が通っているのに、自分は焼け焦げない電線のようなものだ。

テオが不審げな顔つきで、ぼくを見る。

「薬でも切れたの？」

「その反対、やり過ぎだ」

集会はたけなわだった。全従業員が一堂に会している。組合員と非組合員、また、労働側と経営側とを問わず、サンクレールの親愛なる「協力者諸君」（「諸嬢」）が全員押しかけていた。労働総同盟のス

CamScannerでスキャン

ローガンの自動販売機、ルシフルは完全にお手上げ状態だった。「わが社」のプログラムを組みこまれたエリート、レーマンはなんとか最善を尽くしていた。そして、全員が同時に勝手なことを喚いていた。この嵐を静めようとして、腕を振りあげて、「みなさん、お願いです!」とか、「諸君、静粛に!」などと声を振り絞ったところで、なんの役にも立たなかった。パニックは極限に達している。各人がそれぞれの恐怖や、激怒を、あるいはもっと単純に、自分の意見を叫びたてている。巨大な食堂の、ナイフと金属カップとパイレックスガラスとコンクリートの音響装置は、事態の改善にちっとも貢献していなかった。すぐ隣の人の声も聞こえないくらいの大混乱なのだ。「で、もしもあれが本当にあれを吹っ飛ばしていたら?」この言葉が突然、なぜか知らないがまったく予期せぬ仕方でぼくの頭を占領した。そう、もしもルーナが本当に子供を堕していたら? ぼくは一瞬、壊れた愛を見た。それは死んだ生命の形を取っている。ついで、その逆のケースが目に浮かぶ。だが、おなじく壊れた愛の姿。ルーナの胸にしがみつく子供だ。夫婦の愛は、ママの乳房に吸いつくパパのライバルに貪り喰われてしまうのだ。

「この点について君も意見があるだろう? マロセーヌ」

なんの前ぶれもなく発せられたルシフルの質問が、飛行中のぼくを狙い撃った。

「お客さんたちの不満はよく知ってるだろう、ええ?」

ぼくに全員の注意を集中させて、混乱を鎮めるために、大声で質問したのだ。大成功だ。たくさんの頭がすでにこちらを振り向いている。ぼくがまったくひとりぼっちだと感じさせられるのに充分な数だ。ぼくのサービスに不満な客がぼくたちの尻の下に爆弾を仕掛けたとでもいうのか? そういう意味なのか、この質問は?

「品質管理の一員として、その点について、なにか意見があるだろう。なんといっても、あんなに見

事に仕事をこなしているんだから！」

もちろん、答えることなんかない。だから、なにも答えなかった。ただ、力ない拳をルシフルのほうに挙げて、あからじめ濡らしておいた中指を飛びださせた。レーマンが下品に思いきり笑い、何人かが続いた。ルシフルの笑みははっきりと、かならず仕返ししてやるからなと語っていた。そうはいうものの、ルシフルの望んだ静けさは取り戻せたのだ。集会の参加者のまなざしは、次第にぼくから離れてゆく。いいや違う、ただのお客が爆弾なんか置くはずがない、とだれかが声を張りあげる。すると、他のあちこちから議論が巻きおこる。狙われているのはこの会社そのものだ、疑いの余地はない。ルシフルとその一党は、問題の出どころは経営陣以外にありえない、と主張する。レーマンは頭を振りたてて違うちがうというが、ルシフルの命題は賛同者を増やしてゆく。何人もの女性店員が経営状態の調査を要求する。上層部には、あまりに美味しい裏取引があって、そのために犠牲者が出たにちがいない。今回の爆弾は、ころりと騙されたそのカモが産みつけた卵なのよ。ゆすりたかりの類など——レーマンの立場からすれば——まったくもって問題外だ。ゆすりだって？　なにをゆすったんだ？　今回の爆破事件に（次回のもすでに起こったぞ！）、どこかの組織による犯行声明は出たのか？　いや、聞いたかぎりでは、出されていない。経営陣は予防措置の勧告を受けたのか？　受けていない？　だからどうした？ゆすり説なんてばかばかしい。マニアの犯行だ。デパートの閉店を狙う奴さ。そうだ、それだ！

そうだ、やっと辿りついた。それこそが今日の集会の議題なのだ。もしも経営陣が閉店を決意した場合、デパートの従業員はどういう態度を取るべきか。あらゆる場所から抗議の声が上がり、満場一致の叫び声となった。閉店なんてとんでもない。店が閉まるなら、占拠だ。労働者が経営の愚かな失策のつけを払う必要がどこにあろうか。そうとも、だが安全策は？　沈黙。上がっていた手が一斉にだらりと

垂れた。
「見てごらん、危険手当を支払えっていうわよ」
テオは面白がっている。
「土嚢の後ろに隠れてパンツを売るわけ。かわいい戦争だこと。レーマンが迷彩服を着こんで、お客には防弾チョッキを配るのね」
テオはこの問題について長広舌を振るっているが、ぼくにはもう聞こえなかった。別の音を聞いていたのだ。ぼくの脳髄の幾何学的中心で、超音波の小さな笛が鳴る。鋭い音を発している。その音が、メキシコ製のベンガル花火みたいに、自分のまわりをぐるぐる回る。それから、ぼくの両方の耳に向かって、一種の痛みを広げてゆく。さらに、その音は張りつめて、燃えるように熱くなる。まもなく、頭蓋を貫く白熱した鉄線がぼくを引っかけて、宙吊りにしてしまう。あまりの痛みに大きく口を開くのだが、なんの音も出てこない。それから、弱まる。消えてゆく。テオの目が瀕死のぼくを看取ってくれているように感じられて、安心する。テオはなにかいっているが、ぼくには聞こえない。耳が聞こえない。だが、すぐに返事をした。
「大丈夫だよ、テオ。大丈夫、もう済んだ。ありがとう」
ぼくの体の下端のいちばん深いところにあって、顕微鏡でしか見えない潜水服のなかから叫ぶように、声が出てくる。ぼくはテオに、もう演壇のほうを見ていてくれ、と身ぶりで示した。演壇ではまだ議論が続いている。唇が開き、指が突きだされる。ルシフルとレーマンが同意のしるしを振りまいている。もうまったくなにも聞こえないが、目は見える。注意を集中する背中と、不安にみちた首筋。そしてぼくは初めて、この男と女のいり混じった背中と首筋がだれのものであるか、全員わかることに気づいた。

彼らを親しく知っているような奇妙な感覚さえ生まれる。宙に突きだされた指の持主の名前を大部分いうことができた。五か月もデパートの通路を巡っているうちに、彼らを目で覚えてしまったのだ。彼らはぼくのなかに入りこんでしまった。タンタンの漫画の二四〇〇〇ほどのコマ、二四〇〇〇ほどの吹出しのセリフを覚えているように、ぼくは彼らを覚えていた。ジェレミーとちびからいつも感嘆の賞め言葉を引きだす、ごく乏しい記憶力で。

ちょうどそのとき、集会の参加者のなかに四人の刑事の散っているのが、白紙を這う毛ジラミのようにはっきりと見えた。だが、刑事たちと集会の他の男たちとを区別するものはなにもなかった。刑事、店員、事務職。金属製のブレスレットとズボンの折り目を求めて同じ戦いを戦う者たち。違いは目つきだ。四人の刑事は他の者たちを見つめ、他の者たちは自分たちのまえを見つめている。組合の演壇から爆弾なき夜明けの約束がもたらされるかのようだ。刑事たちは人殺しを捜している。まるで変質者の目だ。彼らの耳は見るたびに大きくなってゆく。洞窟を探検するように、この場にただよう感情を探っているのだ。この参加者のなかで、いったいだれが、このボロ家を吹っ飛ばしたくなるほど、むかついたのか？　それ以外の疑問は彼らの頭には浮かばない。

いつまでもこの疑問を抱きつづけるのだ……。

だが、人殺しはこの食堂にはいない！　この確信は、恒星間の静寂のように深いぼくの沈黙のなかに、炎の文字で書きしるされていた。

そこで、ぼくはテオの注意も引くことなく、横の扉のほうへゆっくりと進んでいった。スプリンクラーで武装され、やたらに行先指示の矢が突き立った廊下を進む。「出口」の方向に向かわず、左の脇道に入り、扉の手すりを押すと、向こう側に開いた。

CamScannerでスキャン

照明をすべて灯して、デパートは金粉の輝きのなかに休息していた。ぼくの頭の静寂は絶対に侵しようのないものだったけれど、その静寂に加えて、デパートの沈黙が聞こえるように思えた。回転を止めたエスカレーターは、単なる静止を超えて静止している。商品でごった返しながらひとりの店員もいない売場は、単なる放置を超えて放置されている。もはや鈴のような音を響かせないレジスターは、単なる沈黙を超えて沈黙している。こうした光景を耳の聞こえない者が見れば、それは別世界だ。なんの痕跡も残さず爆弾が炸裂する世界。

「この次の置き場所を探しているのか」

ひどく深みのある声が聞こえて、ぼくは聴覚が回復したことを悟った。この声はお馴染みだ。彼はぼくのそばに肘をついた。ぼくたち二人の視線は、本能的に真下のシェトランド売場に向けられる。それから、ぼくは答えを返した。

「人の殺し方にもたくさんあるからね、ストジル、困ってしまうんだよ……」

ストジルコヴィッチは、遺伝子的にはセルビア人で、職業は夜間警備員だ。微笑むとそれほどの年齢には見えないが、じつは結構な年だ。そして世界一低い声。ロンドンの夜に響きわたるビッグ・ベンの鐘の音。その声がこんなすてきなお話をしてくれた。

「戦争中にザグレブでドイツ人を殺していた奴を知っている。天使みたいな顔をした十五、六の少年で、コリアと呼ばれていた。奴は十数とおりの絶対にばれないやり方を考えだした。たとえば、妊娠した女友だちと腕を組んで散歩する。女のほうは乳母車を押している。ミサから出てきたドイツ人士官の首筋に一発弾をぶちこんで、まだ煙を吐いているリヴォルヴァーを眠る赤ん坊の傍に隠すんだ。そうい

った類のトリックさ。それで、八十三人殺した。奴は絶対に走って逃げたりしなかった。それで、一度も捕まらなかった」

「最後はどうなった」

「気が狂った。生まれつき殺し屋に向いていたわけじゃないんだ。だが、最後は殺さずにはいられなくなっていた。抗独ゲリラによく見られた症状だ。一種の殺人性ヒステリーで、戦後の精神医学国際大会では熱心な研究の的になった」

沈黙。ぼくの目は一瞬、ベビー用品売場を囲む金色の鉄柵の上をさまよった。ぽっかり開いた空間の反対側、ぼくの真向かいだ。もはやベビーカーや乳母車が無邪気なものには見えなかった。

「今晩も、木っ端を差すか」

「木っ端を差す」とはストジルの言葉で、チェスをやろうという誘いなのだ。火曜ごとに深夜まで一戦交えるので、火曜の夜だけは子供たちとつきあえない習いになっていた。今夜、デパートの煌々たる眠りのなかで、木っ端を差す。いいじゃないか、それこそいまぼくに必要な心の安らぎだ。

14

横っ腹にもろに一撃喰らった。息つく暇もなく、次の攻撃が今度は真正面から額を襲い、ぼくは地面に転がった。背を丸め、体の重心をぎりぎりまで下げて、雨霰と降り注ぐものに耐え、すべてが過ぎ去るのを待つしかない。だが、心の底では、これがけっして過ぎ去らないことも知っている。じっさい過ぎ去らない。一斉にありとあらゆる方向から襲ってくる。そのとき頭に浮かんだのは、第二次大戦の終わりころ、太平洋のどこかで沈められたアメリカ船の乗組員たちの姿だった。海に投げだされ、ひと塊になってくっつきあい、たがいの肘にすがりつき、人間でできた巨大な水溜まりのようになって浮いている男たち。鮫の群れがこのケーキに襲いかかり、まず縁のほうから齧りはじめ、すこしずつ、すこしずつ、食べながら、中心に向かってくる。

まったく同じことをぼくにたいしてストジルがおこなっている。彼はぼくのキングの回りに戦力を結集し、あらゆる方向から同時に攻撃を仕掛けてくる。垂線と対角線上で同時に駒を操るこの能力は、今夜のストジルが絶好調であることを証明している。だが、それはかえって良い兆候なのだ。なぜなら、ストジルは調子が悪いときには、いかさまをやるからだ！　チェスでいかさまができるなんて、世界で

CamScannerでスキャン

もストジルひとりだけだろう。彼の駒はすべて二目か四目にまたがり、相手方の視界はかすみ、世界はぐらつき、士気はゼロに低下する。世界の価値観が真の死を迎えるのは、チェス盤がかすんで見えるときなのだ。だが、今夜はいかさまはなし。ストジルにはちゃんと見えている！　彼はじっくり観察し、ぼくは賞讃の気持で眺める。彼の攻撃はすべて偵察行動としておこなわれる。ナイトが馬に乗って横っ飛びで来たり、お道化たビショップが下から急に攻めたり、剣の刃のように鋭く、思いもかけぬ攻撃だ。ナイトは、ふたたび下にさがりながら、自分のケーキの分け前にフォークを突きたてる。足を隠せば、腕が喰われてしまう。頭を引っこめれば、窒息死させられる。いうまでもなく、今夜のストジルは絶好調なのだ。ぼくはといえば、ふくろうからサーチライトのような眼光を浴びせられて、目をしょぼつかせているもぐらにすぎない。ぼくの頭のなかで、狂ったように出口を探していたフリッパーのボールが、ついに敗北の快楽に流されてゆく。

「七人だな」

ストジルの目はまだチェス盤から離れない。彼の声は遠いコントラバスの呟きとなり、その音だけが聞こえてくる。

七人？　七人ってなに？　だれが七人？

「デパートに警官が六人来ていて、うちの奴がひとり。それで七人」

うちの奴とは、にきび面で、いつも唇が濡れている長身の青年だ。ぼくの対戦相手が一手差すごとに事務的に首を縦に振っていたその青年が、ほんのわずか身を固くした。

「会計の細かい帳尻を合わせているサンクレールのところにひとり、二階から上の各階に見えない亡霊のふりをしているのがひとりずつ、それに、チェスのできるふりをしているうちの奴がひとり」

「濡れ唇」は仰天して、腹を立てるどころではなかった。
「どうしてそんなことがわかったんです？　警官たちが入ってくるところを見たはずはないのに！」
濡れ唇には答えず、ストジルは、一日に十回はぼくを拷問室に呼びだすミス・ハミルトンのマイクのスイッチを入れ、それに体を近づけて、腹わたの奥を響かせた。
「三階、レコード売場、煙草を消して」
この天から轟くコントラバスの音を聞いて、三階の見回り警備員は、父なる神その人と交信したと思ったにちがいない。
わがストジルの性格はよく知っている。自分に七人の私服警官がつけられたことが、彼を深く傷つけたのだ。そしてさらに、警備員を警備しはじめた会社こそ、彼にとって不信の元凶だ。そうした例を彼はこれまでにも経験していた……。
にもかかわらず彼は勝負に戻り、ビショップを守るポーンに真中の線を横切らせ、宣言する。
「三手でチェック・メイト」
間違いない。雪隠詰めだ。呼吸困難による死亡。おめでとう、ストジル。勝利者は立ちあがり、老いて骨と皮だけに痩せこけた体を引きずり、いつもミス・ハミルトンが店全体のパノラマを楽しんでいる店内放送の交換ブースの窓に近寄る。おずおずと、濡れ唇はおなじことを訊きなおした。
「ねえ、どうしておれたちが七人だってわかったんですか？」
ストジルのまなざしは、虹色の大きな空虚のなかを、ひとり長いこと滑空していた。
「ぼうず、何歳になった？」
「二十八歳です」

CamScannerでスキャン

その落ち着きのない声だけ聞けば、濡れ唇は十八歳といってもよい。だが、乾ききったすずめ程度の脳からすれば、八十八歳だ。

「戦争のとき、お前のおやじはなにをしていた？」

二人の視線はいま、輝かしい巨大な沈黙のなかを小隊を組んで飛行し、対話は平行線をたどる。

「憲兵でした。パリで」

ストジルの視線はデパートのいちばん底まで潜りこみ、いきなり失速して、渦巻状の再上昇を開始し、各階をつぎつぎに通りぬけ、その状況報告をするためでもあるかのように、ふたたび自分自身の場所に立ちもどった。

「そういったことがこの店でも役に立つとは思わないか」

憲兵の息子の耳は真赤になった。すると、ストジルは彼の肩に父親のようにやさしく手を置いた。

「いいんだよ。わたしも同類だ」

そして、つけ加えた。

「歩哨の生き残りさ」

それから、ストジルコヴィッチは重々しく、ゆっくりと、この若い警官に自分の生涯を語りはじめた。魂の歩哨として、神の教義のまわりに主禱文と天使祝辞の二重の城壁を打ちたてた神学生という出発点から始まり、神の存在への懐疑、神からの離反、入党、戦争、ついで、歩哨ストジルコヴィッチの不動のまなざしのもと（「ヨーロッパ要衝の地、バルカン半島の歩哨だぞ、ぼうず！」）、谷底を進んでゆくドイツ兵たちと、眼下を馬で行くヴラーソフの軍隊（百万人のソヴィエト兵が戦闘の果てに全員反革命軍に転向させられたんだ）、それに続いては、解放戦争を遂行する部族たち、尖った歯のタタール人、

敵の耳をコレクションするチェルケス人の騎兵、腕時計をコレクションしながらバルカンの要衝を越えようとするロシア白軍などなど。だが、ロシア白軍は、徒歩行の発汗の臭気に包まれた歩哨ストジルコヴィッチの監視を計算に入れていなかった。

「歩哨は絶対に自分の足元なんか見ないんだよ、ぼうず、絶対にだ！」

大したものだ。デパートは一気にグランド・キャニヨンのスケールを獲得した。ストジルは世界を見張っているのだ。

「たったの一兵も通しはしなかった！　幸いなことにだ、ぼうず。だって、わたしがひとりでも通していたら、いまごろ店のレジがたらふく腹に詰めこんでいるのは、ルーブルになっていたはずだからな。それに、きっと釣り銭なんか返しちゃくれないだろう」

確かに、横顔を見ると、ストジルは現在でもまさに鷲のような様子をしている。もちろん、若さの生気はすでに失われているが、彼をじっと見つめるひよこのような警官の傍に置くと、ストジルの風貌には凄みがある。

「わかったな。だから、洒落た店を一軒見張ってろといわれれば、ゾウムシの八匹くらいすぐにも見つけられるんだよ」

「七人ですよ」と濡れ唇が訂正した。「おれたちは七人だけです」

「八人だ。八人目が五分前に入ってきたが、お前さんたちはだれも気づかなかった」

「だれか店のなかに入ってきたんですか」

「食堂の通路に面した六階の扉からな。あの扉は鍵がかからないんだ。その点については、三度も報告書を書いたんだがね」

CamScannerでスキャン

濡れ唇はストジルの答えを最後まで聞かず、マイクのほうに突進する。新たな潜入者の情報がグランド・キャニヨンの静寂に爆発する。それから、若い警官はぼくたちを置き去りにして、急に問題の扉のほうに向かう。ほかの六人の警官もそれぞれ自分の担当の陳列台から姿を現わし、同じ扉に向かった。その様子をぼくたちはしばしば興味深く眺めたが、ストジルはぼくの肩に腕を回して、チェス盤のほうに引き戻した。

「バン、ともかく駒を動かして、中央を守らなくてはいけない。さもないと、いつでも雪隠詰めにされてしまう。見てごらん、あんたの黒のナイトと白のビショップは一度も動いていないじゃないか」

「あんまり早く駒を動かすと、あんたが無理に取りあいにもちこんで、ポーンを使ってぼくの裏を掻くからね、ユーゴでやってたみたいに」

「そう、ポーンの使い方も覚える必要がある。結局、力の差をつけるのは、ポーンだからな」

戦略会議がそこまで進んだとき、部屋の扉が開いて、入ってきたのはジュリユスだった。毎火曜夜のこの時間の習いで、ジュリユスは、主人と再会する喜びに小刻みに体を震わせ、はしゃいでいた。ジュリユスのこの楽しみを禁じたことは一度もない。再会の喜びを尽くさないうちに、ふたたび素早く扉が開いた。

「ねえ、ストジルさん、そろそろ……」

この言葉を体の大きな警官がさえぎった。ジュリユスを見つけたからだ。警官の胸は馬のように巨大で、髪の生えぎわが、密生した黒い眉毛すれすれまで下りている。まるでマック・セネットのキーストン警官（コップス）の一員だ。

「そのワンコロはいったいここで何をやってるんだ？」

「ぼくの犬です」とぼくはいった。

警官が驚いているのを見ていつまでも面白がっていることは、法律が許さなかった。この男の得意わざはどちらかといえば脅しであり、目をぎょろつかせ、歯をぎりぎり鳴らすことだった。

「この小屋はいったいどういうことだ？　夜番がトランプ博打にうつつを抜かして、どこの馬の骨だかわからない野郎が、夜の夜中にワンコロを連れてぶらぶらしてるなんて」

ぼくは思いつきの言葉で、高貴なチェス・ゲームの栄光を称え、ぼくたちの古い習慣の弁護をおこなおうとしたが、その説明は肉切り包丁の一閃で叩き切られた。

「ここで何をしてるんだ？」

濡れ唇の許可をえている、とぼくは言明した。

「消えな」

なるほど、権力とは明快なものだ。いずれにせよ、そうしようと思っていたジュリユスとぼくは、その場から逃げだした。六本足でペール＝ラシェーズへご帰還だ。

「おい、どこから出るつもりだ？」

ぼくはコースを説明した。みんなと同じように、廊下から壊れた扉を通ってです。

「冗談じゃないぞ！　従業員用の扉を通れ。みんなと同じようにだ！」

方向転換。ジュリユスとぼくはエスカレーターを降りる。螺旋形を五回描けば、おもちゃ売場に出るはずだ。背後で、思いやり豊かな警官が怒鳴っている。

「パスキエ、あのばか男とくず犬の後についていけ！」

さらにつけ加えた。

CamScannerでスキャン

「なんて臭いんだ、あの犬畜生は!」
パスキエはすでにぼくのすぐ後ろにいて、耳元にこう囁いた。
「悪いね、ほんとに……」
それは、幼さの残る濡れ唇の声だった。
「いやいや、階級組織っていうものは仕方がないよ」
ぼくの前ではジュリユスが、動きを止めたエスカレーターの慣れぬ高さの段を慎重に下ってゆく。その大きな尻がフォーマイカの隔壁のあいだで揺れている。少なからぬ羊飼いを夢見に誘う光景だ。ついに一階の平らな地上に降りられて喜んだジュリユスは、こちらを振り向いて、四本足で跳びはね、歓喜のダンスを披露する。たしかに臭い。洗ってやらなくちゃ。
おもちゃ売場に着いたところで、ことが起こった。これまでのところ、ぼくの人生のもっとも悲痛な思い出として残る出来事だ。ジュリユスは荘重な足どりを取りもどそうとした瞬間、その場に凍りついた。勢い余った濡れ唇とぼくは犬に激突して、顔の骨を折りそうになった。そのショックで、ジュリユスは体の平衡を失い、木馬のように硬直して脇腹から床に倒れる。白目を剥いている。黙示録的な引きつった笑いで黒い唇が捲れあがり、そこから粘っこい唾が大量に溢れでている。巻きあがった舌が喉の奥深くまでふさいで、呼吸はまったく不可能だ。可哀そうなジュリユス、鬱血で顔が膨れあがり、いまにも破裂しそうだ。そうだ、ぐずぐずしていたら悲惨な死体を目の当たりにすることになる。ぼくはジュリユスに飛びつき、引きつれた口に腕を突っこみ、舌をひっこ抜くほどの力をこめて引っぱった。舌はついに緩みはじめ、ごきっという音を立てて伸び、それから突然、犬の黒目がもとの場所に戻った。
だが、その目に浮かんだ表情を見て、ぼくはのけぞった。それから、犬が吠えはじめた。魔女セイレー

ンのように遠い吠え声が空中高くのぼってゆき、増幅され、死者たちをも目覚めさせる恐怖で、デパートの空間をはち切れんばかりに満たした。狂った犬の途切れることのない叫びのなかに、世界のすべての恐怖があった。
「黙らせてよ、お願いだ！」
今度は、濡れ唇が度を失っていた。はじめは何をしているのかわからなかったのだが、ジャケットのボタンを外し、ホルスターの革紐を引きむしり、拳銃をつかんで、犬の頭に向けていた。
ぼくの足が自然に飛びだして、彼の手首を蹴りあげ、銃は店のどこかへ消えた。彼はまだ銃を手にしているかのように、腕を突っ張らせたままだ。やっと手がだらりと下がる。それを見て、ぼくは両腕にしっかりと犬を抱きしめた。
なんて軽いんだ！
空っぽみたいに軽い！
だが、犬は狂ったまなざしで、世界を貪り喰おうとするような痙攣的な笑いを浮かべ、まだ吠えつづけていた。
「おまけに、この犬は癲癇持ちときたもんだ！」
階上から駆け降りてきて、ぼくのすぐそばで大笑いをしている声は、先刻の意地悪な警官のものだった。

15

翌朝、デパートはいつもより早く満員になった。だが、すべての入口で見張りに立つ警官たちが細心の注意をはらって仕事をしている。バッグはみんな底まで探られ、深そうなポケット、ちょっとした膨らみもすべて疑いをかけられる。体を触診され、胸、股のあいだ、はい、うしろを向いて、背中、内ポケット、もう一度前を向いて、それからやっと、

「通ってください」

客はこうした作業が好きだと思うしかない。他人ごとの危機感が消費への抑えきれない欲望をくすぐるのだ。もちろん、爆弾の破裂したデパートがどんなものか実際に見たいという気持もある。シェトランド売場など押すな押すなの騒ぎだ。だが、客の視線がモップのように床を這いまわっても、血の一滴も落ちてはいないし、ウールのなかに髪の毛一房も混じってはいない。なにも起こらなかったのだ。なんにも。甘ったるいアレンジの同じ『雨に唄えば』が、同じ売場に降りそそぎ、同じ客が鼻をくっつけんばかりに混みあっている。そして、子供のころ聞いたウェストミンスターの鐘に似た四つの短い音が鳴り、ミス・ハミルトンの声の雲がただよってくる。

CamScannerでスキャン

「マロセースさま、お客様ご要望コーナーまでお越しください」
ぼくの一日の始まりだ。
プラシーボ効果をもつこの声の持ち主に初めて出会ったのは、ぼくの輝かしいキャリアが始まったばかりの頃だった。場所はカフェテリアだ。小柄で、丸まるとして、バラ色の肌。それまでは、ぼくは彼女のことを、人形のようなお尻をした女の子だと想像していた。現実に見た彼女は、可愛い頭をうしろに反らせて目を閉じるたびに、その腕に時計の振り子のような動きをあたえるのだった。ストローで桃色がかったミルクを飲んでいたが、それが彼女の花弁のような半透明の肌の色の秘密なのだろう。ぼくたちの間柄はとてもうまくスタートした。だから、ひどい終わりかたをするはずはなかったのだ。ところが、彼女はぼくの名前を尋ねた。
「パンジャマン」とぼくは答えた。
「可愛い名前ね」
奇妙な話に聞こえるかもしれないが、彼女の声はスピーカーの声と同じだった。エーテル状の声の雲。よく考えてみると、肌と同じ色の声。彼女はぼくに可愛い微笑みを向けた。
「で、もうひとつの、本当の名前、姓は？」
うしろを通りかかったルシフルがぼくの名前をテーブルに放りだした。
「マロセース」
彼女は目を丸くした。
「えっ！　あなたが？」
そう、そのころすでに、ぼくはぼくだった。

「ごめんなさいね。放送室に戻らないと」
彼女はまだおっぱいを飲み終わっていなかった。
そのころからすでに、いけにえの山羊の臭いが……。

レーマンの司令塔で話し合われようとしていたのは、まさにこの仕事のことだった。サンクレール本人がぼくを待っていた。彼はぼくの直属の上司の机に就き、ぼくの直属の上司は直立不動、胸を張って、腰のうしろで手を組み、誠実そうな目つきをしている。客はいない。ぼくの座る椅子もない。煌々たる蛍光灯の光だけ。それに、ぼくたちみんなのボス、サンクレールのやさしいまなざし。

「マロセーヌ君、偶然にも、共通の知人の家でクードリエ警視長に会ったんだが、彼からなにを教えてもらったか、わかるかね」
ぼくは「偶然」と「共通の友人」という表現に注目し、こう考えた。嘘つきめ、クードリエは直接電話してきたんだろ。ぼくは答えた。
「信じて下さい、招待状をもらわなかったんです」
「だが、マロセーヌ君、君はわたしたちの会話の中心だった」
「ああ！　それで説明がつきました」
「いったい何の？」
「ゆうべの夢です。パーティでモエ・エ・シャンドンのシャンペンを飲んで、げっぷしていたんです」
「マロセーヌ君、ゆうべ君は夢を見る暇などなかったはずだ。警察と夜間警備員の見張りの仕事を邪魔して、わが社の円滑な営業を妨げていたからね」

（ニュースは臭いのように必ずどこかへ洩れる）
レーマンは眉をしかめる。サンクレールは露骨に迷惑だといった表情を作っている。
「君の置かれた状態は万全とはいえない、マロセーヌ君」
（だが、ぼくの犬よりはましだろう。夜間救急の獣医はコンクリートのようなジュリユスの太腿で三本注射針を折ったあげく、なんとか注射に成功した。癲癇の犬なんていうものが存在するらしい。今晩には具合もすこしは良くなるだろう。今朝ジュリユスは世間をばかにしたように舌を出したまま、見開いたきりの目で世の中を見ていた。相変わらずの硬直状態。相変わらずの死）
「なぜ警察に行ってスケープゴートの話なんかしたのかね」
ほら来た。クードリエが電話したのはこのことに違いない。
「ただ警察の質問に答えただけです」
サンクレールのまえの机の表面はつるつるだ。小指の裏でありもしない塵を払いのける。
「わたしたちは君の口の堅さの価値について意見の一致を見たんだよ、マロセーヌ君」
こうしたサンクレールの口の利きかたにはうんざりだ。ぼくはそのことを彼に伝えた。それから、状況がぜんぜん変わってしまった、ともいった。あなたの「わが社」には爆弾が降っている。警察は爆弾犯人を捜している。従業員全員の不満の種を仔細にふるいにかけているのだ。なかでも最悪の立場にいるのがぼくだ。なにしろ、朝から晩まで怒鳴りつけられている。それゆえ、ぼくが日中時の幻滅を晴らすために、夜デパートに爆弾を仕掛けているなどと思われないように、スーパー刑事に自分の立場を明確に説明することは、けっして異常なことではないだろうと思う（「日中時の幻滅」とサンクレール流にいってやった）。

「で、その考えをクードリエ警視長に説明したわけだね、マロセーヌ君」
サンクレールの声に満足の響きはまったくない。心から遺憾の意を表明している。彼は説明した。
「君の言葉に反駁するつもりなどまったくないのだ。クードリエ警視長は君のいったことなどひと言も信じなかったからね。信じられるわけがないだろう。『品質管理』という職掌は、わが社のような企業にはかならず存在するものだ。また、わが社の性格を考慮に入れれば、顧客の苦情が正確に伝達されることはまったくもって当然のことだ……」
サンクレールの演説を聞きながら、夢でも見ているような気分になった。「品質管理」の仕事は、このデパートではまったく見せかけだけのものだ。サンクレールもよくご存知のように。よくご存知のことでしょう、とぼくは言った。
「もちろんだよ、マロセーヌ君！　一日に百貨店が販売する商品の量を考えれば、いったいどうやって品質管理部門がすべての商品を管理することができるというんだ？　スーパーマーケットの大部分がやっているように、品質管理のスタッフを増やしたって、苦情のもちこまれるパーセンテージにはなんの変わりもないのだ。したがって、この職掌により高度な収益性をあたえるため、特別な性格を……なんというか、そう、『広報活動』としての性格を強調するのが得策だと考えたのだ。君はその特色をうまく活かして仕事を遂行しているといわねばならない。しかも、こうすることによって、従業員の数に歯止めをかけ、同時に、苦情を話しあいで処理するという二重の利点も生じている」
たしかに立派な理論だ。サンクレールはすでに、ぼくが雇われたその日に、この理論を縦横無尽に語りつくした。どうしてぼくはこんな小狡い仕事のためにあくせくしてきたのか？　笑うため？　（たしかにお笑い草だが……）ぼくの母親が家出中で、扶養家族の多い一家の主に失業はふさわしいとはいえな

CamScannerでスキャン

いから？（当たらずといえども遠からず……）ぼくの深遠な性格の神秘がなせるわざ？（いやはや……）いずれにしても、ぼくはスケープゴートの臭いをさせる役を引きうけた。だが、いまやこの臭いがトラブルのもとなのだ。

サンクレールはぼくの考えを読もうとしていたにちがいない。ぼくが黙りつづけていると、謎なぞを仕掛けてきた。

「マロセーヌ君、クレマンソーが自分の内閣官房長官について何といったか、知っているかね」

（無視）

「こういったんだ、『私が屁をしても、臭うのは彼だ』」

レーマンの太鼓腹が小刻みに震えている。サンクレールはこうつけ足した。

「それでも多くの立派な人びとが官房長官になっている。そして、みんな官房長官になりたくて激しい争いを繰り広げているんだよ、マロセーヌ君！」

サンクレールをどんなふうに描写すればよいだろう。ハンサムで、繊細そうで、人当たりが良くて、成功者の安定感がある。新時代の哲学者、新時代のロマン派、新時代のアフターシェーヴ。彼は新時代の人間だが、伝統の種子によっても培われている。退屈なやつだ。

「警察当局に偏執狂だと思われてはならないのだ、マロセーヌ君。そのスケープゴートの話の真偽を確かめるために、君の同僚たちが尋問されたらどうなるか、考えてもみたまえ。クードリエ警視長はなにを見出すか。なんの品質も管理しない品質管理部門。つまり、仕事をしない人間。だからこそ、その人間はたえずお客様ご要望コーナーに呼びつけられる。クードリエ警視長が必然的に辿りつかざるをえない結論だ。だが、それはあんまりだ、と君はいうだろう。だって、仕事は立派に果たしているんだか

ら！　とね」
それでも（あえてこの言葉の特異な語感を採用しよう）、ぼくは口を利かなかった。サンクレールはすかさず言葉を続けた。
「君がからかったクードリエ警視長を説得するのに、わたしはひどく苦労した。忠告しておく、マロセーヌ、危ない火遊びは止めたまえ」
「君」が削除されたことに注目した。それから、ぼくはなぜか、ちびとちびの描いたサンタクロースのこと、ルーナの新たな孤独のこと、母親の家出レースのこと、突如硬直状態に陥った犬のことなどを考えた。そして、憂鬱の虫、愛の痛手、唐突な徒労感、なんというか、そういったものに襲われて、こう答えた。
「今後この店のどんなものとも遊んだりはしませんよ、サンクレール。出てゆきます」
彼は悲しそうにうなずいた。
「警察も同じ考えだった、想像がつくだろうが。しかし、この捜査が終わるまで、いかなる人事異動も許されない。解雇も、雇用もなしだ。喜んで君の辞職を受けいれたいところだが、まことに残念に思う」
「ぼくが客のまえでズボンのなかにお漏らしをしたり、口から泡を吹いて床を転げまわったり、この勲章男の喉に喰らいついて歯で扁桃腺を引きずりだしたりしたほうが、もっと残念に思うでしょうね」
サンクレールは反射的に手を出して、大笑いできる心境にないレーマンを引きとめた。
「悪い考えではない、マロセーヌ。いまわが社にはだれか責任を引き受ける人間が必要だからね。君が狂った爆弾テロリストの役を引き受けたいのなら、止めはしない」

話は終わった。サンクレールはハンサムだ。まだ若いし、実力もあり、きわめて老練だ。彼より先にぼくが部屋を出てゆく。扉の把手に手をかけて、振りむき、今度はぼくが謎なぞを出した。

「登場人物が部屋を出るときに、別の登場人物について、『このつけはかならず高く支払ってもらうからな、古狸め』といったのは、タンタンのシリーズのどの巻でしょうか、サンクレール？」

サンクレールは子供のように無邪気な微笑みを浮かべて、こう答えた。

「『燃える水の国』のミュレール教授」

いつかきっとその微笑みを消してやるからな。

16

家に戻ると、ジュリユスの枕元にはクララがいた。高校をさぼって、一日中犬の看病をしていたのだ。
「今度さぼるときはひと言断わらなくちゃいけないよ」
ジュリユスは相変わらず、脇腹を下に横たわり、脚を平行に伸ばし、ガラス壜のように硬ばっていた。
だが、心臓は脈打っている。その音だけが、空虚な檻のなかに反響している。まるでエドガー・アラン・ポーの告げ口心臓を移植したみたいだ。
「なにか飲むものはやった?」
「なにも口にしないの」
ぼくは犬の体を撫でさすった。毛がざらついている。狂った剝製師の手にかかった毛皮みたいだ。
クララがぼくの腕を取り、やさしくぼくを振りむかせ、ぼくの胸に頭をあずけた。
「バン?」
「バン、テレーズがお昼に様子を見に上がってきたの。そしたら、ひどい神経の発作を起こしてしまったの。ジュリユスが地獄を見ているって叫んで、床を転げまわったのよ。ローランに来てもらうほか

なかったわ。彼がテレーズに注射をしてくれた。彼女はいまは下にいるわ。休んでるの」
可哀そうなクララ……。なんて素晴らしい校外実習のプログラムなんだろう！
「で、ちびたちは、ジュリユスを見たの？」
いいえ。クララは子供たちに学校の食堂で昼食をとり、勉強しているように命じたのだ。クララはもうすこし強くぼくの体に身を擦りよせた。ぼくはやさしく彼女の髪をかきわけて耳を出し、その髪の暖かさを一瞬手の甲に感じとった。ぼくは尋ねた。
「君は恐くなかったの？」
「いいえ、初めは恐かった。それで、ジュリユスを写真に取ってあげたの」
愛すべきぼくの妹、思慮深い娘、カメラのシャッターで恐怖に麻酔をかけるとは！　ぼくはクララの体をつかんで、腕をぐっと伸ばした。これほど穏やかな瞳は見たことがない。
「いつか君の写真を売りに出すといい。それで家の生計を立ててくれよ」
今度は彼女がじっとぼくを見つめた。
「パン、あの仕事にうんざりしてるのなら、いつでも止めていいのよ」
（女の直感ってすごい……）
階下ではテレーズが仰向けに横たわり、まなざしを吸盤のようにぴったりと天井にくっつけていた。ぼくは枕元に座った。テレーズを可愛がるのは、いつでもぼくにとって大問題なのだ。ちょっとした愛撫にも彼女は感電死しかねない。だから、ほんとうに慎重にやるしかない。氷のように冷たい額にそっとキスをし、可能なかぎり静かな声でいった。

「面倒なことはいわないでおくれよ、テレーズ。癲癇ていうのは、よくある、軽い病気なんだ。ずいぶん偉い人も持病だったんだよ。たとえばドストエフスキーなんか……」
なにも起こらない。乾いた汗で黄色くなったシーツを握りしめるテレーズの手を片方引きだし、指の一本一本に口づけをしてゆくと、曲がった指から力が抜けはじめた。ほかに話がないので、おなじテーマを続けた。
「ムイシュキン公爵は、あまりにも善良な人間で、癲癇もちだったんだ！　発作が起こったときには、極限的な快感を味わうらしい。ジュリユスはあまりにも善良だろう、テレーズ。それに快感がなによりも好きだよね……」
テレーズに向かって快感の話をするのは、いささか慎みに欠けたかもしれないが、いずれにしても、テレーズは目を覚ました。やっと彼女の頭がぼくのいる側にぐらりと傾いた。
「パン？」
「そうだよ、可愛い子ちゃん」
「デパートで死んだ二人の人は……」
（ああ！　なんてことを……）
「あんなふうに死ななくちゃならなかったの」
（またかい）
「生年月日は一九一八年四月二十五日、新聞に出てたわ。二人は双子だったのよ」
「テレーズ……」
「聞いて、信じなくてもいいから。二人が生まれた日、土星が海王星と合(ごう)に入り、この二つの星が両

CamScannerでスキャン

力とも太陽と矩の位置になっているの」

「テレーズ、天使ちゃん、信じないんじゃなくて、全然理解できないんだ。頼むよ、ひどい仕事で疲れる一日だったんだから」

どうにも止まらない。

「この合は根源的に邪悪な精神を意味していて、不審な、もしくは不正な行為に傾きがちなの」

（「不審な、もしくは不正な行為」っていうのはサンクレール流ではない。テレーズのスタイルだな）

「わかった、テレーズ、わかったよ」

「太陽と矩の位置は、問題の人物が悪しき力に従属することを意味している」

ジェレミーがいなくて良かった！

「第8宮における太陽の存在は暴力的な死の徴なの」

テレーズはいまやベッドの縁に座っている。その口調には激したところはまったくない。コレージュ・ド・フランスの講義の学問的な静謐さを感じさせる。

「テレーズ、買物にも行かなくちゃいけないし」

「あと一秒で終わるわ。始まりの太陽の上を破壊的要因である天王星が通過することによって、死が介入してくる」

「どういうこと？」（思わずジェレミーみたいな口調になった）

「二月二日の出来事よ、もちろん！　デパートの爆弾で二人が死んだ日のこと」

よって証明されたり。テレーズはかくして完全に復調せり。神経発作？　とんでもない。彼女は起きあがり、今朝から散らかしっ放しの元・金物屋を片づけはじめた。テレーズがちびたちのベッドに取り

かかったところで、突然考えが閃いた。

「テレーズ？」

「なに、パンジャマン」

彼女の手の下で、枕が眠りに誘うような心地良いふくらみを取りもどしている。

「ジュリユスのことだけど、ちびたちには知らせてはいけないと思うんだ。見るとあんまり悲惨だからね。だから、昨日の夜ぼくを迎えにきたときに車にはねられて、犬猫病院に運ばれた。でも、『命には別状なし』ってことにしたいんだ。OK？」

「OK」

「君も上に見にきちゃいけないよ」

「わかった、バン、わかったわ」

ベルヴィルをぶらつくと、その時間帯に関わりなく、いつでもクララの写真アルバムのなかで道に迷ってしまったような感じがする。クララはベルヴィルをあらゆる角度から写真に撮っている、この荒れ果てた地域を。建物の古い玄関から、ナツメヤシとピーマンの山、年若い麻薬の売人にいたるまで、クララはすべてを捕える。だから、ぼくはまるで思い出のなかをノスタルジックにさまよっているような気がするのだ（あの見事な写真は、いったい何時間学校をさぼった成果なのだろう？）。クララは、アマルの店の真ん前で祈りの時を告げるイスラム教徒の声まで録音している。今晩は、そのイスラム教徒がナイル河のように長いコーランの一節を繰り広げるあいだ、アラブ人とセネガル人の一団がアマルのレストランの門口で地獄のゲームを転がしていた。サイコロがはじけ、ひっくり返したダンボールの箱

の上で踊る。いつもより雰囲気が張りつめているような気がする。じっさい、そう思った瞬間、アラブ人の握りしめた拳からナイフが飛びだし、もう一方の手が賭金をかっさらう。ナイフの刃は黒人の巨漢の腹に押しつけられて震えており、驚いたことに、黒人の肌が灰色に変わっている。アドゥシュは（店の壁にもたれかかって、所在なさそうにザンのかけらを噛んでいたが）、急に飛びだした。手刀の一閃がアラブ人の手首に炸裂し、男は悲鳴を挙げてナイフを取り落とした。手首が折れなかったのは、男の手が鋼鉄でできていたからだろう。アドゥシュはアラブ人のポケットに手を入れて、争いの種になった五フラン硬貨を取りだし、セネガル人に差しだした。それから、駆けつけたぼくにいった。

「わかっただろ、バン。白いヘロイン一グラムのために黒い大男から巻きあげようっていうんだから、まったく世も末だよ」

それから、ナイフ男のほうを振り向いていった。

「お前は明日国に帰るんだ」

「できないよ、アドゥシュ！」

まさに悲嘆の叫びだった。手首の苦痛よりも強烈な。

「明日だ。荷物をまとめな」

アマルが七代先までぼくの親類たちの消息を尋ね、ぼくがアマルに同じことを尋ねたあと、クスクス五人前と串焼き十本が小さな買物かごに詰めこまれ、ぼくはそのかごをもって店を出た。

「どんなところ、その病院？」

ちびたちは、できたての硬貨みたいにぴかぴかに洗いあげられ、新品のパジャマを着て、質問競争に

突入してきた。年長の妹二人はいい匂いのするブラウスを着て、自分たちも信じているかのように、この病院の話に耳を傾けている。

「最高だよ。名犬に必要なものはなんでも揃っている。各犬の部屋にはテレビがついていて、それぞれの犬の性質に応じて特別の番組が選べるんだ」

「へええ……」

「嘘じゃないよ」

「ジュリユスの番組はなに？」

「テックス・アヴェリーのアニメだ」

それを聞いて、ジェレミーはベッドから滑りおりた。

「ね、行こう、明日行こう」

「だめ。子供は入れないんだ」

「なんで？」

「犬に病気を移すといけないからね」

というわけで、夜の時間は過ぎてゆく。いうまでもなく、デパート事件の血みどろ連続小説が再開し、虚構と現実が陽気に合体する。虚構の場面では、揉み上げパットとハイエナ・ジブがパリの下水道の調査をおこない（ありがとう、ウジェーヌ・シュー大先生）、もしかしてデパートの真ん中に通じていないかを調べた（ありがとう、ガストン・ルルー）。その途中で二人組は神経衰弱のニシキヘビに出会い、即座にこの蛇を飼うことを決断し、都会人（ホモ・ウルバヌス）の孤独を慰めることにする（ありがとう、エミール・アジャール）。ここで、ジェレミーが物思わしげに話を中断した。

「ねえ、パン、ストジルって、ほんとにそんなに凄い夜警なの？」
「ああ、そうだよ」
「それじゃあ、昼間だって、夜だって、店に爆弾を仕掛けることなんかできるはずないでしょ？」
「難しいだろうね」
「下水道を通っても？」
「下水道を通ってもね」
ちびが上体をまっすぐにしたまま、ぺったりと尻もちをつき、鼻に眼鏡を引っかけて眠りこんでしまったので、クララが立っていって、ちびをベッドに寝かせてやった。テレーズは国会と同じくらい真剣に速記に励んでいる。
「ぼく、どうすればいいか、わかると思うよ」とジェレミーがいう。
「どうするの？」
「見ててよ」
かすかな不安……。

CamScannerでスキャン

17

夜中に五回か六回起きて、ジュリユスの呼吸音をうかがった。それが呼吸と呼べるならの話だが、彼は呼吸していた。むしろ、空気が勝手にジュリユスの体のなかに入りこみ、彼の意志とは無関係な通風現象によって外に出てゆくといった感じだった。それが彼に代わって呼吸しているのだ。それから、臭い。珍奇なガーゴイルのようにぽっかり開いた口から出てくるその臭い……。

つまり、生きているということだ！

ぼくは滑稽なことを考えて絶望と戦っていた。たとえば、この機会を利用してジュリユスを風呂に入れても、大量の泡を建物中に巻き散らして逃げだすこともないだろうな、といった類の考えだ。だが、笑えなかった。そこでもう一度眠りに就こうと試みた。試みは成功したらしい。今朝、目が覚めたからだ。一週間ごとの休みの日だったにもかかわらず、犬のようにひどい気分だった。

すぐにルーナに電話した。

「パン、あなたなの」

「そう。ローランを出してくれないか」

電話線の向こうですすり泣きが聞こえる。昨夜ローランが帰らなかったという。

「ああ、二度と帰ってこないわ、パン。わかるのよ、帰ってこないわ！」

パニック。だが、ローランがルーナと一緒じゃないのは、病院にいるからだ。取り乱すにはおよばない。彼が彼女以外の人間のために彼女のもとを離れるとしたら、それは病人のためなのだ。

「病院の電話を教えてよ」

「ああ、お願いだから、彼にやさしくしてやって。ほんとうに可哀そうな人なんだから！」

「ぼくはいつでもやさしいよ！　いつだってやさしくしてきたしね！　いったい、どこのどいつに対してぼくがやさしくなかったことがあるっていうんだ、くそったれ」

病院でも同じことだった。ローラン・ブルダン先生（この七年間というものぼくの妹だけにご執心）は電話に出ると、父親になることへの不安を延々と説明しはじめた。

「パン、君の電話を待ってたんだ。電話をくれるだろうと思ってたよ。でも、悪いけど、全然考えは変わらない。ルーナは絶対にあんなことをすべきじゃなかったんだ。隠れて避妊リングを外すなんて。子供なんて絶対に欲しくなかったし、これからも欲しくない。それは彼女もわかってるはずだ。ぼくが子供を欲しがったこともあったかもしれないが、それでも彼女のほうが大事だったんだよ。一生彼女だけが大事なんだ。いってることはわかるだろう。それに、子供を作るためには、まず自分自身を好きにならなくちゃいけない。ところが、ぼくは自分が好きじゃないんだよ。全然好きじゃない。一度だって好きになれたことがない。たぶん、だからぼくは医者をやってるんだと思う。パン、わかってくれよ。彼女には愛されたい。だが、ぼくを『再生産』して欲しくないんだ。わかってくれないか、なあ、パン。聞いてくれ。いずれにしても、ぼくが家族というものを侮辱しようとしたなんて思わないでくれ

……」

（「家族というものを侮辱」うんぬん。まるでぼくがゴッドファーザーであるみたいな口の利きかたじゃないか、いやはや！）

……だが中絶するかどうかは彼女が選ぶことだ。ともかく、ぼくたちのあいだはだめになった。いまとなっては……

息切れするのを待って、質問した。

「ローラン、癲癇の発作ってどのくらい続くものなのだろうか」

彼のなかのプロが反射的に話に乗った。

「ジュリユスのこと？　数時間かな……」

「だけど、これで丸まる一日と二晩になるんだ」

沈黙。診断の歯車が動きはじめる。

「たぶん、神経筋強縮だな。犬のまわりで物音を立てたことは？」

「いや、テレーズが発作を起こしたことはあるけれど、物音は立ててない」

「その部屋の扉をばたんと閉めてごらん。神経筋強縮だったら、天井まで飛びあがるよ」

（デリケートな診察法だ）ぼくは部屋の扉をばたんと閉めた。なんにも起こらない。ジュリユスは大理石製のままだ。

「それじゃあ、ぼくにもわからない」とプルダン先生は結論した。

（ぼくにもわからない」……正直な医者だ）

「ローラン、いっさい飲み喰いしないで、どのくらい体は持つものだろう？」

CamScannerでスキャン

「病気の性質にもよるけれど、ともかく数日も立てば、いろいろな部位がかなりなダメージを受けるよ」
ぼくがよく考える番だった。ぼくが思いついた話の内容は絶望的に単純なものだった。
「犬を助けたいんだ」
「できるかぎりのことはするよ、バン」

コーヒーを一杯淹れる。飲みほすと、頭蓋骨の内側を滴りおちるコーヒーかすの様子が目に浮かぶ。その茶色の流れの屈曲に、ぼくはジュリュスの運命を読みとろうとした。だが、ぼくはテレーズではないし、星もぼくの友だちではなく、コーヒーかすは、ぼくの憂鬱の黒いジェラニウムを育てる肥料にしかならない。その憂鬱がかえって、サンクレールの浮かべた晴れやかな微笑みを思いださせ、さらに、白い歯を見せる彼の自信を打ち砕いてやるというぼく自身の決意を思いださせた。

そうだ、この決意に関しては、なすべきことがある。その点では、ぼくはジュリュスに似ている。人生のなかで様ざまな場所から追いたてられはしたが、自分の望まぬ場所に押しこめられたことは一度もないのだ。だから、サンクレールの相手になってやる。ぼくをデパートからお払い箱にさせてやるのだ。そうとも、ぼくを放り出させてやる！（これで、ぼくが「やさしく」してやらない奴がひとり出たことになる）。その目的に集中すれば、ほかのことを考えなくても済むだろう。ズボンに片方の脚を通しているときに、アイディアが芽を吹きはじめた。もう片方の脚を通しているとき、アイディアはさらに明確になっていった。シャツのボタンをはめていると、これは世紀のアイディアだという気がしてきた。そして、靴の紐を結んでいるときになって、あまりに嬉しいので、ぼくの助けを借りなくてもこの靴が

CamScannerでスキャン

天才的な計画を実現してくれそうに思えてきた。ぼくは洗濯機の渦のように階段を駆けおり、竜巻のように子供たちの部屋へ行き、クララの撮った写真を何枚か借り、外に出て、地下鉄に潜りこんだ。まったくもって冬らしい二月であり、まったくもって陰鬱な乗客たちだった。ホメイニが赤ん坊たちを最前線に送りこみ、赤軍がアフガニスタンの弟たちを最後の一人まで守ろうとし、ポーランドが突如ユダヤ人を迫害し、木偶の坊のピノチェト（ピノチェキオ？）が人を殺し、レーガンが過剰通貨を吸いあげ、右翼がそれは左翼だといい、左翼は恐慌だといい、酔っぱらいが複数の証拠の裏づけをもってそれは糞だと断定し、キャロリーヌは妊娠していると認めたがらず、共産党書記長は探知用風船に息を吹きこんでアルコールテストを受ける。だが、ぼく、このぼく、ユビュ王、「生ける城塞」は、あまりに面白がりすぎて、駅が通過するのが見えず、月ごとに発行されてはツキを呼ぶ『アクチュエル』誌の編集部からどんどん遠ざかってゆくのだった。

だが、雑誌社の前まで来たとき、ぼくの創造的熱病はゼロに落ちこんでいた。というのは、ジュリア叔母さんの名前を知らなかったからだ。だからといって、彼女の容姿を説明しようとすれば、編集者全員を勃起させることになりかねない。「ぼくは気が小さい」と考えながら、雑誌社のある一角をひとまわりし、歩道の縁にすぐにそれとわかるはずの物体を探した。見つかった。ジュリア叔母さんのレモン・イエローの4（カトル）シュヴォーが荷物搬入用のエリアに止めてあり、時代もののフロントガラスに駐車違反の紙が二枚貼られている。アラブ人嫌いの小さな食料品屋の親父が警官を呼ぶぞと怒っている。ぼくはむしろ『アクチュエル』に勤める金持の不良どもに電話したほうがいいよといい、ひどくいやらしい目配せをして、車の持主の「姐ちゃんのナイスバディがすっ飛んでくる」（原文のまま）のを見て、けっして失望はしないだろうと教えてやった。それから、ぼくは車のドアを開けて、中に入り、待つ。ほ

どのこともなかった。一分もしないうちにジュリア叔母さんが到着した。寒かったが、彼女は体の線の完全に見える服装だった。食料品屋は木枠箱をしっかりとつかんで、大口を開けて待ちかまえていたが、罵りの言葉は喉もとで凍りついた。ジュリア叔母さんは運転席に飛びのり、ぼくのほうを見もしないで、いった。

「消えて」

「着いたばかりなんだ」

彼女は乱暴に車を発進させながら、あなたはとんでもない悪党だと断言し、雑誌社に警官たちがやって来て、爆弾について間抜けな質問をし、二百万人の失業者を抱える国で、自分はちゃんとサラリーをもらい（「いわせていただくならば」と刑事はつけ加えたらしいが）しこたまお宝を稼ぎまくるご身分でありながら、セーターを万引きするなんて恥ずかしくないのか、と尋ねたという。彼女の同僚は死ぬほど笑い転げ、彼女は怒り狂って、ぼくの金玉をシュレッダーにかけてやろうと固く心に誓った。彼女は突然マカロニ野郎通り（ブールヴァール・デ・リタル）のまん中で急ブレーキをかけ、クラクションの一大コンサートのなかでぼくのほうを振りむいた。

「マロセーヌ（彼女は確かにぼくの名前を覚えていた）、あなたって本当にいったい全体どういう人なの？　わたしをデパートのイヌから救ってくれたけれど、わたしの上に乗って一発もやらないで、それから、わたしをサツに引き渡す。ねえ、どういう人なの？」

（ぼくは友人のカズヌーヴのことを思いだしたが、そのことは口に出さなかった）

「それよりもっと悪い奴だよ、ジュリア叔母さん」

「ジュリア叔母さんなんて呼ばないで。車から降りてよ」

CamScannerでスキャン

「ひとつ提案をしてからね」
「だめだめ、あなたのことはよくわかったんだから!」
「記事を書けるネタがあるんだ」
「デパートの爆弾事件の記事?　うちの社には毎日あなたのデパートの人間が五十人もやって来ては、事件の秘密を教えるっていうのよ。『パリ・マッチ』かなんかと間違えてるんじゃないの?」
四方八方からクラクションの嵐。ジュリアはクラッチをつなぎ、ひとりの警官のコート＝デュ＝ローヌみたいな赤い鼻先をつむじ風のように通り過ぎた。警官は紫色の唇を舐めながら、ジュリアの車のナンバーを書きとめた。
「爆弾とはなんの関係もない。五分だけ聞いてほしいんだ。それで興味が湧かなかったら、君の心ときめく生涯の終わりまで、二度とぼくの噂を聞くことはないだろう」
「二分だけよ!」
二分で行こうじゃないか。それだけあれば、デパートでのぼくの役割を説明し、それについて、彼女の働く有名な月刊誌上において、素晴らしい写真つきのルポルタージュができるとわからせるのは難しくない。ぼくの話を聞くうちに彼女は車のスピードを落とし、広い横断歩道に車を乗りいれ、完全な違法状態で駐車した。
それから、ゆっくりとぼくのほうに体を向けた。
「スケープゴート、いけにえの山羊ね?」
彼女の声にはあのサヴァンナの唸り声がふたたび戻り、ぼくは思わず笑みをもらした。
「そう、それがぼくの仕事なんだ」

「でも、それは仕事なんかじゃないわ。ええ、マロ！（ぼくはマロと呼ばれるたびにいつでもぞっとする）神話の真の一断面よ！　すべての文明の根底を築く神話！　そのことがわかってるの？」

（まあ、それはまた別の話だが、ジュリア叔母さんの情熱には火がついてしまった）

「たとえばユダヤ教とか、そのクリーンな弟分！ともいうべきキリスト教だけを考えてみても、崇高なパラノ神エホバがどうやってその数限りない創造物を動かしていたか、マロ、考えたことがある？　あのばかげた聖書のばかげた一ページ一ページにいけにえの山羊を指名することによって、そうしていたのよ、ぼうや！」

（いまやぼくは彼女のぼうやだ。どう思う、サンクレール？　これほどの情熱があれば立派な記事が書けるんじゃないか？）

「で、カトリックもプロテスタントも、どうやって勢力を拡大し、金蔵をいっぱいにしてきたと思う？　山羊を指名することによって。いつでも、いつでもよ！」

（誓っていうが、この女性は、生活のすべての顕微鏡的に微細な側面について、宇宙的規模の理論をもっているにちがいない）

「じゃあ、見せしめの裁判に精を出すお向かいのスターリン主義者は？　それから、なにも信じていないと信じているわたしたち自身はどう？　自分たちが糞じゃないと思いこむことに成功したと思ってる？　隣の家の山羊の臭いをこそこそ嗅ぎまわってるのによ、マロ（またマロだ！）隣の人がいないときは、自分を真二つに切って、その半分をポータブルの山羊に仕立てるの。その山羊が自分の代わりにくさい臭いを出してくれるってわけ！」

ぼくは彼女の熱狂ぶりに感嘆し、彼女がぼくをマロと呼ぶことはあえて大目に見た。これこそ、ぼく

たちが出会った夜のジュリア叔母さんだ。目とたてがみが燃えあがっている。だが、ぼくの前回の行状を考慮して、いまは自制した。ただこう尋ねた。

「それで、ルポルタージュのほうは、やってくれる？」

「やってくれるですって？　これまでで最高の追っかけでもこんなに興奮することはなかったわ！　会社とその山羊、すごいわ！」

（聞いたか、サンクレール？）

結構、彼女はやってくれる。微妙な匙加減が必要なのはここからだ。そこで、微妙な匙加減でつぶやいた。

「ひとつ条件があるんだ」

彼女は前言をひるがえした。

「このテーマは好きだけれど、条件は好きじゃないの。条件を受けいれるくらいなら、『フィガロ』で働いてるわ」

「カメラマンを決めたいんだよ」

「カメラマンってだれ？」

「女性なんだ。この写真を撮った人物」

あの大騒ぎの夜、クララがぼくたち二人を写した写真を見せた。テレーズがジュリア叔母さんの乳房の巨大さについて質問したときの写真だ。ジュリアの顔には呆れた怒りの表情がくっきりと浮かんでいる。ぼくはといえば、完全に萎えて縮みあがっていた。

CamScannerでスキャン

18

ジュリア叔母さんは写真が気に入った。ネガをおまけにして、その写真を彼女に渡す。それから、ブローニュの森の写真を見せた。ブラジルの女装した男たちにヴァタパを給仕するテオ、夜の闇にきらめくスパンコールで飾られた裸身が、皿から立ちのぼる湯気の切れ目をとおして見えている。その顎の張った顔が浮かべる喜びは、つねに異性愛者の快楽を半歩上まわっている。

「どうやって仕事中のおかまの写真なんか撮れたの」とジュリアは尋ねる。「ほとんど全員非合法労働者でしょ」

「彼女は被写体から愛される術を知ってるんだ。一種の天使だね、ジュリア」

いまぼくたちはパリの街中を、ボース平原の中心を行くがごとく、心穏やかに走っていた。ジュリアはぼくにすべてを話してくれという。ぼく自身のこと、デパートのこと、ぼくの家族のこと。そして、ぼくはほんとうにすべてを話した。彼女が食事代を経費で落とすレストランに入ってからも、話しつづけた。いつでもここ以外に興味のある母親、すべてを超越しているテレーズ、ちびと、ちびの人喰いサンタ、ジェレミー、いまぼくが抱えているすべて、商品社会の原罪をこの身に引き受けながらぼくが養

CamScannerでスキャン

っているこの小さな世界。そして、この世で唯一の愛の結晶を放棄するか否か、と自問するルーナに話がおよんだとき、ジュリア叔母さんはその長い褐色の手をぼくの手に巻きつけた。

「堕ろすかどうかの話だったら、今日の午後わたしと一緒に来ない？　その問題について記事を書かなくちゃいけないの」

ジュリア叔母さんがプレスカードを見せて入った会議場は、広さにおいてエリゼ宮に匹敵し、金ぴか趣味においてパリのリヨン駅のレストラン、トラン・ブルーを思わせた。幾世紀を経過し、外貨を巻きあげてきたその醜さ。会場はほとんど満員だった。高価な衣装の群れから皺ひとつない囁きが聞こえてくる。ぼくたちは聴衆をすり抜けて、演壇の両脇にある報道陣席までたどりついた。演壇は全体に重罪裁判所のような感じだ。じっさい、そこでは一種の裁判がおこなわれていた。堕胎施術をおこなう女の裁判だ。すくなくとも、赤いビロードを張った巨大なテーブルのうしろで演説をしている、つるつるの頭をした男はそう語っていた。その男のまえでは会場全体が、横では専門家たちが、また、メモ帳を取りだしたジュリア叔母さんも、男の言葉に耳を傾けている。ぼくは、完全に毛のないこの大きな顔、尖った耳、ムッソリーニ風の目つき、叩いても壊れそうにない六十代の男をどこで見たか、思いだそうとしていた。確かなことは、声には聞き覚えがないということだ。これほど冷たく金属的な器官によって、ぼくの鼓膜が震わされたことはこれまで一度もない。ジュリア叔母さんは、この男も、この声も知っている。たったいま手帳に——その火山のような気性にしては驚くほど整った字体で——「いつもと変わらぬレオナール教授」と書きこんだところだ。小学校の生徒みたいに生真面目に線を引き、「いつもと変わらぬアホ」とつけ加えた。ぼくは話を聞く気になった。

ぼくの理解が正しければ、問題のレオナール教授（なんの教授か？）は、「出産奨励・青少年保護連

卿」という組織の委員長で、選挙で一定程度の影響力を発揮するほど、この国においてかなり重要な地位を占める人物らしい。そして、まさにその事実がレオナールを駆りたてていた。

「率直に申しあげて、政治の話はしない約束ですし、あくまでも事実を知ることのみに話を限るつもりですが（このフレーズは前にどこかで聞いたことがないだろうか？）来るべき選挙の投票日において、われわれキリスト教徒、出産奨励主義者、要するにフランス人が、われわれの票をどのように用いるかということから、問題はおのずと明らかになるのであります」

（ああ、そういうことですか、やっぱり……）

「われわれの最も神聖な価値を蔑視して堕胎を合法化する者どもの陣営に付くというのでしょうか？」

この問いを発したときの教授の目には炎が燃えさかり、地獄から洩れる風で会場全体を焼きつくさんばかりの勢いだった。

「いいえ、私はそうは思いません」と、群衆心理をよく知るレオナールはぐっと声をひそめる。「そうは思わないのです」

（率直に申しあげて、ぼくもそうは思わない）ジュリア叔母さんの肩ごしに一瞥したが、彼女はあれからなにも書き足してはいない。ふたたび耳をオンにすると、砲弾頭はすでに、「寛容の水準をとっくに突破している」移民問題について論じはじめており、この災厄が引き起こした諸問題を列挙し、「治安」一般と、われわれの娘たちの安全については申すまでもなく、教育的視点とおなじく経済的視点からも、この問題は考慮される……」。

次の二つのうちのどちらかだろう。この男はアラブ人が嫌いなのか、もしくは、自分の娘を全然信用できないのだ。この二つのうちどちらであろうとも、アドゥシュはこの男の両手首を叩き折るはずだ。

CamScannerでスキャン

ぼくは気分を変えるために、聴衆に自由に視線をさまよわせた。こぎれいに着飾った人びとだ。古くさい政略結婚のしきたりの見返りとしてあたえられる富への屈従。大多数は女たちだった。男たちは経済運営に出かけているのだろう。そのとき、ぼくはなぜか知らないが、ローラン、ルーナ、そして、二人の出会いのことを考えた。彼女は十八歳で、地下鉄の階段を昇っているところだった。彼は二十三歳で、降りているところだった。彼女は夢物語にうつつを抜かすゾンビのひとりに棄てられたばかりで、彼は医師のインターン試験を受けに行こうとしていた。彼は彼女を見、彼女も彼を見た。パリ全体が動くのを止めた。彼は試験に行かず、それから一年間、彼らは寝室から出てこなかった。ぼくが食べ物と本を小さなかごに入れて届けていた（なぜなら、彼らだって食べる必要があったから。食欲はかなりあった。そして、彼らは星間飛行から帰還する合間に、読書をした。ときには、その最中にも、読書をした。別に不可能だというわけではないのだ）。さて、ここに集う奥様がた、あなたがたの五十カラットのご主人たちのうちで、だれがあなたがたのために、重大な試験や、丸一年間の勉強や、一年分の収入を犠牲にしてくれるでしょうか？　こんな風に「愛」のために。それから、「読書」のために。さて、いったいだれが？

落ち着けよ、マロセーヌ。役者の交替をしっかり見届けるんだ。禿のレオナールは椅子に戻り、次の教授に発言を譲ったところだ（お偉い教授がたの演説会なのだな、とぼくは理解した）。その教授が立ちあがると、ぼくは非常なショックを受けた。前の教授と正反対なのだ！　レオナールが良い体格で、色艶もよく、偉そうで、危険なのと同じくらい、フランケル教授と名乗った産科学者（実際、この分野でこの名前は聞いた覚えがある）は、臆病そうで、苦しげで、ひ弱だった。ごつごつした大きな骨格に皮ばかりが貼りつき、髪の毛は全方位的に展開し、子供のような目には大人の驚愕が宿り、まるでLS

CamScannerでスキャン

Dをやったフランケンシュタイン博士の脳から生まれた、あまりにも善良な、かなり大まかな生物のように見えた。この生物が無防備に飛びこんだ世界は、彼にとって災いの種でしかなかっただろう。

「私は政治の話はいたしますまい」と彼も断言した（だが、フランケルがいうと変に聞こえるのだ）。「聖書、および、教会の教父たちの教えに限定したいと思います……」

こうすれば、一行に要約できる話だが、彼はたっぷり十五分はしゃべり、その間に集会の参加者たちは眠ってしまった。なんでもありの世界だった。「幼な子らを私のもとに来させなさい。ラクダと富める者は針の穴を通る。幸いなるかな、単純な者。罪のない者に最初の石を投げるがよい」。とどめは聖トマスだったかだれかの次のフレーズだ。「生まれぬよりは、病み、かつ、奇形で生まれるほうがよい」。

そして事件が起こった。

新聞はそう報じるだろう。

ぼくは気がつかなかったが、二列目にいたブロンドの、古代バビロンでもかくやと思わせる巨大な毛皮を着こんだ背の高い娘が、亡霊のように立ちあがって、エルメスのバッグに手を差しいれ、なんとも名状しがたい血まみれの物体を取りだし、力いっぱい講演者に投げつけ、ぎざぎざした金切り声を挙げたのだ。

「よく見て、これが奇形だ。大ばか野郎！」

その物体は柔らかな音をさせて空を切りながら、聴衆の頭上を通過し、フランケルの胸に当たって潰れ、栄誉ある列席者たちに強烈な色の血をぶちまけた。フランケルはもはや苦痛を表わす姿ではなく、苦痛そのものと化していた。だが、レオナールは一声叫んで、野生の猫の機敏さを見せ、六十歳の体で演台を乗りこえ、狂ったまなざしで、爪を前に突きだし、娘のほうへ飛びかかろうとしていた。そして

彼が思いきり飛んだその一秒のあいだに、娘は自分の椅子に立ちあがり、コートの前を開いて、叫んだ。

「動くな、レオナール。一人じゃないのよ！」

レオナールはまさに空中で静止した。演壇上の人びとは、一斉に恐怖の叫びを放った。娘はたったいま、出産奨励主義者が夢にまで見た、妊娠した女性のもっとも壮麗な身体を露わにしたところだった。足の爪先から頭の天辺まで一糸まとわず、気球の女神のように丸まると、また満々とふくらみ、全地球的活力のなかに実りの豊かさを誇示していた。

ジュリア叔母さんは小学生のような筆跡で、このとき初めてレオナール教授は真の弁論術を教えられた、と書いていた。

それからしばらくして、ぼくは4(カトル)シュヴォーのなかで、フランケルの血塗られた苦痛を思いだし、あの娘は標的をまちがえたのではないかという意見を披露した。彼女が仔牛の肺臓を投げつけるべきだったのは、あのレオナール教授であり、あの男こそ、ほんとうに性悪な狼なのだと。ジュリアは静かに笑った。

「あなたがいかれたスケープゴートの仕事をしているのは、マゾだからだと思っていたのよ、マロセーヌ。でも違う。あなたは一種の聖人ね」

そうかもしれない。

聖人はアパートの入口で降ろされ、一階の通路をぶらつきはじめた。ある人物を探して。たったひとりの人物。だが絶対に見つけなければならない。緊急事態なのだ。夕方の七時。彼がまだ帰宅していないといいのだが。イエス様、彼を引き留めておいてください。神様、お願いです、一度も頼みごとなん

CamScannerでスキャン

かしたことはないじゃないですか。これまであなたが一度もぼくの名前を聞いたことがないとしたら、それはむしろ幸運だったといってもいいでしょう。だから、望みを叶えてください、畜生！　ありがたい！　見えたぞ。あいつの姿だ。シェトランド・コーナーの角を回っている。近くに客の姿はまったく見当たらない。完璧だ。足を速める。目を合わせる。

「やあ、カズヌーヴ！」

全体重を乗せて、みぞおちに本物のアッパーカットを喰らわせた（やり方は本で読んだ）。カズヌーヴは体を二つに折る。うまくうしろに飛びのいたので、彼が吐いたのは自分の靴の上で、ぼくの上ではなかった（聖人の困難な点は、二十四時間つねに聖人であり続けるわけにはいかないことだ）。

それから、ぼくは日曜大工の階に降りてゆき、毎夕のごとく、老人たちのポケットを探っているテオに会った。老人たちは一列に並んで静かに待っている。テオが老人たちの灰色の作業服から、日中彼らがくすねたものを抜きとっても、だれひとりとして文句はいわない。

「おや、パン。休みの日なのに働いてるの？　サンクレールはさぞかしご満悦でしょうよ！」

クララが森で撮った写真をプレゼントし、盗まれた商品を元の場所に戻すのを手伝う。

「信じられる？　作業服の両ポケットに除草剤を五キロも詰めて一日中持ち歩いてた小爺（おじい）がいるのよ！」

19

次の週にジュリア叔母さんとクララはいけにえの山羊（スケープゴート）に関するルポルタージュを開始した。ぼくはぼくで仕事に全力を尽くした。落胆の極み、泣き男、自殺寸前のぼろ雑巾。客はただひとりの例外もなく訴えを取り下げた。ぼくにいまにも小切手を切ってくれそうな客さえいたほどだ。彼らは正当なる怒りではち切れんばかりの状態で店にやって来て、彼らの人生がかつてどのようなものであったか、また、現在どのようなものであり、そして、今後どのようなものになるかを問わず、まさに今日、この世で最悪の人生を送る人間に出会ったという確信をもって店を後にする。不幸が人間を人間らしくする——現代風にアレンジしたホフマンの短篇みたいだ。そして、クララのカメラが、客たちがデパートに乗りこんでくる様子をあまさず捕捉する。彼らがレーマンのオフィスに向かってすっ飛んでゆくときの激怒の表情を捕え、オフィスに入ってからの彼らの変貌の全段階を凝視し、そこから出てくるときの初めとはうって変わった正統的な人間性の表情を記録し、さらに、一篇の笑劇が終わったとき、レーマンとぼくがまさに立派な悪党コンビとしてげらげら笑っている様子を写しとり、しかも、カメラがどこにあるか、ぼくにさえ気づかせないのだ！

ジュリア叔母さんは、最初の数日はぼくの仕事の実際を観察したが、まもなくぼくの妹の写真だけをもとにして仕事をするようになった。クララの写真のほうが現実そのものより雄弁な現実だったからだ。ネガが現像されるたびに、ジュリアは大量のノートを真黒にしていった。ジュリアがクララにかける言葉には、つねに母親の感動とプロの驚嘆が奇妙にいり混じっていた。ジュリアは、自分のもっとも高い野心が生みだしえた精神的な子供として、クララを娘同様に可愛がった。

夜になって、ぼくが子供たちにその日一日分の物語をあたえてやるあいだ、ノートの作成に励む人間は二人に増えた。言語捕獲用の機械に向かうテレーズと、小学生用の帳面に向かうジュリアだ。このときクララが家で撮った写真は、デパートでの写真に比べるといささか見劣りのするものだった。

「わたしって外向的なのよ、ジュリア叔母さん。もう写真は止めて、バンのお話を聞くことにするわ」

この間毎日、ジュリユスの体からは、管が生えていった。あるものは体に潜りこみ、あるものは体から出てきている。水分、血漿、ビタミン、牛血が入ってゆき、尿と排泄物が出てくる。約束どおり、ローランは最善を尽くしてくれた。だがジュリユスはそれに応えなかった。相変わらず形而上的な執拗さで舌を出し、唇が捲れあがって凶暴そうな牙が剝きだしになったままだった。ときには、夜になると、とくに満月の夜は、白い光が彼の細く曲がった脚の影を引きのばしてみせるので、黙示録に出てくる蜘蛛と同じ部屋にいるような感じさえ覚えた。

「どのくらい持つと思う？」

「ぜんぜんわからない」とローランは答える。「見たかぎりでは、これまでの記録を完全に塗りかえそうだな」

ときおり、力を失った毛の塊がぴくりと動いて、並んだ鞴をかたかたと揺らしたり、管に彼のような動きを伝えてその影が部屋の壁を走ったりした。というのも、床ずれを防ぐために、ジュリユスは褥瘡予防用療性マットレスに寝かされているからだ。

一日も早くジュリユスが帰ってくるのを見たがっている子供たちには、ジュリユスは治ったけれども、病院の院長がもうしばらく彼を手元に置いて、自分の飼犬に犬の生活の様ざまなコツを教えてもらいたがっているのだ、と説明した。扉を開けたら閉めること、良い犬とつきあい、悪い犬を警戒すること、学校に子供を迎えにゆき、雨の日には地下鉄で連れて帰ること、など。

ローランが帰ると、ルーナが家に残り、ぼくの法螺話を無邪気に驚いた表情で聞いてくれる。ぼくたちの共通のママンがよく顔に浮かべた、懐かしい表情だ。ぼくの話を聞いているのは、ルーナというより、彼女のウールの服の下で順調に育っている小さな間借人のほうだ。

仕事に関していうと、ぼくはふたたびサンクレールに呼びだされた。だが、今度は彼自身のオフィスにであり（「ウィスキーを一杯どうかね？」「葉巻は？」）、ぼくがまったく新たに仕事に見せている情熱を賞められた（自分以外の人からこんなに賞められたのは初めてだ）。彼は具体的に数字を挙げて、このわずか二週間でぼくがデパートのためにおこなった経費節減の実情を明らかにした。賞賛すべき成果である。

「だが、ひとつ気にかかることがあるのだよ、マロセーヌ君。これほどやり甲斐のない仕事をこれほど完璧になしとげるために、君はどんな秘密をもっているのかね。個人的な哲学でもあるとか？」

「給料ですよ、社長。高額所得の哲学です」

その微笑みにかぎりない気品をこめて、サンクレールはその場でぼくの給料を倍にしてくれた（いまに見ていてくださいよ、恩人殿）。
レーマンはぼくの見違えるように見事な共犯ぶりにショックを隠せない様子だった。なにしろ、彼が他人とコミュニケートしたのは生まれて初めてのことなのだ。レーマンからの夕食の招待や、その他の申し出を断るのは、ほんとうに大変だった。「ある店を知ってるんだ、いやまったく、おしゃぶりしてくれる女がいっぱいいてな、一度も見たことがないような女たちだぜ！」なるほど友だち、というわけだ。また、レーマンは、ぼくが暇なときにおしゃべりをしていたクララという女はいったい何者だと尋ねてきた。
「妹なんだ。デパートの店員になりたいっていうから、仕事を見せてやったのさ」
「おれにも彼女みたいな娘がいた。死んでしまったがね」
レーマンのなかでなにかが震えはじめた。彼は顔をそむけた（くそっ！　悪党は悪党のままでいてくれよ……）。
サンクレールともレーマンとも違うテオは、最初はなにもいわなかった。しかし、我慢しきれなくなって、ついにいった。
「そんなに頑張っちゃって、バン、いったいどうしたっていうの？　どんなどんでん返しを用意してくれてるのかしら？」
「ぼくが君に、どうしてスピード写真を撮るのか、なんて訊いたことがあるかい？」
「ないわよ。だけど訊かれたら答えるわよ、わたしだったらね！」
いちばん遠くからぼくを視界におさめながら、カズヌーヴは透明人間を装っていた。だが、ぼくは、

自分の企みに没頭すればするほど、カズヌーヴも自分の仕事を真剣に遂行しているのではないかと疑うのだった！

ルシフルは、まえまえから社員のあいだで囁かれていたことが明らかになったと考えている。

「お前は社長のイヌなんだな、マロセーヌ。いつもそう思っていたが、いまとなっては、はっきりと臭いでわかるよ」

先の市町議会選挙における彼の「党」の成功（可哀そうな六十都市）の秘密を説明する嗅覚の鋭さだ。だからといって、五月十七日に挙行されるデパート内部の労働総連合のデモ（ミサのセンスに通じた彼の党が催す二年に一度の儀式）についても、集団的習慣を尊重して、熱意あふれる準備はおさおさ怠りない。

「デモの邪魔をしようなんて思うんじゃないぞ、マロセーヌ！」

ほかになにかあっただろうか。ああ、そうだ！ 聾の発作がときどき起こった。焼けた針が二度も耳のなかに突っこまれ、その辺のエスカルゴみたいに空っぽにされてしまったのだ。そのときも、おなじ現象が起こっていた。デパートが深海のようにくっきりと見え、重い足を引きずりつつ自分の命を売る売り子たちが沈黙の微笑みを浮かべ、レジの計算機が動きを止め、ひそやかに神経発作が訪れ、みずから欲求不満を作りだした客たちがその欲求にあえぎながら、商品の洪水を前にして狂喜し、売上は売上に売上を重ね、あらゆる毛色の万引き犯、金持、貧乏人、若者、年寄り、雄、雌、さらには、テオの小爺たちが、テオに率いられていたるところで自主管理アリの熱狂的な生活を送っている。彼らのポケットの深みに埋めこまれるものの信じがたい量！ そして、店員たちの無感動なまなざしのもと、無の鉱

隣である日曜大工コーナーで、彼らが建築するものの凄さ！　ボルトとナットの大聖堂だ。嘲笑するところか、ぼくはボルトとナットの大聖堂を建築中の小爺たちのひとりに注目する。シャルトルを思わせるその建築。もちろん実物大というわけにはゆかないが、ほとんどそれに近い。ネジの溝切りが正確でないと、彼は規則正しい足どりで専門の売場に行き、必要なものをかっさらって、永遠に変わらぬ小さな歩幅で戻ってくる。まさに独力で城を築いた郵便配達夫シュヴァルだ。彼は階段の下に新たな中世の作業場を開設していた。客たちは買物に夢中で、そばに来ても小爺には気がつかない。買物を済ませた客は早く新製品を試してみたくて、さらに小爺には気づかない。小爺自身もどんな客にも気がつかない。日曜大工仕事の自閉状態は、男を平和にし、女を暇にする。

ある夜、癖の発作は、ストジルとチェスをやっている真最中にも起こった（サンクレールからチェスの許可証をもらったのだ！）。あらゆる戦線においてストジルが優勢に戦いを進めていたときのことだ。ぼくは一気に情勢をひっくり返し、すばやく彼を追いつめた。ストジルはチェス盤上をかすませる作戦に出たが、今回はまったく効を奏さなかった。粉砕だ！　圧倒的な勝利はこの繊細なゲームに野蛮な暴力的興奮をあたえたのだった。

CamScannerでスキャン

20

五月十七日はDデイ、つまり、集団的慣習を尊重するための二年ごとのデモの日で、テオはパールがかったアルパカのスーツを着ていた。ボタン穴に差す花には、黄色い斑の散った青いアイリスを選んでいた。だが、テオが着飾っていたのは、ルシフルの行列のためではない……。

ぼくはレーマンのオフィスでありったけのそら涙を流している最中だったが（ガス洩れする調理台のせいで、ある大家族の名が永遠に歴史に記録されかねないところだった）、テオはスピード写真のボックスのまえで、便所のまえで待っているときみたいに、ぴょんぴょん飛びはねていた。

客のカップルが目論見を完全に狂わされて、レーマンのオフィスから出てきたとき、灰色の作業服を着た小柄な老人と擦れちがったが、その老人はテオの肩を叩きにきたのだった。レーマンはその様子を軽蔑したように顎でぼくに示した。老人はテオにかなり複雑な赤胴色の金属の建造物を差しだす。テオはにべもなくそれを放りだした。老人はめそめそ泣きながら、隣の書籍売場に避難する。レーマンは面白がって笑っていたが、電話が鳴って、店内をめぐるデモ隊がまもなくこの階にやって来ると告げた。レーマンは口のなかで悪態を押し殺した。

CamScannerでスキャン

ぼくはオフィスを出た。
ぼくを見て、テオが叫ぶ。
「そのボックスのなかで、五分も前から、あのろくでなしが何をしてるのか、教えてちょうだいよ」
スピード写真のカーテンを閉めた向こう側の「ろくでなし」によく聞こえるようにぼくは答えた。
「テオ、君とおなじことだよ。化粧を直してるんだ」
「へええ、なにか直す必要があるなら、最初から直しておけばいいのに!」
その通りだ、テオ。テオはいつでも最初から準備ができている。彼はスピード写真を芸術の域にまで高めたのだ。それだけに、このマシンを卑俗なコピー機みたいに扱う客たちのうしろで待つのは、彼にとってどれほど耐えがたいことだろう。
さっきの小爺がまた同じことをする。そのまなざしはひどく哀れを誘う。だが、懇願するようにテオの腕にかかった手はひどく油で汚れている。
「お願いよ、パン。この油染みの山をなんとかして!」
ぼくが老人をやさしく書籍売場のほうに連れてゆくと、彼はぼくに、昔の武器を収載した豪華本の上にある当惑の対象を指差した。それは、ひどい悪性の腫瘍みたいなナット数本で土台にくっつけられた四本の銅の蛇口によるアッサンブラージュだった。
「こいつが動かないんだよ、マロセーヌさん」
その蛇口作品には、リリシズムが感じられた。だが、老人のほうは震えている。そのために、手がビスの溝のピッチを二、三目盛り狂わせたのだろう。そして、ビスの「摩擦緩和」のためにグリスを使いすぎたのだ。豪華本の表紙は、茶色の丸い染みで汚れている(写真を撮る前に武器の油をよく拭いてお

CamScannerでスキャン

くべきだった……）。今晩、テオがこっそりと死体を始末してくれるだろう——豪華本と蛇口を。さしあたっていまは、テオは手がふさがっている。ぼくはできるだけ穏やかに子供のような老人にそういい聞かせてから、書籍の責任者であるリソン氏を探して、本棚の迷路を突き進んだ。リソン氏も老人だ。すくなくとも、文学と同い年だろう。長身のよそよそしい感じの老人だが、ぼくが本の読み方を知っているというので、好意的に迎えてくれる。ぼくの長かった子供時代にしばしば夢想したお祖父さんの姿にそっくりなのだ。いた、リソン氏だ。彼は目をつぶっていてもぼくがなんの本を取りにきたのか、わかっている。ガッダ爺さんのポケットブックによる再版、『メルラーナ街の恐るべき混乱』。これ以上素晴らしい本は望めないので、ぼくは第一ページ目の甘美な喜びのなかに滑りこむ。

「ありとあらゆる暗黒事件が突発するたびにその場に忽然と現われる、人をして呆然たらしめる遍在ぶり。これ以降だれもが、本名フランチェスコ・イングラヴァッロたるこの人物を、ドン・チッチョと呼んだ。神のみぞ知る！〈自由〉遊撃官、捜査局で最も年若く、最も羨望される官吏の一人である」

だが、周囲のざわめきがこの至福からぼくを引きずりだした。

ルシフルが、地下の売場を手始めに、デモ隊を集めながら、各階を通りぬけ、多くの女子店員たちを取りこみ、高度を上げてきたのだ。デモの組織者たちは、侵すべからざるスローガンの調子にあわせて、笑いとおしゃべりにリズムをつけようとしている。良い子の集い、ボーイスカウト支配、儀式なのだ。パスティーユからレピュブリック広場に出てペール＝ラシェーズへの道を行くかわりに、地下のバス・トイレ・コーナーから出発し、ガラスの部屋に籠もって大量虐殺を夢見るレーマンの鼻先をかすめて、階上のペルシャ絨毯売場まで行進するのだ。驚いたのは、今回は、カズヌーヴがこの上昇する縦隊に加わっていることだ。いつもなら、無頼派ふうの嘲笑を浮かべながら、絶対にデモなどに加わらないのに。

CamScannerでスキャン

しかし、今日はカズヌーヴは参加している。ぼくの前を通りすぎるとき（ガッダには申し訳ないが、ばかなぼくは本からつい目を上げてしまった）、カズヌーヴは活動家意識による最大限の侮蔑をこめてぼくを見つめた。彼がぼくを正面から見たのは、ここ数週間で初めてのことだった。ルシフルはげらげら笑いながら、なぜぼくがデモに加わらないのかと尋ね、ルシフルの後に従う多くの女店員もおなじように大笑いした。人を裁く目つきをしながら笑っているのは奇妙なものだ。それは自己矛盾なのか？　それとも自分の気持をほかへそらせるためなのか？　またしても焼けるような剣が頭蓋を貫き、まるで耳が聞こえなくなった。しかし、すべては見えている。強圧的なまなざし、音のない笑い、ボタン穴に青いアイリスを差して遠くで行ったり来たりしているテオ、蛇口作品をいじくりまわしている小爺。ルシフルは、生涯座ったままのせいで腹の迫りだしたレジの女性をひとりデモに誘いこんだところだ。カズヌーヴは隣の女の胸元にたくみに体をかがめている。用心深い客は消えさり、スピード写真のボックスが爆発した。

爆発のせいで耳の栓が飛んだ。一秒の十分の一ですべての鋼板がばらばらになり、裂け目から煙が噴出し、布のカーテンが煽られてボックスのまわりを横殴りにし、一瞬開いたその扉から血が吹きだし、それから、すべてがもとに戻った。ボックスはそこにある。音を立てず、動かず、煙を吐きながら、立っている。ふたたび下に降りたカーテンの裾から脚が半分のぞいて、その先に足があった。もう片方の足は、ぴくりと動き、最後にひと震えして、死んだ。ひどく酸っぱい臭いがこの階の人びとの肺を包みこんでいる。デモ隊は、完全に混乱した暴徒と化し、本物のデモになった。テオはしばらくボックスのまえにたたずんでいたが、それから、なかに急いで入っていった。テオの体はカーテンで半分隠れている。そして、外に出てきたとき、ぼくは彼のまん前に駆けつけた。彼のアルパカのスーツ全体と、顔と

CamScannerでスキャン

手に、細かい血の染みが吹きつけられている。血の斑点は無数にあって、密集していたので、彼が裸ならば、恐ろしく赤い雀斑の多い皮膚だと思われたことだろう。ぼくがなにか尋ねようとするまえに、テオはぼくを引きとめる仕草をした。
「なかに入っちゃだめよ、バン。美しくないからね」
(ありがとう。ぼくの頭のなかを第三の死体の姿でいっぱいにしたくはなかったからね)
「だけど、君は? テオ、君は?」
「だいじょうぶ、彼よりは調子がいいみたい」
テオの上唇で血が滴になり、震え、黄色を散らした青いアイリスの花芯に落ちた。
「アイリスは肉食性の植物って感じ、いつもそう思ってたの」
ほんとうに仰天したのは、その続きだった。爆風で吹きとばされたかのように、いったんは散りぢりになったデモ隊が、集合的慣習のスローガンに安全のスローガンを加えて、上の階でふたたび集結したのだ。今度の爆弾が前の二発より小規模だったからだろうか? 人間はどんなことにも慣れるからだろうか? パニックを起こしそうだった客の群れも、その手前で留まっていた。デパートも閉店しなかった。爆発のあった階のみがその日だけ閉鎖された。
テオは救急隊員に連れてゆかれた。今晩テオの家に行って、異状がなかったかどうか確認することにしよう。
みんなが爆弾のことを話していた。
しだいに話をしなくなった。
あの臭いが空中を漂うだけになったが、客の動員数は二倍になった。

CamScannerでスキャン

その日の午後、ぼくはまたしても二、三度レーマンのところに呼ばれた。彼はミス・ハミルトンのブースに引越していた。ミス・ハミルトンは、その微笑ましい目つきから判断するに、ついに、ぼくの仕事の本質と、ぼくがそこに注ぎこんでいるヒロイズムについて理解したらしい。また、ぼくにたいするサンクレールの高い評価と、ぼくの日々のパン代が二倍に引きあげられた事実も知っていた。

遅すぎた、愛しき女よ。ぼくの正体がおぼろげなときに、ぼくを愛するべきだったのだ。でも、まあ場合によっては、ぼくの同意を得ることができれば……。

そして、外線電話が入った。適当な電話ブースに潜りこみ（だが、こんなときにブースに籠もるのは、いささか用心深さに欠けるのではないだろうか？）、返事をした。

「もしもし」

「パン？」

（クララ！　クララ！　ぼくのクラリネット！　なぜぼくはこんなに君の声が好きなんだろう。君のこんなに穏やかで可愛い声のなかで体を丸くしているのが好きなんだろう。完全無欠。君の正確な言葉が転がってくる柔らかいビリヤードのマット……そのくらいにしろ、バンジャマン。近親相姦は不謹慎、そう、考えたくもないことだ！　それに、ビリヤードのマットの上で体を丸くするっていうのもなあ……）

「心配しないで、ぼくは大丈夫だ。今度のは、とても小さな爆弾だったんだ。ぼくは防護服を着ているし、それを着ないでうろうろ歩きまわったり絶対にしないし、ね、わかってるだろ、家に帰って、こ

の腕に君を抱きしめるときにしか脱がないよ。全然大したことのないボヤみたいな爆弾だったんだ、ほんとに！」
「爆弾ってなに？」
沈黙（爆弾のせいで電話してきたんじゃないのか？　ま、いいや）。
「パン、良い知らせがあるの」
「ママンが電話してきた？」
「ちがうの。ママンは爆弾騒ぎには慣れちゃったと思うわ」
「ジュリア叔母さんの記事の仕事が終わったの？」
「ちがうったら！　あれはもうちょっと時間がかかるわよ」
「今週はジェレミーが居残りをさせられなかった？」
「させられたわ。土曜日に四時間も。音楽の時間に大騒ぎをして」
「テレーズが合理主義者に改宗した？」
「わたしのところからトランプを持っていったばかり」
「そのトランプ占いで、君がバカロレアの国語の試験で及第点を取ると出た？」
「トランプ占いには、わたしが兄さんに恋をしてるけれど『アクチュエル』のジャーナリストがライバルだから気をつけなさいって出たわ」
「ちびがもう人喰いサンタの夢を見ない？」
「彼は、わたしのロベール事典でゴヤの絵の複製を見つけたの。《わが子を喰らうサトゥルヌス》よ。すごく気に入ってるわ」

「ルーナの子供は想像妊娠だった？」
「超音波エコーの検査を受けてきたところよ」
「男？　女？」
「双子」
沈黙。
「クララ、それが良い知らせ？」
「ジュリユスが治ったのよ、パン」
ジュリユスが治った？　ジュリユスが治った！　まさか、ジュリユスが治ったなんて？　治ったのか！　ジュリユス！　そうとも、ジュリユスが治ったんだ！　今朝、ジュリユスはうちの建物の六階から降りてこようとして、そのときある事件を引き起こしていた。彼は自分のうしろに大量の医薬品の壜類を引きずってきたのだ。それが階段の一段ごとにつぎつぎに砕け、また、排泄物をためる袋が破れて、当然なかから溢れるべきものが溢れたため、透明な管を何本も下げたジュリユスの姿は、クラゲの攻撃から逃れようとする狂った猪のようになっていた。建物中がパニックだった。住人はみんな鍵をしっかりと締めて部屋に閉じこもり、ジュリユスの千変万化の悪臭が階段の上から下まで十二分に充満したのだった。
「お風呂に入れてやったほうがいいかしら、それとも、まだちょっと早すぎるかしら」
「遅すぎだよ、クララ。風呂に入れるのが遅すぎた。で、その続きは？」
「続きはないわ。治ったの、それだけ。ちょっと長い散歩をして帰ってきたときくらい、飲んで、食べて、いつも通りの時間に、ちびのベッドで寝ちゃったわ」

「ローランに来てもらった？」
「ええ」
「なんていってた？」
「ジュリユスが治ったたって」
「後遺症もなし？」
「なし。ああ、ひとつだけ。つまらないことだけれど」
「なに？」
「みんなをばかにしたみたいに舌を出したままなの」

CamScannerでスキャン

21

そして、再戦。横っ腹にもろに一撃喰らった。息つく暇もなく、次の攻撃が今度は真正面から額を襲い、ぼくは地面に転がった。背を丸め、体の重心をぎりぎりまで下げて、雨霰と降り注ぐものに耐え、すべてが過ぎ去るのを待つしかない。だが、心の底では、これがけっして過ぎ去らないことも知っている。じっさい過ぎ去らない。しかし、これはチェスのゲームではない。

チェスのゲームなんかじゃないんだ、ちくしょう！

この無言の叫喚がぼくの体を垂直に突きあげる。ぼくを地面に押さえこんでいた人物が歩道に転がり、驚きの叫びを挙げる。つづいて、ぼくの前に仁王立ちになり、ぼくの脇腹に新たに蹴りを加えようとする、カズヌーヴのかなりはっきりした姿。その忌々しい開脚部にぼくの足が炸裂して、南半球全体を目覚めさせるような狂人の叫び声を引き起こす。カズヌーヴが消える。すると、項(うなじ)に一撃が下され、ぼくは腕を開いてまえへ突んのめり、お辞儀するような格好で、反動をつけて飛びだしてきたもうひとりの人間に抱きつく。ふたたび、歩道。だが、今度の落下は、下にもうひとりの人間の体が入って和らげられる。ぼくはこの人間の顔、脇腹、胃を盲めっぽうに殴りつけ、殴られたほうは、助けて、と叫ぶ。く

そ、その声の主は、くそったれ、女だ！　驚きでぼくは頭を上げ、それはちょうどぼくの口を直撃しようとする足の行方を見定めるような格好になった。蹴られて、地獄に転がりこむと、今夜の悪魔はとんでもない棍棒で武装していた。まず、ぼくの肩を一発殴り、二発目は失敗した。というのも、ぼくが両足を鋏のように激しく上下させながら、相手をできるだけ遠くになぎ倒そうと、背中を地面につけたまま頭を中心にして円を描くように体を回転させたからだ。

　脛(けい)骨が叫び声をあげ、なにかがどさりと倒れるくぐもった音が聞こえ、きゃあきゃあ騒ぐ声がして、あらたに悪魔の棍棒が振りおろされ、今回はあやまたずぼくを捕え、哀れな頭蓋骨が爆発し、さよなら人生、さよなら光、さよなら暗闇、このとんでもなくくそったれな暗闇にさえ、さようなら……。

「ありとあらゆる暗黒事件が突発するたびにその場に忽然と現われる、人をして呆然たらしめる遍在ぶり……」

　天国か、地獄か、虚無か。カルロ・エミリオ・ガッダにでも訊いてくれ。虚無でも、天国でも、地獄でも、勝手にしやがれ！

「エリザベート、もうちょっとコーヒーをくれないか」

　そうか、メルラーナ街の歩道で勤務中のイングラヴァッロ警視（だが、いったいなぜドン・チッチョなんて呼ばれるんだ？）には、エスプレッソが一杯必要なのだろう。

「記憶はゆっくりと戻ってくると思いますよ」

　ああ！　ゆっくりと、お願いします。ゆっくりと戻ってくるように、可能なかぎりゆっくりと。たったいま「苦痛」の本質を知ったばかりなのだから。カルロ、ぼくを見棄てないでくれ、記憶をさかのぼ

CamScannerでスキャン

りたくなんかない。カルロ・エミリオ、君から離れないぞ！
「彼はなんていったんですか？」
「カルロ・エミリオ・ガッダとかいう人物から離れたくない、といったんだ。じつをいうと、わたしはその人物を知っている」
「イタリア人ですの？」
「イタリア人のなかでいちばんイタリア人らしい人物だよ、エリザベート。ゆっくりとコーヒーを飲ませてやってくれ。気管に詰まらせないように」
イングラヴァッロ警視の舌鋒は相変わらずハードボイルドだが、その舌は心静かにカプチーノのなかでたゆたうている……。
「そう、ガッダの舌は多言語を操った。わが国の文学に彼に当たる作家がいないのは惜しむべきことだ」
ガッダを子供たちに読んでやらなくちゃ、なんにもわからないかもしれないけれど。クララのバカロレアの試験準備も手伝ってやらなくちゃ——むろん人生は別だ、人生の準備は自分でするほかない——だがまずバカロレアだ。
「やっと目が覚めたようだ。手伝ってくれたまえ。まず彼をまっすぐに座らせなくちゃ」
苦痛で折り畳まれたアコーデオンをどうやってまっすぐに座らせるっていうんだ？
病気のジュリユスでさえ一個の体でできているのに、いまのぼくの体は八万個にもばらばらにされている！　どうやってばらばらの八万個をまっすぐに座らせられる？
「ゆっくりとだ、エリザベート。じゃ、もうひとつクッションをとってくれたまえ……」

でも、ジュリユスは治ったんだっけ？　**ジュリユスは治ったんだ！**

「そのジュリユスってのはだれですか、マロセーヌさん。ガッダは知ってるんですが、ジュリユスはちょっと……」

いつものように微笑むクードリエ警視長の質問が答えを呼びさまし、その答えはすぐさま彼のノートに吸いこまれる。

「ぼくの犬です。病気が治ったんです」

このレカミエ夫人風の長椅子は、世界一安楽な担架とはいいがたい。

「さあ、もうちょっとコーヒーをお飲みなさい。医学のことはなんにも知りませんが、エリザベートのコーヒーには絶対の信頼を置いています。エリザベート、頼むよ、手伝ってあげてくれ」

そう、手伝ってあげてくれ、エリザベート。骨の上にじかに座ってる感じなんだ。

「はいどうぞ」

（いたたたた……）

「なぜレカミエ夫人風の椅子はこんなに硬いんです？」

「征服者が柔らかいソファなんかで寝ていると、領土を失くしてしまうからですよ、マロセーヌさん」

「領土なんかにこだわっていると、時間という安楽なソファを失くしてしまうわけですね……」

「具合が良くなったみたいですね」

ぼくは枕元に座るクードリエ警視長のほうに顔を向け、それから、コーヒーカップ（金線が縁を囲み、堂々たるNのイニシャル付き）を手にぼくの上にかがみこんでいるエリザベートのほうに顔をもち上げ、

自分の足を見るために顔を下に向けた。頭が上、下に動く。具合が良くなったのだ。
「話しあうこともできるでしょう」
話しあいましょう。
「どんなことが起こったか、ちょっとでも覚えていますか」
「デパートがぼくの上に倒れてきました」
「どうしてだと思いますか」
どうして？　カズヌーヴの不当な恨み？　だが彼はひとりではなかった。すくなくとも女がひとり仲間にいた（ぼくがめちゃくちゃに殴ってやった女だ、まったく！）。でも、どうして？　ぼくがデモに参加しなかったから？　いやちがう、ぼくたちは反米でも反ソでもない。だから、ぼくがデモに参加しなかったのも、たまたまそうだったにすぎない。それでは、どうしてあの連中はぼくを襲ったのだろうか？
「わかりません」
「わたしはわかりますよ」
クードリエ警視長は、部屋の緑の光線のなかに立ちあがった。
「助かったよ、エリザベート」
助けたエリザベートは扉を閉めて出てゆく。コーヒーはもうない。本棚の前に立ち、クードリエ警視長は暗誦した。
「ありとあらゆる暗黒事件が突発するたびにその場に忽然と現われる、人をして呆然たらしめる遍在ぶり……」

「ガッダ」
「ガッダとアナタです、マロセーヌさん。最初の爆発が起こったときも、二番目の爆発が起こったときも、三番目の爆発が起こったときも、あなたはそこにいた。きっとそれだけで騒ぎたてる連中がいくらでもいますよ」
そのとおり。だが、忘れもしない、三度ともカズヌーヴもその場にいたのだ。いうべきか、いわざるべきか？　カズヌーヴには悪いが、いう。
「確かに」と警視長は答える。「だが、彼はレオナール教授の講演会には行かなかった」
砲弾頭(あたま)の？　だが、砲弾頭となんの関係があるんだ。彼がどうして？
「今度の被害者なんですよ」
ああ！　なるほど。
「あの講演会であなたはなにをしていたんですか」
カズヌーヴを巻きこむのは構わないが、ジュリア叔母さんはまずい（それに、講演会でぼくを見た人間がいるのなら、当然彼女と一緒のところも見ているはずだ）。
「ぼくには妊娠した妹がいまして、彼女から頼まれて……」
「わかります」
わかるが、納得はしない。また、その答えでは不十分だ。ぼくは体が動くか試そうとして、座る姿勢を変えてみた。うわっ！　ジュリユスが硬直状態に陥ったときみたいに硬い（ジュリユスのほうは治ったのに！）。
「肋骨に二個所ひびが入っているので、包帯で固定してあります」

CamScannerでスキャン

「頭は？」
「ぼこぼこ。でも、それだけです」
(それだけ、ね)
警視長はオフィスを一回りし、椅子に座り、電灯に灯をつけた。ぼくは目が眩み、しかめ面をしたので、警視長は光量を落とした。ぼくの見るかぎり、この部屋で現代性と妥協しているのは、電話と、この可変式の電灯だけだった。彼は耳のうしろを、ついで、鼻の脇をかるく掻き、最後に、指を体の前で組みあわせて、いった。
「あなたのお仕事は一風変わったものです、マロセーヌさん。トラブルが起こるのは時間の問題だったと思います」
(おや、サンクレールがぼくに説明したこととはまったく逆だ。ということは、クードリエはちゃんと理解していたのだ、ぼくのスケープゴートの話を！)
つぎに来たのは、もっとも驚くべき質問だった。被告人、ぼくが被告人だとしての話だが、その被告人にたいして、かつて刑事の口から一度たりとも洩れたためしのない質問だ。
「爆弾を破裂させているのはあなたですか、マロセーヌさん」
「いいえ」
「だれが犯人か知っていますか」
「いいえ」
警視長はふたたび鼻を掻き、ふたたび指を組みあわせ、二度目の驚きを投下した。
「わたしの個人的な結論をあなたに伝えるべきではないのでしょうが、わたしはあなたを信じている

のです」
（こちとらには有りがてえ話だ）
「しかし、あなたの仕事場では、かなりの数の同僚があなたを犯人だと考えている」
「そのなかに、今晩ぼくを襲った連中がいると？」
「とりわけその可能性が高い」
警視長の眉毛の動きから、さらに説明を続ける気だなとわかった。
「いいですか、スケープゴートは、なにか失敗が起こった場合に他の人間の責任を引き受けるだけではない。それはとりわけ、なによりもまず、『説明原則』なのですよ、マロセーヌさん」
（ぼくが「説明原則」？）
「すべての説明不可能な出来事を説明する、謎の、だが異論の余地のない原因です」
（いけにえの羊であるうえに、「異論の余地のない原因」でもあるわけか！）
「中世のペストが大流行したときにユダヤ人が大量に虐殺されたのもこれで説明がつきます」
（でも、もう中世じゃないでしょう？）
「あなたの同僚の一部にとって、彼らには原因が必要だという唯一の理由から、必然的にスケープゴートであるあなたが爆弾犯人になるわけです。それで彼らは安心するのです」
（ぼくはしない）
「彼らにはなんら証拠は要りません。そうだと確信するだけで充分なのです。わたしが事態を打開しないかぎり、彼らはまたやるでしょう」
（打開してください！）

「結構、別の話をしましょう」

ぼくたちは別の話をした。ぼくの話を。あらゆる角度から。なぜぼくはもっと普通に自分の法学士の証書を活用しなかったのか？（警視長は、ぼくがこの紙切れの名誉ある所有者であることを知りえた世にも稀な人間たちのひとりだ）なぜ？　ええと、あまりよくわからない。もしかしたら、当時よくいわれていたように、「体制への順応」が確定するのを恐れる若者の心理？　だがぼくはまったくその種の法螺話を信じたことはなかった。要するに、よくある話だ。

「どこかの組織の活動家になったことは一度もなかったんですか」

どこかのも、ちゃんとしたところのも、一度も。ぼくに友だちがいたころは、ぼくの代わりに友だちが活動家になって、友情を連帯感に、フリッパーをビラの印刷機に、楽しいパーティを二十四時間体制の連絡事務所に、月の光を舗石の炸裂に、ガッダをグラムシに替えて頑張っていた。それに、いずれにしても、ぼくはそのころから家出中の母親を抱え、家にはちびたちがいて、ルーナは覚えたての恋愛沙汰を繰り返し、テレーズは夜ごとベルヴィル中の目を覚まさせるような悪夢に襲われ、クララは三百メートル先の幼稚園から帰ってくるのに二時間かかっていた。

（「見てるの、バン。見てると、面白いの」。ああ、そのころから）

「あなたのお父上は？」

ぼくの母の男のひとり。最初の。彼女は十四歳だった。顔を見たこともない。泣いてください、警視長。だが、警視長は泣いていない。彼は整頓し、分類している。だが、なにも聞きのがさないだろう。

それから、ジュリア叔母さんと、ぼくにとってジュリア叔母さんが「占めている位置」についての微妙な質問が来た。じっさい、彼女はどんな「位置を占めている」のか？　あの徹底した性的自己批判の

一件をのぞいて。それと、彼女が準備している記事をのぞいて――だが、記事の話に警視長は興味がないだろう。

「この質問に答えていただくには、まだちょっと時期が早すぎますか」

「いや、遅すぎたかも」

ここで彼は可変式の電灯の光量を一目盛あげて、たったいまその顔に浮かべた表情の真剣さをぼくにわからせようとした。

「あのご婦人には気をつけなさい、マロセーヌさん。なんらかの……（ちょっと考えて）……なんらかの関わりに巻きこまれて、後悔することのないように」

（黙っているからといって、納得したわけじゃない）

「ジャーナリストには、包み隠さぬ率直さというものにたいする抑えがたい欲望があり、そして、その結果がどうなるかを考えないのです。だが、われわれは、率直さとは、教育を通じて獲得されるものだということを知っている」

「われわれ？　どうして、わ、れ、わ、れ、なんですか」

（考えたこともなかった）

「あなたは一家の長でしょう？　したがって、教育者でしょう？　わたしもまたわたしなりのやり方で、そうなのです」

彼の結論がぼくに披露されるのは、これで二度目だ。まあいい、彼はぼくを爆弾犯人だとは考えていない。とはいえ、ぼくの行くところばかりで爆弾が破裂するのも事実だ。つまり、だれかがぼくに濡れ衣を着せようとしているということだ。だれが？　謎だ。それに、これはたんなる仮説にすぎない。そ

のうち、この仮説が正しいか正しくないか、わかる時が来るだろう。
「でも、いつ？」
「つぎの爆発が起こる時ですよ、マロセーヌさん」
なるほど。だが、つぎの爆発ですべてが吹きとんだとしたら？　ばか正直な疑問だ。ぼくが口に出した疑問だが。
「うちの鑑識はそう思ってはいません。わたしもね」

取調べは、クードリエ警視長のいくつかの忠告をもって終了した。忠告というより命令だ。体が元どおりくっつくまで、二、三日の休暇を取ってから、デパートに復帰すること。生活の順序や習慣をけっして変えないこと。尾行のプロが二人、朝から晩までぼくを監視しているから。ぼくに近づくものは全員かならずこの人間カメラによって写真に収められる。二人の刑事はいわば銃の照星であり、ぼくはその標的なのだ。以上。ぼくがこの条件を受けいれたかって？　なぜか知らないが、受けいれていた。
「結構、早速お宅までお供させましょう」
警視長は小さなボタンを押し（現代性への三つ目の妥協）、エリザベートに階下からカレッガ刑事（ああ、トルココーヒーの警官！）を呼ぶように命じた。
「マロセーヌさん、最後にひとつだけ。あなたを襲った連中についてです。仮にわたしの部下のひとりがあの場に来あわせなかったら、彼らはあなたを殺していたでしょう。訴えを起こしますか？　ここに彼らの名前のリストがあります」
デスクパッドの下から一枚の紙を出して、ぼくのほうに差しだした。その紙切れを読みたいという激

CamScannerでスキャン

しい欲求が渦を巻いた。あの畜生の群れを監獄にぶちこみたいという凶暴な欲望。だが、「悪魔よ、退け」ぼくのなかの半透明の天使が「否」と答えた。天使なんてばかなものだと独り言をいいながら。

「ご自由に。いずれにせよ、彼らは夜間騒音罪の責任を取らされることになるし、この事件の通知を受けたデパートの経営者に呼びだされるでしょう」

そう聞いても肋骨の調子は良くならなかった。

CamScannerでスキャン

22

パリは眠りにつき、カレッガ刑事は世界中の警官がタイプライターを叩く調子で車を運転する。二本指だ。そして、いつものように毛皮の襟つきジャンパーにくるまって冬ごもりしている。ぼくは、できればテオの家のほうに方向を変えてはもらえないだろうかと尋ねてみる。急ターン。

普段なら友人のアパルトマンの階段を四段飛ばしで上がれるのだが、この分では、四分の一段ずつよじ登ることになりそうだ。踊り場に出るたびに、一休み。ついに彼の住居にたどり着いたとき、家事用のエプロンを着て、そこに四本のひな菊のブーケを飾ったテオの小さな写真が扉にピンで留めてあった。わかった。テオは家にいない。ぼくの家にいるのだ。不安になった子供たちが彼に電話したにちがいない。そして、彼は婆やさんごっこをやりに行ったのだ。

車に戻ると、カレッガ刑事はいまにも署に引き返そうとしていた。長く待たせた埋めあわせのため、ぼくの家から五十メートルほど離れたロケット通りとフォリー＝レニョー通りの交差点で降ろしてもらった。こうすれば、一度大通りまで出て、迂回してくる手間が省けるからだ。どうも悪いですね、今晩は当直なもので、急いでいるんですよ。ぼくは車から体を抜き出し、子供たちのほうへと骨を引きずる。

子供たち……ぼくの子供たち。心がちょっとざわめき、奇妙なことに、レオナール教授のことを思い浮かべた。出産奨励主義者のレオはぼくの仕事場に来て、あんなふうに痛めつけられたのだ！　だが、彼はデパート通いをするような顔ではない。スピード写真遊びはさらにしないだろう。レオナール教授は全面的に手作り派なのだ。どう低く見積もっても、彼の着ているものは二、三万フランはする。彼の左足の靴と右足の靴はおなじ職人が作ったものではないだろう。そう、彼のようなタイプの人間はデパートなんかには来ない。どちらか片方で、ひとりの職人が生涯かけなければできないような仕上がりだ。それはそうしたいという激烈な感情に突き動かされたからにちがいない。ある日彼が地下鉄に乗ったとすれば、最近娘のために開いたお見合いパーティの余興で、罰ゲームを課され、その義務の遂行に赴いたにちがいない。

(こんなに長かったでしょうか、神様、五十メートルって)

レオナール……レオナール教授……あれはサンクレールの同類とはちがう。「伝統」を教育で知った人間ではない。彼は後宮で生まれた。純度百パーセント田舎者の乳母の胸から神聖不可侵の価値体系の乳を吸って育ったのだ。彼の前には十二世代にもおよぶ名うての医者たちがずらりと並んでいることだろう。むかしは王様の御典医、いまは医師会の会長、といったところか？　モリエールに出てくるディアフォワリュス以来の医学界の最高権威。これほどの人物が、これほどに大衆的な場所で、偶然の犠牲者として死んでゆくとは。しかも、クルブヴォワで自動車修理工場を営む年寄りと、自分の双子の妹を恋する土木技師といっしょに逝くのだ！　ここまで事件と関わりあいになれば……家の恥だ！

彼は月のない夜にこっそりと埋められるだろう。

(ほんとうにたった五十メートルなのか？)

CamScannerでスキャン

いい加減にしろ、マロセーヌ。お前は上つ方のことなどなにも知らない青二才にすぎない。左がかった偏見ばかりじゃないか。「順応」、これが彼らの唯一の処方箋だ。「順応」、それが彼らの権力の秘密のすべてだ。順応するのだ。そうすれば、アコーデオンを弾きながらだって、神の摂理をものにできる。メトロに乗らないとすれば、まったく堂々たる単純さでシャンゼリゼを歩いて下ってゆくのだ。上には緑のローデンのコートを着て、下にはこっそりプチ・バトーの肌着。それが順応というものだ……。

やはりテオは家にいた。クララも。テレーズも。ジェレミーも。ちびも。ルーナも。彼女のお腹の子も。ジュリユスも。人をばかにするかのように舌を出したままだ。ぼくの家族。ぼくのもの。

「バン！」

そう叫び声が上がった。そのあとにはなにも続かない。苦痛にみちた叫び声はぼくを見て妹のひとりが上げたものだ。どの妹？　ルーナは両手を口に当てがっている。テレーズは机のうしろに座って、幽霊でも見るようにぼくを見つめている（じっさい幽霊だよ）。また、クララは立って、目にいっぱいの涙をためている。そして、自分のうしろを手さぐりし、ライカを探しあて、右目に当てて、フラッシュ！　こうして恐怖が堰止められる。ぼくの顔がエレファント・マンの水準に及ばないことを確認したからだ。

最後にジェレミーの質問が、ものごとの治まるべき秩序を取りもどしてくれた。

「ねえ、バン、教えてよ。直接目的補語の脳たりんが助動詞エートルの大ばか野郎の前にあるとき、なんで過去分詞の糞ったれは直接目的補語と一致しなくちゃいけないの？」

「『アヴォワール』だよ、ジェレミー。助動詞『アヴォワール』の前にあるときだ」

「そんならそれでもいいよ。テオは説明できないんだ」

「わたしは、修理工ですもの……」テオは曖昧な仕草で言いのがれようとする。

で、ぼくが説明する。古き良き文法規則を説明しながら、ひとつひとつの額に父親としてのキスをしてゆく。いいかい、その訳はね、むかしは直接目的補語が助動詞アヴォワールの前にあろうが、後ろにあろうが、過去分詞はぜんぶ直接目的補語と一致していたんだ。ところが、直接目的補語が助動詞の後ろにあると、みんなつい一致の規則をサボってしまうことが多かった。だから、時の文法学者がこの文法の間違いを規則として認めてしまったのだ。というわけ。こんなものさ。言葉は怠け者の方向に進んでいる。そうだ、そうだ、「じつに嘆かわしい」。

「あなたが襲われたのはわたしの家のすぐ下でしょう、バン。やつらはあなたがわたしの具合を訊きにやって来るにちがいないと思ったのよ。そして、建物のドアのところであなたに襲いかかったんだわ」

ぼくはベッドに横になっていた。ジュリユスは床に座り、頭をぼくの腹に乗せている。ぶよぶよで、熱い（生きている！）たっぷり三センチはある舌の先がぼくのパジャマに鎮座している。テオは部屋のなかを行ったり来たりしていた。

「わたしが病院に着いたときには、なにもかも終わっていたの。ノルマンディ・ニエメン部隊の飛行兵みたいな服を着こんだごつい刑事があなたを車に運びこんでいたわ」

（ありがとう、カレッガ刑事）

CamScannerでスキャン

「わたしの考えでは、あの刑事はあなたをつけていたのよ。で、あなたがわたしの家に入ろうとするのを見届けて、その間を利用して煙草の一箱も買いにいって、戻ってきたときには、とっくにあなたは連中に襲われていたってわけ」

「襲った連中を見た？」

「ぜんぜん。救急車が一台止まって、飛行兵にぶちのめされた連中を運んでゆくところだった。ずいぶん派手にやっつけたみたいよ」

（またしてもありがとう、カレッガ刑事）

「で君は、テオ？　どこも怪我はなかった？」

「服がだめになっちゃった」

テオはぴたりと足を止め、ぼくのほうを振りかえる。

「ひとつ質問をしていい？」

「どうぞ」

「あなた、この爆弾事件に関係してる？」

さすがにびっくりした。

「いや」

「残念ね」

それにしても、この夜の会話はなんと驚きにつぐ驚きを用意していることだろう！

「もしもそうなら、あんたは国民的英雄だと思っていたのに！」

おやおや、今夜のテオはどうしたんだろう？　まさか腐敗した消費社会批判かなにかでぼくを騙そう

CamScannerでスキャン

というのではないだろうな。彼がぼくを騙す、この年齢で、こんな仕事をしていて、まさか！
「いえよ、テオ。なにを隠している？」
彼は近寄り、ジュリユスの頭の横に座った。ジュリユスの目玉はゆっくりと回転し（生きているんだな、ジュリユス！）、シェイクスピアの劇で登場人物の告白を聞くような顔つきをしている。
「スピード写真のボックスで吹きとばされた男って……」
ぶつぶつ……。
「うん、なんだい」
「最低中の最低の人間よ！」
誇張ではなく、人間はあまりにも繁殖している。そして、その人間が最低の行為をおこなうのも無理からぬことだろう。なぜなら、最低の行為こそ人間が義務とするところだからだ。
「その男と知りあいなの？」
「いいえ。でも、あいつが暇なときになにをしてるか知ってるわ」
「スピード写真のなかでせんずりでも掻いてるとか？」
その瞬間、テオの目に閃光が走った。
「まさにそのとおりよ、バン」
それがどれほど恐るべきことなのか（あるいは、気持の良いことなのか）わからなかった。
「ちょっとした思い出の品々を眺めながらね」
突然テオの声は震えた。いままで見たこともない怒りに震えていた。
「いえよ、テオ。どうしたんだ！」

テオは立ちあがり、ひな菊のエプロンを脱ぎ、ジャケットのポケットから財布を出し、そこから古い写真のようなものを取りだして、ぼくに差しだした。

「ご覧」

じっさい、それはプチ・リュのビスケットみたいに縁がぎざぎざに裁断されたかなり古い写真だった。白黒で撮られているが、じつに黒々とした闇に沈む写真だった！　深い暗黒。そこには、二、三十年前のレオナール教授の体操選手のような体が写っていた。爪先から尖った頭の先まで全裸だ。燃えあがるまなざし、悪魔的な嘲笑に裂けた口、腕を伸ばして、テーブルの上でもうひとつの体を押さえこみ……

「ああ！　やめて……」

ぼくは目をあげた。テオの顔に涙が流れている。

「死んでるのよ、パン」

もういちど写真を見た。時計が正しい時刻を指しているにもかかわらず、その時計が止まっているとわかるのは、どんな本能がぼくたちに備わっているからだろうか。レオナール教授がテーブルに押しつけている子供が死んでいることは疑いなかった。

「どこで見つけたんだい」

「写真ボックスよ。まだ手に持ってたの」

長い沈黙。その間、ぼくは写真をもっと近づけて見た。裸の男がいて、男の筋肉は緊張し、閃光でも走ったかのようにぎらりと輝いている（フラッシュが汗に反射したのだろう）。テーブルらしきものの上に子供の白い体があって、脚がぶらりと宙に投げだされている。そして、テーブルの下に……。

「テーブルの下に見えているのはなにかな」

CamScannerでスキャン

テオは写真をぼくのベッドサイドのランプに近づけ、手の甲で頬を拭った。
「わからないけど、服じゃないかな、服が積みかさなって……」
そう、なにかが積みかさなって、だんだん深くなる影の単彩画のなかに溶けて、震えるような闇になり、そこから、いけにえにされた子供の白い姿が浮きあがる。
「どうして警察に渡さなかったんだい」
「この屑を殺した人間を逮捕させるために？　とんでもない」
「でも、あれは偶然だよ。君が殺されていたかもしれないんだよ」
この言葉を発してから、ぼくはほとんどその言葉を信じていないのに気づいた。
「偶然にせよなんにせよ、監獄なんかに入れたくないのよ、バン」
「写真はここに置いてゆけよ。そんなものをもち歩かないほうがいい」
テオが帰ったあとで、写真をナイトテーブルの引き出しに隠し、眠りに落ちた。石が落ちるみたいに。
底に着地すると、口が焼却炉になったゴリラみたいなものが、子供のホワイトソース煮込みを作っている最中で、鍋のなかでは小さな子供たちがぐつぐつと揺れていた。そのとき人喰い鬼のサンタクロースが入ってきた。人喰いサンタ……。

23

「**自分の死を真正面から見た男**」と翌朝の新聞の第一面が叫んでいた。つづいて、スピード写真四枚の引き伸ばしがページ全体におよんでいた（ほんとうだ、確かにこの機械は作動したんだ！）。それはレオナール教授の最後の四枚のクローズアップだった。

禿なんてものではない。髪の毛は剃りあげられ、眉毛は引き抜かれている。高く、つるつるした額。突きでた眉弓に尖った耳。肉の厚い頬の下にがっちりした顎。肌の色は蒼ざめているが、たぶん照明のせいだろう（ふたたび、どこかで見たことがあるという印象）。最初の写真では、頭が軽くうしろにのけぞり、真一文字の薄い唇は顔の下にできた傷痕のように見える。重い瞼の下で、まなざしは暗く、冷たく、まったく感情をあらわさず、人に不安を起こさせるほど底知れない。全体は凍りついている。自然な表情が欠けているからではなく、なにも外にあらわすまいとする堅い意志があるからだ。二枚目の写真は、この筋肉と脂肪の力強い建築物全体に震えが走っており、瞼がもち上がって、虹彩が完全に露わになり、そこに真黒な瞳孔が穴を開け、見るものの目を抗いがたく引きつける。唇はかすかに嘲笑を浮かべ、嘲笑が二つのえくぼを穿ち、えくぼに頬の肉が落ちこんでいる。三枚目で、顔が破裂する。眉

弓の山がたが砕け、額と頭に波が走り、瞳孔が虹彩を呑みこみ、口が対角線状の亀裂になって顔を断ち割り、頬は真空に吸いこまれ、入れ歯らしきものが前方に飛びだし、すべてがピンボケになっている。最後の一枚は死者の写真だ。見えている部分だけから判断すると、爆発のあと、彼は回転椅子の上にくずおれたにちがいない。血塗れで空っぽの左の眼窩しか見えない。頭皮の一部がちぎれていた。

クララの両手のなかで労われてはいたものの、ぼくの頭のほうがレオナールよりましとはあまりいえなかった。

「ガーゼをもうちょっとゆるくしてくれよ。湯煎されてるアーティチョークになったみたいな気分だ」

「それだってほとんどぬるま湯よ、バンジャマン」

この妹にバンジャマンと呼ばれるたびに、感動が生まれる。その感動があまり急に膨れあがらないように、クララはぼくの名前をゆっくりと発音しているかのようだ。

「ほんとにひどい顔にされちゃったのね！」

「それどころか、中身のほうはさらに……その四枚の写真をどう思う？」

クララは新聞に身をかがめ、ぼくに答えようとする。まなざしによる答え、みごとなテクニックだ。

「ジャーナリストはいい加減なことを書いていると思うわ。この人が真正面から見ているのは自分の死なんかじゃない（とはいえ、人間が爆弾で死ぬところを四拍子で見るのは前代未聞のことだ）。なにか別のものを見ている、この人が手の先にもっているもの、レンズのすぐ下のところの」

（そのとおりだ、クラリネットちゃん、そのとおり……）

「この顔の歪みみたいなものは、爆発の前にできたものよ、バン」

（そう、そのとおり）
「表情も、苦痛ではなくて、快感の表情を浮かべてる」
そこで、ぼくは自分の妹をしばらく見つめた。それから、ほんのちょっぴりコーヒーを飲み下し、それがゆっくりと体に広がるのを待ってから、尋ねた。
「ねえ、ほんとうに恐ろしい失神するような写真、あるいは長く見ていることなんかとうてい不可能なものを見たら、どうする？」
クララは立ちあがり、バッグにラガルドとミシャールが編んだ大判の国語の教科書を詰めこみ、ミニバイクのヘルメットを手に取り、注意深くぼくにキスし、ドアから出る直前に、答えた。
「わからないけれど、写真に撮ると思うわ」
午後の五時、テレーズが帰って来たときになって、毒気たっぷりのレオナール教授の立派な顔がぼくになにを連想させたのか、わかった。この顔をどこかで見たことがあるという感覚の原因……。
「この人よ、この人。バン、まちがいないわ！」
テレーズはジュリユスとぼくの前に立ち、新聞を手に持って、全身をぶるぶるさせていた。大きな発作の前触れであるあの恐ろしげな熱で彼女の声は震えている。できるだけやさしく、ぼくは尋ねた。
「だれ、この人って？」
「この人よ！」テレーズはたったいま自分の本棚からひっこ抜いてきた本をぼくに突きつけて、叫んだ。
「アレイスター・クロウリー！」

（ああ、そうだ、アレイスター・クロウリー。英国の有名な魔術師、悪魔の頭領ベルゼブルの大親友。レミントン一八七五生——ヘイスティングズ一九四七没。知っている……）

本が開かれたページの写真は、あらゆる点で、レオナールの四枚の写真のうち、最初のにそっくりだった。ともかく、きわめてよく似ていた。写真の下には、キャプションが「黙示録の獣、666、アレイスター・クロウリー」とあった。

向かいのページには、悪魔じみた臭いのするこんな文章が書かれている。

「唯一の掟は、『汝の望むところをなすべし』。なぜなら、人ひとりひとりが星だからだ。しかるに、大多数の人間はそのことを知らない。最も頑迷な無神論者たちこそ、キリスト教の私生児にほかならない。ただひとり『我こそは神なり』といってのけた者は、十字架で武装した母親の手で揺りかごをゆすってもらった、狂った死者である。その狂人の名はフリードリヒ・ニーチェ。他の者ども、わが二十世紀の人間もどきたちは、イエス・キリストの代わりに金の神マンモンを崇め、祝祭の代わりに世界大戦を寿ぐ。先人よりも低い場所に堕ちたことを、いささかならずも自慢している始末だ。崇高なる未熟児のあとには、下劣なる未熟児が現われる。人間的な、あまりに人間的なものの治世のつぎは、人間以下の独裁となろう……」

「この人は死んではいないわ、バン。死んでない、転生したのよ」

そうとも。また始まった。

「ねえ、落ち着いて。また完全に死んでしまったんだよ、スピード写真のボックスで吹きとばされて」

「いいえ、彼は何度も死の外見のうしろに隠れて、どこか別の場所に復活しては、仕事を続けてゆくのよ」

CamScannerでスキャン

(死んだ肉の輝きを帯びた写真がぼくの頭に閃く。「仕事」だと！　自分でも苛立ちはじめているのがわかった)

「パン、見て。この写真の人は『レオナール』って名前なのよ」

ここで、テレーズの血も、声も、真青な恐怖の背後に退いてしまった。映画の一場面のように、新聞が彼女の手から滑り落ち、彼女は繰り返す。

「レオナール……」

ジュリユスはぺえと舌を出している。

「そうだよ、彼の名前はレオナールだ。それがどうかした？」

完全に苛立っている。

「だから、それはサバトの夜、悪魔にあたえられる名前なのよ。悪魔よ、バン！　マンモン！　ルシフェル！」

もう我慢できない。

ぼくはクロウリーの本をもって、慌てずに立ちあがった。それは、緑色のモロッコ革で装丁しなおし、金の印を刻印した、いかがわしい感じの本だった（テレーズがこの種の本の山で棚を埋めつくすのをぼくは放っておいたのだ——「教育者」が聞いてあきれる！）。ぼくは黙ってその本を二つに引き裂き、それをアパルトマンの外に放りだした。さらに、可哀そうな妹のテレーズの肩をつかんで、初めはゆっくりと、それからしだいに激しく揺すぶりながら、初めは急がず、それからしだいにヒステリックに、星占いや千里眼のたわ言とか、悪魔趣味の大安売りにはもううんざりだし、その手の話は二度とふたたび耳にしたくないし、ちびにたいしてもじつに嘆かわしい悪例になるし（「じつに嘆かわしい」、そう、

「じつに嘆かわしい」とぼくはいった)、今後、ただの一度でも、ただの一度でもだ、その種の話を蒸しかえすことがあったら、人生で最大の平手打ちを喰らわすからな、わかったか、このばか娘！　と説明した。

それでも満足しなかったので、ぼくはテレーズの本棚に突進し、両手ですべてを払いおとしてやった。本、お守り、あらゆる種類の小像のたぐいが、風切り音を立てて、ジュリユスの頭上を通過し、部屋の壁にぶつかって、極彩色の石膏を爆発させ、最後に、女装者たちのイェマンジャが、石と化して立ちつくすテレーズの足元で、バイアの魂を天に返した。

それから、ぼくは犬といっしょに外に出た。家の外、道の上。途方に暮れて、ちびの学校のほうへ歩いていった。ちびを、ピンクの眼鏡をかけたちびを、この腕に抱きしめ、世界でいちばん素敵なお話(初めにも、終わりにも、どこにも不幸の出てこない話)をしてやりたいという常軌を逸した欲求が生まれていた。歩きながら、そんな話(いたるところでなんの不安もなく手にすることのできる甘いやさしさ)を探したのだが、見つからない。ゴミ文学のぼけナスめ、どこをとってもリアリズム、死に、夜に、人喰い鬼に、腐りきった妖精だ！　通行人は、頭がぼこぼこの気違い男を振りかえる。しかも舌を出した犬がお供だ。だが、通行人だってぼくと同様、理想のお伽話なんてご存知ない。通行人！　そのうえ、彼らはぼくのことなど気にも止めない！　彼らの笑いは、肉食獣の無知の笑い、千本の歯をもつ羊の冷酷な笑いだ！

突然、怒りが治まった。小さくて丸まるとしたもの、ピンクの眼鏡の向こう側で目を寄り目にしてい

CamScannerでスキャン

るものが、腕に飛びこんできたからだ。
「バン！　バン！　女の先生がとっても素敵な詩を教えてくれたよ！」
（やった！　ひと息つこう！　先生ばんざい！）
「暗誦してくれるかい？」
ちびはぼくの首に腕を巻きつけ、とても素敵な詩を暗誦してくれた。子供たちがみんなそうするように、真珠採りの潜水方式で、一度も息をつがなかった。

むかしむかし　ウゴリーノが
小さな舟で　息子たちを連れてゆく
無料(ただ)で楽しい船旅に　だがご用心
年老いたりとも　この父は吸血鬼！

五週間を越え　六週間を過ぎる
食べものも　そろそろ底をつく
ウゴリーノいわく　「心配無用
わしは息子たちが大好きじゃ！」

藁でくじ引き　たんなる手続き！
スマートなこと　この上ない！

この男には心もない　心を感じるのは
心筋梗塞の薬を飲むときくらい

それゆえ　毅然たる伝説の人
ウゴリーノは　自分の子供を食べた
子供には父親がなくてはならぬ……
ああ　その思い！　私の心は張り裂ける

ジュール・ラフォルグ

結構、もういい。わかったよ。今日のところは充分だ。ベッドに行こう。
だが、ちびは、ピンクの眼鏡の向こうからぼくに微笑みかけて、ご満悦だ。
その微笑み。
ピンクの眼鏡。
喜びの表情。
子供たちはばかだ。天使みたいに。
ぼくはたっぷり四十度の熱を出してベッドに入った。完全な立入禁止。だれもぼくに会いに来ることは許さない。ジュリエスでも。クララがどうしてもいっしょにいたいといったときも、ぼくはすげなく、むしろテレーズを慰めてくれと命じた。
「テレーズ？　テレーズがどうかしたの？　彼女はとても元気よ」

CamScannerでスキャン

（そうかい。他人にあたえたかもしれない苦痛について、もう絶対に思い悩んだりするものか。そんな楽しみは他人に任せておこう）

「クララ、テレーズに、二度と魔術の話なんか聞きたくない、といっておいてくれ。聞いてやるのは、つぎの三連勝式の馬券を当てられるときだけだ。単式でな！」

それから、熱に浮かされたような自己批判の時が来る。いったいどうしたっていうんだ？　いちばん年下の弟がホモの地下世界の詳しい写真アルバムを作っているのに放っておくし、つぎの弟が勉強をサボり、ごろつきのような口を利いても知らん顔。天使のような妹を唆して、バカロレアの準備の代わりに、最低中の最低の写真を撮らせている始末だ。星占いに狂った妹は何年にもわたってお前の祝福を受けてきたんだし、ルーナにアドバイスひとつできない有様じゃないか。そこへ来て突然、今世紀最大の発作的、道徳的危機の訪れ。異端審問官のような顔をして、偶像を抹殺し、全人類を皆殺しだ！　いったいなにが原因なんだ？

いったいなにが起こったんだ？

なにが原因だかわかっている。何が起こったのか知っている。一枚の写真がぼくの人生に入りこんだのだ。意地悪なお伽話が現実原則になってしまったのだ。

人喰いサンタたちのお話……。

この重大な発見に気づいた瞬間、部屋の扉が開いた。

「だれ」

ジュリア叔母さんが戸口に立っていた。微笑みを浮かべている。その服装については、しゃべらない

CamScannerでスキャン

わけにはゆかない。今回は、生なりのウールのワンピースで、豊満な胸のまえが二重になっていた。豊かさの二段重ね。お熱いのがお好き。その柔らかな濃厚さといったら……。

「いいかしら？」

返事をするまえに、彼女はベッドの枕元に腰を下ろしていた。

「うわあ！　みごとにやってくれたわね、親切な同僚たち！」

ジュリアがここまでやって来たのは、クララの仕業だなと直感した（「ね、だから、バンジャマンが死んでいないか、上に行って見てきて」）。

「どこか壊れた？」

ぼくの額の上を滑るジュリアの手はひんやりしていた。彼女は焼けるような熱さを感じたはずだが、手を引っこめなかった。

「ジュリア、人喰い鬼のことをどう思う？」

「どういう観点から？　神話学的？　人類学的？　精神分析的？　民話のテーマ論的？　それとも、そういったもの全部ひっくるめてカクテルでも作る？」

笑いたい気分ではなかった。

「冗談じゃないんだ、ジュリア。ちゃんと考えて、君の人喰い鬼についての、君の考えを聞かせてくれ」

雲母のようにきらきら輝く彼女の目は一瞬考えぶかげに沈み、ついで、このうえなく晴れやかな笑いが白い歯のパノラマを繰り広げた。そして急に身をかがめて、ぼくのすぐ耳もとに囁いた。

「スペイン語では、愛することを『コメル』っていうのよ」

体をぶるりと震わせると、片方の乳房がドレスからこぼれでる。で、ぼくは、「コメル」というスペ

イン語が「食べる」という意味だと思いだして……。

CamScannerでスキャン

24

「マロセーヌ君、私は君に、君の同僚たちのいる前で話をしたかったのだ」
サンクレールは、部屋の反対側に突ったっているルシフルとレーマンを示した。
「それぞれの立場が完全に明らかなものになるようにだ」
沈黙。(ジュリア叔母さんとぼくは三日間ベッドで過ごしたところだった。ぼくの立場は明るく輝いていた)
「それぞれがおなじ階級に属しているわけではないので、そんなことをしても意味がないでしょう。問題を解決する民主的な方法にはなりようがない」
ルシフルが、その悪意が許す最大限の好意を見せて、問題点を明らかなものにした。(ジュリアの手と髪の毛がまだぼくの肌の上を滑っている)
「その悪党どもをとっつかまえたら……」
これはレーマンの復讐の声だ。(ぼくがふと現実に引きもどされると、今度は彼女が現実から甘美に滑りおちてゆく)

CamScannerでスキャン

「形容しがたい悪質な攻撃だ、マロセース君。幸い君が訴訟を思いとどまってくれたから良かったようなものの、さもなければ……」

（「なんてきれいなんだ！　ほんとに、なんて！　ああ、恍惚に染まる君の姿！　ぼくの欲望はアミナバブの馬車のように跳ねてゆく！」）

「まったくもって幸いなことに、君の調子もほぼ元に戻ったようだ。もちろん、まだ顔には跡が残ってはいるが……」

（三日間だ。そうとも、十二回かける三日は、三十六。少なくとも、三十六回！）

「だが、そのことにより、君はさらにわが顧客の信用を高めるにちがいない！」

このサンクレールの考えが同席した二人の笑いを誘う。ぼくは目覚め、仲間に加わる。いちおう、念のために。

かくして、四日間の病気休暇ののち、仕事に復帰した。クードリエの人間カメラの監視のもとで、仕事の再開だ。この汚いアパートのどこにいても、ぼくに向けられる視線を感じる。だが、刑事たちの姿は見えない。素晴らしく良い気分だ。たえず四方八方に落ち着かない視線を配ってはみたものの、だれが刑事かまったくわからない。彼らは二人ともプロなのだ。その日、うしろを振り返っていて、十回も客とぶつかってしまった。客は文句をいい立て、ぼくは散らばった包みを拾った。それから、「マロセーヌさま、お客様ご要望コーナーまでお越しください」。マロセースさまはお越しくださる。そして、マロセーヌさまは仕事をこなしながら、来るべき解雇の日をいささか待ち遠しく思う。ジュリア叔母さんの記事の発表が遅れているのだ。レーマンのオフィスから戻ると、書籍売場に寄って、ぼくが破いた

CamScannerでスキャン

のと同じアレイスター・クロウリー伝を一冊見つけた。リソン老人は、まったくもって感心しない冒長い説教を垂れたうえで、その本を売ってくれた。ぼくもリソンとおなじ意見なんだよ、哀れなテレーズ。こんなものは文学じゃないが、そんなことはどうでもいい。ともかく、損害は償うつもりなのだ。テオにも新しいイェマンジャを持ってきてくれるように頼むことにしよう。

（ジュリアの笑いが聞こえる、「あなた自身のものはなにもないのね、バンジャマン・マロセーヌ。怒りまで売りわたしてしまう」。そして、もうすこし遠い闇のなかから、「わたしもあなたが欲しいわ。航空母艦としてね、バンジャマン。わたしの航空母艦になってくれる？　ときどきあなたのところに休みに来て、感覚を満タンにしてもらうの」。どうぞお休み、素敵な君。そして、君の望むだけ飛んでくれ。ぼくのほうは今後、君の羊水のなかを航海することにしよう）

ぼくを見張っているのはクードリエ警視長のどっきりカメラたちだけではなかった。デパート全体がぼくの虹のかかった顔をじろじろと見つめていた。監視しているものも多かった。カズヌーヴの姿が見えない。ぼくよりちょっと長い病気休暇だろうか？　ぼくが股間に喰らわせた足技のせいで！　精液が耳から噴きだしたにちがいない。可哀そうに、カズヌーヴ。心から可哀そうだと思う（ぼくの頭ではジュリアの新たな笑いがこだまする。「これからあなたを『もう片方の頬を差しだす男』と呼ぶことにするわ」）。それにしても、二人の刑事はどこに隠れているのだろう？　「マロセーヌさま、お客様ご要望コーナーまでお越しください……」。行くよ、行くったら。

仕事が済んだら、ジュリア叔母さんを骨の髄まで知ったのち、ぼくの欲望発電機に異状がないか確かめるために、ミス・ハミルトンのところへ寄ってみるとしよう。

レーマンのところでは、女の客が吠えていた。彼女の手のなかでデオドラントの噴霧器が手榴弾と化

したせいで、いま彼女の繊細な手は、ボクシングのグラブくらいの大きさになっていた。ぼくの「犯罪的過失」にたいするレーマン得意の演目だ。だが、客は訴えを引っこめない。たとえわたしがあんたの顔のところにある涙を流すカリフラワーにハイヒールの尖端を突っこむことができたって……（レーマンよ、人生とはこうしたものなんだ。いつも勝つわけにはいかない）。

そんなわけで罵倒されつくしたのち、ぼくはミス・ハミルトンにちょっと挨拶をしに行った。彼女の体の丸みがいまでもぼくの垂れたものに活力をあたえるか、それとも、ぼくのエデンの園なみに旺盛な精力には、もはやジュリアの存在が必要不可欠なものになったのかを知るためだ。ぼくは階段をよじ登り、「もしもし、ミス、ぼくだよー！」といった。ミス・ハミルトンは背中を向けて、爪に、彼女の声とおなじくらい透明のマニキュアを塗るのに一所懸命だった。その手を光にかざすと、爪は雲のようにたなびいた。だが、マニキュアの匂いはみんなおなじだし、このちょっとした美しさは機械的なものでしかなく、一目見ただけで、ジュリアとはぜんぜん比べものにならないことが明白だった。ともかく、ぼくは咳ばらいをした。ミス・ハミルトンが振りむく。まさか！　待ってくれよ！　ぼくとおなじ顔だ！　役立たずのお白粉の下に、見事な花の形のマークが刻印され、目が半分つぶれてしまっている。上唇は裂けて膨れあがり、ほとんど鼻の穴をふさぎそうだ。いったい全体、だれがこんな目に合わせたのだろう？　皿に硬貨が転がり落ちるように隠しようもなく、その答えは、なにものも逆らえぬ真実の加速度を得て、ぼくの頭を駆けめぐった。ばかだな、お前だよ。お前なんだ、こんな目に合わせたのは。悪党め！　歩道に転がした女の体は、彼女だったのだ。お前が殴りつけたのは彼女なんだよ！

しばらく衝撃から立ち直れなかった。だれが彼女を丸めこんだのだろう。「マロセーヌが『説明原則』なんだ、マロセーヌこそ『異論の余地のない原因』、マロセーヌ＝山羊＝爆弾犯人」。だれか？　カズヌ

ーヴか？　ルシフルか？　なぜ彼女はそいつのいうことを信じたのか？　なぜぼくは彼女がぼくに好意をもっていると考えたのか！　お前の洞察力に乾杯だ、マロセーヌ！　よくやった！　お前が王様になりたいときには、「ぼくはほんとうに王様だ」といえばいいだろう！　すべての責任はお前だ！　お前とお前の汚い仕事だ！　お前とお前の山羊の臭いなんだ！

ミス・ハミルトンとぼくは、ひと言も口に出せず、しばらくたがいの顔を見あっていた。すると、彼女の顔の廃墟のあたりから、二粒の涙が転がりおち、ぼくは、眠っている人びとを虐殺した裏切り者のように逃げだした。

いい加減にしてくれ。もうたくさんだ。うんざり、うんざり、うんざりだ！（「うんざり」にもうんざり……）。

ストジルがいた！　なんとしても、ストジルにそばにいてほしい精神状態なのだ。なぜなら、彼、ストジルコヴィッチこそは、この世のすべての幻滅を知りつくした男だからだ。すべての幻滅。まずは、神様。彼が鉄のように固く信じていた神様は、石鹸で洗ったようにつるつるの彼の魂のなかで滑って転び、彼をして歴史のあらゆる局面を転々とさせた。つぎの幻滅は、戦争のヒロイズムと、そのばかげた規則正しさ。そして、革命が成立したあかつきには、神聖不可侵にして、でっぷりと肥満した共産党同志たち。最後は、亡命者としての除けものの孤独。彼の長い生涯のなかで、すべては挫折し、消えていった。残ったものは？　チェス。だが、それだって負けることがある。そのほかは？　ユーモアだ。ユーモア、この破壊しがたい倫理の表現。

だから、ぼくは老いたるストジルと夜のひとときを過ごすことにした。だが、木っ端を差すことは問題外だ。いま、彼の話に耳を傾けることがいちばん必要なことだからだ。

「いいとも、あんたがそう望むのなら」

ストジルはぼくの肩に手をおき、デパート一周に連れだした。階から階へとぼくを引っぱりまわしながら、地下から響くような美しい声で、もっとも些細なことがら（なんでも一分の圧力鍋、インゲン豆と肉の煮込みの缶詰、ベビードール、エスカレーター、プレイヤッド叢書、照明器具、造花、ペルシャ絨毯）について、二人の火星人が、途方もない文明の凝縮した姿を前にして、その知恵の深さに呆然としたかのように、歴史的・神秘的口調で語った。

つづいて、ぼくたちはチェス盤に木っ端を並べた。誘惑に抵抗できなかったのだ。だが、これは冗談まじりの一戦、おしゃべりしながらの勝負で、ストジルは霊感を吹きこまれたベースの音をはるかに響かせながら、もっぱらモノローグを続けた。そうこうするうちに（どこをどう通ってかは神のみぞ知る）、あのコリア、ドイツ人を殺しつづけて大戦の終わりに気が狂った若者の話になった。

「まえにも説明したように、やつはほんとうに三十六通りもの殺しかたを開発したんだ。いうまでもなく、妊娠した女の仲間と乳母車を使うやりかたがあったし、何人かの士官のベッドのなかにも滑りこんだ（天使みたいに綺麗な顔が好きなのは、なにもナチスの突撃隊だけじゃないぞ！）。そのほかにも、驚くべき事故を装って工事の足場を崩したり、車のタイヤが外れるように仕組んだりした。コリアがまき散らす死は、たいてい、偶然か、事故のかたちを取った。あんたたちフランス人がよくいう、運がなかったってやつだ。コリアはドイツの士官と大っぴらに寝ていたが（進んで敵と交わるバルカン半島のロレンザッチョというわけだ）、そのうち二人の士官は心臓発作で死んだ。だが、なんの毒薬の形跡も

CamScannerでスキャン

なく、危害を加えられた様子もまったく見つからなかった。ほかの士官たちはコリアをゲシュタポの捜査からかばったほどだ。士官たちはほとんど全員やつと寝たがり、結果的に、自分たちの死神を保護していたんだ。だが、たぶん漠然とはやつの本性に気づいていたにちがいない。笑いながら、やつを『ライデンシャフツゲファール』という仇名で呼んでいたからな」

「どういう意味？」

「『情熱の危険』。きわめてドイツ的だ。わかるだろう、きわめてハイデルベルク風、後期ロマン派だよ……こうして、静かに、コリアは死の天使の化身になっていった。それは、やつの顔を正面から見ることのできないわれわれにとっても、おなじことだった。こうしたことも、やつの発狂の一因になったと思うよ」

死の化身。あの写真が、脳裏によみがえる。レオナールのはち切れんばかりの筋肉、ぎらぎら輝く尖った頭、死んだ子供の手足……。ふと尋ねてみた。

「コリアは一度も爆弾は使わなかったの？」

「いや、何度か。過激派の伝統だからな」

「じゃあ、関係のない人たちを巻きぞえにしただろうね？　通行人とか……」

「全然。その点はやつが絶対に譲らない点だった。それで、指向性爆弾のシステムを発明していた。戦後、アメリカとロシアの機関がもっと完全なものに仕上げたアイディアだ」

「指向性爆弾？」

「原理は簡単だ。爆発の騒ぎは最高に派手だが、実際の被害そのものは最小限にとどめることができる。ものすごく激しい爆発音を発しながら、正確に限定された目標に向けて金属の細粒を発射するん

だ」

「なんのために？」

「無差別テロに見せかけながら、じつは被害者をちゃんと選べるからだ。その実、事件の調査がおこなわれても、とりあえず偶然の犠牲者が出たとしか思われないだろう。吹き飛ばされたのは、あんたでも、わたしでも、不思議じゃなかった。爆発の音を考えれば、十人くらい死んでもおかしくない、ってね。ところが、そうやってコリアが殺していったのは、基本的に、ドイツに協力するユーゴスラヴィア人だった。群衆のなかから選り分けていたのさ」

それからストジルはチェスのほうに注意を戻した。そして、熟考を重ねたプレイヤーのような調子でつけ加えた。

「わたしの意見を訊きたいのならいうがね、いまデパートで事件を起こしているやつも、おなじやり方をしているね」

CamScannerでスキャン

25

そのとおりだ。ぼくらの爆弾犯人はでたらめに人を殺しているわけではないのだ。犠牲者は選ばれている。騙された警察は異常殺人者の犯行だと考えている。警察の目から見れば、この虐殺屋のお客にならないためには、運命の神にすがるほかないということになる。そう、一度だけは、一人でなく二人の犠牲者が出たこともある。たしかにそうだ。そのせいもあって、刑事たちは惑わされ、盲めっぽうに殺しまくる気違いの線を洗わされている。もちろん、鑑識では爆弾をじゅうぶんに調べているにちがいない。にもかかわらず、いかなる満足すべき結論にも達しなかった、と考えてみよう。疑問点は以下のとおりだ。仮に犯人が犠牲者の知りあいであり、その知人たちを順番に殺害しているとして、(1)なぜデパートだけが殺害の現場になっているのか？　ほかの場所でも殺害することは可能なはずだし、なにか事情があるのかもしれないにしても、その事情を想像することはかなり難しいという反論がなされるだろう。四人の犠牲者がまったく同じ場所で殺されたという事実は、最初の仮定をあやういものにすると思われる。(2)犯人が犠牲者の知りあいであり、その知人たちを順番に殺害しているとして、犠牲者同士は知りあいなのだろうか？　その可能性は否定できない。(3)だが、もしもそうした潜在的な

犠牲者たちがたがいに知りあいだったとして、なぜ彼らはデパートに買物をしに来ることに固執するのか？　仮にぼくの友人が三人もデパートで爆殺された場合、ぼくだったら、そんな火薬庫に来ることは避けるだろうと思う。結論、犠牲者たちはたがいに知りあいではないが、犯人は犠牲者たちを個別に知っている（あらゆる場所で友だちを作るのが得意なやつなのだ）。よしと。ところで、最初の疑問点に戻ろう。なぜ犯人はデパートの内部でだけ犠牲者たちを殺しているのか？　なぜ、ベッドのなか、赤信号で止まったとき、行きつけの床屋では殺さないのか？　いまのところ、この疑問にたいする解答はない。それゆえ、（4）の疑問に移ろう。デパートでは、刑事たちが、昼は店に入ってくる者のボディーチェックをおこない、夜は警備を続けているし、ストジルコヴィッチの巡回だってあるというのに、犯人はどうやって店内に爆弾をもちこんでいるのか？　答えは？　答えはない。よろしい。疑問（5）だ。**こうした状況のなかで、ぼくの役割はいったいぜんたい何なのか？**　実際、爆弾が破裂するたびに、ぼくは現場にいたのだ。そして、そのたびに、生きて戻ってきた。突然、氷のような冷汗が流れ、（1）、（2）、（3）の疑問が氷解する。クードリエ警視長の作業仮説に戻ってしまうからだ。爆弾殺人犯は犠牲者のだれとも知りあいではない。彼が怨んでいるのはこのぼく、ぼくひとりなのだ。ぼくを骨の髄まで粉々にしようと思っている。それで一日中ぼくの後をつけまわし、好機到来と見るや、ドッカーン！　ぼくの隣の人間を吹き飛ばすというわけだ。だが、こんなに大きな事件を引きおこすほどぼくを怨んでいるのなら、なぜぼくひとりにダイナマイトを仕掛けないのか？　そのほうがずっと怨みも晴らせるだろうというものだ。とはいえ、事実がそうであったとしても、ぼくを怨んでいる犯人というのはだれなのだろう？　ここで、ぼくの記憶の滑らかな深淵に呑みこまれてしまう。なにもわからない。ふたたび、（1）の疑問に戻ってくる。なぜ、デパートの内部でのみ、ぼくを爆弾事件に巻きこまなければならな

CamScannerでスキャン

いのか？　なぜ路上の人びとがぼくとすれ違いざま、ばたばたと倒れないのか？　なぜ地下鉄のなかで、ぼくの正面に座ろうとした人びとが吹き飛ばされないのか？　それではだめなのだ。事件はデパートと結びついている。だが、ぼくがデパートにいることがすべての原因であるとするならば、この虐殺ゲームを終了させるためには、ぼくがデパートを辞めればすむのではないか？　突然、疑問（6）が生じる。なぜクードリエ警視長はぼくにデパートの酸素を吸わせつづけているのか？　彼自身とおなじくらい狡猾な犯罪者を逮捕するというたったひとつの楽しみのため？　じゅうぶんにありうることだ。クードリエは静かなるマニアなのだ。挑戦を受けたと感じ、その挑戦を受けて立った。だが、この戦いで賭けられているのは、クードリエの命じゃない。ぼくなどよりずっと高い場所で、善玉と悪玉とがひと勝負演じているのだ。いまのところ、悪玉が四対ゼロでリードしている。

かくして、わが名探偵バンジャマン・マーロウ、もしくはシャーロック・マロセーヌがつぎからつぎへと自問自答を続けるあいだ、彼のズボンは夢見るように足元へ滑り落ちていった。舌を出したジュリユスの臭いにもかかわらず、ぼくの寝室の空気に、ジュリア叔母さんの香りを嗅ぎつけることができる（「バンジャマン、あなたってほんとうに心の底まで家族の感覚が染みついている人なのね。あなたは妹のクララが生まれて以来、彼女に恋をしているけれど、あなたの道徳観念のせいで近親相姦は禁じられているから、自分が叔母さんと呼ぶ別の女性と性行為をしているわけよ」）。ジュリアの香りが漂い、ぼくはちょっと笑う（「ジュリア叔母さん、君が森羅万象を説明するのをやめたら、いったい世界はどうなってしまうだろうね？」）ジュリユスの目がぼくの孤独なストリップティーズの進展ぶりを見守っている。ジュリユスはベッドの脚の下で横になっていた。ジュリユスはぼくを寝室に迎えるとき、もうけ

CamScannerでスキャン

っして全身でぶつかってはこない。一緒に散歩に連れていってやるといっても、飛び跳ねたりもしない。スープの匂いを嗅いで、それを胃に流しこむ。生きとし生けるものに、知恵の重みを宿したまなざしを送る。癲癇の国に旅したおりドスト氏と出会い、フョードル・ミハイロヴィッチがジュリユスにすべてを説明したのだ。それ以来、この老犬ジュリユスはぼくたちに大人びた態度を見せるようになった。奇妙な感じだ。その舌を出した顔つきは、まぎれもなく子供の顔のように見えるからだ。だが、あいかわらずひどい臭い！　彼があらたに獲得した知恵をもって、自分の体を洗うすべを教えこむことがぼくにできたら……。

「ねえ、ジュリユス、どう思う？」

ジュリユスは目やにをためた目でぼくのほうを上目使いに見たが、そのまなざしには、犬の究極の知恵はけっして体を洗うなと教えている、と書かれてあった。

「好きなようにしろ……」

そして、おねんね。まったくもって疲れる一日だった。だが、シーツのなかに滑りこむまえに、最後の驚きが待っていた。ベッドカバーを捲ると、枕の下に、便箋が一枚挟まれているのを発見した。なんだろう。この驚きの意味は？　愛の告白か、宣戦布告か？　ぼくはその紙片を親指と人差指で摘みあげ、枕元の電灯に近づけ、テレーズの筆跡であることを確認した。テレーズはあの聖なる竜巻が荒れ狂った日以来、ぼくにひと言も口を利いていなかった。それは完璧な線を描いた、まったく癖のない、会計係の軍曹のような筆跡で、第三共和国の小学校の書き方の先生から学んだものにちがいなかった。まず不安が起こり、ついで微笑みが浮かんだ。テレーズはぼくと停戦協定を結ぼうといっているのだ。予想外のユーモアをふくんだ調子に驚いたが、彼女はつぎの競馬の三連勝式に予想を立て、ぼくにこっそり教

CamScannerでスキャン

えてくれた。つまり、クララがぼくのいったことをそのままテレーズに伝えてくれたのだ。

「大好きなバン、この次は、28か、3か、11か、7。28の確率がすごく高いわ。キスを送ります。あなたを愛するテレーズより」

OK、テレーズ。明日から、このなかの三つの数字に賭けることにしよう。クララの写真がついに売れるようになり、テレーズが年に一度宝くじを当ててくれたら、ぼくは金利生活者の美しき人生を送ることができるようになるだろう……（結局、ぼくの野心はたったひとつだ。家族の収益で暮らすこと。献身的に働くのをやめて、投資生活に入ること）。

そう思いながら、眠りに就いた。だが、まもなく目が覚めてしまった。いくつかの疑問が忍びこみ、それが徐々に明確な形を取り、つぎつぎに浮かんでは、陰険なロンドを踊り、ぼくの頭に灯をつけてしまったのだ。意識が完全に目覚めてしまう。ナイトテーブルの引出しに隠した写真のことをふたたび考えていた。だが、今回は恐怖の念に駆られたわけではない。ひとつの手がかりとして思いだしていた。いや、唯一の手がかり。テオはそれを警察に隠そうとした。テオを裏切るつもりはないが、手がかりを隠したことで、ぼくたちが危険な賭けに手を出したことは彼に説明しなければならないだろう。証拠の隠滅はどのくらいの罪になるのだろう？　捜査の妨害、もしかしたら共犯になるのかもしれない！　テオ、テオ、あの写真を刑事たちに見せないでいると、ひどい目に会うかもしれないぞ。ぼくはこのすてきな街の一酸化炭素と地を這う鉛が好きなんだ、テオ、それを奪われたくはないんだよ。それなのに、このぼくはなんでこんな写真を預かったんだろう？　テオが家に帰ったとき、トラブルに巻きこまれないように？　いや、十分な理由にはならない。もっとよく調べるために預かったのだ。そこに、なにか臭いものを嗅ぎつけたからだ。いつもの直感で。ぼくの素晴らしい直感。ミス・ハミルトンの心にぼく

への愛情を見てとった直感だ（やれやれ（マンマ・ミーア）……）。そこで、ぼくは引出しから写真を取りだし、細かく調べてみた。それまで気づかなかったことだが、レオナールの左手にある子供の右足は切断されていた！
それから、テーブルの脚のところにあるこの堆積は何なのだろう？　衣服が積んであるのか？　いや、ちがうよ、テオ、別のものだ。それじゃあ、いったい？　さっぱりわからない。こうなると、部屋の奥の影にしか見えない。それにしても、この影のそこここに、もっと濃い影が落ちているように見える。
そうか、これは本当の影と……切断された肉の反映なのだ！

CamScannerでスキャン

26

小銃をしっかり握りしめ、国民遊撃兵たちは装甲トラックに飛び乗った。車の扉がばたばたと閉まる音が聞こえ、鋭く長いホイッスルの音が響き、回転灯の騒々しい光がガレージの出口からほとばしる。すでに、オートバイ隊員たちはマシンに打ちまたがり、突撃する軽騎兵のように丸い尻を突きだし、先頭に立って道を切り開いている。彼らの前からパリは消える。おびえた車は歩道に乗りあげ、歩行者はベンチの上に飛びすさる。三つの消防署から真赤な怪物たちが放たれ、そのクロム塗装がサイレンよりも激しく喚きたてている。

救急車たちも長い蒼白な叫び声をあげ、ヘリコプターのサーベルが首都の飽和した空気を切り裂いている。テレビ局のまん丸な建物は猟犬の群れを吐きだし、まもなく中継用トラックとアンテナだらけの車に続いて、新聞雑誌のお仲間たちが社の車で出発し、自由民間放送のおっちょこちょいたちまで、自前の原付き自転車で動きだした。それらすべての集団が、このうえなく職業的な興奮に駆られて、南へと流れていた。オピタル大通りから出現した装甲車と、ゴブラン通りから飛びだした消防車が、イタリー広場でぶつかった。青対赤。どちらかが勝ったというわけではなく、アスファルト上に同じ数のヘル

メットが転がった。救急車が整頓作業をおこない、もと来た道を引き返した。

南の高速道路上では、喚きたてる輸送車の群れがなにかを期待する雰囲気を作りだし、野次馬の群衆が殺到し、血に飢えた意気盛んなドライバーたちの巨大な渦が、結婚式にでも参列したように、クラクションを鳴らしはじめていた。パリから十七キロ離れていたが、一呼吸するあいだ、瞬く間に到着した。どこまで来て、どこに向かっているのか、自問する暇もなかった。それほどの切迫感が空気を緊張させていたのだ。**サヴィニー゠シュル゠オルジュ**。事件が起こっている場所の名前だ。より正確には、イヴェット川沿いの、多くのバラに飾られた美しい家での出来事だった。よろい戸が閉ざされ、家の周囲はがらんとして、死の臭いが漂っていた。待機の静けさ。だが、その静けさのなか、エリート狙撃隊員の影が、こちらの車の背後に隠れ、また、あちらの古い瓦屋根に身を伏せ、あるいは、トラックの幌のうしろにひそんで、全員トランシーバーをもった隊長に統率され、照準器付きのライフルの引き金に指をかけ、人間というよりも、ただ視線と弾丸と化している。そんな静けさだ。それまでサッカーのリズムでしゃべっていたテレビのリポーターは、いまは声をぐっとひそめ、囁くように、窓辺に花の咲き乱れるこの美しい家のなかに、デパートの爆弾殺人犯が立てこもり、年老いた自分の父親を人質に取っている模様だと語った。家のなかは小さな町全体を吹き飛ばすに十分なほどの爆薬でいっぱいであり、町の住民はこの家の周囲三百メートルのところまで退避させられていた。

この美しい家の映像が百台ものブラウン管上の彩色された振動波に映しだされるデパートでも、静けさがあたりを支配していた。棒立ちになり、口を閉ざし、画面に目を据えた従業員と客たちが、みんなテレビ機器の展示コーナーに集まっている。同一のイメージで覆われた四つの壁が、観客の期待に応える結末を約束しているようだった。いまは二十時十二分。事が起こったのは、二十時ゼロゼロ分だった。

警察は、事前に放送局に予告をおこなったのち、すべてのチャンネルでニュースが始まる時間に、直接行動を開始する作戦に出たのだ。というのは、容疑者はそれ以前から長いこと捜査されていたからだ。なぜもっと早く逮捕に踏みきらなかったのでしょうか？　リポーターの囁き声がそう問いかける。だが、答えは彼自身が用意してある。手がかりをかき集め、一連の証拠が有罪の推定を補強し、強行突破に十分になるときを見計らっていたのだ。いま、容疑者がこうした抵抗に出ることは、もっとも確かな自白をおこなったのと同じである。実際、バリケードを築くまえに、彼自身の口から有罪を認める叫びが、集まった群衆に向けて放たれていた。家を包囲するような動きがほんのすこしでも認められたら、家を爆破するとも脅していた。したがって、待機するほかなかった。ひたすら待つこと。とくに、ひとりの男は待つほかなかった。作戦の全責任がその肩にかかるたったひとりの男。そして、カメラは一瞬、小さな家の花咲く玄関から離れ、無人地帯をするすると横切り、この待機する男を映しだした。暗い緑の服を着た小柄な男。上着は体よりもいささか大きめで、どちらかといえば、フロックコートの一種のようにも見える。レジヨン・ドヌール勲章を一着におよび、丸まるとした腹が黄金の蜜蜂を散らした絹のチョッキを押しあげている。片方の手をチョッキの二つのボタンのあいだに滑りこませ、胃のあたりを軽く押さえているのは、おそらく重い責任で胃に穴を開けた潰瘍に悩まされているのだろう。もう片方の手は背中に隠れているが、たぶん、ぎりぎりと握りしめた指の様子を見せないためだ。

男の協力者たちは、彼から敬意にみちた距離をおいて立っている。男の黙考を妨げれば、部下といえども厳しい処罰が待っているのだ。予測を立てることの困難さの重みゆえか、頭をかしげ、眉弓の下の暗いまなざしは、そっと花咲く家に投げかけているのだろうと推測される。コンマの形をした黒く重い髪の房が、白く広大な額に読点を打っている。

CamScannerでスキャン

だが、最終攻撃の命令を下すのに何を待っているのだろうか、この男、クードリエ警部補は？　クードリエはひたすら待っている。経験から、急げば戦闘を失うことを知悉しているのだ。また、現在までの彼の成功、「栄光」とまではいわないまでも、この自分の功績が、好機をつかむ天性の勘によるものだということもよく知っている。その瞬間を逃さぬこと。まさにその瞬間を。彼の忠義はそれに尽きる。だから、待っている。カメラの視線のもと、協力者たちの期待の沈黙のなか、花咲く家を前にして、彼は待っている。携帯電話が差しだされるが、彼は身ぶりで拒絶する。取引きするような男ではないのだ。待つ男。そして、稲妻の男。突如、「孤独の男」の背中に波が走る。男は振り向かない。レリーフを施したピンクのコンバーティブル、直列6気筒、鮫みたいに危険なプジョー504が、狙撃陣と警官の群れを引き裂き、ため息のような風を起こして、「孤独の男」の正面で停止する。閉めたままのドアに手をかけることさえせず、そこから二人の男が飛び降りる。寄りそう豹のような跳躍。上司に近よる二人の顔をカメラが凝視する。背の小さい方の男は、拷問を受けるハイエナのように醜い顔をしている。もうひとりは、頭と顔にまったく毛のない禿の巨漢で、唯一の例外は、力強い顎に打たれた蝶番のような二つの揉み上げだった。小男はまるで浮浪者の身なり、巨漢はゴルフ・プレイヤーのようないでたちだ。

「ハイエナ・ジブに、揉み上げパット！」

「ご名答」

「棺桶エドよりも残酷で、ボヘミアの木偶よりも危険なんだ！」

「そのとおり、よくわかったな」

「で？」

「で？　ってなに？」

「で、続きだよ！」
「続きは明日、おなじ時間だ」
「えー、うっそお！　バンったらひどいよ、くそったれ！」
「なんですかあ？」
「続けてよ、ねえ、このままってのはないよ！」
「ぼくがどんなにくそったれかを知りたければ、学習ノートのおさらいを始めたっていいんだぞ」
（ううっ……とためらい）
そして、ジェレミーはクララのほうに向きなおる（いざという場合には、五歳の幼な子の微笑みを再現する能力を発揮できるのだ、こいつときたら！）。
「クララ、なんとかいってやってよ」
クララの声。
「続けて、バン……」
というわけで、ぼくの権威のトーチカはあえなく木っ端微塵になる。

「で、二人組の刑事のうち、ちびで醜い方が（どちらが残酷かはとてもいえないが）「孤独の男」の耳元に身をかがめる。囁きが聞こえ、警視長の顔に微笑の影が走る。その影には、勝利の確信が読みとれた。クードリエ警視長が手を挙げて、指を弾くと、献身という名の魔法の箱から出現するように、忠実な部下カレッガがあらわれた。
一瞬、すべてのテレビのブラウン管がぼやける。ふたたびリポーターの顔が映しだされる。この包囲

戦の長期化は必死でしょう、とリポーターは説明し、その間テレビの視聴者にペルティエ博士の話を聞くようにと促した。博士は世界的な名声をもつ精神医学者で、爆弾殺人犯の性格的特徴を明らかにしようというわけだ。リポーターがゲストのほうを向き、ゲストの顔がブラウン管に浮かびあがる。すると、フランスのすべての若い娘と、その母親たちまでが、心を揺り動かされる。ペルティエ博士はまだうら若い青年で——知識が若さのもとになるというのなら話はわかるが——、蒼白く、繊細きわまりない美貌の持ち主だった。穏やかな調子の甘い声で語りかけ、その声の非常な深みは、夜間警備員ストジルコヴィッチのそれを連想させた。彼はまず、犯人の大いなる知性に讃辞を捧げたいといった。同じ現場で、同じ方法をもって、同じ犯罪を何度も繰り返しながら、一国全体の警察をかくも長い期間にわたって挫折に追いこんだ犯人は、犯罪年鑑を総ざらいしてもいまだかつて記録されていない。そう語りながらペルティエ博士が静かに微笑んだため、視聴者は、彼が凶悪な犯罪者について語っていることを忘れたほどだった。「けれども、この知性の高さに私は驚きませんでした」と博士は続ける。「というのも、私はこの人物をよく知っているからです。子供のころ、小学校の机に向かった何年もの歳月、彼はただの一度も、クラス一番の成績をほかの生徒に譲りませんでした。当時、彼と私は、小学校のみが引き起こしうる白熱した戦いを演じていたのです。そして、今日私が得た社会的地位は、彼に対する競争意識の賜物といってもよいでしょう。したがって、この昔日の友にたいして、私から道徳的な判断を期待しないでいただきたいのです。私は、自分の能力の許す範囲で（といっても、その能力が今日でもなお、彼のそれに遠く及ばないことは確かなのですが）、一見常軌を逸した彼の行動の原理について、説明をおこなうにとどめたいと思います」

「クララ、コーヒーをもう一杯くれないか」

ジェレミーとちびの叫び。

「あとで！　パン、続き。お願いだから、続き！」

「コーヒーを飲むだけじゃないか。そんなに急かすなよ！　それに、もう終わりなんだし……」

「終わり？　どんな終わり？」

「どんな終わりになると思う？」

「警察がバズーカ砲で家を吹き飛ばす？」

「そのとおり、家にあった爆弾全部で、サヴィニーの町は地図から消えてなくなるんだ。警察の勝ち！」

「地下道から家に忍びこんだんだ！」

「ちび、おなじ話のなかで、そんなに何度も地下道を使うわけにはいかないんだよ。飽きちゃうだろ」

「じゃあ、どうやったの、バン？　コーヒーを早く飲んじゃってよ、もう！」

「揉み上げパットとハイエナ・ジブはすごくひねくれた連中で、彼らが計画したとおりに事は運んだ。この犯人は彼らほど狡賢いやつではなかったんだ。まったくの愚か者というわけではないが、ペルティエ教授が主張したほどの、神経細胞の王者というにはほど遠かった。そこで、この医者がテレビで自分の素晴らしい肖像画を描きだす言葉を聞いたとき、犯人は当然のことながら、それまで見張っていた窓辺を離れて、テレビに近づいた（閉ざされたよろい戸の背後に青い反射光を認めて、ハイエナ・ジブは、犯人が自分の武勇談をブラウン管で見ていると考えた）。それで、ペルティエ博士（断っておくが、こ

の男はぼくと同様、精神医学者でもなんでもなくて、二人組の刑事が無軌道な青春時代を送っていた時代の親しい友人なんだ)、つまりこの偽医者が、かつて犯人と小学校の同級生だったと語り、犯人のことをひどく賞めたりなんかしはじめたとき、犯人のほうは頭を絞りあげて、(1) 何年のときの同級生だったか、(2) どうしてこんなに良いやつを忘れたのか、と自問していたんだ。この自問が命取りになった。というのは、いいかい、犯人がその答えを見つけようとしていたとき、揉み上げパットの三十八口径が首筋に押しつけられたからだ。まさに同じ瞬間、ハイエナ・ジブの手錠が犯人の手首にかかっていたにちがいない」

「どうやって家のなかに入ったの、二人組は?」

「玄関の扉からさ、彼らの万能合鍵を使ってね」

沈黙。話がこの段階にさしかかると、いつも沈黙が訪れて、軽い不安をかき立てる。じっと目を据え、眉のあいだに皺を寄せて、子供たちがシナプスをフル回転させているのがわかる。自分たちの聡明さとぼくの才能にふさわしからぬ汚いトリックや、物語の安易さ(省略の濫用、曖昧なごまかし、適当なはぐらかし)がないかどうか、必死に考えているのだ。

「うまくやったね、バン。揉み上げパットとハイエナ・ジブって、ほんとに凄いよ」

ふーっ!

「でも、父親は?」

おっと!

「君たちやぼくと同じで、人質でもなんでもなかったのさ。そもそも、息子がデパートに爆弾を仕掛けたのは、父親が原因だったんだ」

「えっ！　ほんとに？」
三人ともびくりと飛びあがった。テレーズだけが平然と、控え目に、速記の仕事を続けている。
「この父親は発明家だった。そして、デパートの親会社の三つの大企業が、自分の発明を盗んだと主張していたんだ。それはまったくの嘘というわけでもないが、完全に真実というわけでもなかった」
「どういうこと？」
語り手の喜び、ここに極まれり……。
「うん！　ええと、この父親はまったく運のない男だった。素晴らしい品物をたくさん発明したのは本当だ（圧力鍋とか、ボールペンとか、そういったもの）、でも、それがいつでも、だれかが同じものを発明した数日後の話だったんだ（前過去形だぞ、ジェレミー、しかも直接目的補語が助動詞アヴォワールの前に置かれている）。まあ、一度くらいは仕方がない。最悪でも、二度までだな。ところが、この男の場合、それが一生続いたんだ。だれかの陰謀だと思っても無理じゃないよね。それで、ついに、これは三つの企業が仕組んだ罠だと息子を説得して、息子はデパートに爆弾を仕掛けることで、父親の復讐をしようと決心した。つまりは、そういうわけだ」
「ハイエナ・ジブと揉み上げパットが家に入ったとき、何をしてたの、その父親は？」
「父親も、テレビで、息子の友だちのペルティエが話しているのを見ていたんだ。もちろん、父親は息子が学校でそんなに優秀だったなんて聞いたことはなかった。だって、この問題については、父親と息子は怒鳴りあったという記憶しかなかったからね。それで、父親は否応なくテレビ放送に耳を傾け、びっくりしてしまい、息子に詫びを入れていたんだ。あれほど不当な態度を取りつづけた長い歳月について！　息子に詫びを入れながら、涙を流していた……」

CamScannerでスキャン

27

この話のあとで子供たちを寝かしつけるには、しばらく時間がかかった。物語の奔流が巨大な質問の水車を狂ったように回転させたからだ。ジェレミーはとくに、「犯罪者」（ジェレミーはこの言葉が大好きで、殺人犯という言葉より気に入っている）が、どうやってデパートの内部に爆弾を持ちこんだのかを尋ねてきた。ぼくは不意を突かれた。この窮地を救ってくれたのは、クララだった。とっさに、まだなにも究明されてはいないけれど、「犯罪者」の尋問に当たるのは、司法警察きっての若手捜査官、ジェレミー・マロセーヌとかいう人物で、その問題についても、すでに心当たりがあるらしいわ、と答えてくれたのだ。「だろうね」とジェレミーは呟き、満足げな微笑を浮かべ、それ以上なにも訊かずに、ベッドに滑りこんだ。

ジュリユスとぼくが戻ると、部屋はぴかぴかだった。ここ数年来、この部屋がこんなに清潔だったことはけっしてない。かすかにジュリユスの臭いが感じられたが、ジュリアの香りはもうどこにもなかった。よく理解できないボードレールのソネットについてぼくを問いつめるという口実で階上まで付いて

きたクララが、にっこり笑いながら、弁解した。
「パン、掃除をしなくなってから、もう随分になるもの。手が空いた時間を利用しただけなの」
すぐに写真の記憶が蘇ってきた。昨夜、枕元のテーブルに置きっ放しにして、今朝、引出しに隠しておくのを忘れたのだ。ちらっと見る。むろん写真はない。クララに目をやる。
涙が二粒震えている。
「たまたま見つけちゃったのよ、パン」
(なんてばかなんだ。あんなものを放りだしておくなんて……)
「パン、ごめんなさい、本当に、見たくなかったわ……」
二粒のきらめく涙ではなく、いまや激しいすすり泣きがクララの全身を揺さぶっていた。ぼくは間抜けにも、そのすすり泣きが、恐怖の記憶によるものなのか、それとも、秘密を覗いた恥によるものなのか、などと考えていた。
「パン、なんとかいって……」
もちろん、なにかいうべきだ。
「クララ……」
ほら、なにかいった。ぼくが涙を流さなくなって何年になるだろう? (ママンの声が聞こえる「パン、お前はけっして泣かないのね。ともかく、お前が泣いたところは一度もみたことがないわ、赤ちゃんのころから。泣いたことある?」——ないよ、ママン、仕事以外では一度も)。
「パン……」
「いいかい、クラリネット、これはすべてぼくの責任だ。あの写真は本来警察の手に渡っているべき

ものだ。テオが見つけたんだよ。あの写真をぼくに見せながら、テオも君みたいに泣いていたよ。だが、テオは、死んだ子供の仇を討った犯人を警察に逮捕させたくなかったんだ……。クララ、聞いてる？」

「バン……あの写真を写真に撮ったの」

（ブラボー、最高だ。すると、あの写真を見つけた瞬間からもう……）

それから二、三度鼻をすすって、クララは涙を拭いた。

道を歩いていて最悪のものとすれ違った瞬間、それを写真に撮るという習慣が（写真そのものにたいする情熱は別として）いったいどこから生まれたのか、とかつてクララに訊いたことがある。彼女は、子供のとき、自分の嫌いな食べものを兄さんが皿に盛りつけたときのようなものだと答えた。「わたしは兄さんに一度もそれが嫌いだといったことはなかったけれど、その食べものが嫌いなら嫌いなほど――例えば、苦みのあるアンディーブね――、ますますどうしてもじっくりと味わってみたくなるの。わかるためにね、いいこと？　味わったあとで、前より好きになるわけじゃないけれど、でも、なぜ嫌いかがわかれば、ぐずぐずいって兄さんを困らせずに、その食べものを食べることができるようになるの。つまり、写真についても、おなじことがいえるような気がする。それ以上うまく説明はできないけれど」

それで、クララ、あの写真を写真に撮ったいま、君はわかったかい？　なにがわかったんだい、可哀そうな妹？

「クララ、君があれを見たなんて、ほんとにひどい話だ」

「それがなにかの役に立てば、そうでもないわ」

ここで、クララは語調を変えた。もの柔らかだが、はっきりとした声に戻る。

CamScannerでスキャン

「引き伸ばしてみたの」
(まったく……)
「ある引き伸ばしでは、コントラストを弱くし、他のでは、強くしてみたの」
(そうだ、技術の話に限ろう)
「興味深いことが三つあったわ。見たい？」
「もちろん見たいよ！」
(あの白黒写真のなかに君をひとり取り残すわけにはゆかないじゃないか)
数分後、一ダースほどの引き伸ばし写真がベッドの上に並べられた。影の部分、テーブルの脚、床に積まれたもの、徐々に白っぽくなってゆく写真と、徐々に暗くなってゆく写真。そして、驚くべき事実。もはや二人の人間の体のいかなる部分も見えてはいない！　あたかも最初から写真に存在しなかったかのように。完全に消されている！　クララのカメラアイが、死んだ子供と殺人者以外のすべてを完璧に捉えているだけに、それは驚異だった。天使のまなざしによって、恐怖のなかの恐怖が消えてしまったのだ。そしてクララは、ほとんど謎なぞをするような楽しげな口調で、こう尋ねた。
「バン、テーブルの脚のところに積まれたみたいなもの、なんだと思う？」
「おなじ質問をテオともしていたんだ」
「よく見て。なにか思いだせない？」
「クララ、頼むよ、なにを思いだせっていうんだい？」
「見て……」
彼女はカバンから赤のフェルトペンを取りだし、子供のように一所懸命に、テーブルの下に積まれた

影の塊が部屋の闇に溶けている輪郭をたどっていった。そうして、彼女はひとつの形を描きだす。尖った部分と丸い隆起が一本の輪郭でつながってゆく。曲線がぐるりと回ってゆくにつれて、その形には、意味が、ぼくもよく知っているある意味が生じる。膨らんだ腹、固く盛りあがった首筋、尖った耳、ピカソのゲルニカを思わせる、ぽかんと開いて舌を垂らした口、脚の一部分、犬のシルエットだ！

「ジュリユス？……ジュリユスじゃないか！」

時空にシンバルが響きわたる。

「この写真でジュリユスは何をしてるんだ？」

「もちろんジュリユスじゃないわ。ほかの犬よ、バン。でも、ジ、ュ、リ、ユ、ス、が、硬、直、に、陥、っ、て、い、た、と、き、と、同じ状態の犬よ！」

いまや、わが妹の興奮には、コカインを吸ったシャーロック・ホームズが感じられた。

「そこでよ、バン、もうひとつの事実の発見に導かれるの！」

「導いてくれ、クララ、導いて」

「この写真に撮られた光景はデパートのなかのもので、まさにジュリユスが発作を起こしたのと同じ場所なのよ」

「どうしてそんなことが言えるんだ？」

「その場所の前を通りかかったとき、ジュリユスはなにかを嗅ぎつけたにちがいないわ……」

「まさか、だってこの写真は少なくとも二十年は前のものだよ！」

「四十年以上前よ、バン。四〇年代のものだから。この種類の断裁法は五〇年代以降はもうしていないの！　正確を期したければ、薬品の老化度で確認することもできるわ……」

なんと、わが最愛の妹は、警察の鑑識係になっていたのだ。
「でも疑問があるの……」
「なんだい？」
「チェスのゲームの後で、ジュリユスが兄さんをデパートに迎えに行ったのは、あれが初めてじゃないでしょ」
「うん、なぜ？」
「どうしてあの夜になって初めて発作を起こしたのかしら」
思いだした。ゲジゲジ眉毛の意地悪な男が、食堂の扉を通らずに、階段を降りろとぼくに命令したのだ。
「いつもは別の道を通っていたからだよ。あの通路を通ったのは初めてだったんだ」
「じゃあ、発作が起こったのは、おもちゃ売場の前だった？」
そこで妹を見た。まるで妹がぼくに向けて恐怖を放ちはじめたように感じられたのだ。
「どうしてわかったんだ？　その話は一度もしたことがないのに！」
「見て」
白っぽい引き伸ばし写真のうえで、フェルトペンがあらたな散歩を開始した。筋肉質の体のような形がひとりでに描かれ、軽く傾きながら、天井に向かって立ちあがってゆく。別の二本の線が頭巾のひだを描き、ついで、もくもくした髭があらわれる。百年以上も前からデパートのおもちゃ売場の上の階をがっちりと支えている漆喰製のサンタクロースのひとつだ。
「デパートのほかの場所にサンタクロースはないのよ、バン」

CamScannerでスキャン

〈引き伸ばされて、写真は語る……〉

「クララ、それだけかい？」

「いいえ、レオナールはひとりじゃなかったの」

「すくなくとも、彼を写真に撮ったやつがいる」

「その人と、ほかに何人か」

ふたたび赤の小さなフェルトペンが、古い写真の闇の深みをたどり、三、四人の輪郭を浮かびあがらせる。そして、おそらく、フレームの外にも数人。

「OK、クララ。このくらいでいいだろう。この引き伸ばしは全部しっかりと隠しておいてくれ。で、ぼくは明日になったらすぐ、写真をテオに返して、警察に送るようにさせるよ」

CamScannerでスキャン

28

「冗談じゃない、死んだほうがましよ！」

こういいながら、自制しようと努めたにもかかわらず、あまりに強くフォークで皿を叩き、大声を出したので、すぐそばにいた客はびっくりして飛び上がり、こちらを振り向いた。

「どうしたっていうんだ、テオ。見ろよ、皿を割っちゃったじゃないか」

「パン、二度といわないで。この写真は絶対にデカには渡さないわよ」

赤いチェックのナプキンのうえに、セロリのマヨネーズソースあえが石膏の流れのように広がっている。

「それがどんなに危険なことかわかっているのか」

テオは二つになった皿の破片をそっと接着しようとしていた。具合の悪いことに、皿とナプキンのあいだで、セロリがセメントの役目を果たしている。

「あなたにはなんの危険もないわよ。クララの引き伸ばしを捨てちゃえばいいんだから、それだけよ。わたしは……」

一瞬こちらに目を向ける。

「わたしは、わたしの勝手にするわ」

この言葉を歯のあいだから凶暴な囁きとして噴出させ、不吉な写真を財布にしまった。今度は、ぼくが疑問符をかかげて彼を見すえ、先夜の質問を彼に訊きかえす番だった。

「テオ、君はこの爆弾事件に関係してるのか」

「もしも関係してたら、この写真をあなたに見せるはずがないでしょ」

答えはまったく自然に出たし、じっさいテオのいうとおりだった。彼がほんとうにこの事件に関わりをもっているのなら、ぼくの鼻先に証拠を突きだして、ぼくを巻き添えにする必要はないのだ。

「だれが犯人か知ってるのか？　だれかをかばっているんじゃないだろうな」

「だれが犯人か知ってたら、レジョン・ドヌール勲章に推薦してるわよ！　バスティヤン、もう一枚お皿をもってきて、最初のを割っちゃったの！」

このテーブルの受持ちのウェイター、バスティヤンはこちらに身をかがめて、にやりと笑った。

「夫婦喧嘩？」

ここ数か月、このばか男はぼくたちをカップル扱いしていた。

「下らないことをいってないで、もっと頑丈な皿をもっておいで！　セロリのマヨネーズソースあえはぬきよ！　セロリのマヨネーズソースあえなんか発明したご立派なフランス人て、いったいだれ？」

怒鳴りつけられたバスティヤンは、テーブルを拭きながら文句をいった。

「注文したのは、あんたじゃないか！」

「そう、わたし。どんなものかと思ったの！　実験精神よ！　人生には、この目で実際に確かめたい

CamScannerでスキャン

って時があるの！　でしょ？」
その口調には底意地の悪さが感じられた。
「ちがう？　ちがうの、ちがわないの？　わかったら、ポロ葱のフレンチドレッシングあえひとつ！」
ぶつぶついいながら、バスティアンの巨大な尻が遠ざかってゆく。
「テオ、なんでこの写真を警察に送るのが嫌なんだい？」
テオの怒りは方向を変え、ぼくを戸外へ放りださんばかりの勢いだった。
「たまには新聞を読む？」
「いちばん最近読んだのは、レオナールの死亡記事が載った新聞だ」
「結構！　読めたのは運がいいわ。初版の一部よ。第二版は押収されちゃったからね」
「押収された？　なぜ？」
「死人の家族よ。プライヴァシーの侵害でね。タイミングよく告発の電話がかかって、売りに出されていた号は、二時間もしないうちに全部回収されたの。すかさず新聞の編集部に対して仮処分が申請されて、裁判ではレオナールの家族が勝ったわ。今朝のことよ」
「そんなに速く？」
「そんなに速く」
巨大なバスティヤンが音もなく忍びより、ポロ葱のフレンチドレッシングあえがテーブルに現われた。
「でも、写真を渡したくないという理由の説明にはならないよ」
テオは呆れかえったという目つきをした。
「頭にセロリのマヨネーズソースあえでも詰まってるの？　パン、きれいな尻をした悪党どもの権力

がどんなものか、わからないの？　あの豚野郎がよがってる写真を四枚載せた新聞を差し押さえるのに、電話一本でOKだったのよ！（あなただって、あの四枚のスピード写真になにが写ってるかわかったじゃないの？）。そのあとスピード裁判に持ちこんで、新聞に強烈な反撃を喰らわせたわけ。いまわたしが写真を警察に渡したら、どうなると思う、ええ？」
「事件はもみ消される」
「見計らったように上から命令が来てね。思ったほどボケてはいないようね。どう、その続きを聞きたい？」
急に身を乗りだしたので、ネクタイが皿に浸った。
「続きはこう。あの黄金の手がかりを手に入れれば、サツでも大事なことに気がつくわ。『動機』よ。これまで連中は頭のおかしい無差別殺人者という考えに引っぱり回されていたけれど、いまや明白になる。悪魔もどきの屑野郎の一団がいて、人間をいけにえにする腐った黒ミサをやらかしたこと――あるいは、まだまだやらかそうとしていること！――、そして、この儀式では子供にたいする一連の拷問が添えものになっていること。子供よ、子供！」
テオはいまやぼくの前に立ちあがり、拳をテーブルに叩きつけた。皿から出たネクタイがインドの魔術師の紐のように彼の首まで立ち上っている。激怒のあまり全身で叫んでいるように見えたが、彼は呟いているだけで、瞼の縁ではふたたび涙が震えていた。
「テオ、ネクタイを見ろよ。ともかく、座ったらどうだい……」
「突然、デカたちはすべてを理解する。だれかが、その人殺しの儀式に狂った悪党どもを探りあて、ひとり、またひとりとぶち殺している最中であり、デカたちが急いで手を打たなければ、全員をやっつ

けるだろうとね。もちろん、この復讐者が自分たちに代わって立派な仕事をなし遂げていることには、デカたちだって満足していると思うわよ。でもね、警察っていうのは官僚制度よ。つまり、機能しなくちゃいけないわけ。わかるでしょ？　それにもうひとつ、機能的官僚といえども人間、わたしやあなたと同じ人間なの（まあ、わたしとはちょっと違うと思うけれど）。好奇心があるのよ、バン、好奇心がね。子供たちを喰い殺したやつのひとりでも生きて捕まえることができたら、十年分の年金だって投げだすわよ。そいつがどんな神経をしているか見てみたいの。知りたいのよ！　で、生きて捕まった人喰い鬼はどうなると思う？」

「残りの人生を穴のなかで過ごす」

「そのとおり」

テオは座りなおし、ネクタイをほどいて、丁寧に折りたたんだ。

「そのとおりよ。あまりに深いので、だれもなにも知ることのできない穴。裁判はなし。誓っていうけど、穴に直行よ。だって、レオナール家みたいに強力な電話を持った一族が、こんなスキャンダルで泥水をかぶるなんて問題外だからね」

「だけど、子供の家族は？」

テオはポロ葱のフレンチドレッシングあえをじっと見つめた。あたかもそれがこの人生で目撃したもっとも識別しがたい物体であるかのごとく、長い時間見つめつづけた。そして、物思いにふけるように、いった。

「ねえ、孤児ってものをどう考える？」

（「……パパもいなけりゃ、ママもない……」と頭のなかで不吉な鼻歌が聞こえた）

CamScannerでスキャン

「わかったよ、テオ。だれも探す人がいない」
「というわけですよ」
彼はまだ執拗に見つめている、葱を！……。
「ねえ、パン。孤児ってものは人を信頼しちゃうのよ。孤児の願いはただひとつ。ほかの人間を見つけること、キャンディをくれる小父さんに付いてゆくことよ。で、その小父さんたちは、まさに孤児に目がなかったってわけ」
テオの姿には、ぼくに語って聞かせた以上に、もうそのことについては考えまいとする絶望的な努力が感じられた。だが、彼の全存在がそこに固着してしまっているのだ。イメージと戦う男のイメージ。
皿の葱が、たったいま死んだか、まだ生きている名状しがたいものでもあるかのように、テオは用心深く、ナイフで葱を突っついている。
「わたしのいう『孤児』は、範囲が限定されているの。『見捨てられた者』っていうべきかもしれない。見捨てられた子供、世間からどうでもいいと思われ、彼らを保護していると思っている施設からも見放された子供。この素晴らしき世界には、そんな子供がごまんといる。別の虐殺を免れてきたアラブや黒人の子供、放浪するアジアの若者、家出人、逃亡者、路上に自然発生した世代。どうぞ自由にご処分くださいってなものよ……写真はサツには渡さないよ」
テオが葱をひっくり返すと、溺死者のような色の濃さに染まっていた。
「それから、いっておくけど、サツはまもなく、われらの復讐者を捕まえるでしょうね。やつらだって馬鹿じゃないし、いろいろな手段を持っているし、無差別殺人という間違った仮定をそう長くは守っているはずがないわ。これはスピードレースなの。怪傑ゾロのリードは半馬身、いいえ、それほどもな

いかもしれない。たぶん全員を始末する時間はないでしょうね。だったらなおさら、警察の手助けなんかご免よ。すくなくとも、わたしは絶対にいや！」

そして、皿に横たわった青白いものに最後の一瞥を投げる。濃い油の真珠母色に緑と白が溶けあい、そのドレッシングに、不動を保つ二つの目が反射している……。

「お願い、バン。もう行きましょう。この葱は死ぬほどまずそう」

29

それは、今朝、ルーナから電話がかかる直前のことだった。ぼくはレーマンのオフィスを出て、二階の書籍コーナーに立ち寄り、一見くだらないことを調べたのだが、それが捜査を新たな局面に導き、この本のページの無駄使いを節約させる結果になった。

ぼくはリソン老人に、いつからこのデパートで働いているのかを訊こうと思っていたのだ。

「今年で四十七年になりますなあ！　文芸防衛のために戦い、ごく当たり前の本しか売らなかった四十七年間。幸いなことに、《文芸書》の棚をつねに守りきりましたよ！」

この店で四十七年！　何歳のときに勤めはじめたかは訊かなかった。ぼくは本をひっかき回し、ページをばらばらと繰り、結局、リソン氏の誇りを正当なものだと認めることになった。『ウェルギリウスの死』に目を通し、『サラゴサ手稿』のハードカバーを通りすぎ、こう尋ねた。

「文庫で再版されてから、ガッダの本は何冊売りました？」

「『メルラーナ街の恐るべき混乱』？　一冊も」

「おやおや！　たったいま一冊売れたところですよ。ぼくがプレゼントにしますからね」

見事な白髪の下で、不満げな顔が、賛意を表している。「公正かつ厳密」な人柄なのだ。

「まあ、たしかに、あれなら書物と呼んでよいでしょう！　アレイスター・クロウリーに関する駄作と比べれば！」

「あれもプレゼントだったんですよ、リソンさん。人の趣味はどうにもならないものですから」

「私の意見をいわせていただければ、趣味にも許容限度がありますよ」

リソン氏がぼくの買物を小さな包みにしているあいだ（まるで永遠を相手に仕事をしているようだ）、ぼくは本題に近づいた。

「休暇は取らないんですか。いつでもこの売場にいるようにお見受けするんですが」

「ヴァカンスというものは、あなたがたのようにせっかちに動き回っている世代には必要なものでしょうが、私はまったくのんびりとやっていますからな、店が休むときだけ休めば十分なんですよ」

チャンスだ。すぐに飛びついた。

「で、店は何回休みました、この四十七年間に？」

「三回。四十二年に一度、七階を増築した五十四年に一度、六十八年のあのドタバタ芝居のときに一度」

（五月革命の「あのドタバタ芝居」……）

「四十二年に休んだのはなぜだったんです？」

「経営陣、管理部門の交替。いわば、経営精神の変化です。前の取締役会は、こういってよければ、ユダヤ人主体でした。ところが、当然のこととして、真のフランス人がどんな権利を奪還すべきか、みんなが意識しはじめる時代を迎えたんです！」

（はあ？）
「店が休んだのはどのくらいの期間ですか」
「たっぷり半年。『お偉がた』が揉めていたんですな。だが、歴史が裁きをつけてくれた。神に感謝すべきでしょう」
（神がいるなら、しかるべき時にあんたを糞まみれにしてくれるでしょう、この大ばか野郎）
「六か月もほったらかしで？」
「どぶ鼠どもが店を荒らしに来ないように、ヴィシー政権の義勇軍が立派に守ってくれましたよ」
（これまで、このごみ老人を、やさしくて感じのいい人間だと思い、ぼくにはいない祖父のように感じていたのだが、この愚劣な思い出話ときたら……）
可哀そうなガッダを奪いとり、この本を消毒しなくちゃなと思いながら、ぼくはいった。
「リソンさん、ほんとうにありがとうございます。また機会があったら、話をしに来ますよ」
「楽しみにしていますよ。礼儀正しい若者はめったにいなくなりましたからな」
揺り戻しが来たのは、エスカレーターに乗っているときだった。炎の剣に頭を貫かれ、圧倒的な痛みが走る。チェスター・ハイムズの本から抜けでたようなグロテスクな情景が浮かびあがる。こめかみにナイフを突き立てられ、その刃が頭の反対側から飛びだした黒人の大男がニューヨークの闇を疾走しているというものだ。それから痛みは鎮まり、耳の聞こえない状態が再来した。ざわめきも、BGMも、なにも聞こえない。だが、もう遅い。この役立たずの聾状態は、ぼくの夢見た祖父が昔を懐かしんでいるときに起これればよかったのだ。ちくしょう、脳髄の格好をした糞の包みを頭に乗っけていながら、ど

うしてあの人間の屑はガッグやブロッホやポトツキを愛し、アレイスター・クロウリーについてぼくと意見の一致を見ることができるのだろう？　いつになったらぼくは、なにかをまともに理解することができるようになるのだろう？　それはともかく、年代は手に入れた。一九四二年。デパートでなにかが起こったとするならば、それはこの年の六か月間に限られる。昼か、夜か。写真を見るかぎりでは、夜だろう。そう、夜だ。ヴィシー政権の民兵に守られたデパートのなか。

そのとき、ついに彼らを見つけた。

ぼくをつけている人間カメラたち。

クードリエ警視長の四つの目。

あまりにも簡単にそれとわかったので、どうしてもっと早く気づかなかったのか、じつに不思議に思われた。大男と小男。でかいのと痩せたの。洒落者と浮浪者。禿と毛むくじゃら。揉み上げパットとハイエナ・ジブだ。ほとんど。ともかく、現実と虚構の避けがたい距離は否定できないものの、そっくりなのだ。だが、それにしても、彼らに気づかなかったなんて！　この二人組に！　この異様な風体に！高級革製品のショウケースの後ろに突っ立っているのがでかいほうで、そこから十五メートル離れたところで、もう一方のハイド氏が、婦人用レースの陰でチョコレート・エクレアを食べている最中だ。あまりに唖然として、ぼくは二人から目を離すことができなかった。すぐに二人は正体がばれたことを悟った。彼らのほうもぼくに劣らずびっくりしたにちがいない。それで互いにしばらくじっと睨みあったすえ、急に大男が顔を真赤にして、ぼくに向かって頭をちょっと振り、ぼくもその合図の意味を理解した。むっと怒った顔をしているが、番犬のようにがっしりした体だ。ぼくは気を取りなおし、視線をそらした。もちろん、もうひとりの美食家とエクレアからも目をはずす。だが、事態はさらに入り組んで

きた。というのは、二人の背後の十メートルほど離れたところで、ぼくの真正面にあたる位置に、武器のコーナーがあるのだ。銃の棚に、警備用ピストル、動物解体ナイフ、超音波の呼び子、鋭い歯のついた罠など、素晴らしい小物がずらりと勢ぞろいして、狩人――自然を真に知り、真に愛する者！――の目を輝かせる。ところで、カウンターのところに狩人がいる――迷彩服を着たエコロジストのひとりだ。五十代で、二人のガキ、危ういほどに身綺麗な若者二人を引き連れている。三人で、青みがかった反射光を放つ散弾銃をたがいに手に取りながら、その銃の利点を話しあい、すばやく肩にあてがい、銃口を上に向けて短くカーブを描き、それから頷いてみせる。生まれたときから武器に精通しているのだ。店員は全身を笑みに変え、細かい話に入りこんでいる。これほど通のお客と話せることに夢中になって、陳列台全体に目を配ることを忘れている。そのとき、灰色のボール紙の箱に手が突っこまれ、ごく自然に、隠そうというそぶりさえみせず、二個の実包を抜きだしたのを、ぼくは見た。手の持主はテオの小爺のひとりで、実際に小さく、ほんとうに爺さんだった。もちろん、ぼくの知っている顔だったし、向こうもぼくの顔を知っていて、してやったりという笑顔で実包をはっきりとぼくに見せ（嘘じゃない！）、灰色の作業服の左ポケットに突っこんだ。この仕業はすでに三度見ている。最初は、カズヌーヴが戦車のAMX30を拾いあげている隙に、リモコン装置の黒い箱をかすめ取ったときであり、次がマッサージ用のバイブレーター……、で、三度目が……、いやちがう、三度目は、銅製の蛇口をいじっていた……。

急いで刑事たちに目を移すと、二人はぼくをじっと見ていた。そこにぼうっと突ったち、視線を宙に泳がせているぼくが、まるで阿呆の王でもあるかのように。小さいほうが眉毛をもちあげ、肩をすくめた。「どうした、今日のおつとめはお仕舞いかい？」そういっているようだった。ぼくはふたたび武器

の陳列台を見つめた。だが、小爺は消えている。ほっとした気分になった。

二分後、またもや耳が聞こえなくなって、地下一階の深海に潜り、航行を続けながら、ジミニ・クリケットを探していた。ジミニ・クリケット、そうだ、それがあの小爺の名前だ！　まさに、人好きのする、滑稽で、鼻が低く、歳をとりすぎてすべすべになった、バッタ（クリケット）みたいなジミニ・クリケットの顔！　依然として、わが二人組の刑事はすこし離れたところをパトロールしているが、ぼくの目は彼らのプロらしい華々しさに引きつけられてしまうのか、彼らを見てばかりいる。

ぼくと視線を交えるたびに、彼らのする顔つきといったら！　その二つの歪んだ顔には、この世のありったけの脅しがこめられていた。

だが、ジミニは跡形もなかった。はじめて、テオの操る灰色の作業服がどれほど数多くいるかを思い知らされた。そして、歳をとった彼らのたがいによく似ていること。無数の、似かよった孤独な連中。この現代の老人たちは、相互に接触しあうことがないのだ。そうだ、テオ！　テオに連絡を取って、君の被保護者のひとりが武器のスタンドから弾丸を盗みだしたぞ、と教えてやらなければならない！

テオは、壁紙のコーナーで、カスタフィオーレ夫人タイプの大柄で善良そうな女性にアドバイスしているところだった。この婦人の指先の多くの指輪が彼女の趣味を語り、テオの頭は何度も何度もうなずいていた。テオは彼女に壁紙を何枚も売りつけ、それを壁に何層にも貼りつけさせることだろう！

ぼくはテオのほうに船首を向けたが、その進路を半分も行かないうちに、同時に二つの出来事が起こって、航海計画は水泡に帰した。まず、十メートルほど先にジミニの姿がくっきりと浮かびあがり、彼は実包を開け、その火薬をドリルの替刃を収める金属製の筒に流しこみ、一方の目で仕事を確認しなが

ら、もう一方の目をぼくに向けて、共犯の微笑を送ってきた。ジミニの姿は、全員手仕事をおこなっているたがいによく似た五、六人の小爺たちの姿に紛れて、刑事たちが彼の仕事に目を止めることは不可能だった。つぎに、ぼくの肩が力強く叩かれ、それがぼくの頭のなかで「スポン！」という音になってはじけ飛び、最後に、栓の抜けたぼくの頭蓋全体に雷鳴のようなルシフルの声が響きわたった。

「おい、マロセーヌ、夢でも見てるのか？　五分も前からお前に電話だってスピーカーが呼んでるぞ！　妹からだ、緊急事態みたいだな」

「バン？」

「ルーナかい？」

「バン！　ねえ！　バン！」

「どうしたんだい、ルーナ。なにがあったんだ？　落ち着いて……」

「ジェレミーよ」

「ジェレミーがどうした？　ルーナ、頼むから、落ち着いて」

「学校で事故があったの。すぐに行ってちょうだい。バン……ねえ！　バン……」

30

「なんとも幸いなことに、弟さんはクラスにひとりでした」
(「なんとも幸いなことに……」)
中学校の中庭は、煙のいぶる一面の水溜まりと化しており、火事に抵抗したものすべての見るも無惨な屍骸が、そこに横たわっていた。その残骸のあいだを、ぶよぶよになった何本もの長いパイプが蛇行している。溶けたプラスチックの鼻を刺す臭いがまわりの湿った空気のなかに淀んでいる(「だけど、ほんとに耐えられないのは、大火傷した連中だよね……あの臭いは一度くっついたら取れないんだ……二週間も髪の毛が臭ってるから……」)。小柄な救急隊員の姿と声が頭に蘇り、ぼくの鼻孔が働きだし、いいや、この不愉快な臭いのなかには、焼けた肉の臭いは混ざっていないぞ、とぼくに説得をはじめる。
二本のノズルからの放水が、焼け焦げた残骸を水のなかに沈めた。三つの教室が全焼したのだ。
「プレハブの建材ですから……」
そう、張り子の紙でできたガラクタだから、屁のような火でも燃えあがるのだ。テーブルの脚や金属の骨組が熱の力で溶け、グロテスクな姿態で絡みあい、凍りついている。消防士にさえぎられて、現場

から距離を置いた生徒たちは、死者を悼む感情と、ふざけたい気分と、まだ生々しい恐怖の記憶とのあいだを揺れ動いている。
「幸運にも、休み時間の出来事でした」
（「幸運にも……」）
赤い消防車の一台がホースを巻き直しはじめた。スパゲッティを巻きとるフォークという馬鹿げた映像が頭をよぎった。
「あの子はひとりきりで……」
スパゲッティがイカ墨の黒ぐろとしたソースのなかを引きずられてゆく。イタリアのどこの地方の名物だったろう？……。
「われわれが気がついたときには、火の勢いは手をつけられる状態ではなく……」
「なぜあの子はほかの生徒と一緒に外に出ていなかったのでしょう？」
「さあ」
「さあ？」
「それはたぶん、おそらく、非常に独立心旺盛なお子さんでしたから」
（さあ、それはたぶん、おそらく……）
「火はほんとうにあっという間に広がって……」
そうだろう、そうだろう、わかっている、ほんとうにあっという間に、マッチのように。下手をすれば、このマッチは百人もの子供を丸焼きにしたかもしれないのだ。だが、「なんとも幸いなことに」、部屋のなかには、うちのジェレミーしかいなかった。

「なんとも幸いなことに、でしょ？」
「は？」
「あなたは『なんとも幸いなことに』とおっしゃいましたよね？　それに『幸運にも』とも……」
「許してくださいといえと？」
彼の瞳はにわかに眼鏡の大きさに拡大していた。ぼくは彼の前に立ちふさがり、思いきり身を乗りだしていることに気づいた。彼はソファにめりこんでいた。
すると、電話が鳴った。彼は急いで受話器を取ったが、ぼくから目を離さなかった。
「もしもし？　はい？　そうですが、はい？」
（「そうですが……」「なんとも幸いなことに」……「幸運にも」……）
「サン＝ルイ病院、はい、救急病棟ですね。もちろん、なんとお礼申しあげればよいの……」
彼が受話器を置く前にぼくは部屋を飛びだしていた。

サン＝ルイ病院にはローランが先に到着していた。ぼくが着いたときには、利発そうな目をした、茶色の髪の、小柄な医者と話しあいの最中だった。できるだけ遠くから彼らを観察して、その表情にあらわれているものを読みとろうとした。二人の本物のプロが話しあうとき顔に出す表情以外は読みとることができなかった。背の高い金髪の男と、茶色の髪の小男だが、最初の言葉を交わしあっただけで、親友同士といった感じに打ちとけていた。英知がもたらす友愛。そういったところだ……。だが、この光景はぼくをすこし安心させてくれた。ローランがこの医者と仲よくやっているとすれば、ジェレミーはちゃんとした看護を受けているということだ。

CamScannerでスキャン

「ああ、パン、マルティ先生を紹介しよう」
手を軽く振る。
「マロセーフさん、ご心配なさらずに。お子さんは大丈夫ですよ」
「子供じゃなくて、弟なんです」
「大丈夫、彼の容態が悪化するわけではありませんから」
ごく自然に、笑いもせず、ぼくを見つめながら、そういった。だが、その眼鏡の後ろには陽気な目の光があり、ぼくは大いに安心した。ぎこちなく微笑みを返したつもりで、ぼくは尋ねた。
「弟に会えますか」
「その顔つきを変えるという条件でね。彼の意気を消沈させたくはありませんからね」
面白い医者だ、このマルティは。つねに平然とした調子で話し、どことなく冗談めかしたところがあるが、ぼくが普段の顔つきに戻らないかぎり、ジェレミーには会わせてもらえないだろうと確信した。
「どんな具合か教えていただけ……」
「何種類かの火傷、右人差し指の切断、人生に対する恐怖。しかし、必死で気を失うまいとつとめています。看護婦たちを笑わせようとすることでね」
「指が取れた?」
「すぐ元通りにくっつけますよ、さっとね」
信頼とは奇妙なものだ。もしもジェレミーの頭が取れていたとしても、このはっきりとものをいう面白い小男が、その頭をさっと肩の上につけ直してくれるだろうという気がしてきた。専門能力の化身。それと、なにか他に、そう、人間性……。

「わかりました。こんな顔つきでいかがでしょう？」
医者はぼくの顔を一瞬凝視して、それからローランのほうに向きなおった。
「どんなもんでしょう、ブルダン？」

広い場所にジェレミーは裸でいた。体はまだら模様でおおわれ、その縁がかさぶたになっている。両唇と右耳はまがいもののような大きさに膨れあがっている。頭は丸坊主に剃られていた。ぼくが小さな無菌室に入ると、ジェレミーの係の看護婦は笑いころげていた。だが、近くに寄って見ると、彼女は同時に泣いていた。ジェレミーは身動きひとつせずに、ものすごいスピードでしゃべりまくっている。彼の体はじつに小さかった。ほんとうにまだ小さな子供なのだ。言葉の量は大人以上だが。

ジェレミーがぼくに気づくには、すぐそばまで近寄らなければならなかった。ぼくに気づくと、ジェレミーは笑った。だが、その笑いは苦痛のしかめ面に変わった。それからジェレミーは、用心しながら、顔の表情をいわば元の位置に戻した。

「やあ、バン。見てよ、棺桶エドみたいな頭になっちゃった」
看護婦が悲嘆と賞讃をたたえた目をぼくに向ける。
「バン、二人だけで話したいことがあるんだ」
そして、看護婦に昔からの友だちのような口調でいった。
「マリネット、本を一冊買いに行ってきてくれないかな？　この人が帰ったら、読んでほしいんだ」
彼女が本当にマリネットという名前かどうかは知らなかったが、彼女が黙って立ちあがったので、ぼくは扉のところまで彼女を送った。

「あの子を疲れさせないでくださいね」と彼女は耳うちした。「十分後には手術室に移るんですから」そして、やさしい笑顔でこうつけ加えた。

「麻酔をかけるときに本を読んでやりますわ」

一瞬廊下の光が射しこみ、扉はふたたび閉まった。

「さてと、二人きりになれたね、バン」

「ああ、そうだね」

「じゃあ、こっちに来て、座って。すごいニュースがあるんだ」

椅子を運んで、ベッドにつけた。ジェレミーはサスペンスを楽しむかのように、一瞬沈黙したが、我慢しきれなかった。

「やったよ、バン。見つけたんだ」

「なにを見つけたんだい、ジェレミー」

「どうやって『犯罪者』がデパートのなかに爆弾を持ちこんだかだよ！」

（なんともはや……）ちょっとのあいだ、聞こえるのは、彼の激しい呼吸とぼくの心臓の鼓動の音だけだった。それから、ぼくは尋ねた。

「どうやって？」

「持ちこんだんじゃない、なかで作ったんだよ」

（実際、座っていてよかった）

「ほんとに？」

快活な調子でそういうには努力が必要だった！

CamScannerでスキャン

「ほんとに！　試したんだ、うまくいくよ」

「試した？」なるほど、最悪の事態が近づいている。いまや親しいものとなった足どりで、最悪の事態が。

「バン、デパートには、パリを吹っ飛ばすのに必要なものだって、全部揃っているんだよ」

確かにそうだ。そうする必要があればの話だが。

「学校にもね」

続いて、沈黙……沈黙するほかないじゃないか！

「で、実験をやってみたんだ」

「くそっ、ジェレミー、どんな実験だ？　まさか……」

「授業中にだれにも気づかれずに、爆弾を作る実験だよ」

（確かにこう聞こえた）

「なんでもあるからね。例えば、塩素酸ナトリウムを作るのに、除草剤とか……」

かくして、立派に十二歳を迎えつつあるわが弟ジェレミーは、手作り爆弾の見事なレシピをぼくに披露し、みずからの発表にしだいに興奮を募らせるその声は、ぼくの記憶のなかのテオの声と重なりあっていった。「信じられる？　作業服の両ポケットに除草剤を五キロも詰めて一日中持ち歩いてた小爺がいるのよ！」

「落ち着いて、ジェレミー、もっと小さな声で話すんだ。疲れてしまうよ」

（それに、扉の反対側で人が聞いていたらどうするんだ、まったく！　弟が火事を起こしたのだ。ぼくの弟が放火魔だなんて！　そして、ぼくは保護者であり、教育者であり……）

「なにもかもうまく行ったんだ、バン。で、それを家に持って帰って、バンに見せようと思って雷管を外そうとした瞬間、その威力の『決定的な証明』が起こっちゃったんだよ、わかる？　あんちくしょうが手のなかで爆発したのさ」

（で、お前は自分の学校を火事にしたってわけだ、ジェレミー！　なんてことだ、**学校に火をつけたんだぞ！**）

「でも、結局、ぼくのいうことは信じるでしょ？」

初めて声が不安に震えていた。

「ねえ、バン？　ぼくを信じるでしょ、ね？」

沈黙。長い沈黙。ぼくは彼を見ていた。さらに沈黙。そして、睫毛の焦げた目から涙が転がり落ちた。

「そうか、信じないんだね。でも確かなんだ！　ねえ！　バンったら、ぼくが一度だって嘘をついたことがないのを知ってるでしょ……」

（エホヴァ、キリスト、ブッダ、アラー、レーニン、ナントカ、その他その他……ぼくがいったいあなたがたに何をしたというのでしょう？）

「ああ、信じるとも、ジェレミー。これがぼくのお話の最終章になるんだ。今夜その話をほかの妹弟たちにしてやるよ。デパートで作られていた爆弾の秘密、最高だ！　エピローグにふさわしい……」

31

わたしは生きて　死に　火と燃えて　水に溺れる
氷の冷たさを忍びつつ　熱に　焼かれる
人生は　あまりに優しく　あまりに酷い
大いなる苦しみに　歓びが　いり混じる

「だからクララ、朗読するときは、間を置かなくちゃいけない。音楽とおなじで、詩では、沈黙が重要な役割を果たす。沈黙は息継ぎだが、同時に、言葉の陰影になり、また輝きになり、それは読み手しだいなんだ。来るべき重大事を予告する沈黙はもちろん、あらゆる種類の沈黙があるんだよ、クララ。例えば、朗読を始めるまえに、君はヴィクトル・ノワールの墓の上にいる白い猫の写真を撮っていた。君が朗読を終えたあとで、ぼくたちが黙ったとする。その沈黙は前とおなじものだといえようか？」

「『いえようか』ですって、バンジャマン、『いえようか』？　どうであろうか……」

クララはやさしくからかいながら、ぼくの腕に腕を絡め、ぼくたちは陽のあたるペール＝ラシェーズ

墓地の散歩を続けた。たったいまクララは、猫のほとんどが黒猫か白猫であることをぼくに教えたのだ。はっきりと、黒か白。ほかの色はなし。ぼくは、十日前に指を接合する手術を受け、あさって家に帰ってくることになっているジェレミーのことを考えていた。また、ぼくの気分を晴らすために何度も一緒に夜を過ごしてくれたジュリアのことを考えていた（「いいえ、ぜんぜんとんでもないことなんかじゃないわ、バンジャマン。子供時代っていうのは本来実験精神にあふれているものなのよ。たしかに面倒なこともあるわよ、でも断じてとんでもないことじゃない。それに、あなたはそのことになんの責任もないんだもの。ねえ、リラックスして、好きなことをして、こんな理屈をこねてるわたしの口をふさいでよ……」）。またしてもジュリアの香りがぼくを守ってくれた。それから、あれ以来一度もデパートで見ていない小爺のことも考えた。彼は二人の刑事の視線がしだいに集中してくるのを感じているにちがいない。また、クララのことも考えている。彼女は明日バカロレアの試験を受けることになっているが、ルイーズ・ラベのこのソネットのことをあまり理解しているようには思われない。

「そうだ、ルイーズ・ラベだ。ねえ、ルイーズ・ラベのことに戻るけれど、そのあとの第二詩節を朗読してごらん、沈黙を大事にするようにして。そうしていただけると、試験官としては嬉しいんですがね」

嬉しさに　笑うとともに　涙にむせび
楽しみのなか　数しれぬ悲嘆に耐える
幸せは　過ぎ去り　とこしえに　続く
わたしは　枯れはて　また萌えいずる

「彼女はなにについて語っていると思う、クララ？　この全神経の震え、この振動、このショートの大花はいったい何だい」

「彼女は不安なんだと思う。不安で、同時に、自分にすごく自信をもっている」

「不安と自信、うん、かなりいい線までいってるね。次の行を暗唱してごらん、次の一行だけ」

かくて　たえず　愛の神に　引きずられ

「愛の神だよ、クラリネット。ぼくたちをこんな状態に引きずりこむのは、愛なんだ。たとえば、君の姉さんを見てごらんよ」

ここでクララは小道のまんなかでぴたりと立ちどまり、ぼくを写真に収めた。

「わたしが見ているのは、あなた！」

こう続ける。

「ルイーズって、正確には、どんな人？　たとえば、その時代のほかの詩人、ロンサールとかデュ・ベレーとかいった人と比べて？」

「彼女はルネサンスでいちばん完璧な存在、いちばん繊細微妙な詩であり、いちばん過激で野蛮な力業だった。彼女は剣を操り、男に変装して剣術の試合に出場した。城塞に突撃したり、ペルピニャンの攻囲戦にも参加した。そのあとで、可能なかぎりもっとも細い鵞ペンを削って、詩を書き、その時代のすべての詩を打ち負かしたんだ」

CamScannerでスキャン

「彼女の肖像画は残ってる？　綺麗な人だった？」
「彼女は『美しき網屋の娘』と呼ばれた」
かくて、たえず、われらの散歩はつづき、クララは写真を撮り、ぼくは彼女のために崇高な詩の解剖をおこなってみせ、彼女は驚きの視線をぼくに投げかけ、ぼくはクロスビーのキャシディみたいに、ぼくが教師だったら、ありとあらゆる悪しき理由でこの職業を好きになるだろうが、なかでもいちばんの理由は、こんなふうに素朴な讃嘆の目で見られることだろうな、と考えていた。ぼくはそうした賞讃のまなざしにまったく弱いのだ。

ジャーナリスト、ヴィクトル・ノワールの墓のつぎに抜擢されたのは、オスカー・ワイルドの霊廟だった。寝室に飾るために、テオが引き伸ばしを欲しがっているのだ。まかせてくれ、クララはテオにプレゼントするだろう。

オスカー・ワイルドをカメラに収めたところで、散歩は中止。ちびを学校へ迎えに行く時間だ。帰り道で最後に目に止まったのは、オカルト研究家アラン・カルデックの墓の前で暗い呪文をぶつぶつ唱えている三、四人の老婆の姿だった（どんな隣人たちの幸福を願っていたのだろうか？）。クララが老婆たちの姿を永遠に焼きつけようとしたとき、そのひとりが背をそむけ、ぼくたちにさっさと立ち去れと合図した。その刺のある仕草には、猫の爪がひゅっと空気を切るような音が続いた。
まさにその瞬間、デパートで四発目の爆弾が破裂した。
四発目の爆弾……。

ぼくの休みの日に！

それはまったく手作りの爆弾だった。導火線を繋いだ箱に詰めた銃砲用の火薬＋小型ガス・ボンベ（キャンプ用）＋……エトセトラを、テレビを利用した遠距離からの着火装置で作動させる。

小型爆弾。

それが、ドイツ製バス・トイレ設備のディーラーに陶器の破片をぶちこんだ。彼はデパートの最上階でおこなわれていたスウェーデン物産展のトイレで、心静かに小便をしていた（ぴかぴかのトイレ、ほんとうに真白で、ほんとうに頑丈――現に扉は吹き飛ばなかったし――完璧な防音設備だったのでだれも爆発音を聞かなかった――わずかに屁のような音がしただけ）。そこで小便をしていたこのディーラーが犠牲者だった。

便所の壁に自分で貼りつけた一連の古い写真を見ていたときのことだ！

「不幸なことに」一家の主だった（それも大家族）。すでに、何人かの孫もいた。

もしかしたら、切手のコレクションでもしていたかもしれない。

だが、純白の陶器の破片をぶちこまれた。鉄屑も。さらには、大粒の散弾も。

そして、裸で。

裸？

一糸まとわず。頭の天辺から爪先まで。要するに、全裸。

爆弾で屁を吹き飛ばされた？

いや、自分自身で。爆発の前に。

「だが、マロセーヌさん、私たちが切りたいのは、みんなが扉を打ち破って死体を発見するまで、あ

のスカンジナビア製のトイレの前で、銅像みたいにじっと突ったって、あなたの妹のテレーズがなにをしていたのか、ということなんですよ。それを私たちは知りたいんです」

ぼくもだ。

CamScannerでスキャン

32

「だから前にいったじゃないの、バン！」
彼女は立ったまま運命の神のように頑な様子で、いまにも辞職を申してる寸前に見える刑事三人に取りまかれていた。まわりでは、司法警察が蜜蜂の巣箱のような活動を繰り広げている——蜜蜂が瓶や缶の死骸のあいだで次から次へと煙草をふかしながらタイプライターを打つとしての話だが。
要するに、彼女、がりがりに痩せたわが妹のテレーズはこの貧乏くさいオフィスに立って、年齢の割には大きな体を縮めるようにしていた。どんよりと立ちこめる紫煙のなか、男どもに取り囲まれた妹を見ていると、肉親愛の衝撃に襲われるのだった。
「前になにをいったというんだい、テレーズ？」
揉み上げパットのそっくりさんは、テレーズを生のまま喰いつくしてしまいそうだった。歯が折れる恐れはあっただろうが。その相棒は、おそらくチョコレート・エクレアとともに過ごす別の人生を夢見ているのだろう。彼らは意気消沈の極みにあった。
「この一時間、それ以上なにも聞きだせなかったんだ！」

ぼくの知らない三人目の刑事がいて、この金髪の若者はほとんどべそを掻かんばかりだった。「兄さんのバンジャマンにしか話はしないわ。だって、兄さんには前にいったんですもの」

「だから、前に何をいったってんだい、くそったれ」と金髪青年が苛立ちをぶつけた。

そのうえ、若さのあまり、こんな言葉もつけ加えてしまった。

「な、ともかく椅子に座ったら？　淫売ちゃん」

というわけで、万策尽きはてて、三人の刑事は、容疑者ナンバーワン、すなわちぼくと、カレッガ刑事の到着を待たねばならなかったのだ。そのぼくがいまや、テレーズの前に立ち、兄弟愛にみちた微笑みを彼女に送っている。その間、ほかの刑事たちは家宅捜索をおこない、かつての金物店とぼくの部屋をめちゃくちゃに引っかき回し、ともかく見つけだしてやるぞ（なにを？）という狂った意欲に燃え、なかを調べるためにジュリユスの口まで開けてみたのである。

「前に何といったっけ、テレーズ」

彼女はびくりとして、いま目覚めたかのようにぼくを見つめた。

「28か、3か、11か、7で、『28の確率がすごく高い』っていったでしょ」

（ああ！　それじゃあ、あれは競馬の当たり番号じゃなかったんだ……）

「兄さんがまたわたしの言葉をないがしろにするといけないと思って、わざわざ紙に書いておいたじゃないの」

（「わたしの言葉をないがしろにする」か……驚いたな、この突然のユーモア感覚……）

「そのわけのわからない話はいったい何なのよ？　おれたちに催眠術でもかけてるってか？」

金髪青年は男っぽい奴を気取っている。二人の刑事は待っている。扉がばたんばたんと音を立てる。

罵りあいの声が飛びかう。司法警察。テレーズ、ぼくたちは司法警察の取調室にいるんだよ。
「テレーズ、この人たちにぼくらの話の内容を説明してあげてくれないか」
「わたしが正しかったことを認める?」
(来たぞ、これこそ「前置き」というものに他ならない)
「ああ、君が正しかった、認めるよ、テレーズ」
「それなら、この方がたに説明してさしあげるわ……」
この言葉に周囲は凍りついた。金髪青年がタイプライターのうしろに滑りこむ。四つ目の二人組の耳がかすかに大きくなる。
「簡単なことですわ、みなさん……」
彼女は立ったまま。それ以外は座っている。風景が一変した。彼女が「先生」で、彼らは教えを傾聴しようと張りきっているガキにすぎない。
「ほんとに簡単なことですから、あなたがたのだれだって同じ結論に達するはずです。すこし努力をすれば」
そう、彼女はこんな調子で始めるのだ。甲高い声で、警察学校の教壇に立ったような調子で。「死のテーマ系に関する占星学捜査実習」
煙草のけむりの広がりから骨ばった長い顔を突きだして、けむり以外の空気を吸いながら、彼女は説明を始めた。いつもと同じように、「この方がた」に、先の四人の犠牲者のホロスコープは、明らかに彼らが暴力的な死を迎えねばならず、また、その前日でもなければその翌日でもないまさにあの事件の日、まさにあの地理的位置、すなわちデパートのなかで死なねばならなかったことを示していると説明

した。
「じゃあ、ぼくの退職日はいつになる?」と金髪青年が茶化し、知らぬうちにジェレミーの役割を演じていた。
「黙ってろ、ヴァニ二」と揉み上げパットのそっくりさんがぼくの台本を借用したかのように叱りつけた。いい加減うんざりしていたのだ。
「いいからなんでもかんでも供述書に書きとるんだ、クラフティ菓子のレシピだろうとな。まもなくボスが来てくれるだろう」
こう丁寧に、ハイエナ・ジブはテレーズに話を続けるよう促した。
「五人目の潜在的犠牲者についていえば」とテレーズは続ける。「その人物の素性も年齢もわからないので、生年月日のパラメータから出発するわけにはいかなかったから、逆に、仮定上の到達点にもとづいて推論を始めるほかなかったの――この到達点はいわゆる『死』というものだけれど、これがじつは『通過点』にすぎないことはいうまでもないわね――それで、この土台の上にしっかりと構築された演繹的論証の基礎から、時間の流れを遡って、問題の人物の出現点――いわゆる『誕生』のことで、これもむろん単なる『肉体の顕現』にすぎないんだけれど――この出現点を明らかにしようとしたのよ」
クードリエ警視長の四つ目組は、あたかも壁など存在しないかのように前方を見つめたままで、一方、金髪青年は錯乱したようにキーを叩いており、タイプライターの色褪せたリボンは死神のように蒼白な文字を吐きだしつづけていた。テレーズは勢いづいている。
「ところで、先の四人の犠牲者の『肉体の顕現』の日付と、彼らのデパートでの『通過点』――つまり、いわゆる死――の兆しである惑星の通過の性質を見てみると、きわめて高い確率で、今月の二十八

日、始まりの土星のうえを土星が通過することによって、同じ場所で、暴力的な死が介入してくるにちがいないと思われたのよ」

彼女、テレーズは今朝早く起床し、デパートの入口をくぐる最初の客となった。半分眠ったような警官の検査の手探りに恐怖の震えを催し、まだひと気のない通路をさまよった。彼女を見る女店員たちのまなざしは当惑したものだったが、この霊感を受けた人物の姿を流しの万引犯とは見なさなかった。ついで、彼女は人ごみのなかに紛れこみ、群衆とともにデパートのどんなに人目につかぬ場所にも入りこみ、自分の演繹の正しさを立証する死の瞬間を待つとともに、推論が正確であることを恐れた。というのも、彼女はだれの死も望んではいなかったからだ、可哀そうに。「バン、わたしを信じるでしょ、ね。わたしが一度だって嘘をついたことがないのを知ってるでしょ!」(そう、病院のベッドでのジェレミーとまったく同じ言葉だ)「ああ、信じるよ、君はだれも傷つかないように望んだんだ、ほんとうに。続けてくれ、みんな聞いているから」。どこで死が襲いかかるかはわからなかったが、おぼろな光明のせいで(金髪青年がタイプライターから目を上げた。そう、たしかにテレーズは「おぼろな光明」といったのだ)、その瞬間が来たら、死の時間と場所がわかるだろうと確信していた。

そして、「その瞬間が来」て、寒い国からやって来たトイレの閉ざされた扉の前から動こうとしない娘が発見された。夕方のぽっかり空いた時間帯――各オフィスが閉まって客が最後に殺到する時間の十分前――だったので、事実上その階はひと気がなく、爆発音を聞いたものはだれもいなかった。

テレーズを発見したのは、売場主任だった。体は頑丈で大きいが、声のか細い男だ。彼女が途方に暮

れているのだと思って、彼女のためにトイレの扉を開けてやろうとした。中から鍵がかかっている。困って、売場主任は待つことにした。だが、この痩せたのっぽの娘が強直したような状態で、ひと言も口を利かないために、なんとなく恐くなったのだ。結局上司に報告する道を選び、その道は警察に通じたというわけである。

警察は扉をぶち破った。

陶器の破片をぶちこまれた死体。

血まみれの壁に何枚かの写真。

「でね、バン。彼が死んだ瞬間に正確な生年月日がわかったわ。一九二二年十二月十九日」

金髪青年のマシンガンが鉄のしゃっくりを起こして、急に止まった。自分の机のうえに開きっぱなしになったパスポートに仰天したまなざしを投げ、大声で読みあげた。

「ヘルムート・キュンツ、在仏ドイツ人。イダル・オーバーシュタインにて、一九二二年十二月十九日生まれ」

「マロセーヌさん、事態の重大さはおわかりかと思います」

もう夜も更けている。カレッガがテレーズを家まで送っていった。司法警察そのものがお休みの時間だ。ただクードリエ警視長のオフィスの可変抵抗器付きランプだけが、この役所がまだ思考を続けていることを示している。クードリエはデスクのうしろに座り、ぼくは彼の前に立っている。エリザベートも、エスプレッソコーヒーもない。「教育者」が、もうひとりの「教育者」と対面しているだけ。

「というのも、すべてが、あなたに不利な推定の網の目を細かく編みはじめているからです」

この瞬間の重要性を強調するために、光がわずかに強くなった（専用の梨形スイッチをこっそり足で踏むことによって、クードリエ警視長は光量を自在に調節することができるのだ。捜査官にはそれぞれこの種のトリックがあるのだろう）。

「私がその点を重視しないことが、私の部下たちには理解できないのです」

（テレーズ、なんとかしてくれ……）

「よろしければ、状況を要約してみましょう」

（よろしくもないのだが……）

クードリエは八点に要約した。われらの薄明に落ちたこの八点は、八つの告訴箇条といってもよかった。

（1）この七か月間、未知の殺人者に爆弾を仕掛けられてきた百貨店で品質管理を担当するバンジャマン・マロセーヌは、爆発が起こるたびに現場にいた。

（2）四度目の爆発では、彼ではなく、彼の妹テレーズが現場にいた。

（3）テレーズ・マロセーヌという名のこの人物は未成年であり、四度目の爆発の時間と場所を予知した——占星術に懐疑的な全捜査官を当惑させている事項。

（4）ジェレミー・マロセーヌもまた未成年者であり、手製の爆弾で中学校を炎上させたが、その爆弾の化学的成分のすくなくともひとつは、すでにデパートの爆弾殺人犯によって使用されている。

（5）魅力的な未成年者であるクララ・マロセーヌはマロセーヌ家に住む一番年上の姉にあたるが、彼女のカバンから発見された多くの写真から判断するに、デパート内部の地理的配置が大いにこの一家の関心を刺激していたらしい。この家族の住居を家宅捜索した際、何点もの写真の引き伸ばしも発見さ

れている。捜査令状発行月日……云々。

(6) マロセーヌ一家の最年少者はここ数か月「人喰いサンタクロース」の夢を見ている。この不吉な要因は、最後の爆発の現場に残された数点の写真（これまた不吉な）と暗合が認められる。

(7) まもなく成年になる看護婦ルーナ・マロセーヌの妊娠をきっかけとして、バンジャマン・マロセーヌと、三度目の爆発の犠牲者であるレオナール・マロセーヌ教授の出会いが実現した。

(8) マロセーヌ一家の犬（年齢、種別不明）さえも事件と無関係ではないらしく、この犬は殺人現場のひとつにおいて神経発作に襲われた（スウェーデン物産展の便所で発見された写真の分析により、すくなくともそのなかの一枚に、同一の症状に襲われた犬が写っていることが明らかになった）。

さらに光量が上がった。ぼくの前に腰をおろしたクードリエ警視長は、パリの闇のなかにただひとり照らしだされた人間のように見える。

「興味深いですな、とくに疲れきって、結論を出そうと急ぐ警察官の一団にとって」

沈黙。

「しかし、これだけではないのですよ、マロセーヌさん。ちょっと見ていただけますか」

裏打ちされた紙でできた、はち切れそうに膨らんだ封筒をぼくに差しだした。パリの有名な出版社のスタンプが押してある。

「一昨日受け取ったものです。この話をしたかったのですよ」

封筒にはタイプで打った二、三百ページの紙束が入っていた。「小説」と銘うってあり、タイトルは『**爆縮**』、著者のサインは「バンジャマン・**マロセーヌ**」とある。一目見て、事件が始まったときからぼ

くが子供たちに話してやった物語だとわかった。二週間前、ジェレミーの告白によって、その結末も付いていた。ぼくがあまりに呆然としていたので、クードリエはこうつけ加えるべきだと思ったらしい。

「あなたの家でオリジナル原稿も見つかったんですよ」

眠れるパリのうなり声がたえず聞こえてくる。

そこを、警察の車の立てる悲しげな音が、悪夢のようによぎってゆく。クードリエ警視長の机の上で、光がわずかに弱まった。

「わかってほしいのだが、君……」

(「君……」)

「君が使える切札はもう一枚しかないのだよ。私の個人的な確信。いうまでもないが、君は無実だという確信だ。だが、私の協力者のだれひとりとして、この確信を共有するものはいない。そうした状況下で、彼らに他の線を捜査させておくのは簡単なことじゃない。私の確信を補強するほかの事実がすぐにも現われないときは……」

この点点点が一個また一個と落ちてくる音が聞こえる！　そして、ぼくは力尽きた。テオには申し訳ない。日曜大工コーナーの老いたる怪傑ゾロにも申し訳ない。ぼくは、灰色の作業服の小爺(おじい)が武器売場から実包を二個くすね、その火薬をドリルの替刃の金属製の筒に詰めているところを見たといってしまった。

「なぜもっと早くいわなかったのかね？」

(実際、なぜだろう？)

「そうすれば、人ひとりの命を救えたかもしれないんだよ、マロセーヌ君」

（警視長殿、友人のテオがいるからですよ。わが友テオと、彼のボロ葱のフレンチドレッシングあえ）

「事情はどうあれ、調査してみよう」

なにか確信をもてないような口ぶりだった。実際、警視長はこうつけ加えずにはいられなかった。

「その人物が見つかったら、感謝してほしいものだ……」

33

「わかってるのか？　自分がやったことがどういうことか、わかってるのか」
「兄さんをびっくりさせたかったのよ」
「大成功、確かにびっくりしたよ！」
ぼくがどれほど怒り狂っていたか、説明するのは難しい。なぜ、よりによってクララが、ぼくのクララが、あの原稿をコピーして、十一もの出版社に送りつけるなんていうアイディアをひねりださなくちゃならなかったんだ？　十一！（じゅういち、だぞ！）
「そんなにぷりぷりすることないわよ。立派なできばえだったんだし、ね。刑事たちだって、あれを読んで大喜びしてたわ」
ルーナを絞め殺してやろうか？　母になる目前の半球を抱えて、その上で指を組みあわせ、上の空の調子で話に割りこんできたルーナを？　一瞬、ぼくはこの問題を検討した。
「とくにナポレオン・クードリエ閣下の描きっぷりには、みんなほんとに大笑いしてたわよ」
「ルーナ、頼むから、口を出すな。クララの説明を聞こうじゃないか」

(いったい、この子供たちの頭のなかはどうなっているんだ？　それに、若い娘たち。頭がどうかしてるんじゃないのか？　この連中は、単にママンをモデルにして作られたママンの子供にすぎないのか、それとも、全員おんなじなのか？　だれでもいい、哀れだと思って教えてほしい。教育学者でもだれでもいいから、説明してくれ！）事件の捜査はまだ終わっておらず、ぼくは数か月間も刑事たちに付けまわされつづけ、ジェレミーは中学校の校舎に火を放ち、その大惨事の翌日、クララがぼくの物語を十一の出版社に送りつけ（クララが！　十一社にも！）、ぼくの物語のエピローグは、ジェレミー式爆弾のレシピと、その非公式製造法の秘密を白日のもとにさらした！　**なぜだ？**

「あなたを慰めるためよ、バン」

（ぼくを慰める……）

「ジュリアに訊いてみたの。そしたら、彼女は賛成だって」

（幸いなるかな、ぼくの親しい取りまきにまたしても気違いがひとり増えたというわけだ）

「それに、とっても面白いもの。保証するわよ、バン。警官たち、ほんとうに笑い死にしそうだったんだから」

「そうかい、ルーナ。じゃあどうして出版社は出版を拒否したんだ？」

（ああ、わかってる、とくにクードリエ警視長がな……）

というのも、今朝クララが運んできた朝食の盆のうえに、最初の返事が乗っていたからだ。丁寧だったが、断固たる拒絶だった。署名者は、この傑作の「まぎれもない想像力の豊かさ」を認めるものの、「いささか混乱した構成」（よくいうよ！）を残念に思い、「類似した事件が新聞紙面等を騒がせている現在、かような作品の出版が果たして時宜にかなったものであるかどうか」疑問に感じ（ぼくだって、

CamScannerでスキャン

疑問に感じる)、いずれにしても、「この種の作品はわが社の出版方針に適合しない」と結論していた。
(かえって良かったが……)
「どうってことないわよ、バン。まだ十社も残ってるんだから！　あなたの悪いところは、自分のすることに一度も自信をもったことがないってことよ、わかってるでしょ」
ぼくのなかの野獣がびくりと動きを止めた。その目はルーナの腹に注がれる。「十日もしたら、さらに一人しょいこむことになるんだぞ」と野獣は考える。ぼくは歯を剝きだす。爪がぎらりと光る。まさにこの瞬間、テレーズが割って入り、類まれな心理学的洞察にみちた仮説を披露した。
「本が拒否されて傷ついちゃっただけよね、バン？」
(予定されていたぼくの安楽な引退生活は可能なのだろうか？)

以上が家庭の状況。仕事場に目を転じてみると、ジェレミーだったら、悲しむほどではない、というだろう。バッタ(クリケット)みたいな顔の老人はぱたりと姿を消した。刑事たちも。ぼくはひとりだ。地雷原にひとり。扉がかちゃりと閉まっても、陳列台からちょっと重い品物が落ちても、普通より大きな声で言葉をかけられても、ぼくは飛びあがる。ミス・ハミルトンの声でもそうだ。たえず気絶寸前の心境。重症のパラノイア。
お客様ご要望コーナーでは、お客の窮状を聞くたびに本物の涙が溢れでるし、ぼくを慰めるのに大変な時間を浪費しているレーマンは、ぼくがアル中になりかかっているという噂を流した。
「ほんとに？」とテオが尋ねた。「鼻から吸いこむやつのほうがいいんじゃない？　健康に悪いのはおなじだけど、気分はもっと良くなるわよ」

そして、サンクレールは理解を示した。

「君の仕事は気分を沈ませるものだからね、マロセーヌ君。要するに、いままでこんなに長いこと耐えてこられたことのほうが奇跡なんだよ。今後、新たな職務を探してあげようじゃないか。どうかね、一階の警備係だったら、気に入るんじゃないか。カズヌーヴ君を解雇することを考えているんでね」

なぜジミニ・クリケット老人は消えたのか。ぼくに仕事の現場を目撃されたから？　でも、いつでも目撃されるような大っぴらなやり方だったじゃないか！　ジェレミーの事故が起こらなければ、ぼくは彼の爆竹製造の全工程を見せてもらうことができたはずだ。ではなぜ？　クードリエの部下の二人組に見張られていることに気づいたから？　ところで、どうしてあの二人組まで蒸発してしまったのだろう？　なぜ、彼らの代わりに、壁の保護色をした別の二人組が登場しないのだろう？　このアパートのなかには、もうたったひとりの刑事もいない。テオも、彼の小爺たちも尋問されなかった。この孤立状態はいったいなんなのだろう？　なんの目的があるのか。爆弾が欲しい。爆弾が破裂してほしい。どこで、いつ、だれが爆発させるか、知りたいんだ！　なんとしても、この数か月というもの、ぼくに責任をなすりつづけてきた悪党の首根っこを押さえてやりたい！　そうする必要があるんだ。そうじゃなければ、ぼくがやつの代わりに牢獄にぶちこまれることになる。証拠はないが、手がかりと推定材料は山ほどある。ルーナの双子が成人するまで穴倉にぶちこまれるに十分な量だ。そしたら、だれが連中を育てるんだ、あのばかな子供たちを？　ジェレミーか？　ジェレミーだったら、彼らに中性子爆弾の秘密製造法だって教えてやれるだろう！　ママンは？　ママン……。

「ママン、ママン……」

CamScannerでスキャン

迷子のようにすすり泣いているぼくをテオが見つけたのは、ロッカールームに隣接するシャワー室だった。「ママン、ママン……」と洗面台の上でしゃくりあげ、冷たい水で顔をびしょびしょにして、泣きじゃくっていたのだ。「ママン、ママン……」という絶望の言葉に続いて、「父よ、なぜ我を捨てたまいしか」という連禱の文句が、教理問答に埋もれたあの時代から螺旋を描いて立ちのぼってくる。あのころ、ママンはパパの代わりに神様がいると教えてくれたものだった。「ママン、ママン、なぜぼくを捨てたの？」そして、かつてアマル老人の妻ヤスミナが慰めてくれたように、いまぼくを慰めてくれるのはテオだった。正義の裁きをおこなった小さな年寄りを密告して、ぼくが裏切ったテオ……。

「わたしの年寄りのひとりですって？」

「君の年寄りだよ、テオ。バッタみたいな顔で、スピード写真のボックスの爆発があった日、蛇口をいじっていた老人だよ。彼が君に声をかけてあの場所から遠ざけようとしたのは、爆発で君にけがをさせないためだったんだ……ぼくが彼のことを警察にばらしたんだ、テオ。ぼくに不利な推定材料があまりにも多すぎたから……」

彼の手が蛇口を締める。そして、わが友テオがぼくの顔を拭ってくれたとき、教理問答の思い出の影響が強すぎて、彼の動きは聖書から抜けでてきたようだった。そこでぼくの立派な顔がタオル地にさかさまに写ったら、聖書的エピソードとして申し分なかったのだが……。

「大したことじゃないわよ、バン。いずれにしても、スウェーデンの便所の写真で、デカたちは有力な手がかりをつかんでいたわけだから」

「あの老人の本当の名前はなんていうんだい」

「ぜんぜん知らない。名前をつけるのはわたしじゃないし。わたしが付けるのはあだ名だけだもの」

CamScannerでスキャン

「住まいは？」
「さあねえ……施設かなにかじゃない、それとも、どこかの家の使用人部屋とか」
「なぜ消えたんだろう？」
「あの歳の人間が消えるのに不思議がある、バン？」
「死んだと思うのかい」
「ありうるわよ。いつだって死ぬときは急よ。そして、永遠の顔に変わる」
「テオ、彼は死んではいけないいんだ！」
（「その人物が見つかったら、感謝してほしいものだ」……）
「べつの仮説も考えられるわ……」
「え？」
「彼が契約をやりとげたっていう仮説よ、バン。人喰い鬼どもを全員片づけて、自然のなかに消えちゃったのかもしれない」

CamScannerでスキャン

34

一週間以上ものあいだ、ジュリアとテオとぼくは、パリの第四世代の地下世界を探しまわった。テオは彼の老人たちに案内されて、ジュリアは持ち前の詮索好きの本能だけに導かれて、ぼくは替わるがわるテオとジュリアのうしろにくっついて。先頭に立つにはあまりにも力不足だったし、かといって、この探索のドラマから離れてじっとしているには、あまりに気が焦っていたからだ。救世軍のいちばん荒れ果てた支部から、はげしく営利的な目的を追求する多種多様の団体を経て、もっとも金持が集まるブリッジのクラブまで、そこには、ありとあらゆるものが存在した。人で満杯の共同宿泊所、トルコ式便所、透明なスープ、不透明な女経営者、各階に溜まった汚水。毎日テオは自殺を考え、ジュリアは次の記事を考えた。

「パン、発見したわよ！」

（わが老いさらばえた心に一条の希望の光）

「何、ジュリア、何なんだい？」

「世紀の麻薬取引。あの小爺たちは全員麻薬のディーラーの餌食なのよ！」

CamScannerでスキャン

（そんなことはどうでもいいんだよ、ジュリア。関係ないんだ。ぼくの、ぼくの、ぼくの老人を見つけてくれ。君の職業なんか放っといてくれよ、まったく！）

「狂ったみたいに麻薬を打ってるの、バン。でも理解してやって。なにもかも忘れたいのよ、未来さえも。それでも、忘れることができないのは、思い出がほしいからなの。麻薬の板挟みよ！」

彼女には完全に火がついていた。世界中のなにものにもこの火事を消しとめられないことをぼくは経験で知っていた。

「わたし以外にも前からその存在に気づいていた人はいるわ。でもわたしはいくつかの取引を突きとめたの……。信じて、究極の麻薬市場が開かれているのは、そこよ！」

（ぼくの不安に新たな材料が加わるときが来たらしい……）

「気をつけて、ジュリア。慎重にやるんだ」

とんでもない、彼女はもう走りだしているのだ。

「もちろん、彼らの苦痛を鎮めるのに十分な量の麻薬をあたえない医者も……」

（ジュリア、後生だから、ぼくを助けてくれ。**まずぼくを**、ジュリア！）

「それと、当局のご加護ね。麻薬摂取過多で年寄りがひとりくたばっても、もとからの廃墟が完全に崩れたってだけの話ですからね」

すこしずつ、テオはデパートのために新たな人材を補充しはじめ、ジュリアは自分の記事の材料をほじくりだし、ぼくはひとりで問題を抱える状態に戻っていった。ただ、この空っぽな頭に、テオのひと言が引っかかっていた。「彼は契約をやりとげて、自然のなかに消えちゃったのかもしれない」……。

いや、ジミニ・クリケットは契約をやりとげてはいなかった。彼にはまだ始末すべき人喰い鬼がひとり残っていたのである。六番目。最後の犠牲者。そのことを教えてくれたのは、彼自身だった。昨夜のことだ。もう彼を見つけることはできないだろう、と絶望的な気分で夜の地下鉄のレザーの席に腰をおろしたとき、ちょうどぼくの正面に、ごく自然に、バッタ（クリケット）の顔をしたぼくの小爺がいた。

ぼくは驚きを振りはらって、直接会話に入った。

「最後の？」

「そうだよ、お若いの。やつらは六人いた。『111団』と名乗っていた六人だ」

「なぜ百十一なんです？」

「111に6をかけると666になるからだよ。666は『ヨハネの黙示録』に出てくる『獣』のしるしで、111はいけにえとして捧げられるべき犠牲者の数にちがいない」

彼が浮かべた微笑には、一種の寛大さが見てとれた。

「そう、象徴的な数字だ、お若いの、ばかげたことだよ。最悪の怪物的愚行はつねに子供っぽい趣きを呈するものだ」

なるほど。これで安心して、あらためて驚きに戻ることができる。というわけで、彼、ジミニ・クリケットはぼくの正面に座っていた。ぼくが驚いて叫び声をあげないように、彼は人差指を唇に当てた。

彼は笑った。

そして、いった。

「そうとも、わしだよ」
ぼくたちのほかに、車両には居眠りしている人が三人いた。ストジルと別れてきたばかりだったが、ストジルもぼくを元気づけることはできなかった。ストジルはたえずこう繰り返すばかりだった。
「やつは近くにいるよ、まちがいなくね。本物の殺人者は自分自身の亡霊になってしまうものなんだ」
「本物の殺人者ってなに、ストジル?」
「飢えなき殺人者だよ」
そうか！　ぼくがいま目にしているのは、飢えなき殺人者だった。ぼくの前に座っている。
彼は、小人が王座に就くように、背もたれに体を届かせようと、尻をくねらせて席に就いた。ぼくの弟たちが段重ねのベッドに座って空中で足をぶらぶらさせるように、彼も足を振っていた。その目には、ぼくの子供たちと同じ輝きがあった。孤児院の灰色の作業服を脱いで、年齢にふさわしいテルガル地の服を身につけ、その服には身分相応のきちんとした折り目がついていた。襟のボタン穴につけたレジョン・ドヌールの略綬が、その緋色をちらちらと見せている。彼は前置きなしで話しはじめた。ぼくが彼に飛びかかり、ぐるぐる巻きに縛りあげ、運賃発送人払いでクードリエに引きわたすとは、一瞬たりとも思わなかったらしい。ぼくもそんなことは一瞬たりとも思わなかった。話をしながら彼は大きくなり、話を聞きながらぼくは小さくなっていった。聞いてみれば、そんなに驚くべき話ではなかったし、話しかたも大向う受けを狙ってはいなかった。話の核心に直接入ったのだ（その核心からは狂ったような腐乱死体の臭いが放たれたが！）。一九四二年。ヨーロッパ全域でユダヤ人迫害がおこなわれ、それに伴ってデパートも一時閉鎖された。ともかく、裁判沙汰は六か月続いた。経営者たちは自己防衛に必死になり、文明は体裁を取り繕うためのゲームを続行した。だが、いうまでもなく、この六か月が死体消却

炉の開いた口に通じていた。「歴史が裁きをつけてくれた」とは、本の壁のうしろに隠れた偽善者リソンの言いぐさだ。取締役会の総退場。

一九四二年。その六か月間、デパートはおびただしい商品の静まりかえった薄明のなかに投げだされていた。商品は戦争の眠りに沈み、そのまわりには、ヴィシー派民兵の黒い紐が巻きつけられていた。ナチスの茶色いシャツをまとった思想的煽動者のなかには、国家社会主義の千年記念祭まで、このデパートを墓のように閉ざしておくべきだと主張するものも現われた。

「やつらは、それが明日のことでもあるかのようにしゃべり散らしていたよ、お若いの。ヨーロッパを貪り喰うことで、『時』そのものまで支配できると思いこんでいたんだ」

かくして数週間ののち、デパートはピラミッドのごとき神秘のなかに沈められた。暗闇に閉ざされ、完璧に不動のその姿は、死体が寄生体の巣になるように、さまざまな噂の源となった。その腹わたのなかで繰り広げられる秘密の動きについては、じつに多様な噂が流れた。あるものは、そこがレジスタンス運動の最高会議の場だといい、あるものは、ゲシュタポの拷問の実験場だといい、また、あるものは、ただのデパートの廃墟、死んで突然異様に見えるようになった閉鎖された歴史の博物館だといった。いずれにしても、人びとは、もはやそれが何であるかわからなくなったかのように、この建物を見つめているのだった。

「突然一般の出入りを禁じられた公共の建物ほど、すぐに伝説の仲間入りをしてしまうものはないんだよ！」

そう、そのころ、人びとの想像力は伝説という無限の領野を大股で進んでいた。たった数か月経過するだけで、すべての記憶のなかで千年が流れさったのだ。

化石と化した商品のひしめく薄暗がりの秘密のなかで、「111団」の六人の人喰い鬼は、この一瞬の永遠の時代を生きたのだ。
「その六人とは、だれだったんですか」
「私とおなじく、あんたももう知ってるじゃないか。背景はさまざまだが、アレイスター・クロウリーが『二十世紀の下劣なる未熟児』と呼ぶものへの軽蔑を共通の旗印にして集まったのさ。うじゃうじゃ群れる人間どもを完膚なきまでに叩き潰して楽しもうという固い決意に燃えてね」
「レオナール教授も一員だったんですね」
「ああ。アレイスター・クロウリーを気取っていたのは、とくにあの男だった。もうひとりはジル・ド・レもどきだった。そして、悪魔的な考えを寄せ集めて、全員一緒にそこに身を浸し、自分らの所行を、時代の魂だと主張していた。確かにね、お若いの、やつらは『時代の魂』だったよ。生きた肉を貪り喰う魂だ」
「子供の?」
「ときには動物も。レオナールは自分の歯で犬の喉を嚙み切っていたんだ」
(そうか、ジュリユス、その蛮行をお前の魂が嗅ぎつけたんだな! 人に話しても、だれも信じちゃくれないだろうが……)
「どうやって犠牲者を手に入れていたんです?」
「欠乏の時代だったから、ジル・ド・レが貯蔵庫を開ければ、子供たちは飛びついてきたよ。やつらは子供たちに『おもちゃの国』を見せたんだ」
(人喰いサンタども……)

「その大部分は追いつめられた親が託した子供たちだった。目下進行中の虐殺を逃れて、子供たちをスペインやアメリカに脱出させる特別なルートがあると考えたんだな。だが、そのルートはデパートの闇のなかに消えていた。そして、六番目、最後の男、子供を調達した者が、まもなく死ぬことになる」

「いつ？」

思わずびくりとして質問をしたのだが、同時に、まさか答えが返ってくるはずはないだろうと確信していた。

「今月の二十四日」

彼は微笑みを浮かべて、ぼくを眺めている。落ち着きはらって、繰り返した。

「二十四日の、十七時三十分、おもちゃ売場で。来てくれるね、お若いの。クードリエ警視長も一緒だと思うが」

ジミニはメトロの路線を六回乗り換えさせた。陶器でできた通路を行くとき、彼の足はなんの響きも立てなかった。そのとき、彼がふわふわのシャラント・スリッパを履いているのに気づいた。「歳なんでね……」弁解の笑いとともに、彼は呟いた。

彼はぼくの質問になんでも答えてくれた。そのなかでただひとつ、この質問にすべては要約されていた。

「この復讐になぜぼくを引き入れたんですか」

グット・ドール街のほうに向かって、地下鉄はがたがた揺れて行く。黒人たちが暗がりで頭をこくりこくりとさせている。緊張をゆるめぬ肩のうえに、居眠りの頭が乗っている。

「なぜ、ぼくなんです？」

彼は心のなかで帳簿を調べているかのように、長いことぼくを見つめ、やっと答えた。
「あんたが聖人だからさ」
ぼくが牛のように純朴な視線を返すと、彼はその考えをさらに展開した。
「あのデパートであんたがやっているのは、素晴らしい仕事だ。完璧に人間的な仕事だよ」
(ですかね……)
「全員の過ちを引き受け、店のすべての罪を肩に背負う。あんたは聖人として行動しているんだ。つまりは、キリストだよ!」
(キリスト? ぼくが! おやおや……)
「私は長いことあんたを待っていた……」
聖霊降臨祭の小さな炎が突然いっせいに彼の目に灯った。そして、体の内側から紅潮しつつ、なぜぼくの鼻先で爆弾を破裂させたのか、説明した。彼によれば、絶対悪の排除は、その対極である至高善、すなわち、迫害される無垢の象徴である「いけにえの山羊」が見守るなかで、なし遂げられなければならない。つまり、ぼく。しかり、悪魔どもの殲滅(せんめつ)には天使が立ち会わなければならなかったのだ。
「お若いの、証人として立ち会ってくださいよ。あんただけが真実を託された者であり、唯一その資格のある人なんだから!」
いうまでもなく、バッタ(クリケット)をパリの夜のなかに放ったあと、すぐに電話ボックスに駆けこんで、クードリエ警視長を呼びだした。彼は黙って話を聞き、それからこういった。
「だから、君のやっている仕事は危険だといったでしょう……」

（それももう長いことではない、聖人の誓いの言葉だ！）

「二十四日、十七時三十分、おもちゃ売場でといいましたね。木曜日だ。行きますよ。マロセーヌ君、君も来るようにしてください」

「もちろん！」

「それまでは何も起こらないだろうし、君は相変わらず私たちの部下の人気ナンバーワンの被害者だ」

了解。ぼくはさらに訊いてみた。

「最後の犠牲者、子供を調達していた犯人の正体について、なにか考えはありますか」

「ぜんぜん。君は？」

「彼は、ぼくが驚くだろうといっただけです」

「結構、驚きを待とう」

ジュリユスがベッドの脚の下で待っていた。この事件に関しては、ジュリユスのほうがぼくよりずっと鼻が利いたわけだ。ジュリユスはすべての疑問にすでに答えていたのだ。そういえば、まだ風呂に入れてやっていない。ジュリユスの思慮深い頭を撫でてやり、自分の頭を高いところから枕に落下させた。その頭は、雑誌のつるつるした表紙で冷たい平手打ちを喰った。

『アクチュエル』だ。

聖人の生涯を語る号。ついに出た！

自分に関係のあるページを開き、はっきりいって、いささか複雑な感情を抱いた。レジョン・ドヌールをつけた怪傑ゾロ老人がこの記事を読んでいたら、ぼくの聖人としての評価を見直すことになっただ

CamScannerでスキャン

ろう。

一方では、サンクレールの顔を思い浮かべて、強烈な喜びを味わった。そして、クビになって、ついにあの腐りきった仕事におさらばできるのかと思うと、ともかく嬉しかった。それに、記事が出る出ないにかかわらず、サンクレールはぼくをあの仕事から外さざるをえないところに来ていたのだ！

ここ数か月ではじめて（つぎの木曜がどうなるかという心配はあるが）、ぼくは幸福を約束された人間のように眠りに就いた。

35

「子供はいるかね、マロセーヌ？」

顔のしわひとつにも感情はあらわれていない。前とまったくおなじく、ぼくはオフィスに迎えられた。だが、ウィスキーも葉巻も勧められなかった。座る椅子さえも。そして、今回の件については、取りたてて喜んでもいなかった。サンクレールはこう訊いただけだ。

「子供はいるかね？」

「知りません」

「調べておいたほうがいいな。君に訴訟を起こすつもりだし、君はこの裁判に敗れて、七代先の子孫まで破産に追いやることになるからだ。ありうべき君の遺産相続者には、あらかじめそのことを知らせておくのがフェアなやり方だと思ってね」

『アクチュエル』の最新号が彼の目の前に開かれていたが、彼の目が見つめているのは、ぼくだった。

「君がスープのなかに唾を吐いたことは、いってみれば、よくある出来事にすぎない。いずれにしても、君は高い代償を支払わなければならなかっただろう。だが、今回の事件に限っては、たとえ君の飯

CamScannerでスキャン

食が空っぽになったあとでも……」
彼はすばやく胸算用を済ませた。
「マロセーヌ君、君が支払うべき代償には、まだ値段がつけられない状態だろうね」
彼の顔から消し去ってやりたいと切望していた微笑みが、ゴムのように柔軟な驚くべき適応力をもって、ふたたび彼の顔に浮かんでいた。この適応力こそ、できそこないの聖人であるぼくには、永遠に身につかない能力だろう。
「というのも、君は契約にサインをしたからだ。思いだしたまえ、品質管理責任者の役割を明確に定義した契約を。そして、時来たりなば、君の目の前に８５５人のわが社の全社員があらわれ、みんな揃って――この世でもっとも確かな誓いとともに――君が一度も正しく責務を果たさなかったこと、自分の病んだ脳から生まれた恥ずべき殉教者の幻を演じるのに熱心だったこと、また、わが社に唯一の過ちがあったとすれば、それは君に品質管理の職務を続けさせたことだと証言するだろう」
間をおく。
「だが、このデパートの経営を任されるようになった三年間、私はただひとりの解雇者も出してはこなかった」
満面にこぼれるような笑みを浮かべて、繰り返す。
「ただのひとりも」
（たしかに本当だ、サンクレールの微笑みが一種類しかないのは）
「それゆえ、君を解雇はしなかったのだ」
そして、いまや、彼の声にはなにか別のものが紛れこんでいた。それは、全世界に散らばるサンクレ

ール一家の、すべての力の源泉だった。彼はそれを信じている。自分がたったいま作りあげた解釈を鉄のように固く信じているのだ。それは彼の真実ではない。それこそが真実なのだ。レジのベルを鳴らす真実。唯一の真実。

「もうひとつある」

（なんですか、サンクレール？）

「私が君の立場だったら、人目を避けて壁際すれすれに歩くだろうね。この六か月間に君と関わりをもったお客は、なんとしても君を見つけだそうとするだろうからね……。たとえどれほど時間がかかっても」

（実際、ぼくの前にぬっと立ちふさがる背中が見えた。太陽をさえぎった背中が、日蝕を引き起して、こういう。「おい、ちびすけ、こんな屑どものいいなりになってるんじゃないぞ、戦え！」）

「それだけだ」

（それってなに？）

「行ってよろしい。クビだ」

そこでぼくはばかなことをいった。小狡そうな様子を作って、こう呟いたのだ。

「でも、警察の捜査のあいだ、人員の異動は禁じられているとおっしゃったのでは……」

取締役の高らかな笑いが爆発した。

「冗談じゃない！　マロセーヌ、嘘をついたんだよ。もちろん、会社のためを思ってだ、わかりきったことだろう。君は完璧に役割を果たしてくれたよ。辞職するのが残念だ」

（そうかい、そうかい、そうかい……騙されたのか。一杯喰わされたってわけだ）

親切に扉のところまで送ってくれた。
「だが、君を完全に失ったというわけじゃない。君はこれまで会社に多額の金を使わないで済むようにさせてくれただけではなく、これからもそれ以上の金を支払ってくれるのだからね」
というわけだ。社員みんなで世紀のお楽しみを待っている。時来たりなば、その楽しみはイタリアの美酒フェルネト・ブランカの味をもって開花するだろう。だが、この点についても、ジュリアの意見が正しい。将来の楽しみが約束されただけでは、けっしてそれに投資してはいけない。その場で楽しみを味わうか、けっして楽しみの実現を期待しないこと。どれ、「輝く未来」の実現を目ざし、汗水たらして働いているここの人びとに訊いてみよう……。
こんなことを考えながら、ぼくはレーマンの最後のまなざしを潜りぬけてゆく。ああ！　エスカレーターがもっとも深い深淵にぼくを沈めてゆくあいだ、彼は透明な檻のなかから、裏切られた男の視線をぼくに注いでいる……。ぼくは恥じていた！　大喜びしてもおかしくないはずなのに、ぼくは恥じていたのだ！
気持が上ずってしまい、エスカレーターが突然途切れたとき、あやうく前のめりに床に顔をぶつけそうになった。そして、なんとかバランスを取り戻しながら（おもちゃ売場の女子店員がどっと笑った）、まったく新たな笑みを浮かべたミス・ハミルトンの声が、靄のようにただようのを聞いた。
「カズヌーヴさま、お客様ご要望コーナーまでお越しください」
人生の時間割には、ある瞬間が書きこまれている。一日のある決まった瞬間。人が自分の運命に憐れ

みを感じる瞬間だ。独特の瞬間。仕事にも、食事にも、消化にも煩わされない完璧に自由な瞬間。ゆったりと災厄の大きさを測ることのできるひと気のない浜辺。そうして目測してみれば、一日はなかなか良いものに感じられ、幻想は消えて、風景は道筋もあきらかに見えてくるだろう。だが、フォークを動かしながら自分の不幸のことを考えると、さし迫った仕事の再開に目先はふさがれ、ミスを犯し、計測をあやまり、実際以上に自分が追いつめられていると思いこむ。ときによっては、自分が幸福だとさえ錯覚する!

ベッドに横たわり、ジュリユスの体温を借りて、そんなことをぼんやり考えていると、電話が鳴った。ぼくの調子は悪くなかった。自分の困難の正確な面積を測量し、サンクレールへの勝利のあとに来た奇妙な敗北感を反芻していたところだ。自分の不幸の園の大きさを完璧に目測しようとしていたところに、忌々しい電話の音が一撃でぼくの測量をぶち壊し、この世に存在するなかでいちばん深く幻想に汚染された行為へと向かわせた。受話器を取ることだ。

「バン? ルーナが臨月に達したわ」

「臨月に達した」……こんな言いまわしをするのは、テレーズしかいない。ぼくがくたばったら、その死の報にも驚くことなく、「長兄の死去に大いに心痛を覚えている」と彼女は宣言するにちがいない。

さて。ルーナは「臨月に達した」。ぼくは病院の住所を書いた真白な紙を手に取り、地下鉄にごとごと揺られて、手すりをつかみ、時間が過ぎてゆくのを待った。双子の顔を見ると考えたとき(二人なのに同じひとつの顔?)、ぼくのなかにぴくぴくと脈うつものが生まれた。それはまもなく、五年前ちびの誕生のときに感じたのと同じ強さでぼくの胸を叩きはじめた。ちびの誕生の前にはジェレミーの誕生

があり、さらにその前にはクララの誕生があった——彼女をこの世に迎えたのはぼくなのだ（産婆は酔っぱらっていたし、医者は金庫を抱えて夜逃げしていた）。彼女の臍の緒を切ったのもぼくだし、家の各部屋を案内して見せてやったのもぼくだ。ママンはうしろに立って、例の言葉を繰り返していた。

「バンジャマン、お前はいい子だよ。これまでも、いつだって、いい子で……」

そう、ぼくが感じていたのは幸福だった。というか、一種の幸福だ。ぼくがベッドに横になって作った不幸の測量図は完全にかすんでしまった。だが、冷静に考えてみよう。「ルーナが臨月に達した」。現実には、新たな大災厄が始まることを告げる控え目な楽観主義にすぎない。だって、双子が生まれるということは、甘い幻想を捨てれば、さらに養うべき口が二つ、楽しませるべき耳が四つ、監視すべき指が二十本、そして、慰めてやらなきゃならない心の状態は数知れず、その他その他が増えることとなのだ！　そのうえ、サンクレールの裁判沙汰も浮上しているし、行手には破産、もしかしたら監獄、いずれにしても恥辱、最後はアルコール漬けの零落というわけ（ゾラじゃないんだぞ！）。お先真っ暗だ！双子が五歳になるころには、ぼくは幼児売春に売り飛ばしているだろう！　これが未来だ！　手足を切断されて、物乞い！　さぞかし儲かることだろう！　だが、空っぽの皿以外のものを食べたくなったらどうするんだ！

なぜ「現実」はいつでもぼくの計画に反対するのか？　花咲きガキ喚く病院で、ルーナの枕もとに立ちながら、ぼくはそう自問していた。「ああ愛してるよ、ぼくの可愛い子ちゃん」と腕にルーナを抱きしめているローランに目を向けると、彼は突然、水槽のガラスに鼻をぺったりと押しつけた。この滅菌保育器は子供を貪ろうとする父親から子供を保護するための装置だ。ローランは声を張りあげる。

「ルーナが三人になったんだ、ルーナが三人だよ、バン！　一人だったのが、いまは三人だ！」

CamScannerでスキャン

（いっておくが、一人分の費用じゃなくなるんだぞ！）

最後は「クトゥピア」へ行った。子供の誕生を知らせるために行ったのだが、いつものように、アマルはぼくたちに店のおごりでたっぷりとクスクスをご馳走してくれた。

「大事なことを発見したんだ、パン（マスカラ産の十六度のワインの確かな助けを借りて、こう思索にふけるのはローランだ）。それは、たとえ現実が想像よりも悪い事態におちいったとしても、想像より現実のほうが耐えやすいということだよ！　ぼくは子供なんか欲しくなかったのに、いまや二人の子持ちだ、ね！　だが、現実には嫌悪感なんかない、ぜんぜんだよ、パン。この驚異を経験することを嫌悪していたんだよ。（ため息をつく……）ねえ、パン、どうしてルーナにあんなことをさせられたんだろう？（すすり泣く……）ひっぱたいてくれ、パン、お願いだから。殴ってくれよ、君の妹のために！（われとわが身を鞭打ち、シャツを引き裂く男……）」

「マスカラをもう一杯どうだい」

「うん、今年のはいいできだね」

「ねえ、パン？」

ジュリアの手がぼくの太腿に巻きつく。

「クララがわたしにいったんだけれど、裁判のことなら、心配しなくていいのよ。サンクレールはあなたをからかっただけ。もし訴訟が起こされたとしても、相手は雑誌社だし、仮に裁判官がものすごく意地悪だったとしても、損害賠償金は一フランがせいぜいよ」

「それも旧フラン、ドゴール時代の前の、極小の一フランよ」とつけ加えたのはテオだが、彼の目はアドゥシュのお尻を愛撫している。

CamScannerでスキャン

みんな猫のように喉を鳴らす満足な一夜だった。クララはジェレミーの肉を切ってやり、テレーズは飽きもせずウーム・カルスームの埋葬シーンを映像付きジュークボックスの画面に呼びだし、ちびはジュリユスにミント茶の儀式を伝授し、アマルは百回も繰り返して、ニュー・ベルヴィルの建設にともなって自分のレストランが近々とり壊されることを教えてくれた。

「アマル、あなたの気持を思うと悲しいよ」

「なぜだい、息子よ？　食事は楽しいのに」

そして新たに、年金を利用して、南サハラの砂に埋まってリューマチの療養をするのだと語った。

（アマルの真白な髪、首のまわりにはサハラ砂漠……）

この夜の最後の最後になって（ローランは酔いつぶれて皿にうつ伏して眠ってしまい、ジェレミーとちびはジュリユスの腹に抱かれ、その毛皮のなかで玉のように丸くなり、テオはだいぶ前からアドゥシュとどこかに消え、テレーズは踊り狂うイスラム修道僧と化し、ジュリアの手は最後の突撃が間近なことを教えていたが）、クララが、ぼくのクララが一大ニュースを告げた。

「バンジャマン兄さんを驚かせることがあるの」

CamScannerでスキャン

36

その驚きは（ほんとうにまだ驚きたいというのか）、電報の姿をしていた。電報は権威ある出版社から発信されたもので（その出版社の名前を引用しないのは、出版社同士が勝手に疑心暗鬼の腹の探りあいに乗りだせばいいと思うからだが……）、ほとんど脅迫的な簡潔さをもつこんな言葉で書かれていた。

「イタク興味アリ。至急出頭サレタシ」

自分が思ってもみなかった天才だと知らされることは、気分の悪いことではない。数か月間、不眠症の子供と癲癇持ちの犬の一団に向かって、とりとめのないおしゃべりを続け、それがまったく言葉の綾を解さぬ速記者によってタイプされ、無責任な仲介人の手で発送された結果、その原稿が出版界のドラゴンの涎を垂らさせるに十分な出来映えだったと知るのは、かなり嬉しいことである。

そう思いながら、目を覚ました。そう思いながら、地下鉄に乗り、そう思いつづけながら、いま、この巨大な（オフィス？　サロン？　会議場？　陸上競技場？）で待たされている。歴史を感じさせる艶

やかな豪華装飾が、未来風の家具調度の大胆な幾何学となじんでいる。アルミニウムとスタッコ、躍動感と伝統。過去を腹いっぱい詰めこみ、未来を喰いつくす出版社。来るタイミングもそんなに悪くなかった。
ぼくを迎えたお洒落な若者の熱烈な愛想の良さから、この社の面会予定者はぼくひとりだという確信が生まれた。ぼくに電報を発送してから、だれも眠っていないのだ。空気のなかに、みんなが息を止めているといった雰囲気が感じられる。
「もしマロセーヌが拒否したら？」
会議場にパニックの風が巻き起こる。
「ほかの社の申しこみを受けたら？」
「諸君、契約金を五倍にしようと思うが……」
(『爆縮』……そんなに悪くないな、クララのタイトルも)
「なにかお持ちしましょうか」
若者が書庫の下からミニバーを出現させた。
「スコッチ？　ボルトにします？」
(たしかにボルトを一杯の時間だ、うん)
「コーヒーを」
構わないさ、コーヒーで。したり顔で沈黙を守る。足を組む。若者のじっと見つめる気配。ぼくの小さなティースプーンが銀色のロンドを踊る。
「ご立派なものです、マロセーヌさん、ほんとうに」

（立派に「ご」をつけると皮肉な感じになるから注意したまえよ）
「でも、ぼくの口からそれ以上のことをいうのは許されていないんです」
かすかな笑み。
「わが社の文芸部長のみに許された特権ですから」
かすかな笑み。
「まもなくおわかりになると思いますが、ご立派なかたです……」
（彼女も？）
「ここだけの話ですが、ぼくたちは親しみをこめて『ザボ女王』と呼んでいるんです」
（ザボ女王、けっこう、ここだけの話だ）
「判断の明敏さに、言葉の率直さ……」
（一瞬ためらいの影を見せ、それから、半分調子を低くしていった）
「問題はすべて、まさに、そこから生まれるんですがね」
（問題って、なんの問題？）
微笑、咳ばらい、明らかな当惑を示す兆候だ。それから、だしぬけに、
「じゃあ、あなたが来たことを知らせてきますから」
きざな若者退場。半時間経過。ザボ女王を待つこと三十分。本でも読んでいようと考え、恐る恐る書庫に向きあい、丁重に手を差しだし、注意して一冊を抜きだした。表紙だけで、中身は空。
ほかの本を試す。以下同文。
この部屋にはただの一冊も本がないのだ！　けばけばしい色の表紙が飾られているだけなのだ。だが

間違いない、マロセーヌ、お前は出版社に来ているのだ。

しかたなく、ベストセラーを出版するとどのくらい儲かるか計算して自分を慰めた。全部勘定に入れると、映画化権、テレビ化権、ラジオ放送権、計算しきれないほどだ。最低限に見積もっても、ぼくの算数の能力をはるかに上回る。だが、どんなモデルケースを想定しても、あのいけにえの山羊の腐った仕事を辞めて正しかった。デパートで三十年働いたって、その十分の一も稼げなかったろう！

ザボ女王が入場してきたのは、まさにこの幸福の瞬間だった。ザボ女王！

「ああ、こんにちわ、マロセーヌさん！」

背の高い骸骨みたいなおばさんで、その体のうえに、異様に丸まると膨らんだ顔が載っていた。

（はじめまして、マダム……）

「いえ、どうぞそのままで、それに長くお引きとめしませんから」

形式を気にかけない甲高い声だ。

「で？」

ザボ女王はこの「で？」を叫び、ぼくはびくりとした（で、なんですか、陛下？）。ぼくはかなり面食らった顔をしたにちがいない。彼女は頬を膨らませて大笑いした。信じられない話だが、ほんとうに彼女の顔は、たまたま体の上に落ちてきて、そこに乗っかっているように見えた！

「ああ！　ちがうのよ、マロセーヌさん。誤解しないで。あなたに来ていただいたのは、本のことじゃないの。うちではあの種の際ものは出版しないから！」

小姓役のきざな若者が咳ばらいをした。すると、ザボ女王はぐるりとうしろを振り返った。

CamScannerでスキャン

「だって、際ものでしょうが？　ゴーティエ、あなたがいった言葉よ！」
それから、今度はぼくのほうを振りむく。
「いいこと、マロセーヌさん、本じゃないわよ、あれ。中身になんの美的配慮もないし、話は四方八方に飛ぶし、結局どこにもたどりつかない。これ以上やっても絶対にむだよ。すぐに諦めなさい、あなた。天職を間違えないで」
小姓のゴーティエは透明人間になりたそうな様子だった。ぼくは彼女に煽られて、体の内側が火照ってきた。
「あなたの天職は、これ！」
どこからか取りだした『アクチュエル』をぼくの膝に投げてよこした。部屋に入ってきたときは、手になにも持っていなかったはずなのに。
「この種の人間をどれほど出版社が必要としているか、想像もできないでしょうね。いけにえの山羊！　これこそまさにわたしに必要なものよ。わかる、マロセーヌさん？　この職業のせいで人から怒鳴りつけられるのは、もういい加減うんざりなの！」
この言葉に超高音の長い笑いが続いたが、それは抑制不可能なものが漏れてゆくような音だった。そして、急に止まった。
「読者にちゃんと読まれていないと思いこんでいる作家見習い、出版の仕方が雑だといってのける新米作家、払いが悪いと文句をいうベテラン作家。そんななかに入って、わたしはみんなから怒鳴りつけられるのよ、マロセーヌさん！　聞いてちょうだい、この仕事に入って二十年になるけれど、ただのひとりとして自分の運命に満足している作家には出会ったためしがないわ！」

自分の知能の鋭さにいまだに驚きつづけている五十歳の天才少女のような感じなのだ、このザポ女王という人は。だが、なにかが違う。わざとらしい陽気さのなかに、けっして変わることのない悲しみがある。膨れた肉にときどき電気を走らせる顔の塊の下に、悲しげに埋もれているものがある。

「ねえ、マロセーヌさん、先週だって、作家志望の男がやって来て、二か月前に送った自分の原稿についてどう思うかって訊くの。朝の九時によ。ここにいるゴーティエが（ゴーティエ、いるのか？）オフィスでその男を受けつけたものの、まだ寝ぼけていて、わたしのファイルのなかに男の本の読書メモを探しに来たのよ。その読書メモは、じつは彼のファイルのなかにあったのにね。ゴーティエがいないあいだに、当然その男はゴーティエの書類をひっくり返しはじめた。そして、読書メモを見つけたの。そこにはわたしがこう書いてあった、『糞のかたまり』。そう、わたしたちの言葉づかいには無駄がないの、ここだけの話だけれどね。ゴーティエの役目はまさに、この無駄のなさに装飾をほどこすことにあるわけ。要するに、その読書メモは、問題の原稿の作者に読ませるために作ったものではないの。それで、この男の反応はどうだったと思う、マロセーヌさん？」

（ふうっ！　まあ、ぼくとしては……）

「セーヌ河に身投げしちゃったの、すぐ前の、ほらあそこ」

すばやい動作で河に面して開かれた二重窓を指さした。

「水から釣りあげたとき、彼は自分の本に関する読書メモをもっていて、そこにはわたしのサインがあった。すごく気分がいいとはいえないわよね」

そうか、彼女の抱えている問題はわかった。ザポ女王は、この時代にあって、感じやすい存在なのだ。全人類の苦しみを感じる少女。責め苛まれる娘。まあ、そういったところだ。「存在の悲しみ」をたた

えた謎の女性。その責め苦がキリストの受難ほどにも激しくなると、大いなるためらいののち、彼女は流行の精神科医を呼びに行く。今度は医者が聞き手になって、すぐに、人類そのものがこの利発な娘の悩みの種であることを理解し、辛抱強く、長椅子の上での問診を繰り返し、病巣のいちばん小さな根っこまで引きぬき、そのあとに社会的なものの種を植えてやる。これがザボ女王の正体なのだ。精神分析が成功して、彼女が食事をすると、顔ばかりが膨れてゆく。残りの部分はついてゆかないのだ。ほかにもこの手の症状を示す人間に会ったことがあるが、みんな似ている。

「で、こうした不愉快な事態を避けるために、あなたを雇いたいのよ、マロセーヌさん」

(ぼくを? 雇われないぞ、このぼくは!) 沈黙。女王陛下のX線のようなまなざしが注がれる。そして、

「あんな記事が出たからには、デパートをクビになったと思うんだけれど?」

紫外線のまなざし。笑いの影。

「もしかしたら、クビになりたいために、記事を発表させたのかしら?」

それから、決然といった。

「でも、そんなことは茶番よ、マロセーヌさん。あなたは他のどの仕事でもない、この仕事のために生まれてきたの。いけにえの山羊、それがあなたの『天職』よ」

そして、しっかりとした足どりでぼくを導く。

「自分の能力を見損なわないように。これからあなたには仕事の依頼が山と来るでしょう。それはわかってる。でも、どこがいくら出すといっても、うちではその倍額をあなたに支払うと思ってちょうだい」

CamScannerでスキャン

37

そして運命の木曜日がやって来た。それまで、一秒一秒に注意を集中して時の流れをせき止めようと思ったけれど、空しいかな、時は流れつづけた、わが聖なる魂の割れ目を通って（「われの、わが魂はひび割れて……」。バカロレアの口頭試験でクララが出会ったのはこの一節だった……）。

おもちゃ売場に、群衆はいない。それだけは確かだった。指令が行きわたり、謎のサインがここから客を遠ざけていた。ぼくはここにいる。いまあらためて思うのは、あの夜、バッタのジミニと地下の遠乗りに出かけて以来、この瞬間のことが一秒たりとも頭を離れなかったという事実だ。ぼくの考えのどんな些細なひだにも、期限切れという妄執が入りこんでいた。ぼくは恐い。ちくしょう、恐いんだよ！

十七時三十分。ジミニはまだ来ない。クードリエも。彼の部下もひとりも来ていない。

リスみたいに可愛い女店員は痩せてしまっていた。その頬っぺたの貯蔵庫では、冬のための貯えが尽きていた。デパート……デパート全体が疲れている……。リスの友だちの女イタチが、四時間も押し寄せていたガキどもにめちゃめちゃにされた陳列台を一所懸命もとに戻している。ジミニはいない。

ぼくは、いる。

そして、犠牲者は？　いるのだろうか、犠牲者は？　「その時が来たら教えてあげよう、きっと驚くよ」。なぜ驚くといったのだろうか。結局のところ、ぼくが考えつづけていたのは、そのことだった（なぜ驚くのか？　ぼくが犠牲者と知りあいだからか？　有名な人物なのか？　マスコミの知名人とか？）。そのことや、他のことを、とりとめなく考えていた。地下鉄での会話のことも。「なぜデパートを舞台に選んだんですか？　犠牲者を連れてきたんですか？　でも、どうやって？」ぼくの小爺はやさしい微笑みを浮かべた。「ときどきは、小説を読むかな？」ときどきどころか、よく読む、とぼくは答えた。「じゃあ、フィクションの楽しみをいっぺんに喰い潰してはいけないことをよく知ってるんじゃないかな」。「喰い潰す」というのは小爺の世代の言葉だなと思った。同時に、なぜフィクションなのか、とも思った。「フィクションですって？」「そうとも、小説のなかのことだと思えば、恐怖と戦うのに役立つだろう」。そして、こうつけ加えた。「たぶん、楽しむためにもね」。そこで、ぼくは、彼のいうことがよく見えなくなりはじめた。恐ろしくもなってきた。形のはっきりしない恐怖がひとときもぼくから離れなくなったのだ。気分を落ちこませる副作用もあった。ラブレーなら「臭い屁が洩れる」というだろう（要するに、うんこちびりそう、ということだ）。どこからこの感情がやって来たのか。この感情、そう、恐怖……。それに、テレーズは？　どうやってジミニはテレーズを見つけ、彼女の身元を知ったのだろう？　「あんたの弟と妹のなかで、彼女がいちばんあんたによく似てるよ」（なに！　他の妹や弟も知ってるのか？）。そうとも、ちびと彼の人喰い鬼、ジェレミーと彼の実験科学の才能、クララの目……。「お若いの、なんの不思議もないさ。あんたの友だちのテオはあんたたちをすごく好きだからね」。なるほど、テオか。テオがぼくたちのことをジミニに話したのだ。「あんたたちは、いわばテオの家族だよ。テオがわしたちの家族なのとまったく同じだよ」。わしたち？　ああ、そうか、デパート

の小爺たちのことか。にもかかわらず、ぼくは今日ここに来た。クードリエが電話で気をつけろとぼくに警告したにもかかわらず、ではない。ぼくが家を空けると、ぼくの家族の頭上に奇妙な不吉の前兆がただようように感じられたのだ。それでも、ぼくはこの謎の老人に好感を抱いていた。わが「人喰い鬼喰い」に。彼の頭はいかれていたかもしれないが。地下鉄はぼくたちを人生みたいに激しく揺さぶっていた。尻から上のバランスを取るために、ジミニは小さい手を両側にぺったりとついていた。子供の自転車の補助輪みたいだ。

そう、あの爆弾事件と、このとんでもない出会いがなければ、ぼくはこの小爺を引っぱってゆき、祖父ででもあるかのように、ぼくの家に招待しただろう。なぜなら、小さな尻の上にちょこなんと座って、彼もまたぼくを殺人の現場に招待してくれたからだ……。

「お若いの、証人として立ち会ってくださいよ。あんただけが唯一その資格のある人なんだから!」

彼がいる。やって来たのだ。テオが小爺たちに着せる灰色の作業服を身につけている。顔の表情に老人臭さを装っている。最初のころ、べらべらしゃべり散らしていた小柄な爺さんの顔だ。AMX30で遊んでいた年寄り。ぼくを見たかどうかはまったくわからなかった。彼は売場の反対側にいる。失神した女性を腕に抱えるキングコングのロボットをいじっている。苦情をいいに来た深海ダイバーみたいな筋肉男をぼくが騙したあとで、ぼくの気分を完全に落ちこませたキングコングだ。ぼくは潜望鏡を取りだし、デパートに警官たちの影を探した。だれも見えない。なにが起こっているかを知らず、そこここで品物を物色している客がばらばらといるだけだ。それに、犠牲者は? 犠牲者もいない。ともかく、知った顔はだれもいない。クードリエ、なんとかしろ! ナポレオン気取りだが、ワーテルローでへま

をしちゃなんにもならないだろ！　出てきてくれ！　ぼくは恐怖で死にそうだった。殺人現場なんか見たくない。殺人犯を殺すところも見たくない。断じていやだ、殺人反対！　出てきてくれ、クードリエ、くそったれ！　デカの仕事をしてくれ！　怪傑ゾロとその仇を取りおさえろ！　ゾロには勲章をやり、仇をゴミ溜めにぶちこむんだ。だが、ぼくはそっとしておいてくれ！　ぼくは立派な一家の長だ！　ぼくは法律の手先でも、番人でもないんだよ！　**クードリエ！　どこにいるんだ？**

（警官たちのやって来るのがこんなに待ち遠しくなるなんて、だれも教えてくれなかったよ！……）

ジミニがぼくを見た。

微笑んだ。

ボケ老人を装ったパントマイムの背後で、いらいらしないで、もうちょっと待てという合図を送ってくる。子供のように黒い猿で遊びつづけている。猿の手のなかには失神したクララのあまりにも白い体。ジミニは足元に猿を置き、ぼくのほうに出発させた。猿は体を揺すってやって来る。そうか、やろうというのか。いまはその時なのだ！　待機の時……。

（逃げなくちゃ。ここにいつづけるなんてとんでもない。逃げるんだ！　五秒数えて、ナポレオン皇帝と近衛兵の姿が見えなかったら、ずらかるぞ！）

一……。

二……。

三……。

突然、明かりがともる。**犠牲者がわかった！**　あの下司野郎のリソンだ！　ぼくが夢見た本屋の爺さん！　すべてがぴったりと当てはまる。年齢、頭の腐っていること、四十年前にデパートにいたこと。

調達係だ！　やつが子供の調達係なのだ。追いつめられた家族を相手に、子供を戦争の外に連れだしてやると騙し、じつは人喰い鬼の巨大な塩漬け貯蔵庫を満杯にしていた誘惑者！　ぼくの知っている人間でこの役を務められたのは、やつしかいない！　リソンだ。なぜか自分の死の臭いに引かれて、いまにもここに姿を現わすだろう。そして、ぼくの目の前で吹っ飛ぶのだ！　たとえぼくがこの場から逃げだしたとしても、リソンはやって来るだろう。絶対に確かだ。ぼくをこの殺人の聖なる保証人にするには、ぼくに殺人の時間と場所を知らせるだけで十分だったのだ！　前回は、怪傑ゾロはテレーズが立ち会ったことで満足したのだろう。だが、逃げだすなんてとんでもない。ぼくは人殺しではない。できれば逃げだしたいし、そのほうが人生は楽だろうが、ぼくの聖人の資質がそうはさせてくれない。ここにとどまるんだ。大股歩きのゴリラと、必要な時間だけ遊んでいるのだ。待つのだ。耐えるのだ。そして、リソンが来たら、飛びかかって、爆弾の射程の外に放りだす。そうしたら、今度はぼく抜きで、法律がリソンをどうにかしてくれ。ぼくは犯罪者でもなければ、裁判官でもないんだから！

燃えるゴリラはペンギンのように愉快な腰の振りかたをしている。不吉そうな外見に、偽りの無邪気さが加わっている。真赤な目。口からは火。腕にクララ……。ばかな考えはやめろ、マロセーヌ、まだ時は熟してしない。ゴリラがお前のところに来たら、ジミニのほうに向け直してやるんだ。この下らないゲームを続けなくちゃいけない。*続けろ*！　それがすべてだ。なにかが起こるまで。クードリエが姿をあらわすまで。エスカレーターの地平線に、リソンの上品で背の高いシルエットが浮きあがってくるまで。このゴリラの毛は真黒だ。そして、抱かれた娘の体は真白だ。黒と白。死の闇を背景に、白い体の輝き！　炎を吐く口、不吉にぎらつく目……。

CamScannerでスキャン

突然、遠くにもうひとつの目。ぼくを見るジミニだ。笑いかけてくる。謎のぼくのお爺さん……。
そして、わかった。
ぼくにこそ時間が必要なんだ！
生きている時間が。
まだかなりある。
ジミニの目はレオナールの目と同じだ！　黙示録の「獣」と同じ目だ。
ジミニが送ってよこしたのは、ぼくの死だ。
驚愕と恐怖があまりにも強烈で、ふたたび白熱する剣がぼくの頭を貫いた。血だらけの牡蠣の串刺しが頭蓋骨から飛びだす。
またも耳が聞こえない。そして、ついにクードリエが見えた。ジミニの十メートル先。クードリエと同じような服を来て、同じように身動きひとつしない試着用マネキンの横。クードリエ警視長だ。革ジャン・コーナーの近くにカレッガ。他にも何人かいる。急に、警官たちが目に飛びこんできた。
ゴリラはさらに一メートルほど進んでいる。
だが、なぜぼくが？
彼方の老人の目には喜びが浮かんでいる。邪悪な小人！
ぼくが気づいたことに気づいたのだ！
さらに、ぼくも気づいた。
彼なのだ、六番目の男は。最後の男、子供の調達者だ！　彼は、ぼくの知らないなんらかの理由で、他の連中を全員始末した。

そして、いま彼が吹き飛ばそうとしているのは、このぼくだ。
だが、なぜ?
彼のキングコング陛下は近づいてくる。カレッガがクードリエに問いかけるような視線を投げて、右手をジャンパーのなかに滑りこませる。クードリエは素早く首を振って、だめだという合図をする。
だめ? なぜ、だめなんだ? いまだ、いけっ! やれったら! カレッガ、銃を抜け! ゴリラの口の炎に青いものが混じっている。青と、血のような赤を際だたせる黄色。
われを失ってクードリエに目を向ける。
耳も聞こえず言葉もなくしてカレッガに祈る。
麻痺した激情。
応答なし。
老人の顔に名状しがたい歓喜が湧きあがる。
ぼくの恐怖の表情を見て突発した喜び。オルガスムスだ! 人生最高のお楽しみ! この瞬間だけを待ちこがれて生きてきたのではないか。百年も待つに値する喜びだ!
クードリエは出てこないだろう。
ぼくのなかの超千里眼の聾に、超明敏な聾がそう告げている。
連中はみんなしてぼくが吹っ飛ばされるのを放っておくつもりだ!
吹っ飛ばされるのか。吹っ飛ばされるくらいなら、こっちから吹っ飛んでやる!
人生を賭けたダイビング。子供さらいの猿の右側へ! 自分がまったく他人になったかのように、ぼくははっきりと見た。自分の体が宙に浮き、地面すれすれに飛ぶのを。猿のほうに飛びながら、ぼくは

嘲笑う人喰い鬼から目を離さなかった。狙った猿に飛びつき……。
スイッチを切ったとき……。
吹っ飛んだ。
向こうで。
陳列台の向こう側で。
灰色の作業服が膨れあがる。
一瞬、彼の顔は狂喜のきわみに達した。
ついで作業服から血のピューレが吐きだされる。
彼の体だったもの。
爆縮。
そして、ふたたび立ちあがったとき、自分が殺人者の役を演じさせられたことに気づいた。
どうして、ぼくが？
なぜ？
ぼくは警官たちに連れてゆかれた。

38

今回は聴力を回復するまで数時間かかった。音がよく響くはずの病院の一室で、ひとりで過ごした数時間。たしかにひとりだった、三十人ほどの医学生を除けば。彼らは熱心に、ぼくに身を傾けて断続性雑音の症状を説明する白衣の先生の言葉に耳を傾けている。先生は「知」の微笑を浮かべている。学生は勉学の真剣さを見せている。彼らはいつの日か、先生の地位を奪うために、たがいに殺しあいを演じることになるのだろう。先生はいまの地位にしがみつくだろう。いずれにしても、そんなことはぼくから遠く離れたところで起こる出来事にすぎない。なぜなら、ぼくは六人もの殺人事件を自分の身に背負って、どこか牢獄で、終身刑の日々を数えあげているにちがいないからだ。

「なぜ?」

なぜ、ぼくなんだ?

なぜ、ぼくに責任を押しつけたんだ?

その答えをいうべきジミニはもういない。

いったい彼はなんという名だったのか、ぼくの理想のおじいさんは? ぼくは彼の名前さえ知らない

のだ。
いっそのこと、最後までぼくの耳が聞こえなかったらいいのに。だが、無理だ。白衣の先生は医師の免状を盗んできたわけではないからだ。だから、きっと、耳の栓を抜いてしまうだろう。
「諸君、これは厳密な意味で器質性障害ではなかったのです」
知のピラニアたちの賞讃のさわめき。
「ふたたび徴候が現われる可能性はまったくありません」
そして、先生の声がぼくの耳を甘美にくすぐる。
「治りましたよ、あなた。自由にお帰りになって結構です」

ぼくの自由はカレッガ刑事の姿になって現われた。ひとこともいわず、パリ警視庁まで案内してくれた（ぼくの聾を治したのに、唖に引きわたすとはご苦労な話だ！）。
ドアがばたんばたんと開閉する。階段を上り、エレベーターに乗る。廊下に靴音が響く。コツ、コツ、コツで、クードリエ警視長の扉に着く。
彼は電話中だった。受話器を置く。ぼくを見つめながら、しばらくうなずいていた。尋ねる。
「コーヒー？」
（悪くないな）
「エリザベート、お願いだ……」
コーヒーが来る。
「どうもありがとう。もう行っていいよ」

（そのとおり。だが、コーヒーポットを置いていってくれよ。そう、結構だ）
この建物全体のなかで、ばたんと音を立てない唯一の扉があるとすれば、それはエリザベートが出てゆくときのクードリエ警視長の部屋の扉だ。
「それで、君、やっとわかったかね」
（いえ、あまり）
「君は自由の身だよ。家族の方がたを安心させるために、たったいま電話をしたところなんだ」
ついで、説明がおこなわれる。最後の説明は、こうだ。ぼくは殺人犯ではない。だが、もうひとりの男、ぼくが宙に吹き飛ばした物騒な小人は、殺人犯のひとりだった。それも、第一級の！　ぼくをゴリラに飛びかからせて、自分自身の殺人のスイッチを押させただけでなく、人喰いグループ全員を始末したのも彼だった。
「彼はどうやって、かつての仲間をデパートに引き入れたんですか」
たまたま口から飛びだした質問だが、そう、その点について、クードリエは長いこと考えていたのだった。
「引き入れてなんかいないよ。彼らは自分の意志で来たんだ」
「はあ？」
「自殺だよ、マロセーヌ君」
クードリエは急に笑い、椅子のなかで伸びをした。
「この事件で三十歳は若返ったよ。もう一杯どうかね」

第二次世界大戦で人間が焼肉にされているころ、この種の愚劣な秘話はごまんとあった。ところで、停戦協定が調印された直後のことだが、クードリエ警視長がおこなった最初の任務のひとつが、こうした悪魔の鍋を一掃することだった。

「たいへんに単調な仕事だったよ。四〇年代のあの狂った秘密教団は、どれもこれも似たりよったりだったのでね」

そう、みんな同じモデルに基づいている。道徳的規範とイデオロギーを拒絶するという奇妙な現象は、すべて「今この瞬間」を絶対化する神秘主義に行きつくのだ。すべてが可能だということは、すべてが許されているということだ。彼らの脳のなかには、この言葉が大きな文字で書かれている。そして、極端に狂った時間感覚が彼らを駆りたてる。さらに、メンバー相互の対抗意識がいわば飽和状態を作りだす。そこに、唯物主義への過激な批判が加わる。唯物主義は人間に先のことばかり考えさせ、あくせく働かせる——物の商いをしていると、代金の支払われる明日をおぞましいまでに信じるようになるのだ。明日に死！　今この瞬間に万歳！　「永遠の今」の王者、享楽のマンモン神に栄光あれ！　というわけだ。大きな文字のスローガンだ。かくして、そこかしこで、その時代の心やさしき気違いたちが即席の秘密教団を作り、享楽と殺人を追求する。そのなかのひとつに、黙示録の「獣６６６」を信仰する六人の人喰い鬼の素敵な集い、「１１１団」があったのだ。

「はじめのうちは、私も途方に暮れていた」

だが、すぐにわかったのだ、クードリエ警視長は。

「第一に、あの犠牲者たち全員の顔に浮かんでいた歓喜の表情」

なるほど、最初の男はズボンの前を開けていたし、次の二人の老兄妹は抱擁しあっていた。四番目の

出産奨励主義者は、爆発する直前に昇天していたし、スカンジナビア製トイレにいたドイツ人は全裸で……。

「これはけっして普通とはいえない」

(たしかに、いえない)

性と死。これはクードリエにおなじみのテーマを思い起こさせた。デス&セックス。さかしまの祈禱に耽る者の臭いがしたのだ。大戦直後の捜査活動で嗅ぎわけられるようになった臭いだ。

「だが、連中はなぜデパートを選んだんですか、自分たちの……儀式のために?」

「もういったはずだよ。デパートは、彼らの目から見れば、唯物主義者どもの希望の殿堂なんだ。その殿堂を瀆そうとしたんだよ、物質のきらめきに引かれてやって来る無垢の犠牲者たちをいけにえにすることによってね。ドイツ人のヘルムート・キュンツは、彼の写真コレクションが示しているように、サンタクロースに仮装することを好んだ。彼は儀式のあいだ、おもちゃを配って歩いたんだ……」

静寂。心が凍りつく(コーヒーを持ってきてくれ、火傷しそうに熱いエスプレッソを!)。

「なぜ彼らは自殺したんですか」

良い質問だ。彼の目に灯がともる。

「彼らの自殺に関しては、君の妹のテレーズの占星学的推論が私の考えを裏づけた。あの連中は、星の託宣に耳を傾けていたんだよ。彼らは、自分たちの死の日付がホロスコープに書きこまれている、と鉄のように固く信じていた。そこに書きこまれた日にみずから死を選ぶことで、自分の個人的な自由をまっとうしながら、星の託宣を守ることができたんだ」

「いってみれば、自分自身が『運命の神』の役を演じたわけですね……」

「そのとおり。自分たちがもっとも強烈な生を経験したその場所で、公衆の面前で、自分自身を吹き飛ばすことによって、最後の巨大な喜びを感じたんだよ。いわば、神になったんだ」
「それで、死んだ顔に恍惚の表情が浮かんでいたんですね」
そう、という頭の動き。沈黙（結局は、ひどく単純な人間たちだった……）。
「で、ぼくは、この事件で、いったいどんな役割をしていたんです？」
（ほんとに、まったく！）
「君？」
照明がかすかに強くなる。
「可哀そうに。君こそ、神の恩寵が彼らにあたえ給うた最も美しき贈物だったのだよ。つまり、聖人だ。みずからの肩に『商業』の罪をひとり背負い、顧客たちの涙に泣き、物の商いに罪悪感をもつデパート職員全員の憎悪を買う姿。ひと言でいえば、行き場のない矢をすべて自分の胸に引き受ける卓越した才能ゆえに、君は、わが人喰い鬼たちの目に聖人として映ったのだ！　そのときから、彼らは君の命、というか、後光を頂こうとした！　立派な聖人を罪に巻きこみ、殺人犯の汚名を着せ、有罪者と名指して、社会的制裁を加える。あの老いたる悪魔たちにとって、これ以上素晴らしい誘惑はないのではないかね？　だが、結果的には、彼らは、君の同僚たちを唆して、君をリンチにかけることに失敗した。幸いなことに、カレッガが近くにいたから。覚えているね……」
「ああ、ぼくは聖人なんかじゃない、ちくしょう！」
「それを決めるのはヴァチカンだよ。君を聖人と認めるためには、いまから二、三百年後に、ローマ教皇庁の典礼聖省の手で、より正確な判断が下されなければならない……。いずれにしても、人喰い鬼

の最後のひとりが、他の連中よりも極端なやり方に出た。たぶん、君の友人のテオが彼に君のことを、無邪気に、讃嘆の気持をこめて、ずいぶんとしゃべっていたのだろう。家族の長兄として父なし児たちを守る君の姿が、彼の憎悪を大きく煽ったのだ。彼にとって、君は無垢の子供たちを人喰い鬼の塩漬け貯蔵庫から救いだす聖ニコラウス(サンタクロース)のように見えたのだろう。ところで、貯蔵庫はあの老人のものだった。貯蔵庫を一杯にしておくことは彼の任務だったのだ。したがって、君は老人の貯蔵庫から食事の材料を盗んでいたようなものだ。かくして、君に巨大な憎悪を抱く人間が生まれた。今後これほどの憎しみを受けることはけっしてないだろうね。彼は警察の目の前で君に殺されることで、君に致命的な打撃となるはずの現行犯逮捕を画策したわけだ。しかも、みごとに手の込んだことに、前もって君にその予告までしている。先日の夜、地下鉄のなかで、じつに巧みに君の気を引いただろう？」

（たしかに）

「君がまんまと罠に落ちたと知ったときの、彼の喜びを想像してみたまえ。死のとき、彼は、君が六人の殺人の罪を背負いこんだと確信していただろう」

（……）

「彼はなんという名前だったんですか」

沈黙のまなざし。灯が落ちる。

「ここで、君は秘密に突き当たるのだ。世間でいう立派な人物だったとしかいえない」

（とうとう来たか。テオ、君のいうことは正しかったよ……）

それゆえ、捜査の結果は秘密にされるだろう。もうデパートで爆弾が破裂することはない。だが、サンクレールは商売の数字をさらに高めるために、引きあげる警官の代わりにわざわざ警備員を雇って、

お客の体を探らせつづけるだろう。警備員は死者たちの記念碑の役を演じる（死者たちの記念碑の第一の仕事は生きつづけることだ）。

些細な事柄がもう二つ。ぼくがクードリエに、なぜあのとき飛びだして来なかったのですか、なぜぼくがゴリラに飛びつくのを放っておいたのですか、と訊いたとき、彼はドゴールのような答えをした。

「そうなされるべきだったからだよ」

それから、しばらくして、ぼくを扉まで送ってくれたとき、こういった。

「マロセーヌ君、デパートを解雇されたのは間違いだったね。いけにえの山羊の仕事を、君は非常に立派に務めていた」

警視庁を出て、ぼくは一瞬、駐車禁止区域に、レモンイエローの4（カトル）シュヴォーが待っていることを期待した。なんとしても、その車の持主の谷間で、体を丸くして、影に包まれてまどろみたかった。もちろん、ありえない話だ。待っていたのは、地下鉄の暗い穴だけ。仕方ない。ジュリアのいない夜。ジュリュスのいる夜が来る。

CamScannerでスキャン

39

家でも、いくつかの驚きが待っていた。まず、大きな箱いっぱいに詰まった雇用申し出の手紙の山。一度読んだだけで、全部紙屑かごに直行だ。この国のすべての企業がいけにえの山羊にたっぷりと餌をやりたいらしい。

とんでもない、ご免だね。「二度とこんなことが起ごらねえようぬ」、ローマ法皇が戦争についていった言葉を借りることにしよう。

最後の手紙は文部省からのものだった。開けて見たのは、文部省の名のもとにぼくが踏みつけにされることを承知した場合、文部省がいくら払うか知りたかったからだ。

ゼロ。文部省はジェレミーの中学校の被害を弁償するように求めていた。計算書添付。

その金額の桁を数えているときに、室内電話が鳴った。

「バン？　早く降りてきて。あなたを驚かすことがあるわ」

もちろん、ぼくは急行した。

驚きはサイズだった（彼女のサイズがいつもの倍に膨れあがっていたのだ！）。

ママン！　それはママンだった。

彼女は母親らしい美しさになっていた。母親らしく、いっそう若返っていた。若く美しい母親らしく、いまにも臨月に達しそうに妊娠していた。

ぼくはいった。

「ママン！　ママン！」

彼女はいった。

「バンジャマン、わたしのおおちびさん！」

彼女はぼくを腕のなかに抱きしめようとしたが、彼女のなかにいるやつが、もうぼくを押しのけようとしていた。

ぼくはいった。

「で、ロベールは？」

彼女は答えた。

「ロベールはもういないの」

ぼくは小さな半球を指さした。

「で、これは？」

彼女は答えた。

「最後の子よ、バン、誓うわ」

ぼくは受話器を取りあげ、ザボ女王の番号を回した。

CamScannerでスキャン

訳者あとがき

ダニエル・ペナックは、いまやフランスでもっとも人気の高い作家のひとりである。一九八五年に、本書『人喰い鬼のお愉しみ』が一大ベストセラーになったのを受けて、主人公マロセーヌのシリーズは現在第三作まで書き継がれ（最終的には四部作になる予定という）、『妖精カービン』（一九八七年）、『原稿売りの少女』（一九八九年）という続篇もそれぞれベストセラー入りを果たした。第一作『人喰い鬼のお愉しみ』と第二作の『妖精カービン』はガリマール社の有名な推理小説シリーズ「セリ・ノワール」文庫から出版されたのだが、第三作にいたって、マルセル・プルーストからフィリップ・ソレルスまでが登場するガリマール社の顔ともいうべき単行本の「ブランシュ」版で発表された。つまりは、純文学の大家扱いへと格上げされたのである。一般読者の人気も凄まじいが、文学通の評価もウナギ昇りということなのだ。

現在では、マロセーヌ・シリーズは三冊ともガリマール社のペーパーバック叢書である「フォリオ」文庫で刊行されており、三冊を一箱に収めたボックス仕様さえも本屋の店頭には並んでいる。いまだにペナック・ファン激増の勢いは衰えを見せていないといってよいだろう。その余波を買ってか、九二年に出たペナックの読書をめぐるエッセー『小説みたいに』（邦訳『奔放な読書』、藤原書店刊）も売れ行き好調で、読書論という地味な内容でありながら（むろん、その語り口はペナック独特の破天荒なユーモアに満ちみちているが）、フランスでは一年間で二〇万部を突破するベストセラーになった。驚くべき人気であるが、この現象など、『人喰い鬼のお愉しみ』

以下、マロセーヌ・シリーズの大ヒットなくしてはとても考えられない出来事だ。

さて、本書は、そのペナック現象の端緒となった"*Au bonheur des ogres*"の邦訳である（このタイトルは、エミール・ゾラの《ルーゴン＝マッカール全書》第十一巻、本書とおなじくパリのデパートを舞台にした『ご婦人がたのお楽しみに』*Au bonheur des dames* をもじったものであり、Au bonheur des dames というのは、このデパートの店名でもある）。本書の主人公バンジャマン・マロセーヌはパリのデパートに勤め、表向きは商品の品質管理にたずさわることになっているが、じつは買物客の苦情処理係で、客から文句が出るたびに「お客様ご要望コーナー」なるガラス張りのブースに呼びだされ、上司にこっぴどく叱られる役回りである。そして、上司の激烈な問責に完全に打ちひしがれ、終いには、我にもあらず落涙する。そのあまりの愁傷狼狽、悲嘆の激しさのせいで、客はマロセーヌに同情し、それどころか、上司のレーマンの冷酷さに喰ってかかるありさまだ。結局、客は苦情を取りさげ、自分の暖かい人間性にあらためて感動しつつ帰宅する。いっぽうデパートは、損害賠償の責任を免れ、商品の品質管理のために雇うスタッフの人件費も丸まる節約することができる仕組みである。マロセーヌは筋金入りのスケープゴート、いけにえの山羊のプロフェッショナルなのだ。

このマロセーヌの回りで、爆弾事件が続発する。彼自身は被害を免れるものの、しだいに死者は数を増し、事件の舞台はつねにデパートのなかである。爆弾殺人鬼はだれか？　その動機は？　マロセーヌの役割は？　なぜデパートが舞台に選ばれるのか？　突飛な舞台設定と、奇想天外な事件の数かず、そして、ひと癖もふた癖もある奇妙な登場人物たちの大活躍。一読してユーモア奇譚かと見まがうが、そうした謎には、最終的にすべて合理的な解決が用意されている。もちろん、推理小説のジャンルとしては「変格派」であり、江戸川乱歩いうところの「奇妙な味」の極限的ケースではあるのだが、見事なミステリであることに変わりはない。フランス・ミステリ界の大御所ミシェル・ルブランも、ペナックが八五年に現れた最優秀新人であると絶讃している。

CamScannerでスキャン

とはいうものの、殺人の趣向の奇抜さと謎解きのアクロバットでのみ読者を引っぱる、いわゆる「本格派」とはいささか趣きが異なり、『人喰い鬼のお愉しみ』は強烈なユーモア感覚で読むものを魅了する。枚挙に暇のない言葉遊びは別にしても、一ページに最低数度はニヤリとさせられること請けあいの面白さなのである。ときに強烈なブラック・ユーモアに傾くこともあるが、その絶妙のユーモアが陰惨な事件の連続をじつに楽しく読ませる効果を発揮している。しかも、そのユーモアは、主人公マロセーヌがプロのいけにえの山羊であるという設定から必然的に導きだされたものであり、小説全体の文学的価値（人間観察の鋭さ、逆説的な思考実験、社会システムのうがった分析、等々）から遊離しないどころか、むしろその価値の中心をなしている。そこが、このシリーズの素晴らしさの本質であり、何百万人もの読者を引きつけている理由であろう。

冒頭にルネ・ジラールの『身代りの山羊』の一節が引かれていることからもわかるとおり、職業的スケープゴートという主人公の設定はジラールの命題の影響を受けているのだろう。だが、その設定からの極端な想像力の飛躍は、完全にペナックの独創である。とくに、「日曜大工仕事コーナー」の主任を務めるおかまのテオや、テオに率いられた老人修理工の軍団（白雪姫と七人の小人を思わせる「小爺（おじい）たち」）、今世紀ヨーロッパの内戦を歩哨として生き抜いてきた夜警のストジルコヴィッチ、デビッド・ハミルトンの写真のように柔らかい声のアナウンス嬢、雌ライオンみたいに壮麗な金髪の美しき万引き女、といったデパートの変人たちの活写はペナック文学の最大の魅力をなしている。推理小説的側面においてもこの特色は最大限に活かされ、パリ警視庁の敏腕警視長クードリエや、大男のカレッガ実習刑事など愛すべき警官群像、さらに、揉み上げパットにハイエナ・ジプという捜査官コンビに至っては、完全に幻想的なパロディの域へと舞いあがってゆく。

後半になって、いささかオカルト的な傾斜から、人間の本性的な悪の考察へと進み、戦争、暴力、供犠、聖性といったバタイユ的な命題や、罪と罰の問題（ドストエフスキーの名が様ざまな文脈で引かれる）も浮上してく

CamScannerでスキャン

る。だが、それはあくまで物語のスパイスであって、ペナックの視野の広さを裏づけるものではあるが、本書の第一の特徴は、とにもかくにも抜群に面白い読みものであるということだ。ジラールも、ドストエフスキーも、アレイスター・クロウリーも、カルロ・エミリオ・ガッダも、ルイーズ・ラベも、ひたすら物語を活気づけ、面白くするために、一堂に会しているのである。

この小説のもうひとつの特色は、家族の解体が趨勢となった現代において、主人公のマロセーヌが必死で家族の統合をめざし、肉親愛の守護者となっている点である。マロセーヌの母親は家出常習者で、つねに異なった男と出奔を繰り返しているのだが、そのたびごとに父親の違う子供を家に連れかえり、最年長の息子であるマロセーヌに養育を任せては、またしても男と家出してしまう。したがって、マロセーヌは三人の妹と二人の弟を男手ひとつで育てなければならない。ところが、この五人の妹弟が揃いも揃って個性的、可愛くもあり、また、とんでもない猛者ばかり。というわけで、マロセーヌは家庭の内と外で孤軍奮闘を余儀なくされ、家族崩壊と失業の瀬戸際で、ほとんどマゾヒスティックな聖者の姿をあらわにするのである。『人喰い鬼のお愉しみ』は、一風変わった「家族小説」としても楽しめるし、感動もさせられる。そうそう、この家族にもうひとり、ジュリユスというパリで一番臭い犬が加わり、おまけにジュリユスは癲癇持ちであることが判明するのだが、このエピソードが思いがけず物語の深い秘密と通底していることをお教えしておこう。

『人喰い鬼のお愉しみ』は、小説ジャンルとしては「ユーモア・ミステリ」に分類されやすい作品だが、主人公マロセーヌが体現する内向的な感性はまぎれもなく上質な文学のものであり、例えば、村上春樹の主人公たちのそれと深く通じあうものがあると思う。あるいは、さらに一歩踏みこんで、『人喰い鬼のお愉しみ』は、初期の赤川次郎の洒落た設定のもとで、村上春樹の主人公が右往左往する物語に、望月峯太郎の強烈なドライブをかけたような小説とでもいえるかもしれない。

さて、著者のダニエル・ペナックは一九四四年にカサブランカで生まれたフランス人である。文学的デビューは児童文学の領域だったが、友人たちに勧められて書いたミステリ『人喰い鬼のお愉しみ』で一躍人気作家となったことはすでに申しあげた。本職（？）は公立高校の国語（つまりフランス語）の先生で、先ほど触れたエッセー『小説みたいに』は、国語教師としての経験に基づいて、生徒たちに読書の喜びを指南するという内容だった。マロセーヌ・シリーズは、小説の舞台であるパリの下町ベルヴィルの名を取って「ベルヴィル四部作」になるということだが、第四作の発表が心待ちにされる。なお、第二作『妖精カービン』は現実に起こった出来事にヒントを得て老人の連続殺人を扱い、第三作の『原稿売りの少女』は、マロセーヌが謎のベストセラー作家に名前を貸したことから起こる事件を追っている。

最後に、本訳書を上梓するにあたり、全面的な協力を頂いた白水社の小山英俊氏に深くお礼を申し上げる。また、多くの疑問個所に関して、学習院大学フランス文学科助教授ティエリ・マレ氏の丁寧なご教示を頂いた。奇しくもマレ氏はガリマール社から二冊の長篇小説を出版している作家である。畏友マレ氏に心からの感謝を捧げたい。

一九九五年二月

中条省平

CamScannerでスキャン

訳者略歴
一九五四年生
東京大学大学院博士課程満期退学
学習院大学助教授
フランス文学・映画論専攻
主要著書
「最後のロマン主義者——バルベー・ドールヴィイの小説宇宙」
「映画作家論——リヴェットからホークスまで」
主要訳書
J・ド・ラングラード「D・G・ロセッティ」(共訳)
ローラン・キュニー「ラスベガス・タンゴ——ギル・エヴァンスの音楽的生涯」(近刊)

《新しいフランスの小説》
人喰い鬼のお愉しみ
一九九五年三月一〇日印刷
一九九五年三月二五日発行
訳者 © 中条省平
発行者 藤原一晃
印刷者 山田隆
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部〇三(三二九一)七八一一
編集部〇三(三二九一)七八二一
振替 〇〇一九〇—五—三三二二八
郵便番号一〇一
精興社・松岳社製本
ISBN 4-560-04330-2
Printed in Japan

953
ヘ

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは，著作権法上での例外を除き，禁じられています。本書からの複写を希望される場合は，日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

CamScannerでスキャン